熊本県文化財調査報告第75集

曲野（まがの）遺跡 Ⅲ

一般国道３号松橋バイパスに伴う埋蔵文化財
発掘調査報告（第Ⅳ次調査報告）

1985

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告第75集

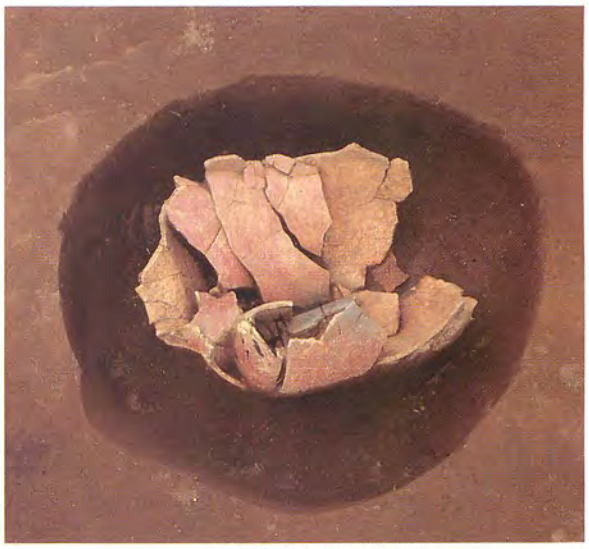
曲野（まがの）遺跡 Ⅲ

一般国道３号松橋バイパスに伴う埋蔵文化財
発掘調査報告（第Ⅳ次調査報告）

1985

熊本県教育委員会

出土曽畑式土器（縄文）



出土丹塗土器（縄文）

出土石器（旧石器）

調査Ⅶ区、航空写真

序　　文

熊本県教育委員会では、建設省九州地方建設局によって計画された、一般国道３号松橋バイパス建設予定地内の埋蔵文化財調査を昭和55年度から進めてきました。下益城郡松橋町曲野遺跡の調査は既に「曲野遺跡Ⅰ」「曲野遺跡Ⅱ」として刊行しております。

本書は、昭和58年度第４次調査を実施しました曲野遺跡の第Ⅴ、第Ⅵ調査区の報告であります。第Ⅴ調査区では旧石器時代の遺物が主として確認され、第Ⅵ調査区では縄文時代の遺構が確認されました。これらはこの地域の原始、古代を解明するうえで貴重な資料を提供することができると思います。

発掘調査の実施にあたりましては建設省九州地方建設局熊本工事事務所当局をはじめ地元教育委員会、並びに多数の方々の御協力を賜りました。ここに心からお礼申し上げます。

昭和60年３月31日

熊本県教育長　　伴　　正　善

例　　言

1．本書は、熊本県下益城郡松橋町曲野に所在する曲野遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査は、一般国道３号松橋バイパス建設工事に伴う事前調査として、建設省九州地方建設局熊本工事事務所の委託を受けて、熊本県教育庁文化課が実施した。

3．本書は、昭和58年度に第Ⅳ次調査として実施した調査結果を収録したもので、すでに第Ⅰ・Ⅱ次調査分を「曲野遺跡Ⅰ」、第Ⅲ次調査分を「曲野遺跡Ⅱ」として報告書を刊行している。

4．本書に掲載した航空写真については、熊本県警察本部航空隊に撮影を御願いし協力を得た。記して謝意を表するものである。

5．本書の文中に示した遺構の略記号は次のとおりで、遺構番号は時代にとらわれず発見順とし、その頭に調査年次の数字を付した。

　ＳＢ－掘立柱建物、ＳＤ－溝、ＳＫ－土壙、ＳＸ－その他性格不明遺構

6．現地調査に関する実測及び写真撮影は、各調査員が分担して行い、本書に使用した図の作成及び写真は浦田信智が行い、旧石器時代の石器については江本直、縄文時代の石器については平井浩一の協力を得た。

7．本書の執筆は主に浦田が行い、第Ⅰ章１節を平岡勝昭、第Ⅳ章１節を江本が行った。

8．本書の編集は熊本県教育庁文化課で行い、浦田が担当した。

本文目次

序　　文…… 1
例　　言…… 2
本文目次…… 3
挿図目次…… 4
表　目　次…… 5
図版目次…… 6

第Ⅰ章　序　　説
1節　調査に至る経過…… 9
2節　調査組織…… 9

第Ⅱ章　位　　置 …… 11

第Ⅲ章　調査の概要
1節　調査日誌抄…… 13
2節　Ⅲ次試掘調査…… 17
3節　層　位…… 18

第Ⅳ章　調査の結果
1節　旧石器時代の調査…… 19
1．遺　物…… 19
2節　縄文時代の調査…… 25
1．包含層出土遺物…… 25
2．ＳＸ-411（土器埋納土壙）…… 40
3．集石遺構…… 42
3節　弥生時代の調査…… 50
1．遺構と遺物…… 50
4節　古墳時代の調査…… 53
1．遺　物…… 53
5節　奈良・平安時代の調査…… 54
1．一括遺物…… 54
2．遺構と遺物…… 67
6節　平安時代以降の調査 …… 114
1．遺構と遺物…… 114

第Ⅴ章　総　　括 …… 117

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図……12
2　調査位置図……15
3　昭和58年度Ⅵ・Ⅶ区試掘トレンチ配置図……17
4　層位概略図……18
5　出土石器実測図……20
6　47－Ｋ・48－Ｋグリッド石器出土状態ドット図……21
7　Ⅳ次旧石器調査グリッド位置図……23
7　Ⅲ次旧石器調査グリッド位置図（第Ⅰ～Ⅴ調査区）……23
8　縄文土器実測図……26
9　縄文土器実測図……27
10　縄文土器実測図……29
11　縄文土器実測図……30
12　縄文土器実測図……31
13　縄文石器実測図……33
14　縄文石器実測図……34
15　縄文石器実測図……35
16　縄文石器実測図……36
17　縄文石器実測図……37
18　円盤状土製品実測図……39
19　63－Ｑグリッド縄文土器集中部実測図……39
20　63－Ｑグリッド縄文土器集中部出土土器実測図……40
21　80－ＰグリッドＳＸ－411 実測図……41
22　ＳＸ－411 内出土土器実測図……42
23　72－Ｏグリッド１号集石実測図……43
24　72－Ｐグリッド２号集石実測図……44
25　76－Ｏグリッド４号集石実測図……45
26　79・80－Ｐグリッド６号集石実測図……46
27　80－Ｐグリッド７号集石実測図……46
28　59－Ｐグリッド９号集石実測図……47
29　集石内出土遺物実測図……48
30　弥生土器実測図……50
第31図　59－ＰグリッドＳＸ－414 内遺物出土状態実測図……51
32　ＳＸ－414 内出土遺物……52
33　古墳時代の遺物実測図……53
34　一括遺物　蓋実測図……55
35　一括遺物　坏実測図……57
36　一括遺物　坏・高坏実測図……59
37　一括遺物　高坏、器種不明土器、カマド実測図……60
38　一括遺物　土師器甕・浅鉢実測図……61
39　一括遺物　須恵器甕実測図……62
40　一括遺物　須恵器甕実測図……63
41　ＳＢ－401 実測図……68
42　ＳＢ－402 実測図……69
43　ＳＢ－403 実測図……70
44　ＳＢ－404 実測図……71
45　ＳＢ－405 実測図……73
46　ＳＢ－406 実測図……74
47　ＳＢ－407 実測図……75
48　ＳＢ－408 実測図……76
49　ＳＢ－409 実測図……77
50　ＳＢ－410 実測図……78
51　ＳＢ－411 実測図……79
52　ＳＢ－412 実測図……80
53　ＳＢ－413 実測図……81
54　ＳＢ－414 実測図……82
55　ＳＢ－415 実測図……83
56　ＳＢ－416 実測図……84
57　掘立柱建物跡柱穴内出土遺物実測図……85
58　75－ＯグリッドＳＸ－410 実測図……86
59　グリッドＳＸ－410 内カマド実測図……87
60　ＳＸ－410（竪穴住居址）内出土遺物実測図……88
61　80・81－ＰグリッドＳＸ－401 実測図……89

第62図　ＳＸ－401 内出土遺物実測図……90
63　78・79－ＱグリッドＳＸ－402 実測図…91
64　77－ＱグリッドＳＸ－404 実測図……92
65　ＳＸ－404 内出土遺物実測図……93
66　76－Ｐ・ＱグリッドＳＸ－405 実測図…95
67　75－ＰグリッドＳＸ－406 実測図……97
68　ＳＸ－405 内出土遺物実測図……98
69　ＳＸ－406 内出土遺物実測図……98
70　75・76－ＯグリッドＳＸ－409 実測図…99
71　ＳＸ－409 内出土遺物実測図……100
72　63・64－ＯグリッドＳＸ－412 実測図…101
73　ＳＸ－412 内出土遺物実測図……102
74　60・61－ＰグリッドＳＸ－413 実測図…103
75　ＳＸ－413 内出土遺物実測図……104
第76図　72－ＰグリッドＳＸ－408 実測図……104
77　ＳＸ－408 内出土遺物実測図……104
78　71－Ｐグリッドピット１遺物出土状態実測図……105
79　71－Ｐグリッドピット１内出土遺物実測図……106
80　71－Ｐグリッドピット２内遺物出土状態実測図……107
81　71－Ｐグリッドピット２内出土遺物実測図……108
82　溝（ＳＤ）流方向方位図……113
83　土壙（ＳＫ）実測図……116
84　掘立柱建物跡（ＳＢ）棟方向方位図……119
85　掘立柱建物（ＳＢ）模式図……120

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表……11
2　昭和58年度Ⅵ・Ⅶ区試掘トレンチ一覧表 17
3　出土石器観察表……49
4　一括遺物須恵器・土師器観察表…64・65・66
5　掘立柱建物跡柱穴内出土遺物観察表……109
6　ＳＸ－410(竪穴住居址）内出土遺物観察表……109
7　ＳＸ－401 内出土遺物観察表……109
8　ＳＸ－404 内出土遺物観察表……109
9　ＳＸ－405 内出土遺物観察表……110
第10表　ＳＸ－406 内出土遺物観察表……110
11　ＳＸ－409 内出土遺物観察表……110
12　ＳＸ－412 内出土遺物観察表……110
13　ＳＸ－413 内出土遺物観察表……110
14　ＳＸ－408 内出土遺物観察表……111
15　71－Ｐグリッドピット１内出土遺物観察表……111
16　71－Ｐグリッドピット２内出土遺物観察表……111
17　溝（ＳＤ）遺構一覧表……114
18　掘立柱建物跡（ＳＢ）一覧表……121

図版目次

図版1　調査Ⅶ区全景……122
2　Ⅴ区表土剝ぎ……123
Ⅶ区遺構検出……123
雪の中の調査風景……123
3　Ⅶ区75，76－O，P遺構検出状態……124
Ⅶ区70－N～Q遺構検出状態……124
Ⅶ区73，74－O，P遺構検出状態……124
4　Ⅴ区長谷川－3344全体仕上げ……125
Ⅵ区鳴渕－1036，1037仕上げ(東ヨリ)…125
Ⅵ区鳴渕－1035仕上げ（東ヨリ）……125
5　Ⅶ区81－O，P
ＳＢ－401 検出状態（南ヨリ）……126
Ⅶ区81－O，P
ＳＢ－401 仕上げ（北ヨリ）……126
Ⅶ区80－P，Q
ＳＢ－402 検出状態（東ヨリ）……126
6　Ⅶ区80－P，Q･SB－402 仕上げ……127
Ⅶ区79，80－O
ＳＢ－403 検出状態(東南ヨリ)……127
Ⅶ区79，80－O･SB－403 仕上げ……127
7　Ⅶ区78，79－O，P･SB－404 発掘前…128
Ⅶ区78，79－O，P
ＳＢ－404 仕上げ（南ヨリ）……128
Ⅶ区78，79－O，P
ＳＢ－404 仕上げ（西ヨリ）……128
8　Ⅶ区75－O･SB－405 発掘前(南東ヨリ)129
Ⅶ区74，75－O･SB－405 仕上げ……129
Ⅶ区74，75－O，P
ＳＢ－406，407仕上げ……129
9　Ⅶ区73，74－O，P
ＳＢ－408 発掘前（南ヨリ）……130
Ⅶ区73，74－O
ＳＢ－408 仕上げ（南ヨリ）……130
Ⅶ区73，74－O
ＳＢ－408 仕上げ（東ヨリ）……130
図版10　Ⅶ区72－O・ＳＢ－409 仕上げ……131
Ⅶ区72－P，Q　ＳＢ－410 仕上げ……131
Ⅶ区71－P，Q・ＳＢ－411 仕上げ……131
11　Ⅶ区69，70－P，Q
ＳＢ－412 仕上げ（東ヨリ）……132
Ⅶ区69，70－O，P
ＳＢ－413 仕上げ（東ヨリ）……132
Ⅶ区69，70－O，P
ＳＢ－413 仕上げ（北ヨリ）……132
12　Ⅶ区70－N・ＳＢ－414 発掘前(南ヨリ) 133
Ⅶ区70－N・ＳＢ－414 仕上げ……133
Ⅶ区69，70－N，O
ＳＢ－415 発掘前（南ヨリ）……133
13　Ⅶ区69，70－N，O
ＳＢ－415 仕上で（東ヨリ）……134
Ⅶ区69，70－N，O
ＳＢ－415 仕上げ（南ヨリ）……134
Ⅴ区63－Q・ＳＢ－416 仕上げ(東ヨリ) 134
14　Ⅴ区　土壙群発掘前（東ヨリ）……135
ＳＫ－401 ……135
ＳＫ－402 ……135
ＳＫ－403 ……135
ＳＫ－404 ……135
ＳＫ405（右），406(左）……135
ＳＫ－407 ……135
ＳＫ－408 ……135
15　Ⅶ区80，81－P・ＳＸ－401 仕上げ……136
Ⅶ区78－Q・ＳＫ－402仕上げ(北ヨリ)…136
Ⅶ区78，79－O・ＳＸ－404 仕上げ……136
16　Ⅶ区76－P，Q
ＳＸ－405 仕上げ（東ヨリ）……137
Ⅶ区76－P，Q
ＳＸ－405 遺物出土状態（西ヨリ）…137
Ⅶ区76－P，Q
ＳＸ－405 遺物出土状態近景……137

図版17　Ⅶ区75－P
ＳＸ－406 遺物出土状態（東ヨリ）…138
Ⅶ区75－Ｐ・ＳＸ－406 仕上げ……138
Ⅶ区74－Ｒ・ＳＸ－407 仕上げ(北ヨリ) 138
18　Ⅶ区72－Ｐ・ＳＸ－408 仕上げ……139
Ⅶ区75，76－Ｏ・ＳＤ－404，ＳＸ－409
遺物出土状態（南ヨリ）……139
Ⅶ区75，76－Ｏ ・ＳＸ－409 仕上げ……139
19　Ⅴ区63，64－Ｑ
ＳＸ－412 仕上げ（南ヨリ）……140
Ⅴ区60，61－Ｏ，Ｐ・ＳＸ－413 仕上げ 140
Ⅶ区71－Ｐ・pit No. 1 遺物出土状態……140
20　Ⅶ区71－Ｐ
pit No. 1 遺物出土状態（拡大）……141
Ⅶ区71－Ｐ・pit No. 2 遺物出土状態……141
Ⅶ区71－Ｐ
pit No. 2 遺物出土状態（拡大）……141
21　Ⅶ区75－Ｏ・ＳＸ－410発掘前(南ヨリ)・142
（竪穴住居址）
Ⅶ区75－Ｏ
ＳＸ－410遺物出土状態(南ヨリ）……142
（竪穴住居址）
Ⅶ区75－Ｏ
ＳＸ－410遺物出土状態近景(西ヨリ)・142
（竪穴住居址）
22　Ⅶ区75－Ｏ・ＳＸ－410 カマド……143
（竪穴住居址）
Ⅶ区75－Ｏ・ＳＸ－410 カマド半割……143
（竪穴住居址）
Ⅶ区75－Ｏ・ＳＸ－410 仕上げ……143
（竪穴住居址）
23　Ⅶ区76，77－Ｎ・ＳＤ－403 仕上げ……144
Ⅶ区75，76，77－Ｏ，Ｐ
ＳＤ－404 仕上げ（南西ヨリ）……144
Ⅶ区71－Ｐ・ＳＤ－406仕上げ(北ヨリ)・144
24　Ⅶ区80－Ｐ・ＳＸ－411 検出状態……145
Ⅶ区80－Ｐ・ＳＸ－411内土器出土状態・145
Ⅴ区59－Ｐ・ＳＸ－414内遺物出土状態・145
25　Ⅶ区72－Ｏ・１号集石検出状態……146
Ⅶ区72－Ｐ・２号集石検出状態……146
Ⅶ区76－Ｏ・４号集石検出状態……146
26　Ⅶ区79，80－Ｐ
６号集石検出状態（東ヨリ）……147
Ⅶ区80－Ｐ・７号集石検出状態……147
Ⅴ区59－Ｐ・９号集石検出状態……147
27　Ⅴ区59－Ｐ・９号集石土器出土状態……148
Ⅴ区63－Ｐ，Ｑ
縄文土器出土状態（北ヨリ）……148
Ⅴ区63－Ｐ，Ｑ
曽畑式土器出土状態　……148
図版28　Ⅴ区45－Ｋ・旧石器調査
カーボン集中地点調査風景……149
Ⅴ区43－Ｋ・旧石器調査遺物出土状態…149
Ⅴ区44－Ｋ・旧石器調査
カーボン集中地点……149
29　Ⅴ区46－Ｋ・旧石器調査
Ⅵ層中遺物出土状態（西ヨリ）……150
Ⅴ区47－Ｋ・旧石器調査
Ⅵ層中遺物出土状態……150
Ⅴ区63－Ｏ・旧石器調査
Ⅵ層中遺物出土状態（南ヨリ）……150
30　Ⅴ区45－Ｋ・旧石器調査遺物出土状態…151
Ⅴ区45－Ｋ・旧石器調査
カーボン集中地点（南ヨリ）……151
Ⅴ区45－Ｋ・旧石器調査
カーボン集中部断面……151
31　Ⅴ区46－Ｋ・旧石器調査
Ⅵ層中遺物出土状態……152
Ⅴ区47－Ｋ・旧石器調査
Ⅵ層中遺物出土状態……152
Ⅴ区47－Ｋ・旧石器調査
Ⅵ層中遺物出土状態……152
32　Ⅴ区47－Ｋ・旧石器調査
Ⅵ層中局部磨製石斧出土状態……153
Ⅴ区48－Ｋ・旧石器調査
Ⅵ層中局部磨製石斧出土状態……153
Ⅴ区63－Ｏ・旧石器調査
Ⅵ層中遺物出土状態……153
33　出土遺物（旧石器，縄文石器）……154
34　出土遺物（縄文石器）……155
35　出土遺物（縄文土器）……156
36　出土遺物（縄文土器）……157
37　出土遺物（縄文土器）……158
38　出土遺物（須恵器，土師器）……159
39　出土遺物（須恵器，土師器）……160
40　出土遺物（須恵器，土師器）……161

第Ⅰ章　序　　説

1節　調査に至る経過

昭和55年度から、建設省と委託契約を行い、一般国道3号松橋バイパス建設に伴う埋蔵文化財の調査を実施してきた。未買収地を残し、昭和58年度は県道城南松橋線より西側の地区（長谷川、鳴渕地区）を主として発掘調査した。

本報告は、昭和58年度現地調査したもので昭和59年度に報告書作成を行ったものである。　　（平岡）

2節　調査組織

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	森　一則（文化課長）
	米村嘉人（前文化課長）
	岩崎辰喜（前々文化課長）
調査総括	隈　昭志（文化課主幹・文化財調査係長）
調査担当者	平岡勝昭（文化課参事　主査）
	江本　直（文化課学芸員）
	森山栄一（文化課嘱託）
	浦田信智（文化課嘱託）
	坂田和弘（文化課嘱託）
	野田英治（文化課嘱託）

調査指導及び協力者

三島　格　（肥後考古学会会長）
富樫卯三郎（前肥後考古学会会長）
柴田喜太郎（広島大学理学部地鉱教室）
石野博信　（奈良県立橿原考古学研究所）
藤澤眞依　（大阪府教育委員会）
森屋直樹　（大阪府教育委員会）
佐藤伸二　（国立八代工業専門学校助教授）
高木恭二　（宇土市教育委員会）
木下洋介　（宇土市教育委員会）
小田原弘則（松橋町教育委員会）
豊崎晃一　（城南町教育委員会）
清田純一　（城南町教育委員会）
池田栄史　（琉球大学法文学部史学研究室）

澤田宗順　（八代市教育文化センター）

吉永　明　（八代市教育委員会）

宮坂孝宏　（別府大学史学科考古学専攻生）

木村元浩　（別府大学史学科考古学専攻生）

松橋町教育委員会

県立宇土高校社会部

建設省九州地方建設局熊本工事事務所

調査事務局

佐々木正典（文化課長補佐）

林田茂一　（前文化課長補佐）

柴田和馬　（文化課主幹・経理係長）

大塚正信　（前文化主幹・経理係長）

花田隆二　（文化課参事）

松崎厚生　（前文化課参事）

谷喜美子　（文化課主事）

整理協力者

高村恭子・西村美津恵・西村鈴香・佐藤淳子・藤崎香代子・永目尚子・米原圭子・坂井美佐松原明美・前田志磨江・木下俊恵・中村絹子・瀬丸延子・六田育子・本田まゆみ・中原由子住田幸恵・古賀ゆみこ、他に収蔵庫の方々には多大な協力を得た。

最後に本報告書を作成するにあたり、熊本県教育庁文化課諸氏には多大な指導・助言を頂き、ここに記して深く感謝するものである。

第Ⅱ章　位　　置

曲野遺跡は、熊本県のほぼ中央部から突出した宇土半島の基部南側で、西側を不知火海に、東、北側を九州山脈より延びる山地および宇土半島中央部を走る山地に囲まれた八代平野に続く平野の北端部に位置している。行政区では松橋町に属し、下益城郡松橋町大字曲野、第Ⅴ調査区は字長谷川、第Ⅵ調査区は字鳴渕、第Ⅶ調査区は字大坪に位置している。遺跡の地理的環境、歴史的環境、概観等の詳しくは、第Ⅰ、Ⅱ次調査の調査報告書「曲野遺跡Ⅰ」[註1)]第Ⅲ次調査の調査報告書「曲野遺跡Ⅱ」[註2)]と同一遺跡の継続調査であり、内容が重復するため、本報告では割愛し前報告書の「曲野遺跡Ⅰ」「曲野遺跡Ⅱ」を御参照頂きたい。

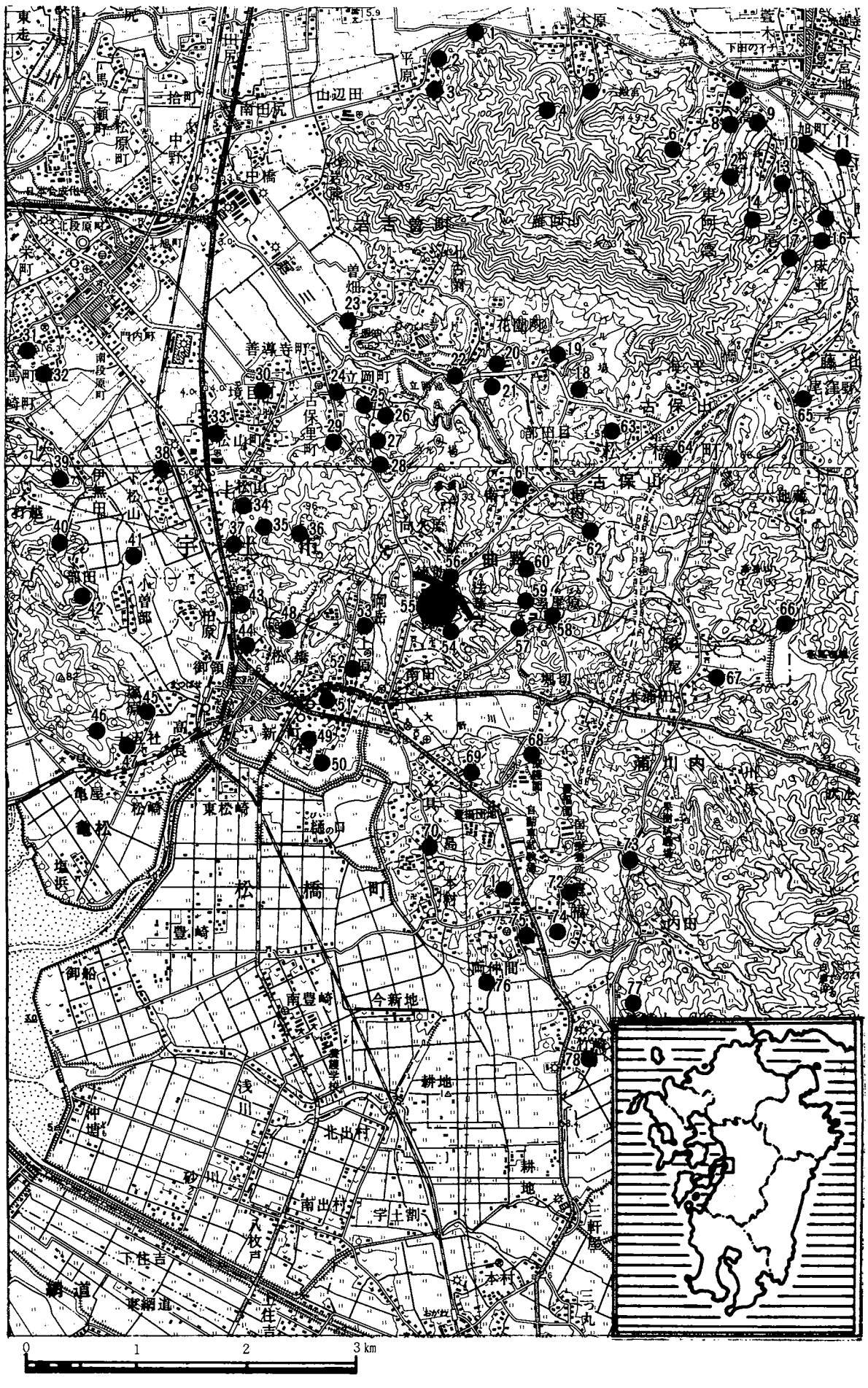
註

1）高谷和生他「曲野遺跡Ⅰ」熊本県文化財調査報告第61集　1983

2）江本　直他「曲野遺跡Ⅱ」熊本県文化財調査報告第65集　1984

No	遺跡名	時代	備考	No	遺跡名	時代	備考
1	ソビエ石貝塚	縄文		40	大平横穴古墳群	古墳(後)	
2	神ノ上古墳	古墳(後)		41	鬼塚古墳	〃	
3	富合平原窯跡	古代(平安初)	松本・三島『城南町史』他	42	仁王塚古墳	〃	
4	木原城	中世		43	御領東原古墳群	〃	柏原古墳も含める
5	木原古墳	古墳(後)		44	出町	弥生中～後 古墳	古田一英『熊本史学』26
6	影熊古墳	古墳(?)		45	塚原古墳	古墳(中?)	
7	阿高貝塚	縄文　中～後	西田『阿高貝塚』城南町文化財調査報告	46	塚原古墳群	古墳(後)	舟線刻多数 三島格『日本考古学年報』14 『不知火町史』
8	阿弥陀尾横穴古墳群	古墳(後)		47	十五社石棺群	〃	
9	御領貝塚	縄文　早 縄文　後～晩	坪井『城南町史』	48	宇賀岳古墳	〃	京都帝国大学文学部考古学研究報告3
10	岸1号墳	古墳(?)		49	松橋大塚古墳	古墳(中?)	
11	岸2号墳	〃		50	前田	古墳	
12	御領横穴古墳群	古墳(後)		51	大野貝塚	縄文　後～晩	
13	飛ノ尾横穴古墳群	〃		52	大野	中世	
14	阿高城	中世		53	上ノ原	縄文早・晩 古代・中世	
15	一位田横穴古墳群	古墳(後)		54	曲野城	中世	
16	ウシクビ横穴古墳群	〃		55	曲野		
17	一尾横穴古墳群	〃		56	丸山城	中世	
18	三日如来寺跡	中世(鎌倉)	『如来寺跡』宇土市文化財報告9集	57	寺尾	古代(奈良末)	『曲野遺跡Ⅰ』熊本県文化財報告61集
19	三日鬼の窟古墳	古墳(後)		58	当尾窯跡	古墳(後)	『生産遺跡基本調査報告』Ⅱ 熊本県文化財調査報告48
20	女夫塚古墳(女塚)	古墳(?)		59	伽藍原古墳	古墳(?)	
21	女夫塚古墳(男塚)	古墳(中)		60	琵琶田窯跡	?	
22	檜崎古墳	〃	梅原・古賀・下林 『熊本県史跡名勝天然記念物調査報告』2	61	古保山廃寺	古代(平安初)	松本・三島『城南町史』
23	曽畑貝塚	縄文　前・後		62	古保山古墳群		
24	古保里石棺群	古墳(後?)		63	打越遺跡	縄文～中世	
25	二枝古墳	古墳(?)		64	古保山	縄文　早 縄文　晩	
26	晩免古墳	〃		65	六地蔵古墳	古墳	
27	潤野古墳	〃	京都帝大文学部考古学研究報告3	66	萩尾窯跡群	古代(奈良)	
28	西潤野古墳	古墳(後)		67	山口1・2号墳	古墳	『生産遺跡調査報告』 熊本県文化財調査報告48
29	神ノ山古墳群	〃	宇土高校社会部部報2	68	豊田城	中世	
30	境目	弥生中～中世 縄文　晩		69	上久具	縄文　晩 弥生　後	
31	宇土城址(城山)	戦国～近世初	『宇土城址(城山)』宇土市文化財報告7	70	瀬小島	縄文	
32	宇土城三ノ丸	弥生～古墳 近世	『宇土城三ノ丸』宇土城三ノ丸発掘調査団	71	狐塚	縄文　晩 古墳　?	
33	桶底古墳	古墳(後)		72	豊福古墳	古墳(?)	
34	チャン山古墳	古墳(前)	富樫卯三郎『石人』106号	73	弁天廃寺	古代(平安)	
35	南山内箱式石棺群	古墳(後)	北條・平山・木下『宇土市史研究』	74	豊福城	中世	
36	御手水古墳	古墳(前)		75	仲間貝塚	縄文(中)	
37	向野田古墳	〃		76	宮島貝塚	縄文　早～前 弥生　中	
38	下松山	弥生　後		77	竹崎城	中世	
39	久保古墳	古墳(後)		78	竹崎年ノ神古墳	古墳(後)	

第1表　周辺遺跡一覧表



第１図　周辺遺跡分布図

第Ⅲ章　調査の概要

1節　調査日誌抄

Ⅳ次調査は、前年度（Ⅲ次）の調査地区より西側の県道145号線で分断された西側台地の建設省一般国道3号松橋バイパス関係工事第10工区がその調査対象地となり、その中でも調査地区が飛び地となるため、55年度からの調査を踏まえて、調査箇所を3地区に分け、第Ⅴ、第Ⅵ、第Ⅶ調査区と仮称し、調査を行った。本年度は、特に継続調査の最終年度となっており、Ⅴ区の旧石器調査の継続と終結、Ⅵ・Ⅶ区の古代、縄文時代、旧石器時代の調査を本年度中に終結させなければならない。

以下、調査日誌をもとにして、調査の概略を記しておきたい。

4月15日より58年度Ⅳ次調査を開始する。16日にプレハブ建設を行い、18日より57年度（Ⅲ次）調査の調査残し分、第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ調査区の旧石器調査を5月13日まで行い終了させる。

5月14日より本年度調査予定地区である第Ⅴ調査地区の旧石器調査から開始する。他の調査地区との日程の関係上、まず調査が進めやすい43—Kグリッドより始め、Kの列を48グリッドまで終えた後、Lのグリッドに移るという調査日程で行うことにした。ところが5月の下旬になり建設省九州地方建設局熊本工事事務所より文化課宛に、10工区のボックス西側調査地区の工事を夏工事で行いたいため、当地区の発掘調査を先に行ってほしいとの依頼があり、いそぎ調査日程を変更し、Ⅴ区の旧石器調査を5月31日までで切り上げ、6月1日より機械を搬入し表土剝ぎを行い、第Ⅶ調査区の調査作業を開始する予定で調査日程の組み直しを行った。

6月1日より機械による第Ⅶ調査区の表土剝ぎを開始し、並行して遺構の検出作業も行う。13日までで機械によるⅦ区の表土剝ぎ終了、ひき続きⅤ・Ⅵ区の表土剝ぎ作業を行う。Ⅶ区は遺構確認作業を続ける。17日まででⅦ区の遺構検出作業をほぼ完了。掘立柱建物遺構15棟、大型土壙6、竪穴住居址1、溝遺構8本、小型土壙2、その他ピット群多数、縄文時代のものと考えられる集石遺構3ケ所などの遺構と多量の縄文式土器、石器、平安時代の土師器、須恵器を検出した。22日はグリッド杭打ち、レベル移動などを行い、調査区の東側グリッドより発掘調査を開始する。調査方法は、数の多いピット群及び竪穴住居址、土壙を各グリッドごとに調査を済ませ、後に主遺構である掘立柱建物遺構の調査を行い、最後に縄文時代の集石遺構を調査するという計画の基に調査を進めた。

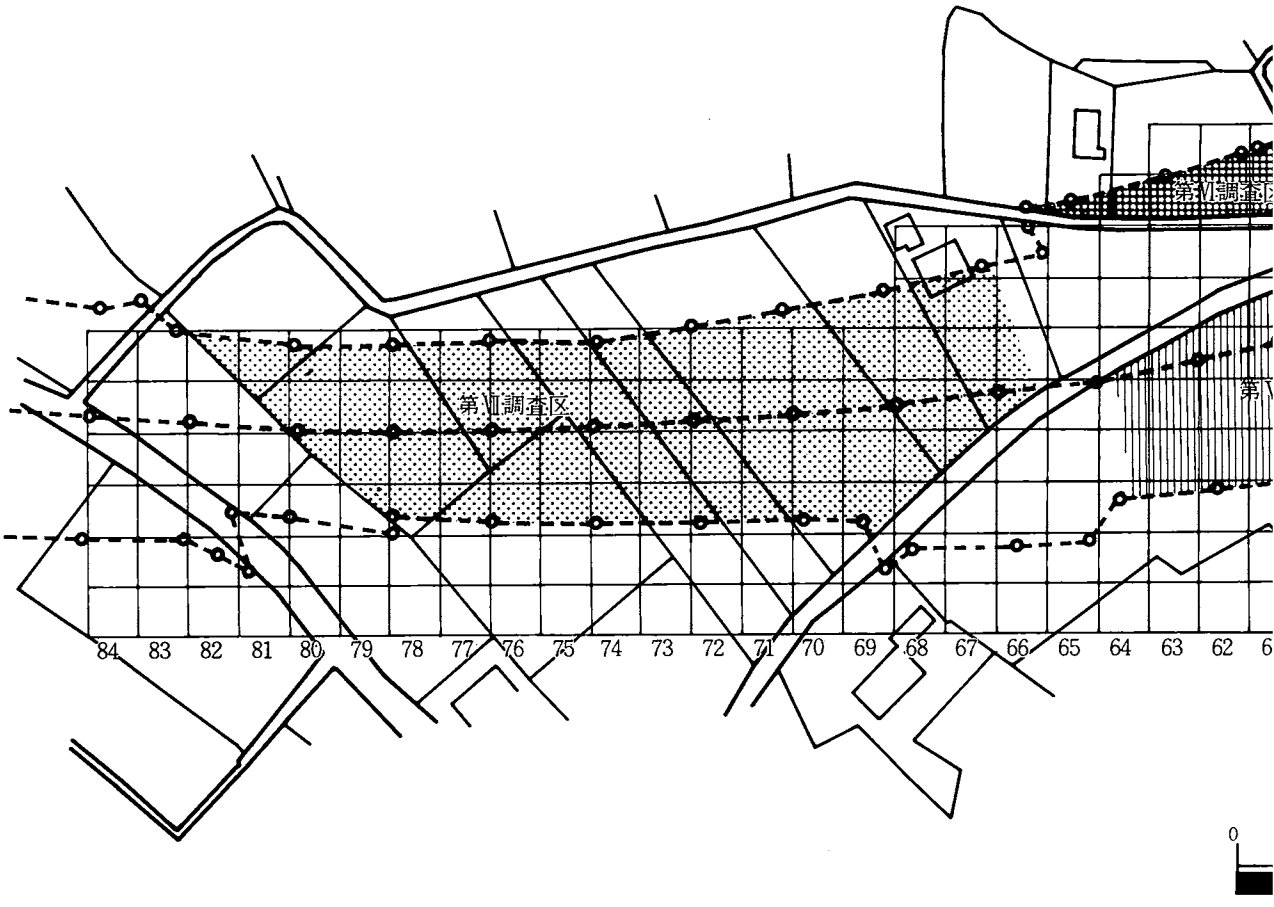
7月に入り、益々暑さが厳しくなり作業計画どおり調査が進展せず、また調査員一同に少々疲れが見えはじめる。7月下旬になり第Ⅶ区調査区が期限まで終わりそうもないので、調査期限を8月下旬から9月下旬まで1ケ月間延期してほしいとの旨、建設省九州地方建設局熊本事務所長あて要請し、了承を得る。26日より調査が遅れているため、各グリッドのピット群調査と並行して溝遺構、土壙、竪穴住居址の調査を開始する。8月に入り、益々暑さが厳しくまた雨も降らないため調査がいっこうに進まなくなる。土壙、溝遺構、竪穴住居址の調査にメドがついたため、3日より掘立柱建物遺構の調査を開始する。9日4号掘立柱建物址の調査を開始。調査が進むにつれて2間×5間で南側に間仕切り柱をもち、柱穴径が1m程で、柱穴埋土が堅い面、軟らかい面が互層になる版築に似た工事を行っており、Ⅶ区内での主屋的な中心をなす大型の掘立柱建物遺構であることが判明した。18日熊本県警察本部の協力により、ヘリコプターによるⅦ区全体の遺構撮影を行う。

9月20日、Ⅲ層上面の平安時代の遺構調査がほぼ終了。残っている実測と並行して縄文時代の集石遺構及

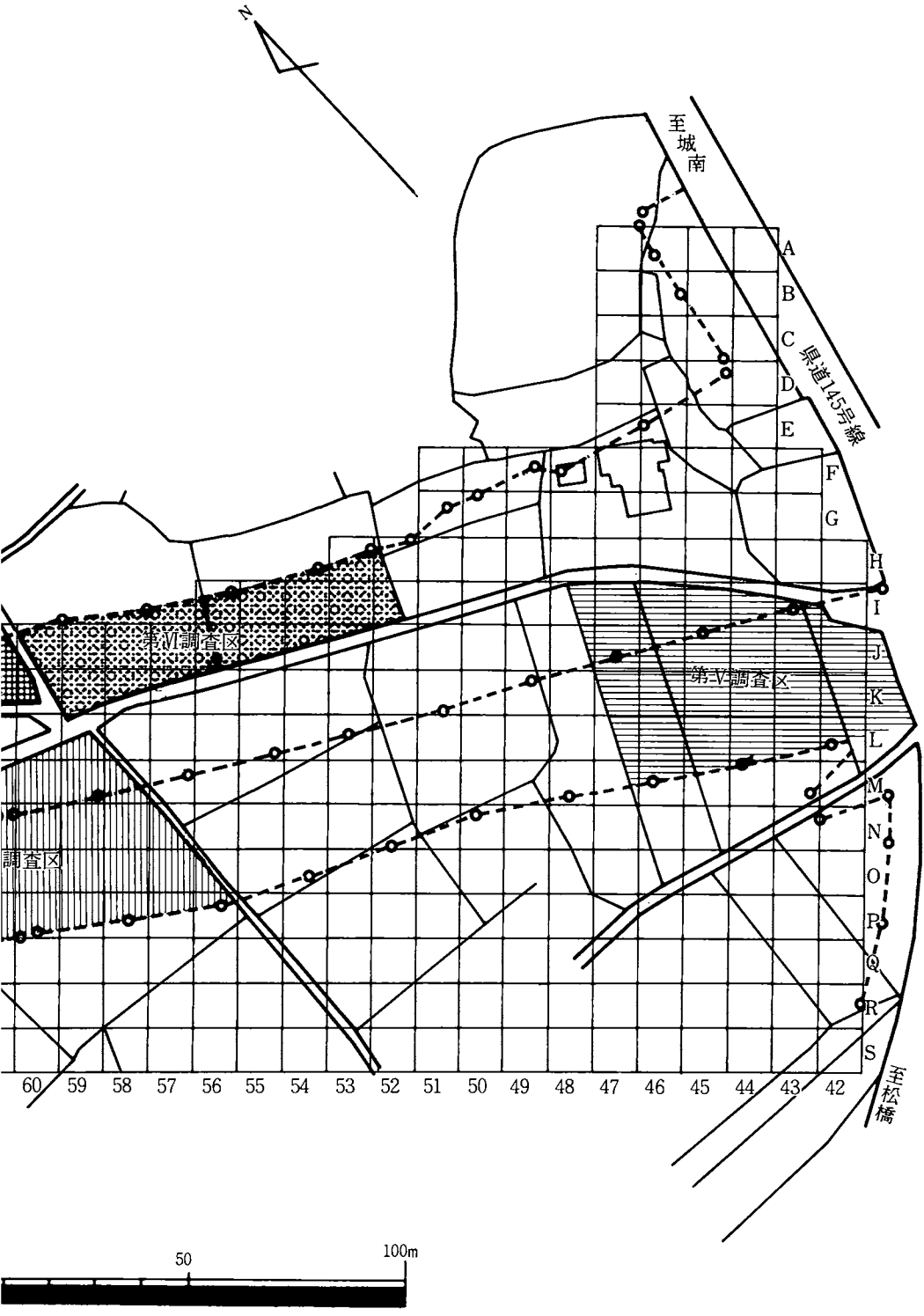
び縄文土器包含層の調査を開始する。縄文時代の調査は、Ⅶ区の全グリッド調査が調査期限の都合上できないため、確認されている集石遺構を中心に行うことで作業計画を立て調査を進めることにする。27日にはⅦ区の発掘調査を終えⅥ区の方に移り、後は調査員による遺構の実測調査を残すだけとなり、調査員だけで調査を続行する。30日、予定通りⅦ区の調査を終了。10月1日建設省九州地方建設局熊本事務所宛に文化課を通じその旨を報告し、引き渡しを行う。

10月3日よりⅥ区の調査に入り、遺構検出作業を行う。並行してⅤ区の竹伐採作業を開始する。Ⅵ区は台地の縁にあたるため、ごく少数のピット群だけの確認である。13日まで発掘作業を終了。14日より、機械による表土剝ぎが行われるまで、Ⅴ区43～47－Kグリッドの旧石器調査の方にはいる。26日ピット群の実測がほぼ終了したため縄文時代の包含層調査にはいる。遺構は見つからない。

11月21日よりⅤ区の機械（ユンボ）による表土剝ぎを開始。竹根、樹根が多く、表土剝ぎ作業が難航する。この地区の遺構確認面までは深いが、竹根が縦にのびているため遺構が攪乱を受けているかもしれない。12月13日竹根、樹根が多く、また根が張っているため、機械（ユンボ）でも除去できず、人の手で根の除去作業を行ったことや、竹根により遺構がかなり攪乱されていることより、遺構確認作業に手間取り、作業が大幅に遅れた原因となった。14日、Ⅴ区の遺構確認作業がほぼ終了したため、検出後のⅤ区全景写真を撮影する。検出遺構は、掘立柱建物遺構1棟、大型土壙、土壙群、縄文時代の集石遺構1、ピット群、他に多数の縄文時代の土器、石器、平安時代の土師器、須恵器が出土している。並行してⅤ区43～48－Kグリッドの旧石器調査を進める。1月17日より森山栄一が、59年度中に調査を実施する予定の一般3号熊本北バイパス(熊本-植木線）の路線予定地内の、熊本市新南部町西谷遺跡の試掘調査を始める。2月6日、Ⅴ区の平安時代の遺構調査がほぼ終了したため、縄文時代の包含層調査にはいる。10日、旧石器の遺物出土範囲がⅤ区の竹山地区まで延びているか否かを確認するために、縄文時代の包含層調査が終了した部分より、ローム層まで掘り下げ調査を行うこととし開始する。3月初旬までに、61～63－Oグリッドの3ケ所に旧石器調査を実施したが、剝片が数点出土しただけで、遺物の広がりが認められないことと、残りの調査日数の問題より、もうこれ以上調査の必要はないものと判断し、Ⅴ区竹山地区の旧石器調査を打ち切り、縄文時代の調査を残りのグリッドにおいて続行することにする、9日までに遺構の実測、土層断面実測、写真撮影などをほぼ終え、47・48－Kグリッドの旧石器調査を終了させるために調査を開始する。13日、48－Kグリッドの北西コーナー付近のローム層中にナイフ形石器、剝片などの石器集中部を確認、その中より局部磨製石斧を確認する。残り地区の旧石器調査の遺物取り上げ、出土状態実測、写真撮影、土層断面実測などすべての作業を3月30日の午前中までに無事終了する。午後より現場の撤収作業を行い、発掘調査器材を文化財収蔵庫へ搬送し、昭和58年度曲野遺跡の最終発掘調査日程をすべて終了する。


第Ⅵ調査区
第Ⅶ調査区
84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62
0

第２図　調査区位置図

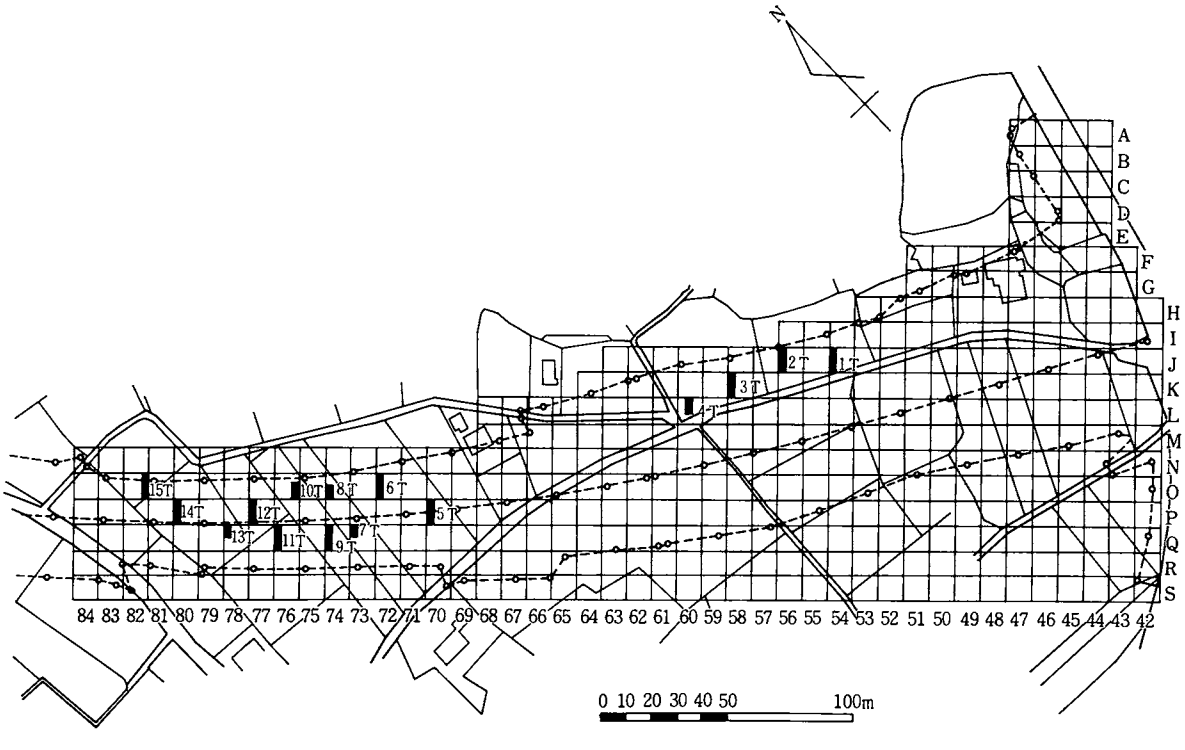

N
至城南
県道145号線
至松橋
第Ⅵ調査区
第Ⅴ調査区
調査区
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
60
59
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
50
100m

2節　Ⅲ次試掘調査

本節は、57年度（第Ⅲ次）調査期間中に並行して行った58年度（第Ⅳ次）調査対象地区、Ⅵ・Ⅶ調査区の試掘調査結果である。調査は、57年11月11日から12月23日までの20日間実施した。この調査は、Ⅳ次調査予定地区内の遺構および遺物の有無、遺構の広がりをたしかめ、本調査を行なう必要があるかどうかを決定するためで、なるべく多くの試掘トレンチを多くの場所に入れることに努めた。試掘トレンチの場所は第３図に、検出遺構および出土遺物などの試掘調査結果は第２表に示す通りで、調査予定地区の全域にわたりピット、土壙などの遺構と縄文土器、石器、土師器、須恵器などが散布していることが確認され、結果を文化課および建設省九州地方建設局熊本工事事務所に報告し、58年度もⅥ次調査とし継続して本調査を実施することとなった。

番号	トレンチ設定区(グリッド)	地　番	試掘面積	検　出　遺　構	出　土　遺　物
1	54－J	鳴渕1037	20㎡	土壙	なし
2	56－J	〃	20㎡	ピット	縄文式土器(晩)・須恵器・須恵質土器(擂鉢)
3	58－K	鳴渕1036	20㎡	ピット	なし
4	60－L	〃	12㎡	土壙	なし
5	70－P	鳴渕1029	20㎡	ピット	土師器（甕・糸切り底坏）・須恵器（坏・蓋・壺）
6	72－O	〃	20㎡	ピット・住居址か？	縄文式土器(晩)・打製石斧・土師器（甕・高台付坏）須恵器（甕・高台付坏・蓋）
7	73－Q	鳴渕1028	10㎡	ピット・土壙	縄文式土器(前・晩)・石製品？・土師器・須恵器
8	74－O	〃	10㎡	ピット・住居址か？	縄文式土器(晩)・黒曜石片・土師器・須恵器（甕）
9	74－Q	鳴渕1027	20㎡	ピット	土師器・須恵器（甕）
10	76－O	〃	10㎡	ピット・土壙・溝	縄文式土器(晩)・土師器（甕）・須恵器（高台付坏・蓋）
11	76－Q	鳴渕1016	20㎡	ピット・土壙道路（硬化）	縄文式土器(早・晩)・須恵器（坏）
12	77－P	鳴渕1017	20㎡	ピット	縄文式土器(晩)・土師器（甕）・須恵器（蓋）
13	78－Q	鳴渕1018	10㎡	ピット・土壙	縄文式土器(晩)・土師器・須恵器（高台付坏）
14	80－P	〃	20㎡	ピット・土壙	縄文式土器(晩)・石器片？・土師器・須恵器（蓋）・陶磁器
15	82－O	鳴渕1019	20㎡	ピット・土壙・溝	縄文式土器(晩)・土師器・須恵器・陶磁器

第２表　昭和58年度Ⅵ・Ⅶ区試掘トレンチ一覧表



第３図　昭和58年度Ⅵ、Ⅶ区試掘トレンチ配置図

3節　層　　位

本遺跡の層位および文化層については、調査報告書「曲野遺跡Ⅰ」、「曲野遺跡Ⅱ」の中に詳しく書かれており、今回調査した地区も前回までの基本層序に基づき調査を行ない、また層序自体も何ら前回までの基本層序と変わらないことより、詳細は前回までの調査報告書を参考にしていただき、本節では簡単に本遺跡の基本層序についてのみ書いておくことにしたい。

第Ⅰ層　耕作土層。厚さは20cm程で小石を含んでいる。

第Ⅱ層　黒色土層。火山灰土で、いわゆる黒ボクに相当し、粘質は少なく乾燥が早くサラサラしている。縄文時代以降の弥生時代～近代までの遺物を包含している。

第Ⅲ層　黄褐色土層。第Ⅲ－ａ層と第Ⅲ－ｂ層に分けられる。第Ⅲ－ａ層は粘性が弱く乾燥するとサラサラしており「キナコ」と呼ばれる。第Ⅲ－ｂ層には４～５cm程の淡黄褐色の土塊があり、Ａｈ(アカホヤ）の火山ガラスが含まれている。

第Ⅳ層　この層も第Ⅳ－ａ層と第Ⅳ－ｂ層に分けられる。第Ⅳ－ａ層は黄褐色で粘性を有しており、層の厚さは薄く認められない部分もある。第Ⅳ－ｂ層は黒褐色土で粘性を有している。縄文時代早期の押型文土器、塞ノ神式土器を包含している。

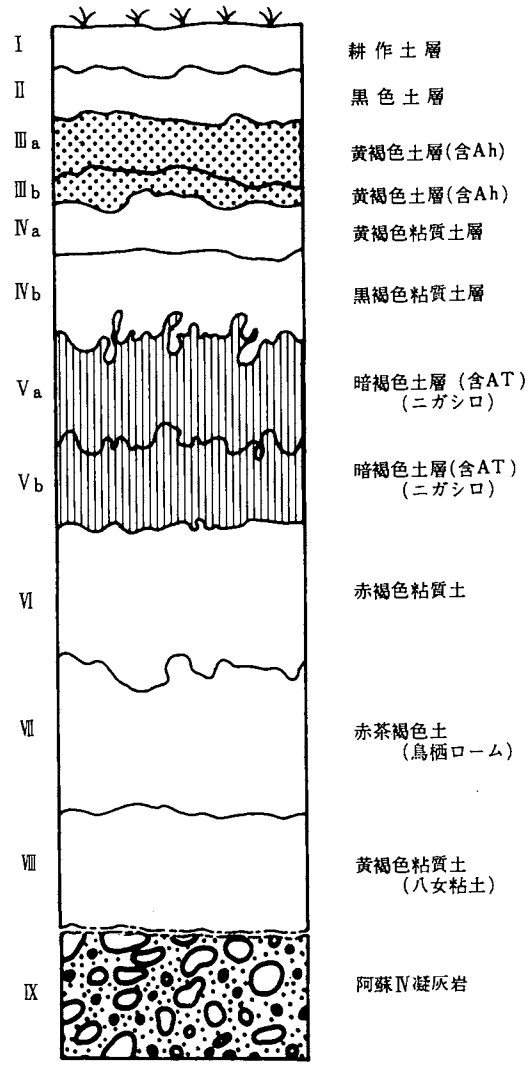
第Ⅴ層　暗褐色土。ゴリゴリした土塊を多量に含み通称「ニガシロ」と呼ばれる層である。この層も第Ⅴ－ａ層と第Ⅴ－ｂ層とに分けられ、第Ⅴ－ａ層は白っぽい班点が多く含まれ、雲母片も若干認められる。乾燥するとクラックが生じる。第Ⅴ－ｂ層は第Ⅴ－ａ層に比べて班点が少なくなり黒色が強くなる。広域火山ガラス「AT」が両者の中間位に最も多く含まれている。遺物の出土はなく、無遺物層と考えられる。

第Ⅵ層　赤褐色ローム層。強い粘性を持ち厚さは60cm程を測る。中位よりやや上面に、旧石器時代の遺物を含んでいる。

第Ⅶ層　赤褐色土。火山灰層で粘質は弱くサラサラとした状態で土放れが良い。下位にいくに従いＭｎを多く含むようになる。鳥栖ロームと称されるものである。

第Ⅷ層　淡黄褐色土。粘性が強まり、下位にいくに従い軽石が多くなる。八女粘土と称されるものである。

第Ⅸ層　阿蘇Ⅳの凝灰岩層で、数ｍ堆積している所もある。



第４図　層位概略図

第Ⅳ章　調査の成果

1節　旧石器時代の調査

前年度(第Ⅲ次発掘調査)、旧石器時代関係の調査は約2,000㎡の規模で実施され、報告されたように、第Ⅵ層赤褐色粘質土が石器群の包含層であり、ナイフ形石器・台形石器・石核・剥片などが出土している。石器群は「ＡＴ」下位に位置づけられ今も大きな論議を生じさせている。

さて、今年度の調査は曲野遺跡を南北に横切る県道をはさみ、西側地域が調査の対象地であり、合計９グリッド、約900㎡の調査を実施した。前年度地区に比して遺物の出土数は非常に稀薄であるが、石器群の出土層を同じくしており、石器群の出土範囲が前年度地区から、さらに西側に伸びるという事実の確認ともなったが、ちなみに、直線的に東西間約120m の距離をはかる。広い範囲で生活が営まれていたことを証している。石器の出土数は非常に少なく、剥片・砕片を含めて約100 点であった。

３点の石器を報告しておきたい。

第５図１はナイフ形石器である。第Ⅲ層、黄褐色土（アカホヤ）から出土したもので、本来的な出土状態を示していない。石質は緑白色を呈するチャートであり、横長剥片を素材としている。下半部を欠失しているため二側縁加工になるか否か不明である。表面に横剥ぎされたネガティブ面が見られ、連続的に剥がされた可能性もあり、国府型ナイフ形石器との関連が問われる。細かなブランティング加工が裏面から急角度に施されている。

２・３は第Ⅵ層から出土した局部磨製石斧である。２の石材は淡黄褐色を呈し、片岩と思われる。粗い剥離で整形を行い、刃部を欠くが一部に磨製痕跡を認めることができる。

３の石材は硬質砂岩と判断できよう。片面に粗い二次加工を行っており、刃部は、細かな剥離を連続して形成。ごく一部に磨製痕らしきものが見られる。

第Ⅲ次調査で明らかにできた様に、第Ⅵ層の石器群は、ナイフ形石器・台形石器・スクレーパー・石核らの石器組成を示している。ナイフ形石器・台形石器とも概して小型であり、端正な剥片剥離技術の展開を見せていない様である。むしろ、不定形剥片を素材としている。

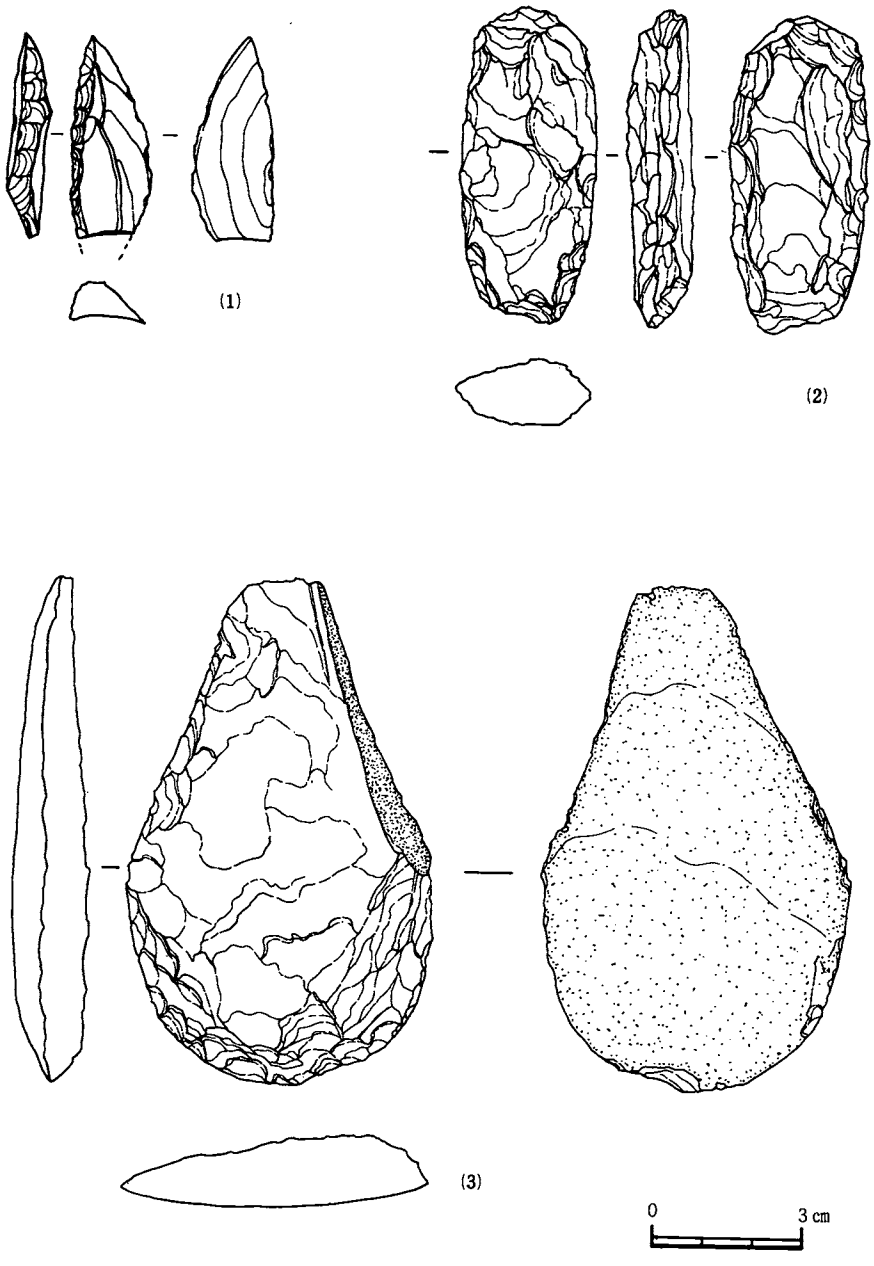
ナイフ形石器は切り出し状の形状をとり、二側縁加工を施し、一部には平担剥離も行っている。

台形石器は逆台形の形状をとり、二側縁に二次加工を施しているが、下縁への加工は行っていない。一部平担剥離は行われている。

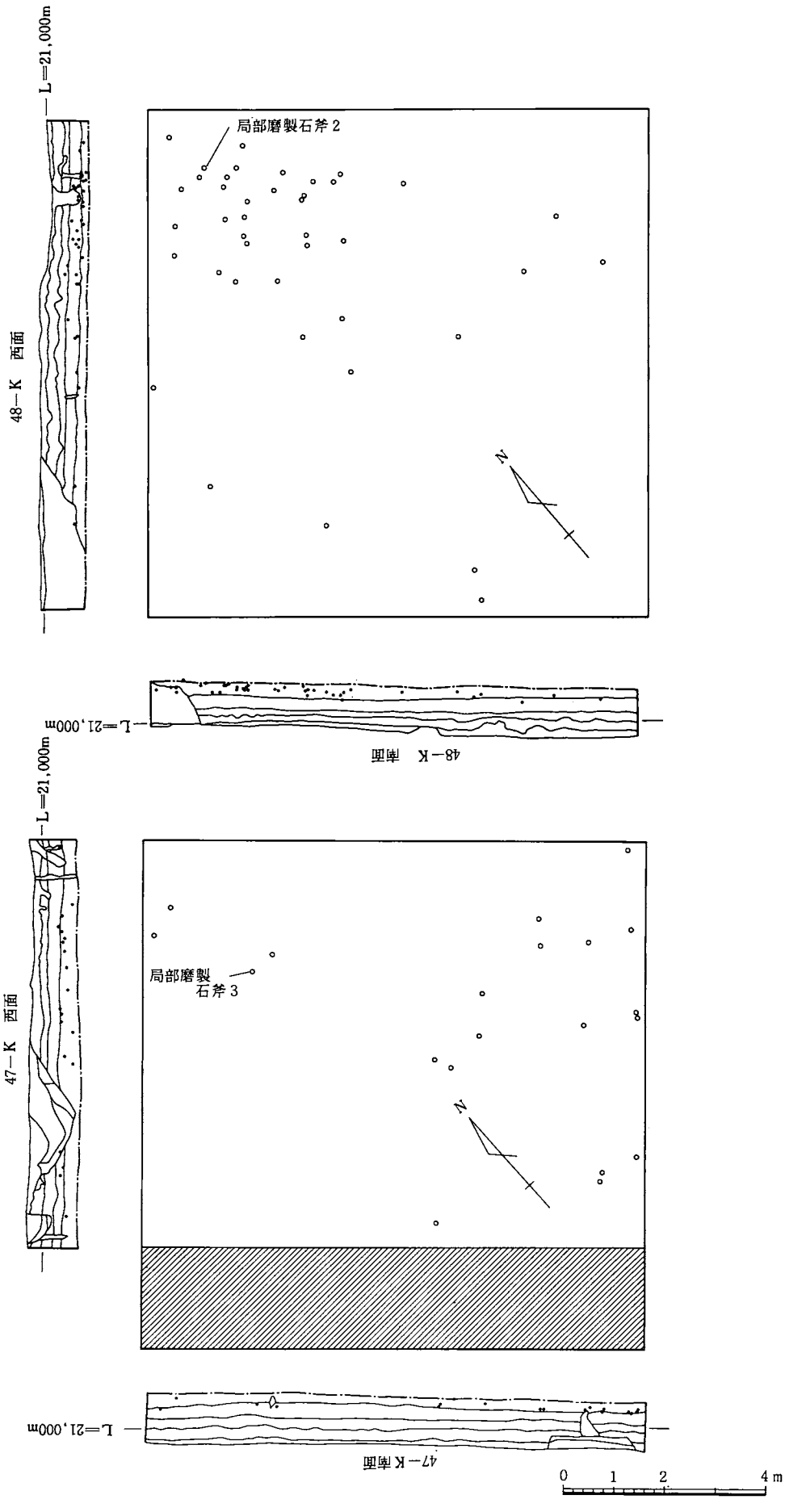
この様な石器群に加えて、今回、局部磨製石斧が石器組成の中に加わることになる。九州において、ナイフ形石器・台形石器と局部磨製石斧とが共伴する事例は知られていない。一方、関東地域を中心に「ＡＴ」前の石器群の中にナイフ形石器と局部磨製石斧が出土する事例は増えている。東京都杉並区高井戸東遺跡をはじめとして、立川ローム層下位からの出土が知られ、約28,000～30,000年前という非常に古い時期のものと考えられている。

次に、１のナイフ形石器は横長剥片を素材として、連続的に剥取された可能性を有している。国府型ナイフ形石器との関連が強そうである。熊本県内で国府型ナイフ形石器が発掘調査で出土した事例は現在のところ認められていない。曲野遺跡、第Ⅲ次調査で出土層位を明確にしない出土石器の中に、国府型ナイフ形石器に類似する石器と三稜尖頭器各１点が出土している。今回のナイフ形石器を含めて合計３点の石器は何れも出土層位を明確にする事ができないが、特に三稜尖頭器が「ＡＴ」下位から出土する事例を聞くことはない

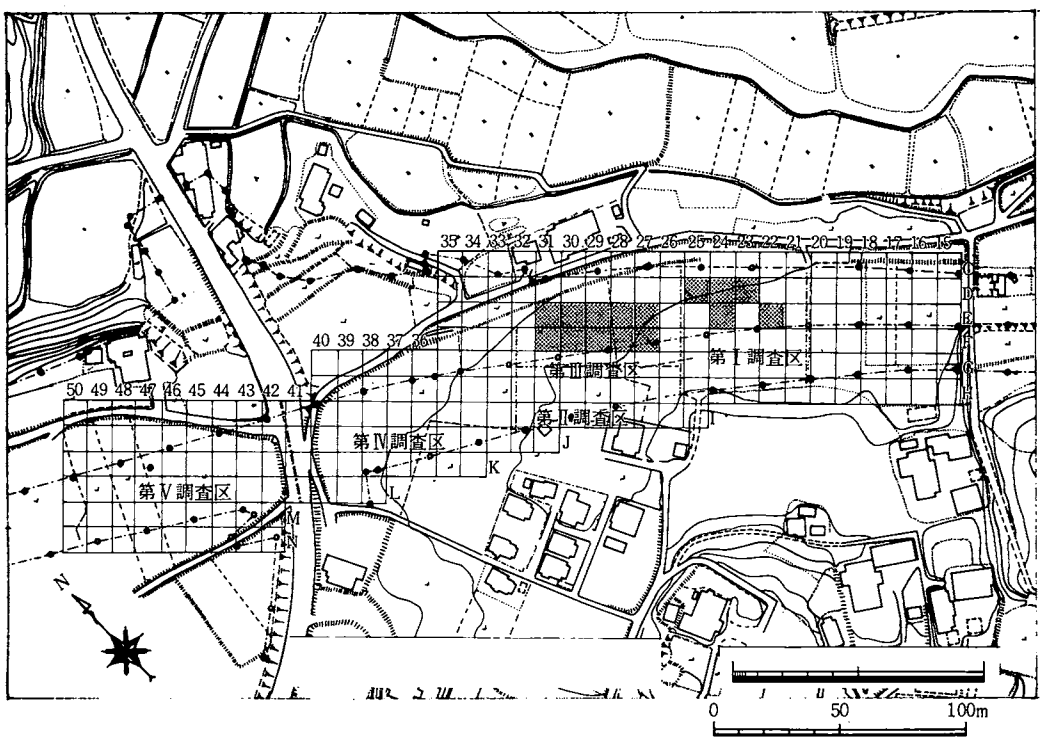
ので、第Ⅵ層の石器群とは出土層位を異にする可能性が強いであろう。とすれば、第Ⅵ層の石器群の上位にもう一枚の石器群が存在するものと考えていかなければならないであろう。



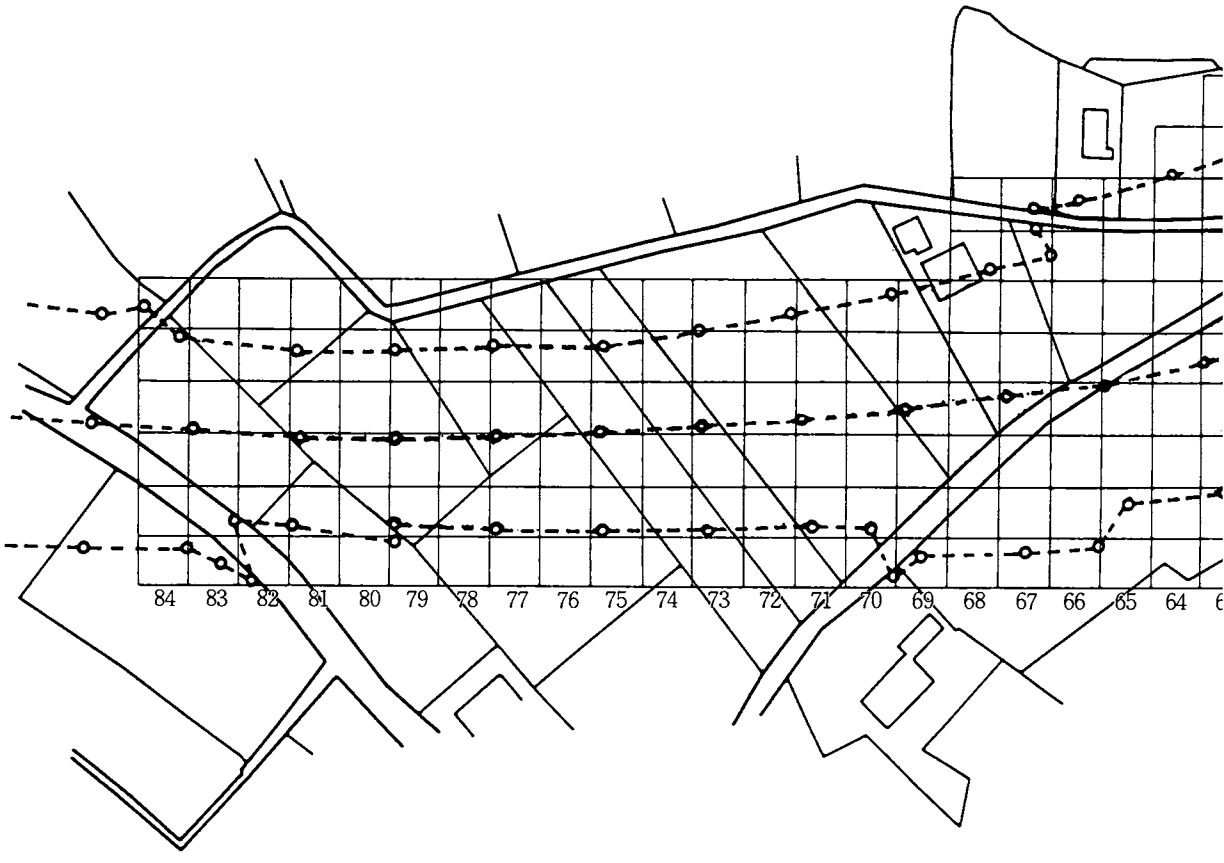
第5図　出土石器実測図



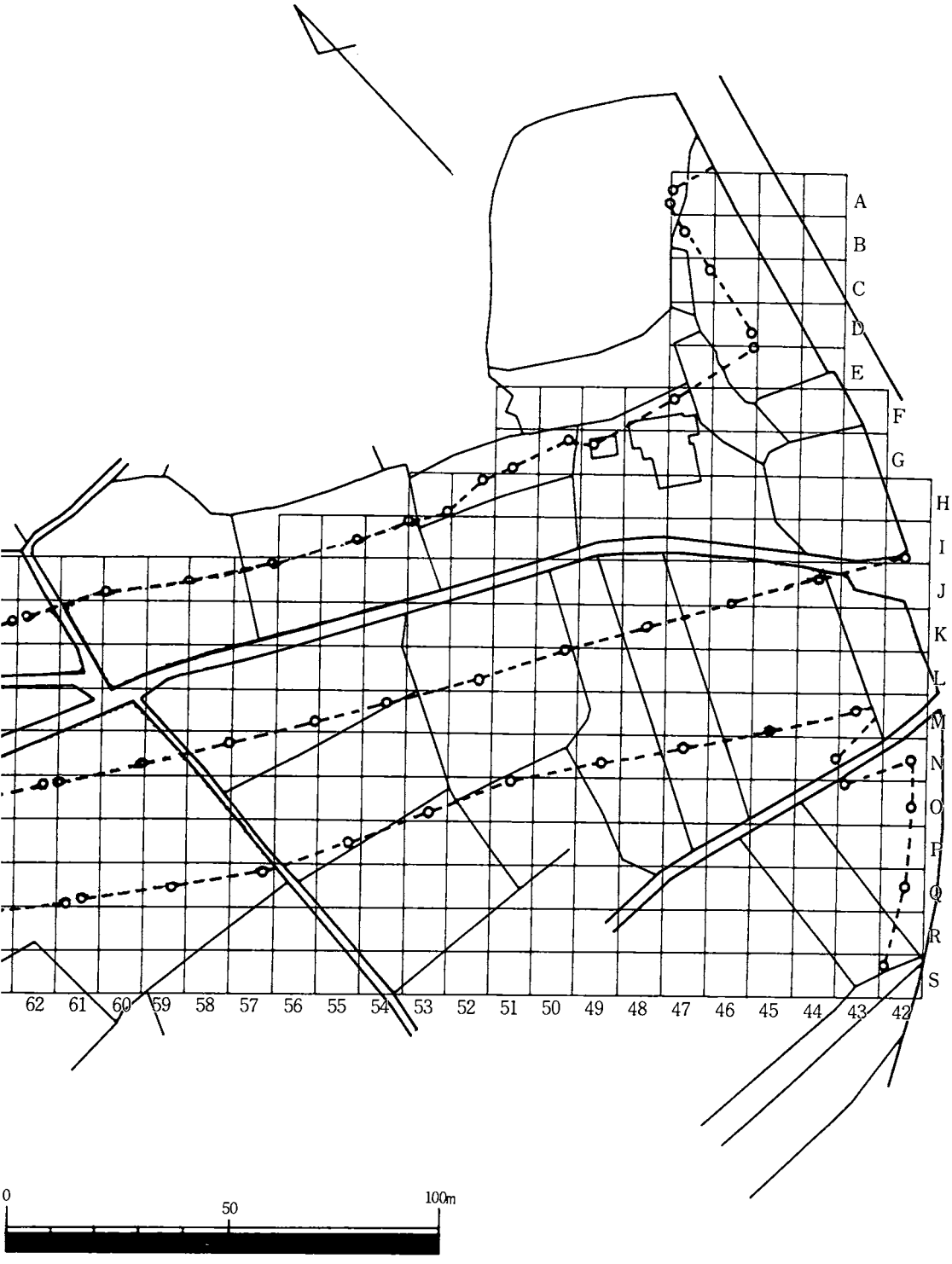
第6図　47-K・48-Kグリッド石器出土状態ドット図



第７図　Ⅲ次旧石器調査グリッド位置図(第Ⅰ～Ⅴ調査区)



第７図　Ⅳ次旧石器調査グリ


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42
0
50
100m

ド位置図

2節　縄文時代の調査

昭和55年度を初年度調査としⅠ次、Ⅱ次、Ⅲ次発掘調査及び試掘調査の結果より当然Ⅳ次調査においても、土器及び石器など遺物の出土、遺構の検出が予想された。しかし、今回の調査地区は、前回までの地区と違い台地の側縁部から端部にかけての範囲が調査対象地区になることより、縄文時代の遺構は今回の調査地区までは広がらない可能性が強いのではないかという考えにより、今年度は古代の調査に重点を置き、もし縄文時代の遺物、遺構を検出した場合、その部分を中心に広げ調査を行うという調査方針の基に調査を行った。しかし調査の結果縄文時代の遺物、遺構が予想に反して台地の端部まで延びていることが確認され、遺構としては、住居址等の検出はなかったが、前回の調査同様集石遺構を８ケ所、また縄文晩期終末頃と考えられる壺埋納土壙１ケ所を検出した。他に土器片、石器類が多く出土したが、これらは遺構に伴わずほとんどが包含層すなわち遺跡Ⅲ層と呼んでいる、鬼界アカホヤ火山灰ＣＫ－Ａｈ１を含む黄褐色土層よりの出土である。これら縄文土器と出土層位に関する問題は、古い時期の遺物出土量が少ないこと、また前回Ⅲ次調査の報告において詳細に述べてあるためここでは省略させて戴きたい。以下縄文時代の土器、石器及び検出遺構別という順に報告していきたい。

１．包含層中出土遺物

縄文土器(第８図～第12図)

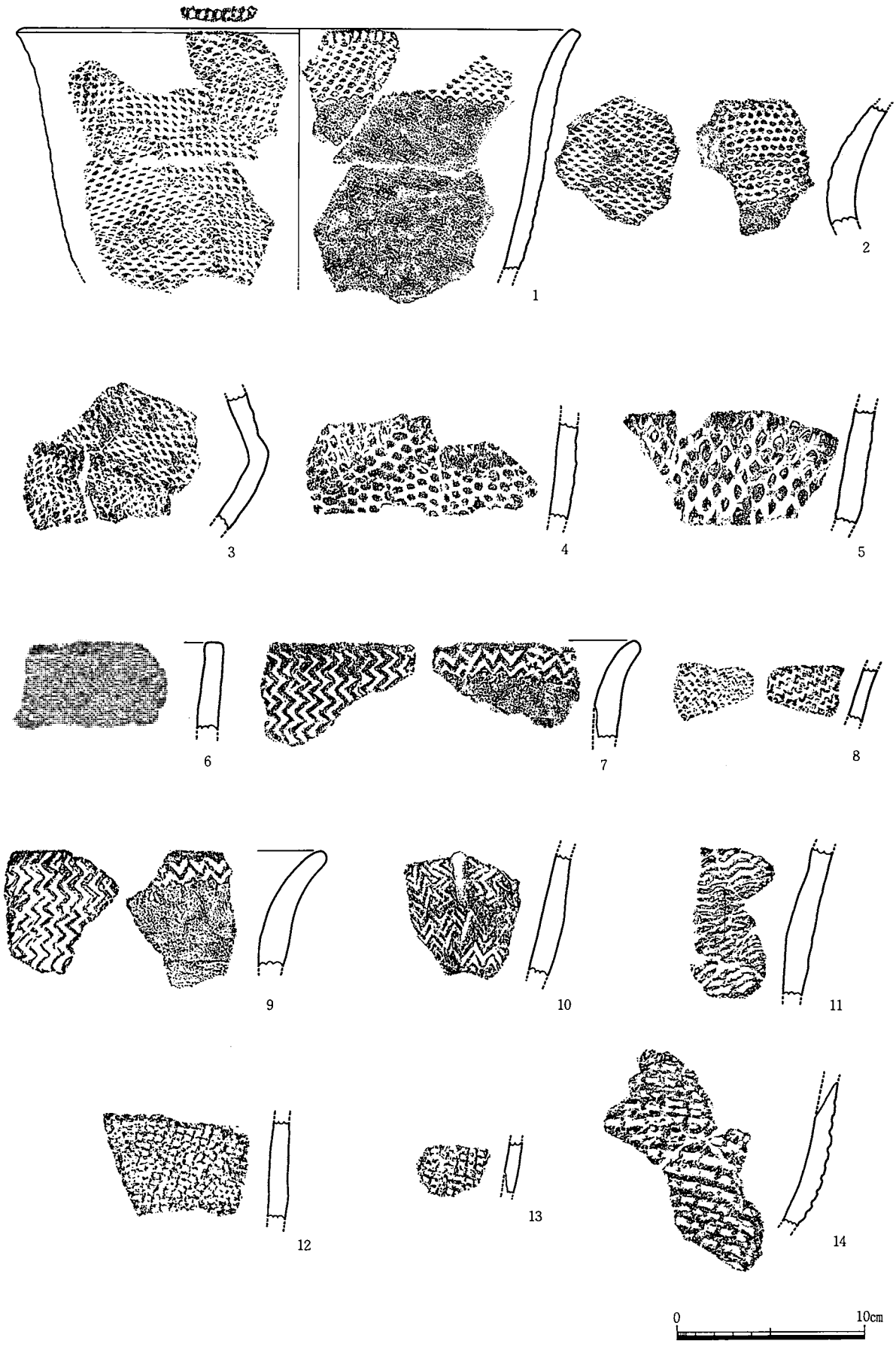
今回の調査した調査Ⅴ区、Ⅵ区、Ⅶ区の包含層中より出土した縄文土器は、前回のⅠ次、Ⅱ次、Ⅲ次調査地区より量的にはかなり少ない。時期別に遺物の出土量を見ると、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ次調査同様、後、晩期に集中する傾向が見られ、中期は全く見られない。また早、前期は若干量見られるが少ない。ここに図化した土器は、量的には少ないが当遺跡の縄文時代における生活時期を知る上で重要な土器でかつ代表的な土器を取り上げ、ここに掲載する。以下、文様の特徴により分類を行い説明を加えていく。

Ⅰ類　押型文土器（第８図１～14）

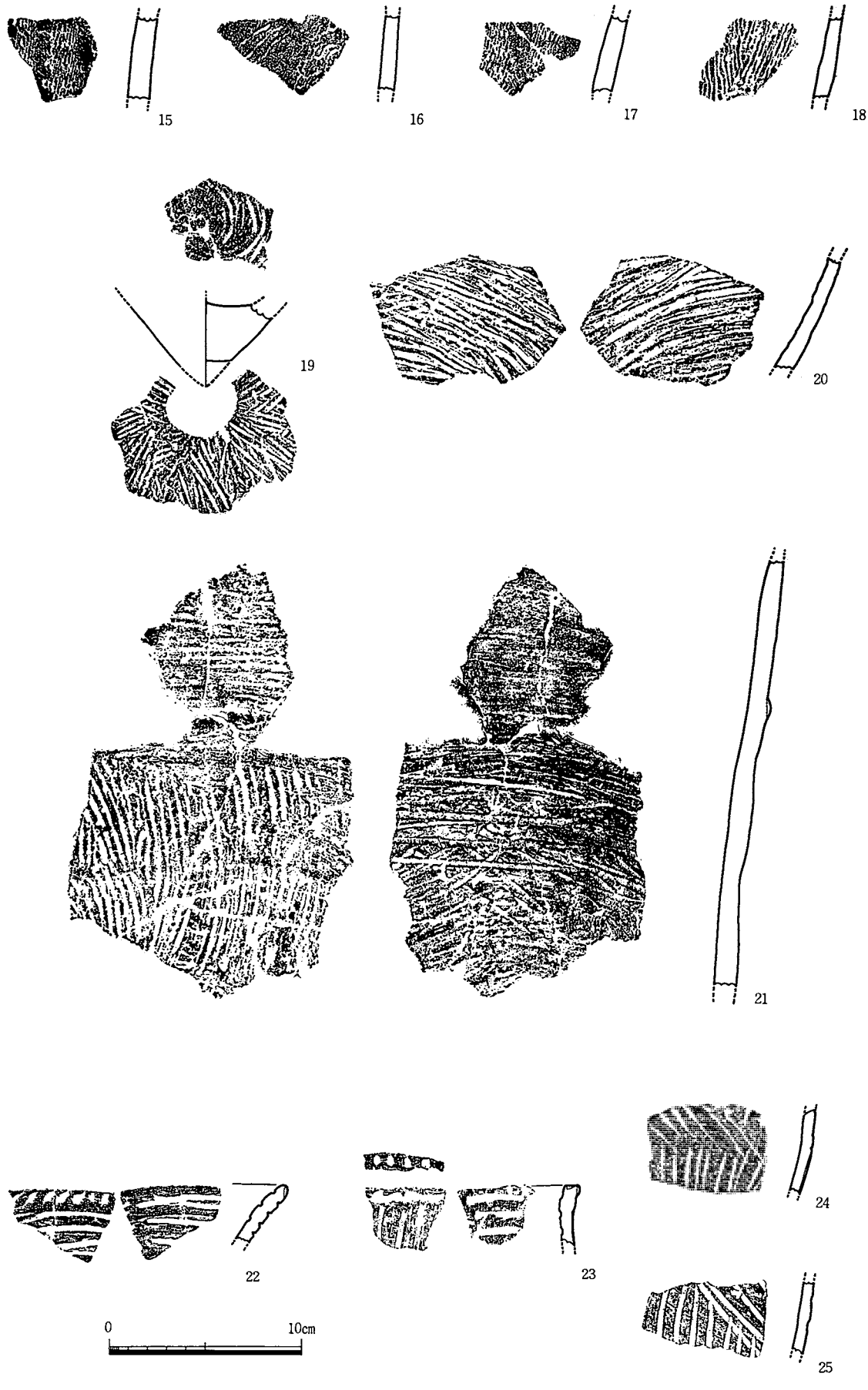
文様は大別して楕円押型文(第８図1～5)、山形押型文（第８図６～11)、格子目押型文（第８図11～14）の３種に分類される。１は、胴部からやや外傾しながら立ち上がり、口縁端部にかけて外反する深鉢の口縁部で、口径30.2cmを測る。文様は外面全体および内面口縁部に小型の楕円文を施文し、内面の口縁付近と口唇部には、同一原体による原体条痕を施している。２は口縁部が極端に外反する口縁付近の深鉢片で、小型の楕円文を内、外面に施文している。３は小型の楕円文を外面に施文した深鉢胴部片で、胴部が内側に逆くの字状に屈曲している。２と３は共に器形の特徴より手向山式土器に比定されると考えられる。４、５は共に粗大化した大型の楕円文を外面に施文した深鉢胴部片である。６は口縁部が直口して立ち上がり、外面に横および斜方向に山形文を施文した深鉢口縁部片である。７・９は共に粗大化した大型の山形文を、外面は縦方向に、内面を横方向に施文した深鉢口縁部片で、口縁部は共に外反し、口縁端部は丸くなる。８・10・11は外面に山形文を施文した深鉢胴部片で、10・11は共に文様が粗大化している。12～14は外面に格子目文を施文した深鉢胴部片で、14は文様が粗大化し雑な施文を行っている。

Ⅱ類　撚糸文土器（第９図15～18）

すべて深鉢の胴部片で、器面全体に撚糸文を施文している。文様を全体に施文した後、ナデにより磨消し、文様区画を行い独特の文様帯を作り出している。文様の特徴より塞ノ神式土器に比定されるものである。



第8図　縄文土器実測図



第９図　縄文土器実測図

Ⅲ類　貝殻条痕土器（第９図19～21）

19は深鉢の底部片で底面部分を欠失しているが尖底になるものと考えられる。内外面には、貝殻腹縁による条痕調整を行っている。20・21も共に内外面に貝殻腹縁による条痕調整を行った深鉢胴部片である。20は傾きにより底部近くになるものと考えられる。この一群は、轟式土器に比定されるものと考えられる。

Ⅳ類　沈線文土器（第９図22～25）

22は口縁部に向って大きく外反する深鉢口縁部片で内外面に横方向の沈線を施している。また外面の口縁端部近くには刺突を行っている。23も同じく内面に横方向、外面に縦方向の沈線を施した深鉢の口縁部片で、口唇部に刺突を行っている。器形は胴部から直口して立ち上がり口唇部を平担にするために余った粘土を外側に折り込んでいる。24・25は共に深鉢の胴部片で、外面に縦および斜方向の沈線を施文している。４片とも、器壁は薄く、色調は赤褐色または橙色で、胎土に滑石粒を含んでいないが曽畑式土器に比定されるものである。

Ⅴ類　貝殻腹縁押引き文土器（第10図26～30）

26～28は共に口縁部に、二枚貝の腹縁を使い２段または３段にわたって押引きを行い文様を付け、また貝殻腹縁文の上部と端部の間には、棒状器具を使った２本単位の押引きが見られる。器形は胴部から口縁部にかけほぼ直口または若干外反ぎみに立ち上がり口縁端部が丸くなる深鉢の口縁部である。29・30は端部が欠失するが、二枚貝の腹縁による押引きを行っていることより、口縁部に近い部位と考えられる。これらの土器は、すべて器壁が1.2～1.6㎜と厚い特徴がみられる。特徴より早期の土器と考えられる。

Ⅵ類　縄文土器（第10図31）

外面に縄文を施した深鉢の胴部片で、傾きより底部に近い部位と考えられる。この土器は中期船元系の竹崎式土器に比定される土器であろうと考えられる。今回の調査では、中期の土器は１点のみで阿高式土器も全く出土していない。

Ⅶ類　爪形状刺突文土器（第10図32）

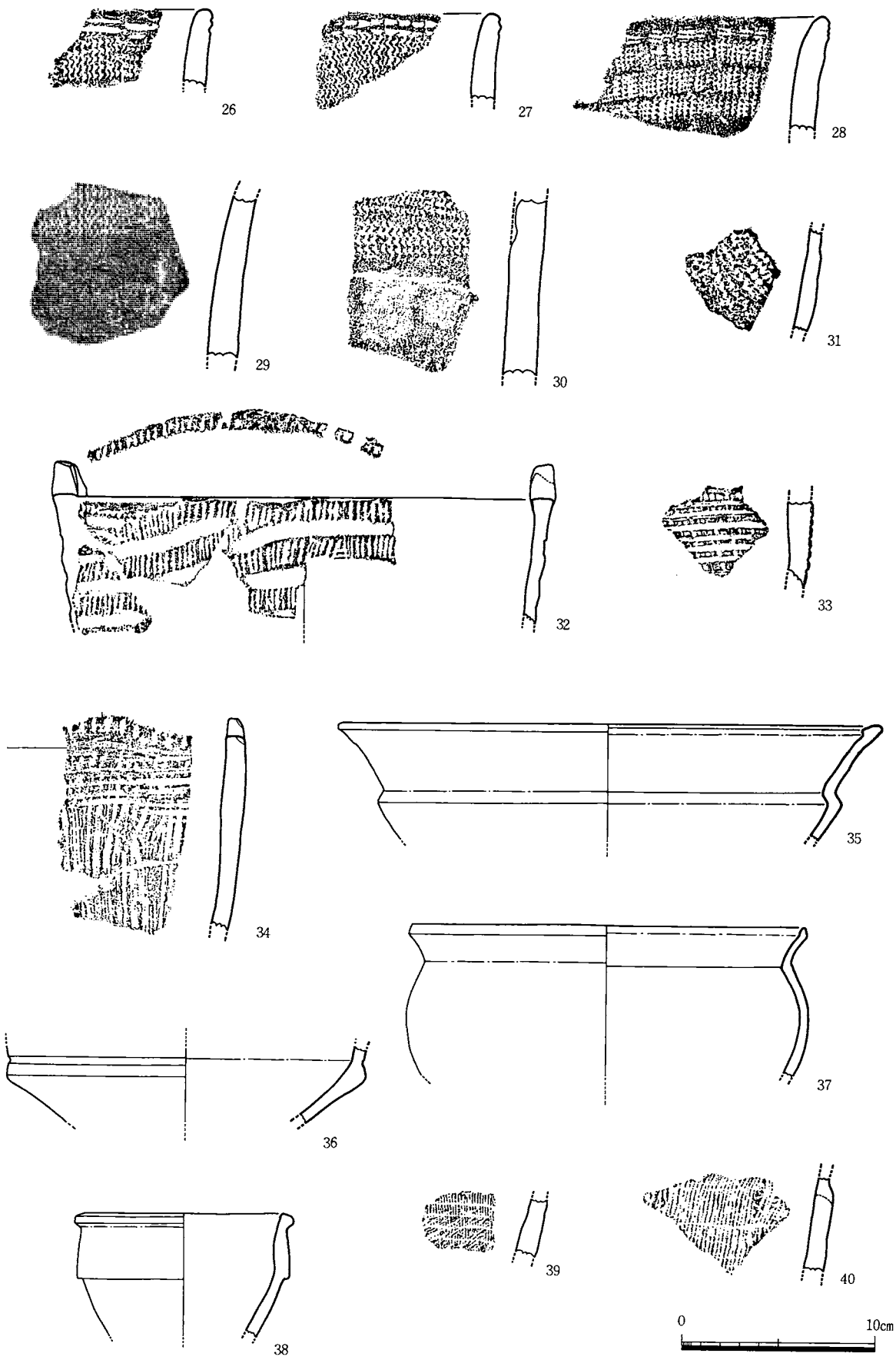
口径32㎝を測る深鉢の口縁部片である。口唇部と口縁から胴部にかけて、同一ヘラ状器具による刺突文を施し外面の爪形状刺突文には、間に凹線を施し区画を行い文様帯を作り出している。文様をよく観察すると爪形状の刺突文は、斜めや縦に施文している部分が認められることより、最初に爪形状の刺突文による文様構成を大まかに行った後、さらに文様帯を整えるために凹線で調整を行っているようである。また口縁部には、文様を施文した後に、頂部に２条の切れ込みを入れた山形の粘土を相対する位置に２個張り付けている。器壁は薄く、口縁部はやや内湾ぎみに直口し立ち上がる。特徴より後期初頭の土器と考えられる。

Ⅷ類　条痕文土器（第10図33～34）

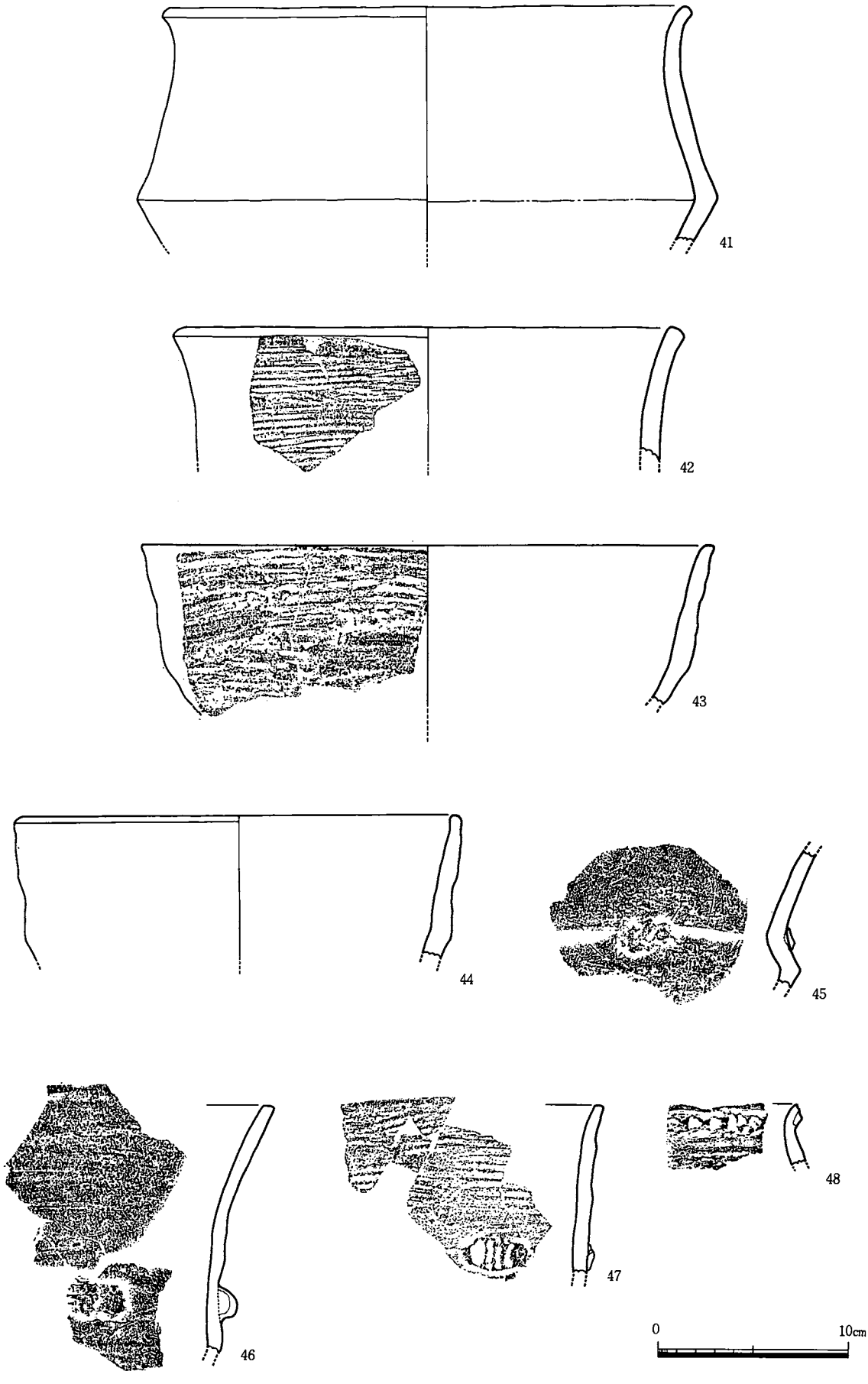
棒状工具による条痕調整を外面にのみ行っている深鉢片である。両方ともよく観察すると縦方向の条痕調整の後、横方向の条痕調整を行っている。34は口縁部ににかけてほぼ直口して立ち上がり口縁は山形口縁をなしている。また端部には刺突を施している。

Ⅸ類　精製研磨土器（第10図35～38）

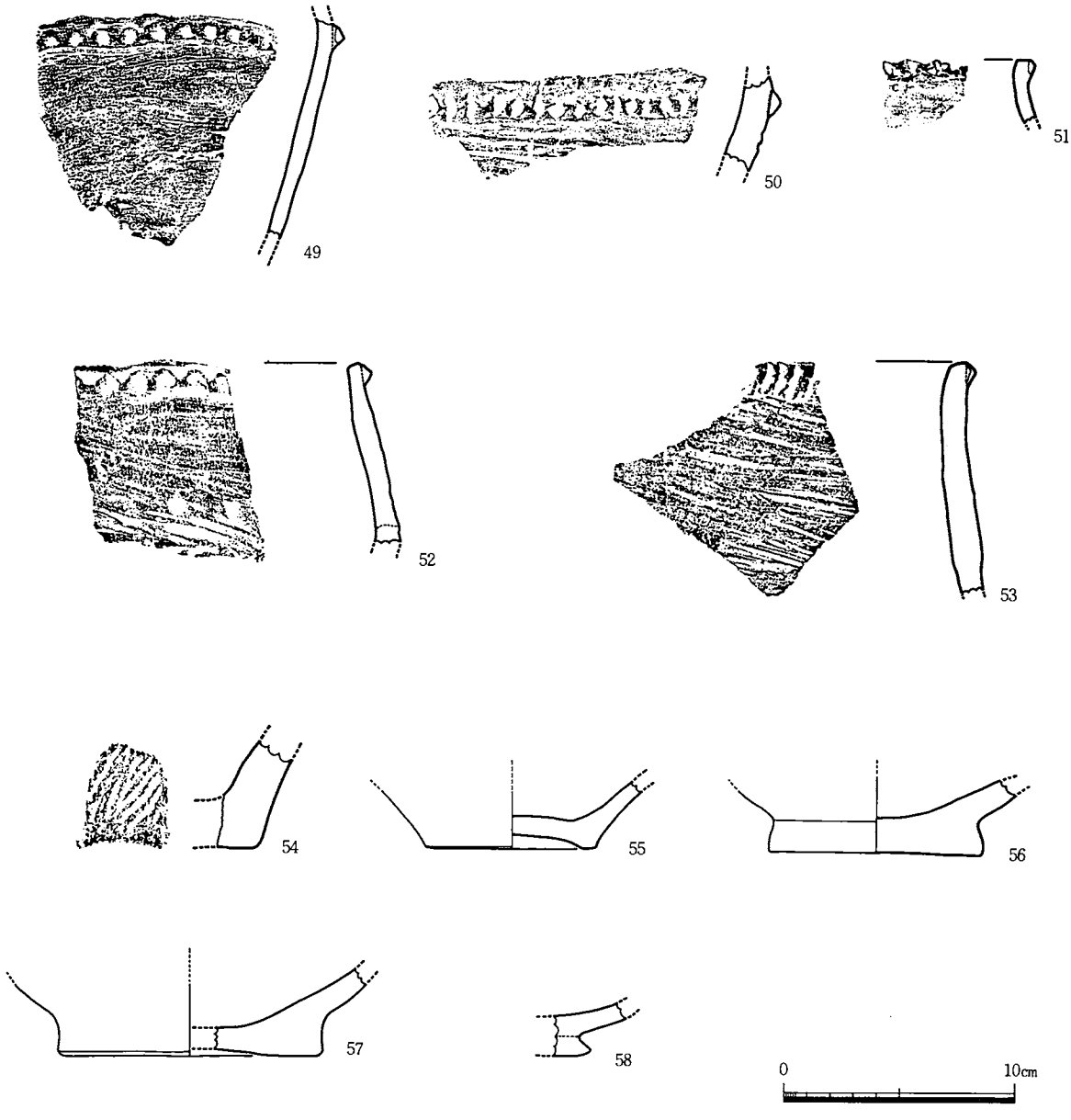
35は、口径28.4㎝を測る浅鉢の口縁部片である。器壁は約５㎜と薄く、器形は胴部が内側に屈曲した後直．



第10図　縄文土器実測図



第11図　縄文土器実測図



第12図　縄文土器実測図

ちに頸部から口縁部にかけてくの字状に大きく外反する。36は同じく浅鉢の胴部片で、胴部径18.8cmを測る。器壁は薄く、器形はやはり胴部が内側に屈曲した後、口縁部にかけて大きく外反するものと考えられる。頸部に1条の沈線が見られる。37は口径20.6cmを測る、胴部が丸く張り出し頸部にかけて内湾し、頸部から口縁部にかけて大きく外反する壺の口縁部片と考えられる。器壁は4mmと薄く、口縁端部は短かく内傾し丸くなる。38は口径11.4cmを測る小型鉢片で、胴部で内側に屈曲し、口縁部にかけてやや内傾気味に直口して立ち上がり口縁端部にはふくらみを出し突帯に似たものを作り出している。これらの土器は4片とも内外面共によく研磨されている。特徴より後期後半の土器と考えられる。

X類　組織痕土器（第10図39～40）

器種不明の胴部片で、2片とも蓆目圧痕と称されるものであると考えられる。39は縦糸は1cmに7本で、横糸の間隔は6mmである。40は縦糸は1cmに5本で、横糸の間隔は1.8cmである。糸の撚りは左撚りと思わ

れるがよく判別がつかない。特徴より晩期の土器と考えられる。

Ⅺ類　粗製土器（第11図41～44）

41は口径28cmを測る深鉢口縁部片で、胴部で一度内側に逆くの字状に屈曲し、口縁部にかけて内傾して立ち上がり、口縁部で短く外反し端部は丸くなる。内外面共にナデによる調整を行っている。42は口径27cmを測る深鉢口縁部片で、胴部から口縁部にかけてゆるく外反し、外面は条痕、内面はナデによる調整を行っている。43は42と同様、外面は条痕、内面にナデによる調整を行っている口径15.1cmを測る浅鉢片と考えられるものである。底部付近から胴部にかけて内湾し、口縁部にかけてやや外傾気味に直口して立ち上がる。44は胴部からやや外傾しながら直口して立ち上がる深鉢口縁部片で、口径23.6cmを測る。内外面は共に浅い条痕調整の後ナデによる調整を行っている。特徴より晩期初頭の土器と考えられる。

Ⅻ類　粗製突帯文土器（第11図45～47）

45は胴部で逆くの字状に屈曲した後、頸部でさらにくの字状に屈曲し、口縁部に向って外傾しながら直行して立ち上がる深鉢片で、くの字状に屈曲する頸部にリボン状の突帯を貼り付けている。46も同じく胴部から直口して立ち上がりさらに頸部付近でゆるく屈曲し外傾しながら立ち上がり口縁部にいたる深鉢片で、頸部よりやや下側にリボン状の突帯を貼り付けている。47は胴部からほぼ直口して立ち上がり口縁部でゆるく外反する深鉢片で、胴部近くに刻目を入れたリボン状の突帯を貼り付けている。内面はナデ調整、外面は条痕調整を行っている。特徴より晩期後半の土器と考えられる。

ⅩⅢ類　刻目突帯文土器（第11図48、第12図49～53）

48は胴部より内傾しながら立ち上がり、端部近くで外側に開く甕口縁部で、口縁端部よりやや下側に刻目を施した突帯を貼り付けている。器面調整は内面ナデ、外面条痕である。49・50は刻目突帯を貼り付けた甕胴部片である。外面には条痕調整を行っている。51は48と同じく内傾して立ち上がり、端部でゆるく外反する甕口縁部片で、口縁端部に刻目突帯を貼り付けている。外面は条痕調整を行っている。52・53は胴部で逆くの字状に屈曲し内傾して立ち上がり口縁部にいたる、口縁端部に刻目突帯を貼り付けた甕口縁部片である。外面は条痕調整を行っている。特徴より晩期終末の土器と考えられる。

底部（第12図54～58）

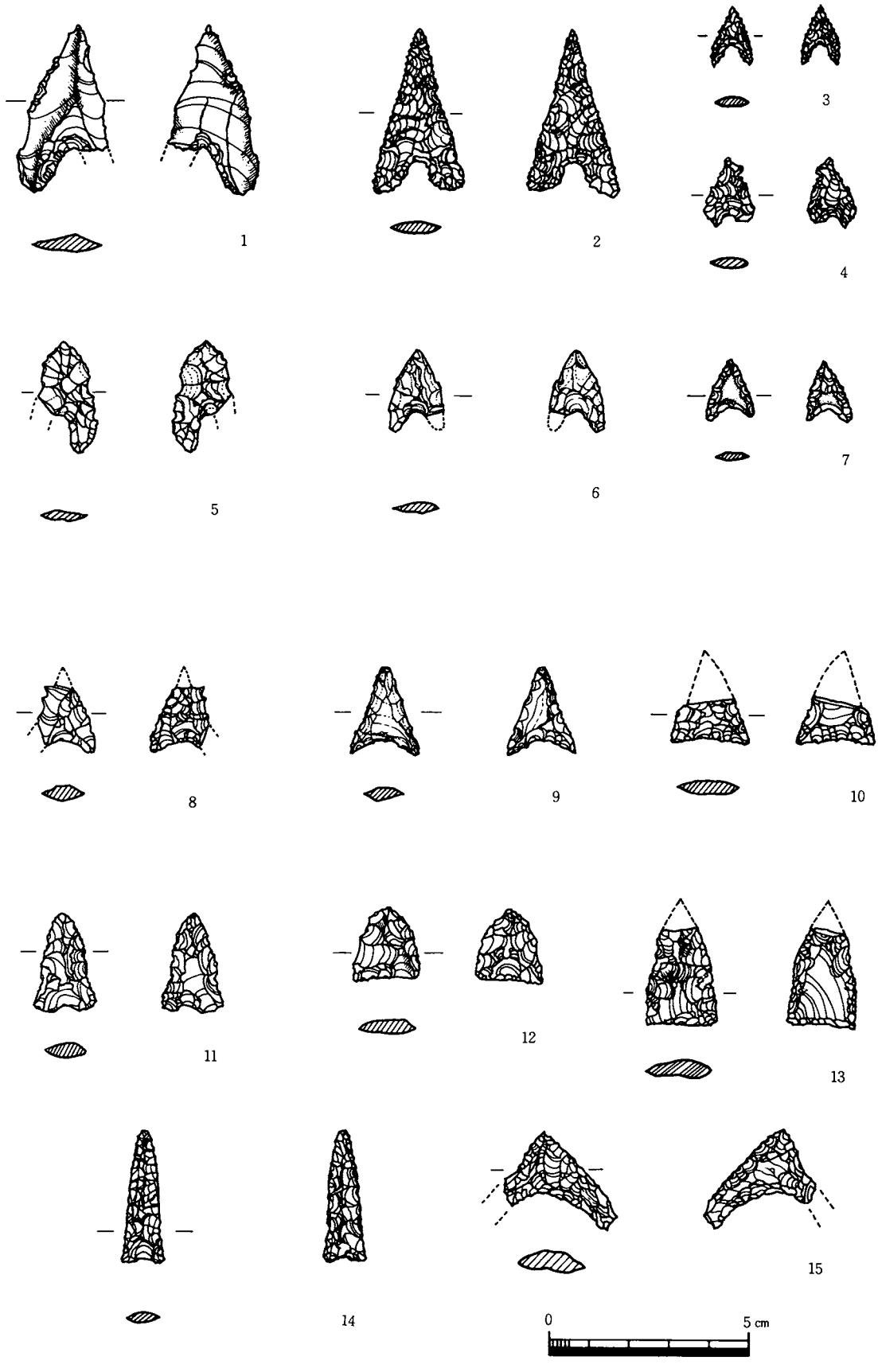
54は外面に条痕を施し、平底を呈する深鉢底部片である。器壁は2cmを測り非常に厚いことより、早期または前期の土器であろう。55は平底で上げ底を呈した浅鉢の底部片で、底径7.5cmを測る。内外面は共に研磨により仕上げられ、底面を削って上げ底を作り出している。おそらく後期の土器であろう。56・57は共に平底を呈する深鉢の底部片で、底径は56が9.2cm、57が11.6cmを測る。58は同じく平底を呈する底部片で、器種は不明である。56・57・58の3点は円盤貼り付けの底部と考えられ、晩期初頭に位置付けられるものであろう。

縄文石器（第13図～第17図）

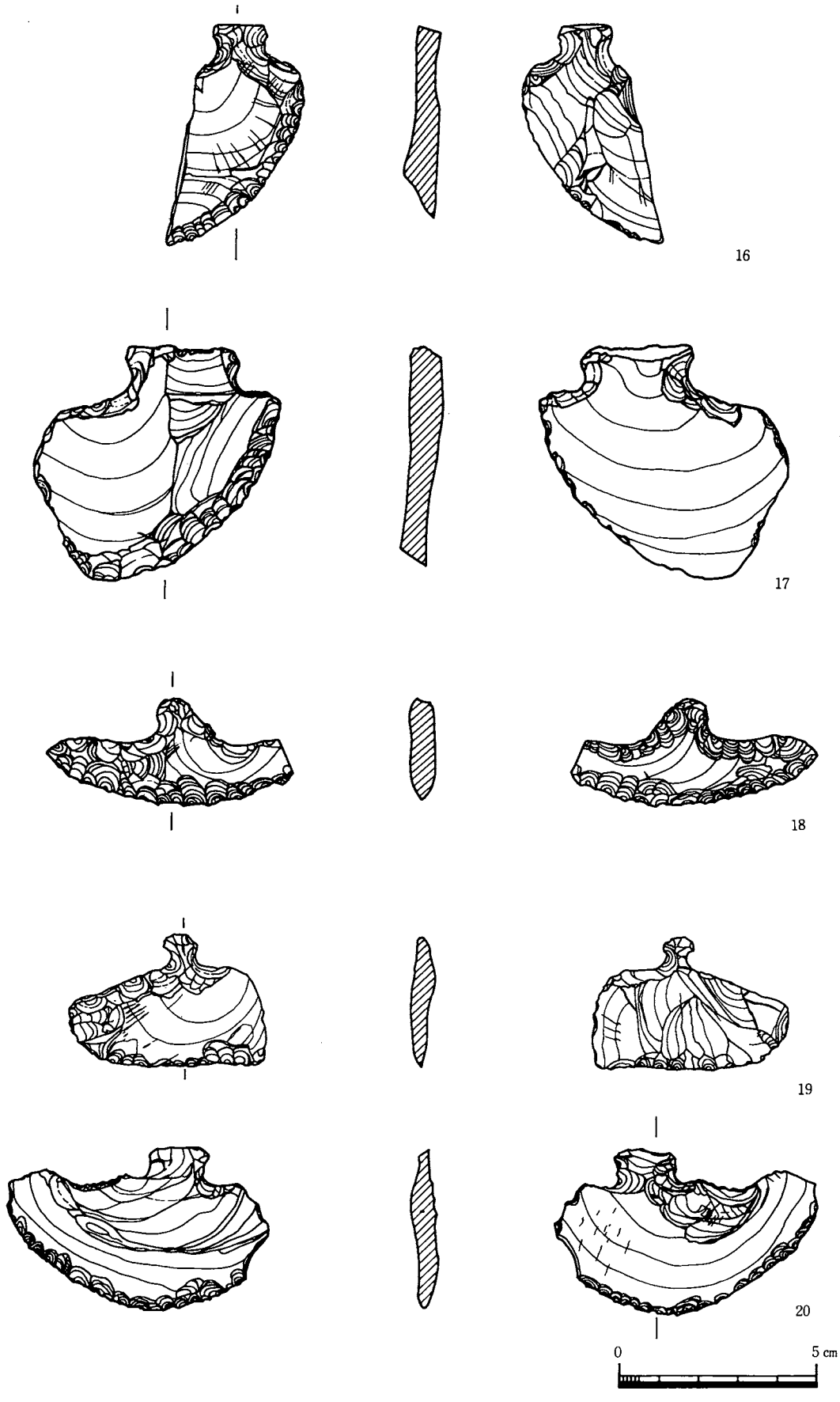
石鏃（第13図1～15）

総数15点を数え、石材は黒曜石が多く9点、次に安山岩4点（5・6・9・14）、チャート2点（10・14）である。

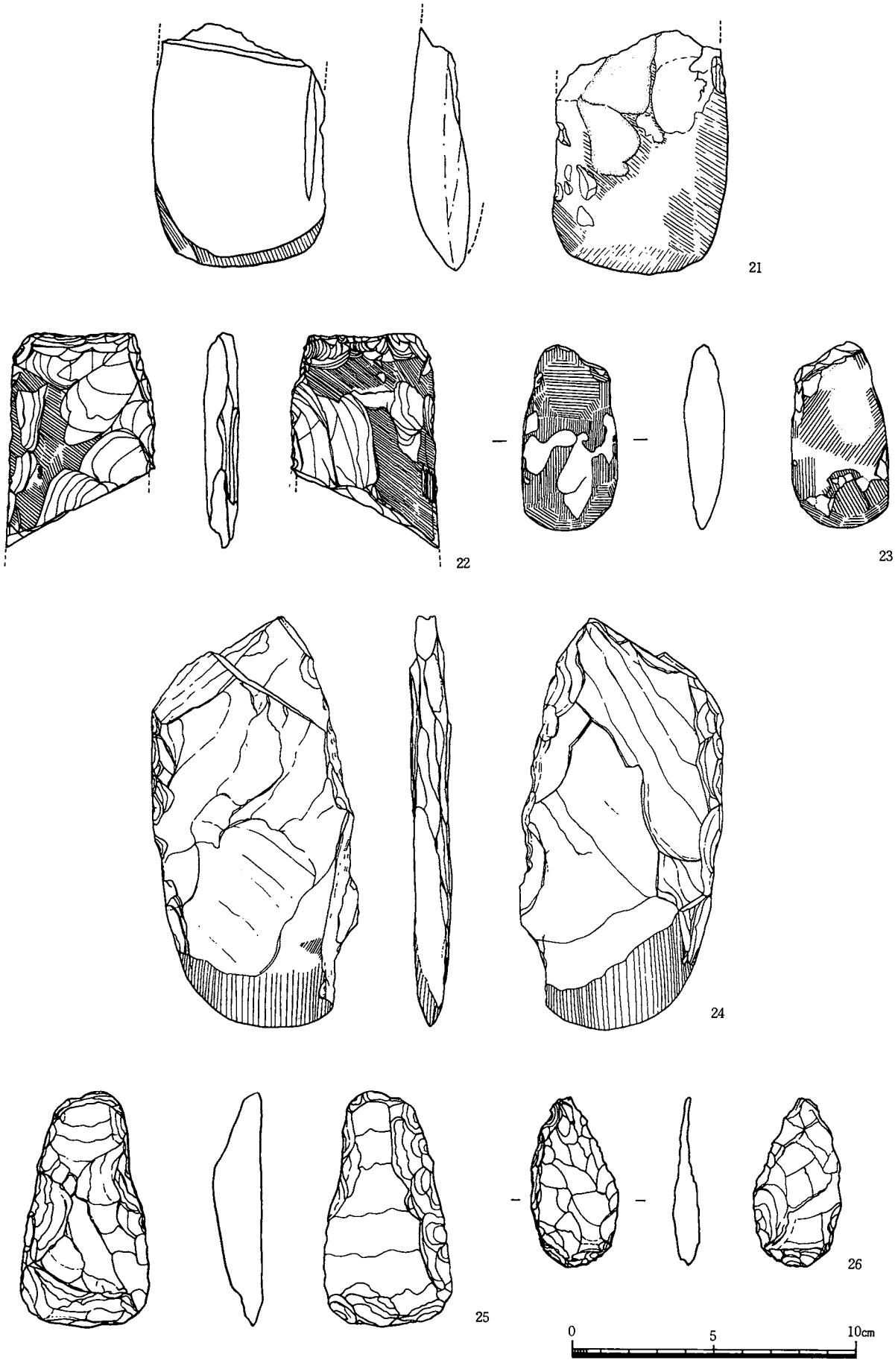
1と2は、共に大型の二等辺三角形を呈した抉入の深い凹基無茎鏃で、鍬形鏃と呼ばれるものである。1



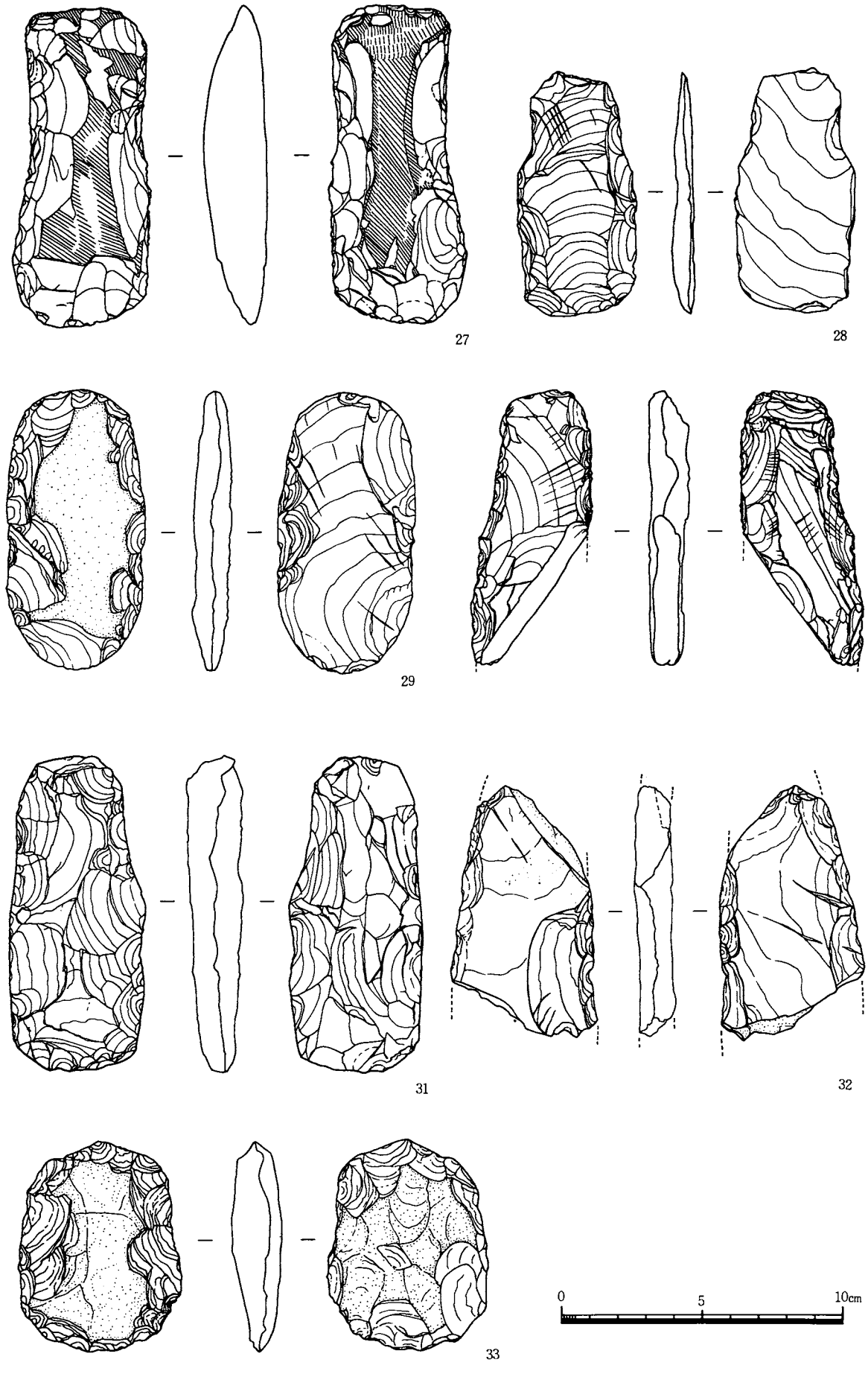
第13図　縄文石器実測図



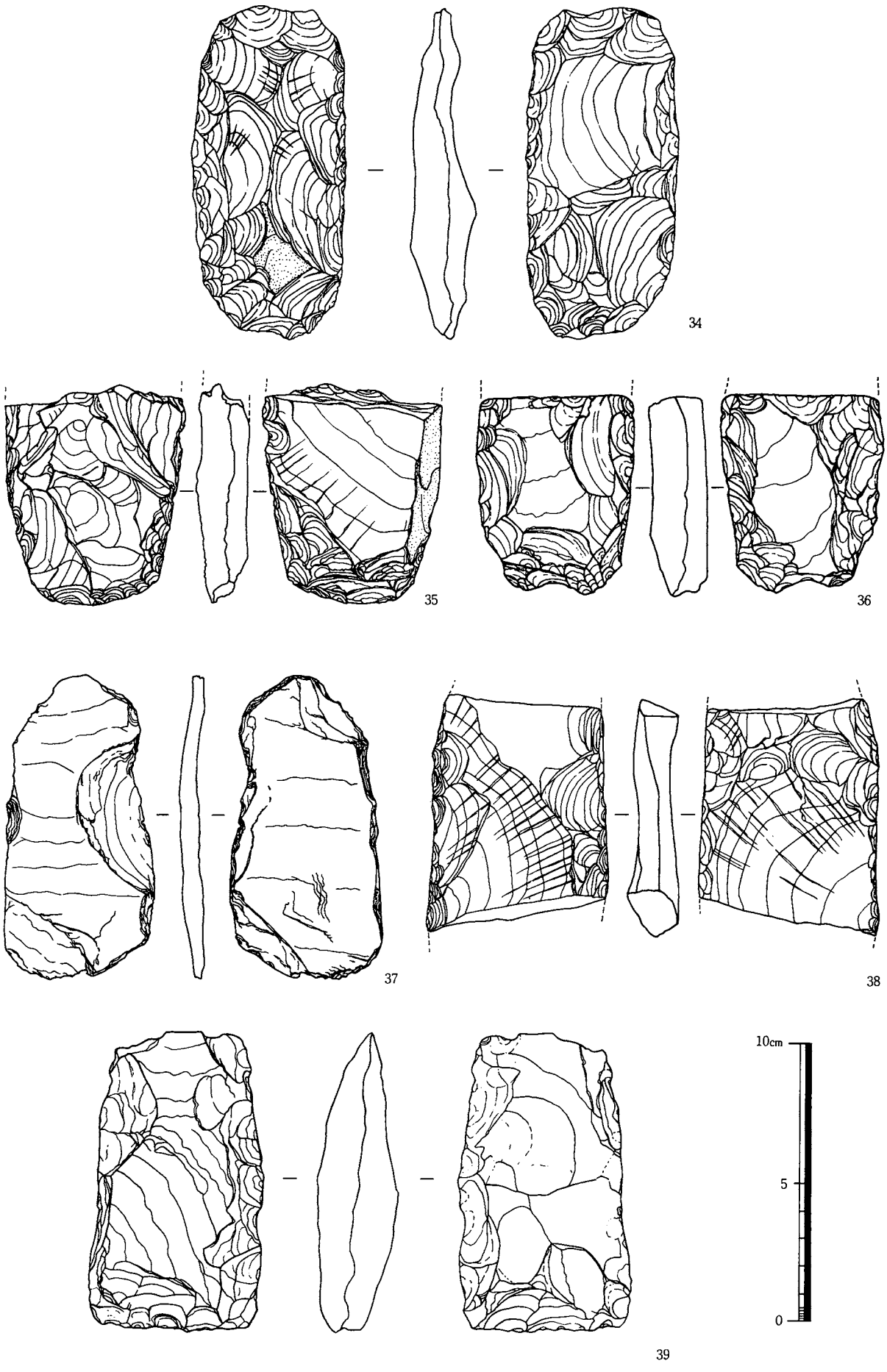
第14図　縄文石器実測図



第15図　縄文石器実測図



第16図　縄文石器実測図



第17図　縄文石器実測図

は剝片をそのまま使用し基部にのみ細部調整を加えている。3～6も抉入の深い鍬形鏃で、3・4は小型で、いわゆるミニチュア鏃と呼ばれるものである。7～11は抉入の浅い凹基無茎鏃である。7は小型のミニチュア鏃で、外面に自然面を残している。12・13は、基部が直線的なもので平基無茎鏃と呼ばれるものである。12はほぼ正三角形を呈する。14は長三角形で基部にわずかな抉入が見られる凹基無茎鏃である。15は基部が大きく広がり抉入の深い凹基無茎鏃である。そのうち9・10・11・13は主要剝離面を残している。

石匙（第14図16～20）

5点を数え、20のみピット内、他は遺跡Ⅲ層（包含層）中よりの出土で、石材はすべて安山岩を使用している。16・17は縦型、18～20は横型を呈し、剝片はすべて縦剝ぎの剝片を使用している。19はつまみの部分が小さいのが特徴である。

石斧（第15図21～第17図39）

19点を数え、磨製のもの（21～24、27）と打製のもの（25・26、28～39）に分けられる。21は両刃の石斧で全体よく研磨されている。22・27は短冊形の石斧で側縁部および刃部は剝離による加工を行い、表面には研磨された部分が残っていることより磨製石斧の再利用と考えられる。23は小型の石ノミ形石斧である。24は扁平両刃石斧で刃部のみ研磨を行っている。打製石斧はすべて扁平石斧で、ほとんどが剝離面及び自然面を残している。25は小型で分銅形の石斧、26は同じく小型で洋梨型を呈する石斧で、33も小型で小判のような楕円形を呈した石斧である。残りは短冊形を呈する石斧である。

これら石鏃、石匙、石斧などの石器の出土はすべて包含層中または古代の遺構覆土内からの散在的なもので、直接縄文時代の遺構の存在を考えさせるような出土のしかたではない。

円盤状土製品（第18図）

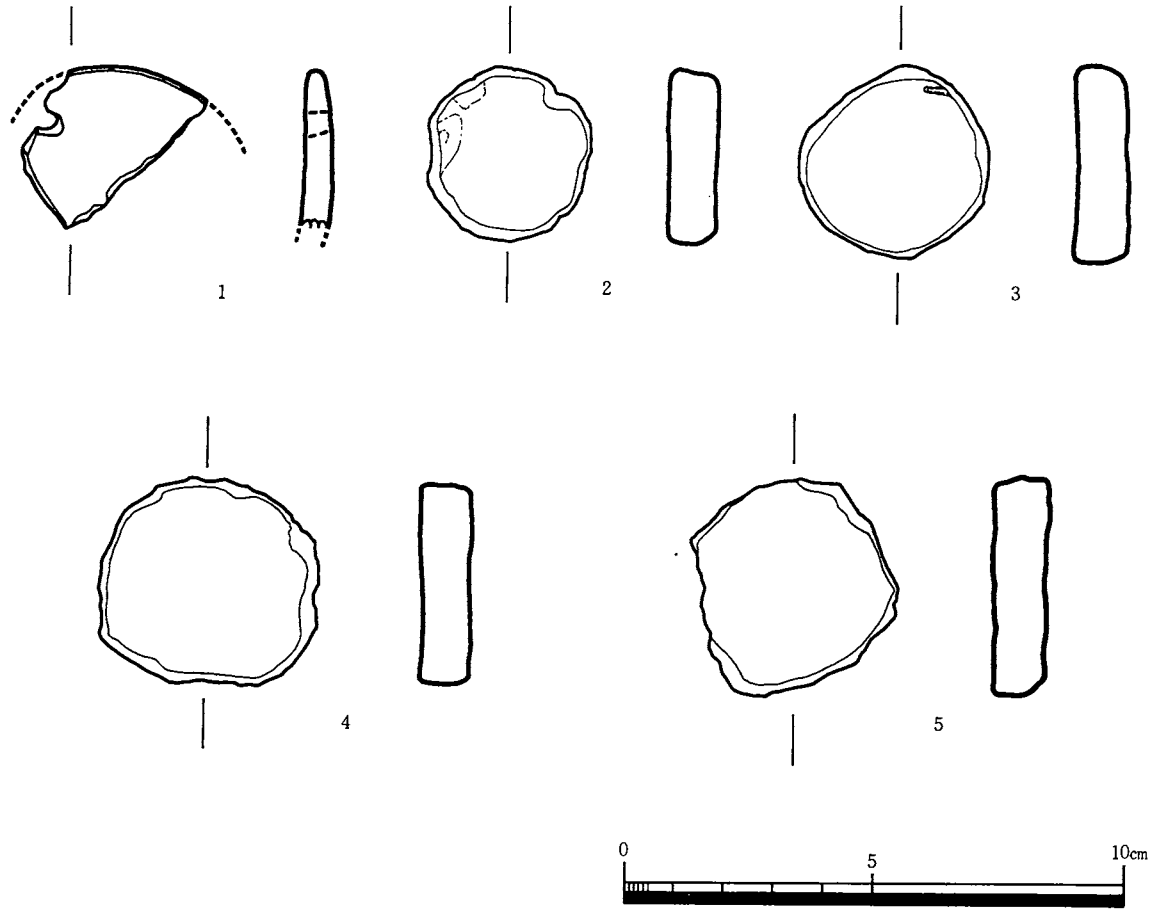
総数6点出土している。1はピット内の出土で残りはすべて包含層内の出土で直接遺構には伴わないため正確な時期は不明だが、製品は縄文土器の転用であることより縄文時代の遺物と見てほぼ間違いないものと考えられる。ただ1の時期は不明である。

1．調査Ⅴ区58－Ｊグリッドのピット内より出土で全体の⅔程は欠失している。推定直径6.6cm、厚さ5mmを測る比較的薄手の土製品である。土製品の縁近くに直径4mm程の穴が斜めに穿孔され、縁及び全体はナデて丹念に仕上げている。この土製品はむしろ円形土製品と呼んだ方が適当かもしれない。また時期的には他の土製品より新しくなる可能性が考えられる。

2～5．いずれも縄文晩期土器の転用で縁が粗く加工されており、厚手であり外面には条痕調整痕が残っているのが特徴である。2はⅦ区ＳＸ－410の覆土からの出土で、直径3.3cm、厚さ9mmを測る。3はⅦ区63－Ｐグリッド Ⅲ層よりの出土で、直径3.8cm、厚さ1cmを測る。4はⅦ区Ⅲ層よりの表採品で直径4.4cm、厚さ1cmを測る。5はⅤ区よりの表採品で、直径4.3cm、厚さ1cmを測る。いずれも胎土には、小石及び雲母を含み、焼成は良である。

縄文土器集中部（第19図）

調査Ⅴ区63－Ｑグリッドに検出した遺物の集中部分である。歴史時代の調査を終えた後、縄文時代の包含層である遺跡Ⅲ層（黄褐色土）を調査中に検出したものである。土器は、Ⅲ層黄褐色土の中位付近から下部にかけて一ケ所に集中して出土しており、出土状態は完形の土器が潰れたような状態ではなく、底部片が胴部片の中から出土している点などから、壊れた土器を投棄したような出土のしかたであり、又掘り込みは検

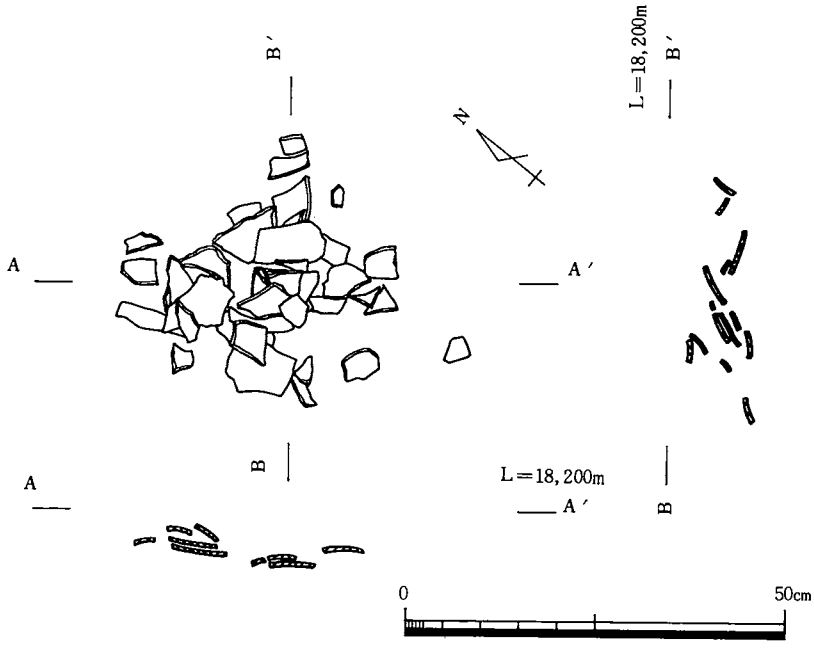


第18図　円盤状土製品実測図

出されなかった。土器はすべて同一個体であり、沈線を器面全体に施している。時期は縄文前期に比定される曽畑式土器と考えられる。

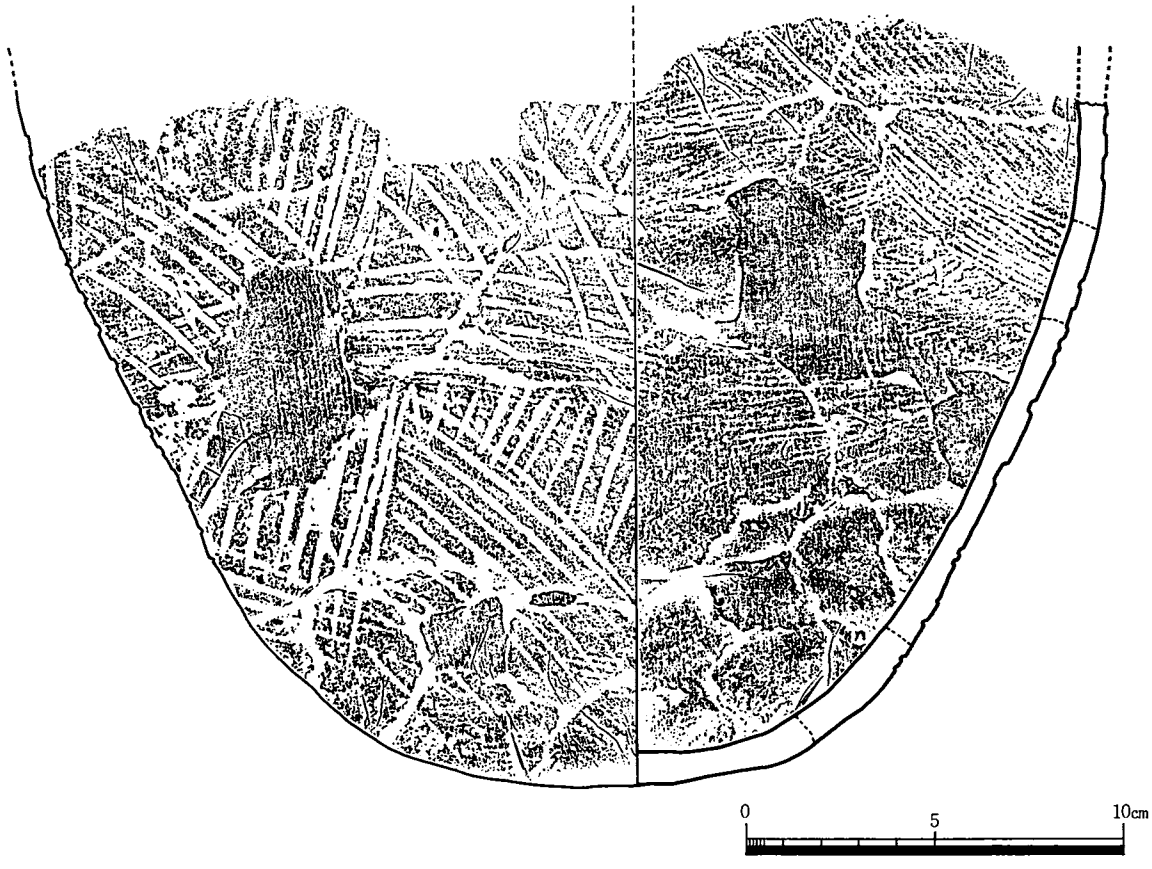
出土土器（第20図）

土器は深鉢で、口縁部を欠失しているが、残りの部分は底部までほぼ完全に復原することが出来た。現存高17.9cmを測る。口縁部は完全に欠いており口縁部の形状は不明であるが、ほぼ直口するものと考えられる。底部は、丸底である。外面は、ナデ調整を行った後、沈線による文様を底部近くまで施文している。底部は無文である。文様は、細く浅い沈線を10～15本単位で



第19図　63－Qグリッド 縄文土器集中部実測図

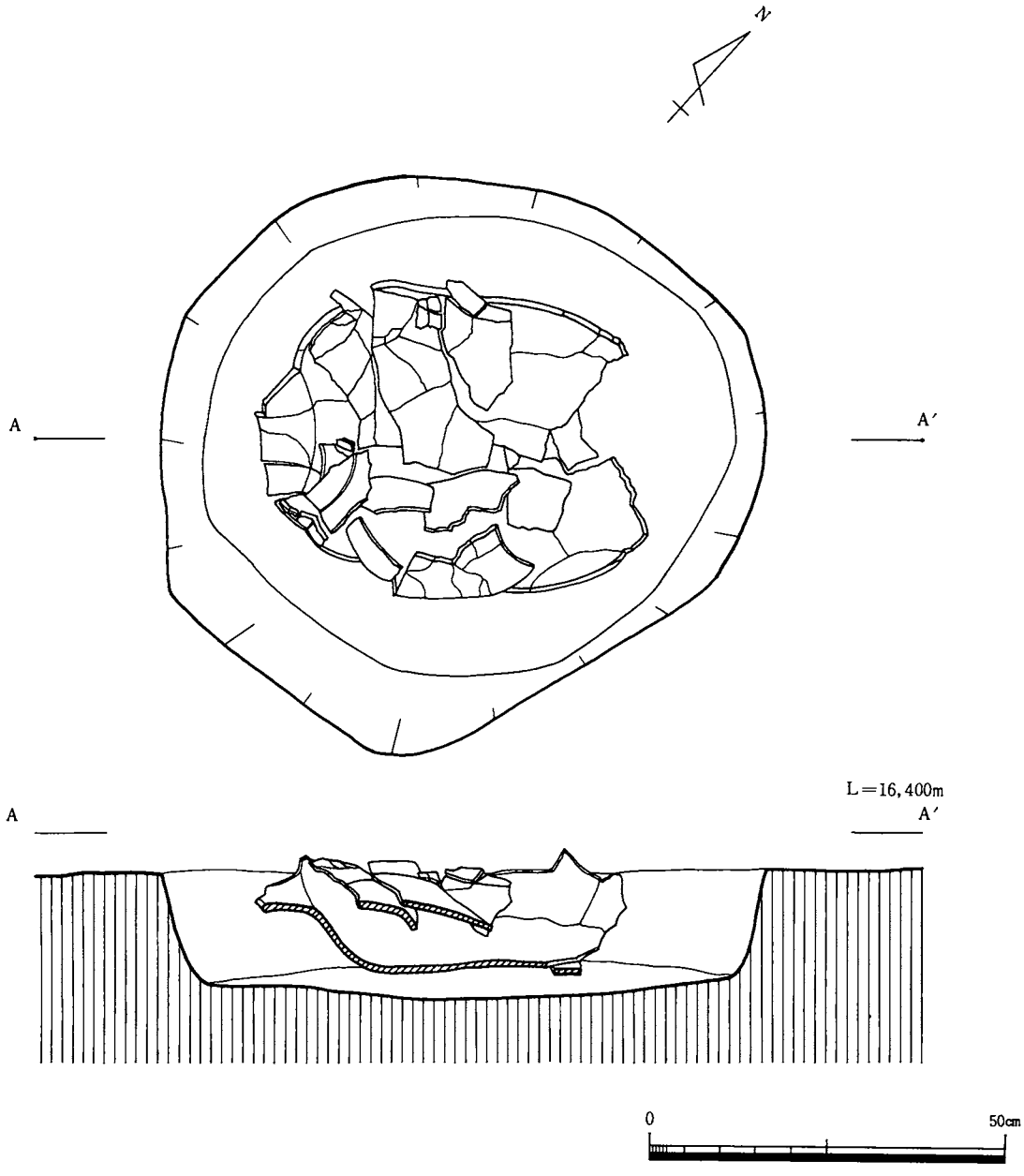
用いて、斜方向で交互に方向を変え文様を作り出しており、胴部中央付近には、５本単位による横方向の沈線を施文し、上部文様と下部文様に区画して文様帯を作り出している。文様は、はみだしたりしてかなり雑に施文していることより、曽畑式土器文化の中でも古い時期のものであろうと考えられる。内面には、貝殻腹縁と考えられる条痕調整の後、その上から指によるナデ調整を行っている。胎土は荒く黒雲母粒、長石、小石等を多量に含んでいるが、曽畑式土器に見られる特有の滑石粒は全く含まれていない。焼成はやや不良で、色調は暗赤褐色又は橙色を呈している。



第20図　63－Ｑグリッド 縄文土器集中部出土土器実測図

２．ＳＸ－411(土器埋納土壙)　(第21図)

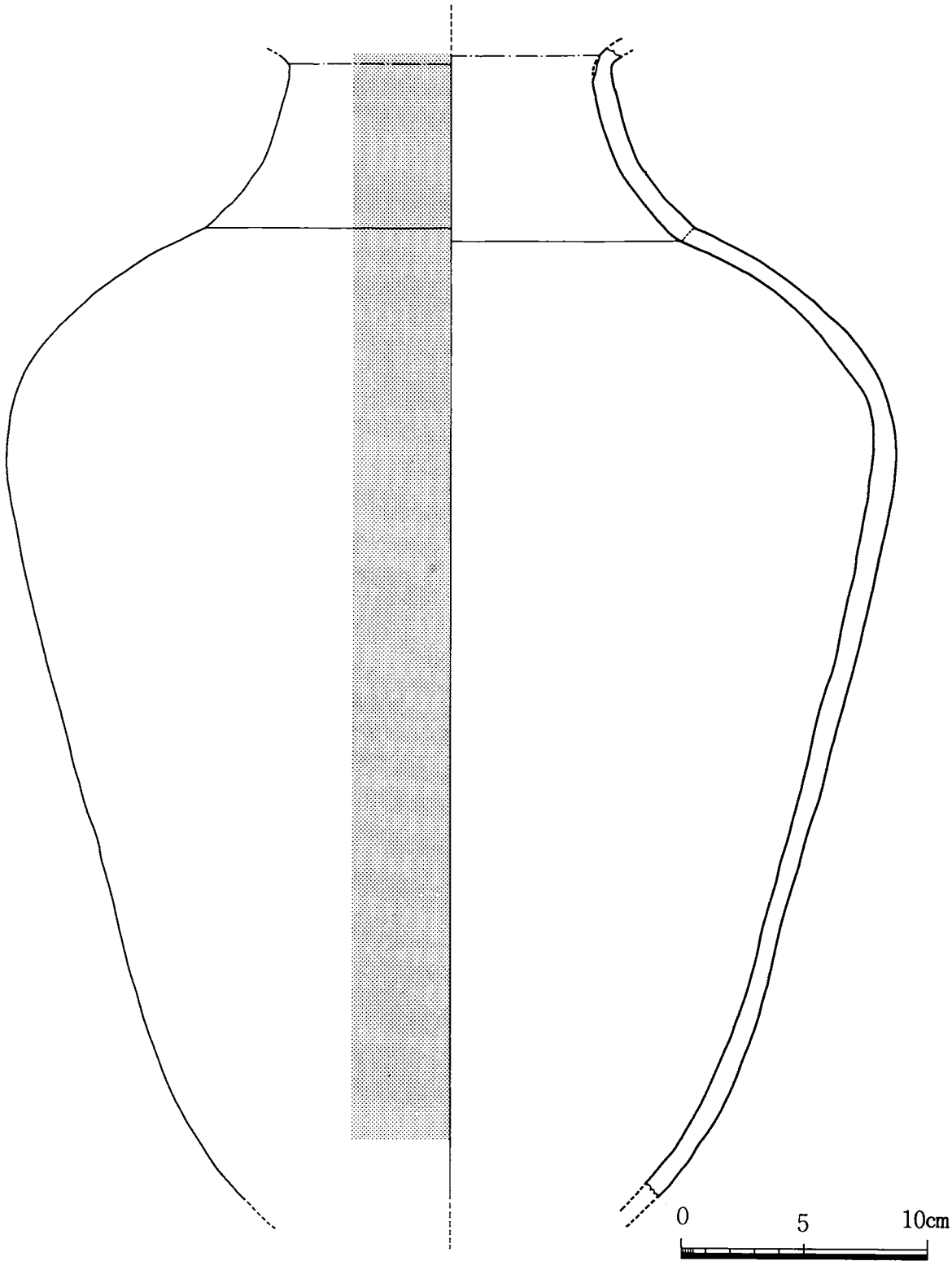
調査Ⅶ区80－Ｐグリッド内に検出した土器埋納土壙である。土壙は、長径85.5cm、短径81.5cm、深さ18cmを測り平面プランは不整円形を呈している。土壙は、黄褐色土の地山に掘り込まれ、覆土は明るい暗褐色土を呈していることより遺構確認が困難であった。土壙内より、外面全体に赤色顔料を塗布した壺形土器が、口縁部を南西方向に向け横置きにして埋置された状態で出土した。壺は土圧により完全に押し潰されていたが、残存状態は非常に良好でほぼ完形に復原できる。埋納された壺の口唇部及び底部は、共に欠失しており、土壙内から底部片、口唇部片の出土がないことより、埋置する前の段階において意図的に打ち欠いて埋置したものと考えられる。この遺構は、壺の埋置状態及び口唇部や底部を意図的に打ち欠いていることなどより、埋葬遺構と考えられるが、それを証拠付けるような人骨及び副葬品等の出土は全くない。また周辺から他に埋葬遺構も住居址等の生活遺構も全く検出されていないが、調査が台地の一部地区に限られているため、調査区外の地区に同時期の遺構が存在する可能性が十分考えられ、今後のこの時期の解明に期待したい。



第21図　80－Pグリッド　SX－411実測図

出土土器（第22図）

口縁部および底部を欠失する壺で、ほぼ完全に復原することができた。法量は現存高で46.2cm、頸部径20cm、胴部最大径36.2cmを測る。土器は、内外面ヘラ研磨の調整をした後、外面にのみ口縁部から底部付近にかけて赤色顔料を全体に塗布している。土器の特徴は、頸部がわりとしまった感じを受け内斜しながら直線的に短く立ち上がり、口縁部から口唇部にかけてくの字状に外反する。口縁端部は欠失しているが丸くなるものと考えられる。頸部と肩部の境は明瞭であるが沈線は有しない。胴部は長く、最大径が肩部近くまで上がり、直線的に肩部から下がりながら底部に至るスマートな感じを受ける形状をしている。底部は欠失しているが丸底になるものと考えられる。口唇部及び底部は欠失しているが、出土状態より、焼成を行った後、埋置する前の段階で意図的に打ち欠いて埋置したものと考えられる。土器の焼成は良好で、胎土には径1～2.5mm程の小石、石英粒および砂粒を多く含み、色調は外面暗赤色、内面橙色を呈している。土器の時期は特徴より縄文晩期終末と考えられる。

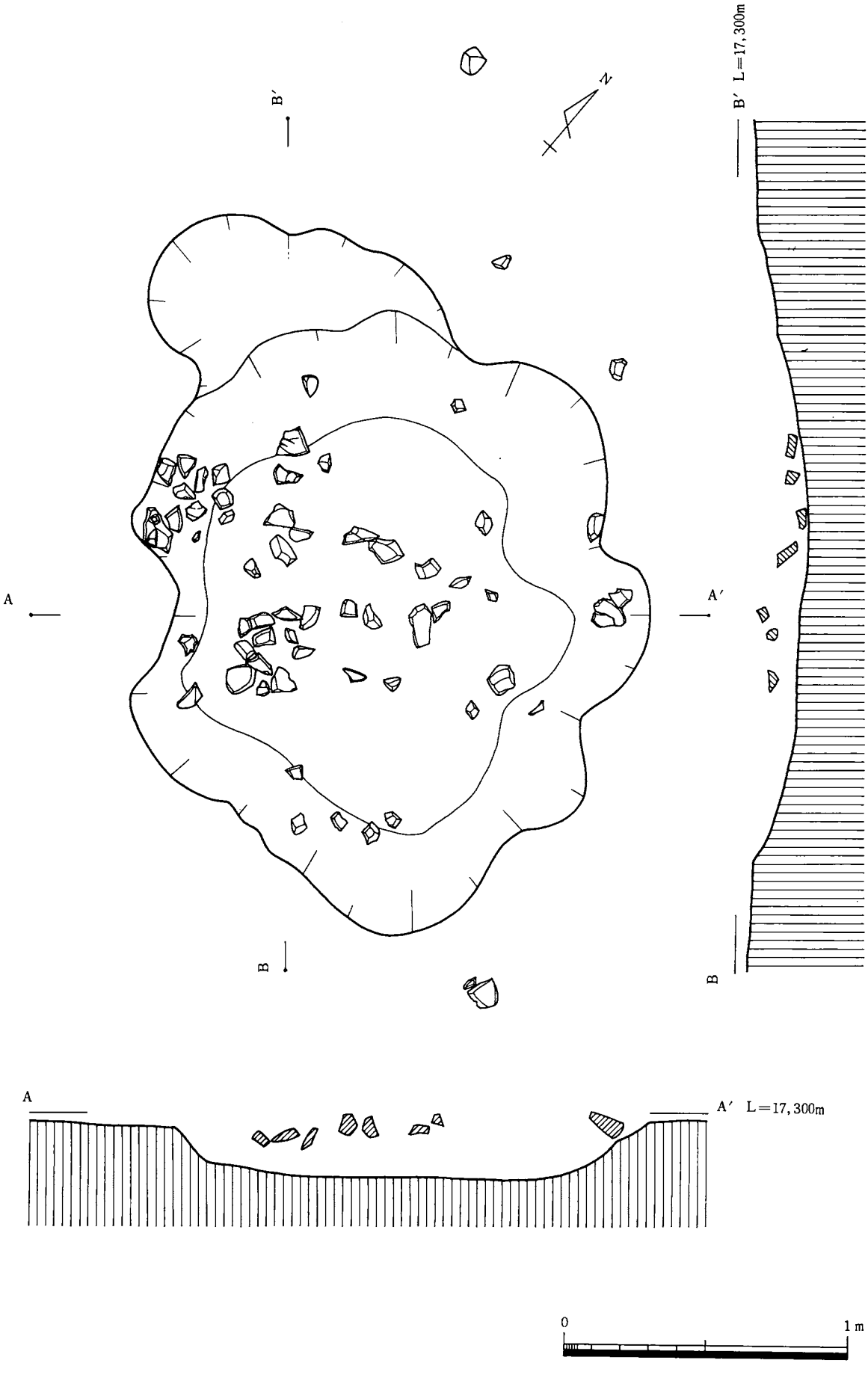


第22図　SX－411内出土土器実測図

3．集石遺構

1号集石（第23図）

調査Ⅶ区72－Ｏグリッド内のⅢ層（黄褐色土）中より検出した集石遺構である。集石遺構には、長径2.15

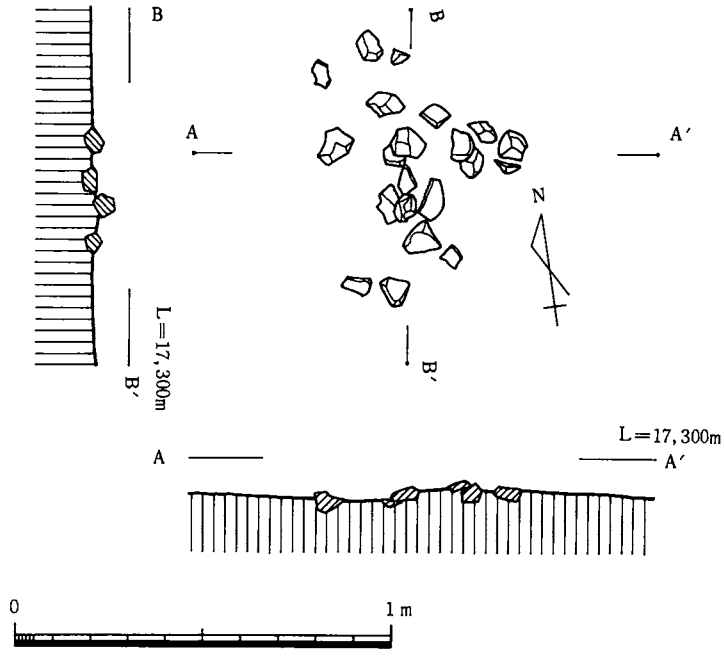


第23図　72－Oグリッド　1号集石実測図

m、短径1.90mの不整楕円形で深さ15cm程の、浅く断面が皿状を呈した掘り込みが検出され、掘り込みの中には直径10cm前後の砂岩質の礫が投げ込まれた状態で出土した。礫の中には、火熱を受けているため変色したり、亀裂が生じ剥離したり、またカーボンの付着している礫も認められた。礫は、全体的に掘り込みの中心から北側にかけて集中する傾向が認められるが、特別に規則性は認められない。伴出土器は見られないが、遺構の検出層位及びレベル等より縄文時代後・晩期頃の遺構と考えられる。

2号集石（第24図）

調査Ⅶ区72－Pグリッド内に検出した集石遺構である。集石は、Ⅲ層（黄褐色土）の調査中に発見されたもので、掘り込みは確認出来なかった。集石には、10cm前後の砂岩質の礫を20個程使用している。礫は、熱を受けたためか赤色に変色し、亀裂が入りかなりもろくなっている。また、タール状にカーボンが付着している礫も半数近く認められた。礫は、1m四方の範囲に散在しており、現状では規則性は認められない。集石内からの伴出遺物がないために、時期判定は困難であるが、遺構の検出層位及びレベル等より縄文時代後・晩期頃の遺構と考えられる。



第24図　72－Pグリッド　2号集石実測図

3号集石

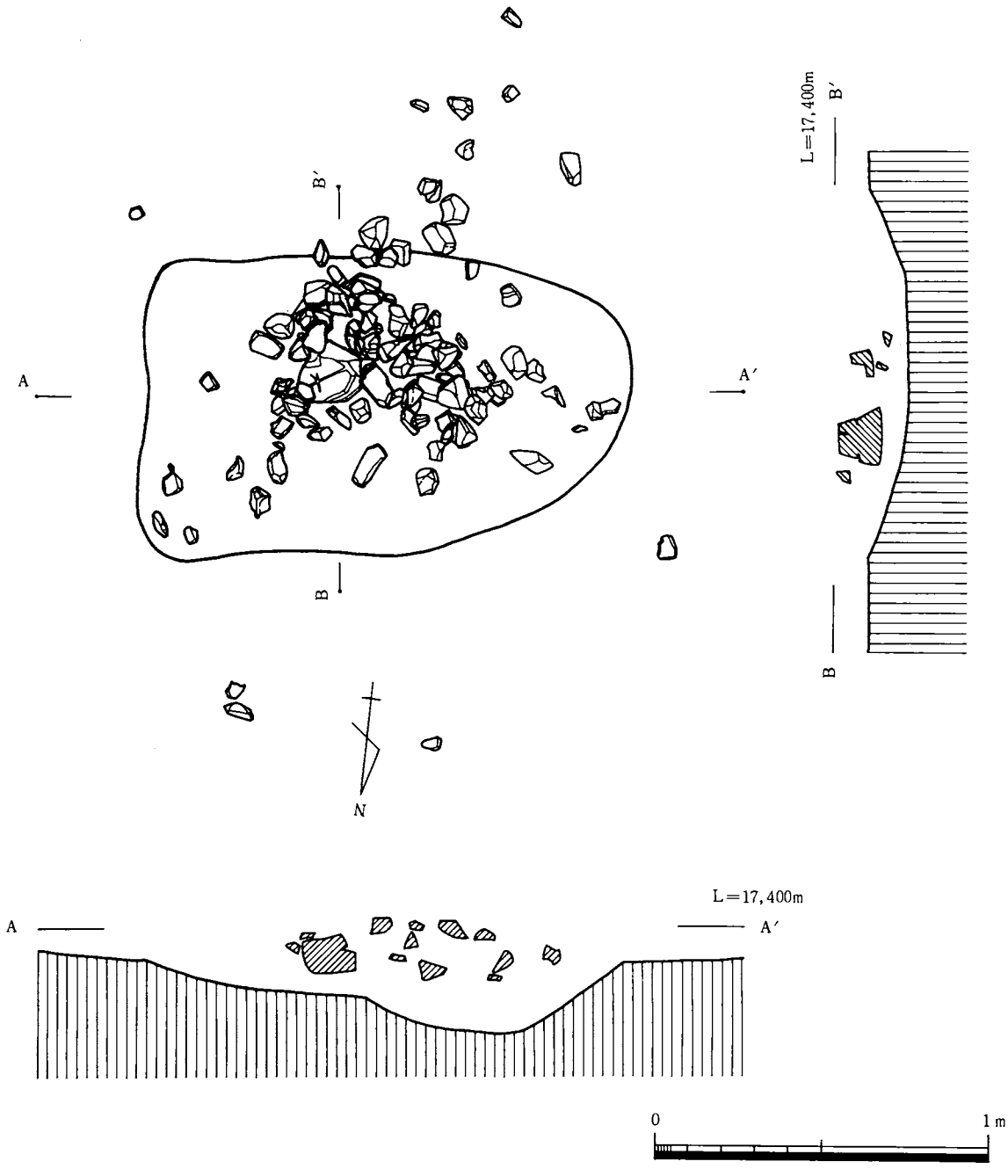
調査Ⅶ区73－Oグリッドの Ⅲ層（黄褐色土）中に数個の砂岩質の礫が検出されたが、表土剝ぎにより破壊されてしまった。このため集石の詳細は全く不明であるが、検出層位、レベル等により、縄文時代後・晩期頃の遺構と考えられる。

4号集石（第25図）

調査Ⅶ区76－Oグリッド内のⅢ層（黄褐色土）中より検出した集石遺構である。集石遺構には、長径1.50m、短径1.10mの不整楕円形で深さ12cm程の、浅く断面が皿状を呈した掘り込みが検出された。集石は、10cm前後の砂岩質の礫により構成されており、熱を受けているため変色したり、剝離したり、またカーボンの付着している礫も認められる。礫は全体的に見ると掘り込みの中心より南側に集中する傾向が認められるが、特別な規則性は見受けられず無造作に投げ込まれた状態である。伴出土器は見られないが、遺構の検出層位及びレベル等より縄文時代後・晩期頃の遺構と考えられる。

6号集石（第26図）

調査Ⅶ79・80－Pグリッド内のⅢ層（黄褐色土）中より検出した集石遺構である。集石遺構は、長径1.05m、短径0.75mの楕円形で深さ16cm程の、浅く断面が皿状を呈した掘り込みが検出された。集石は、10～20cm前後の砂岩質の礫により構成されており、熱を受けているため変色し、剝離したり、またカーボンの付



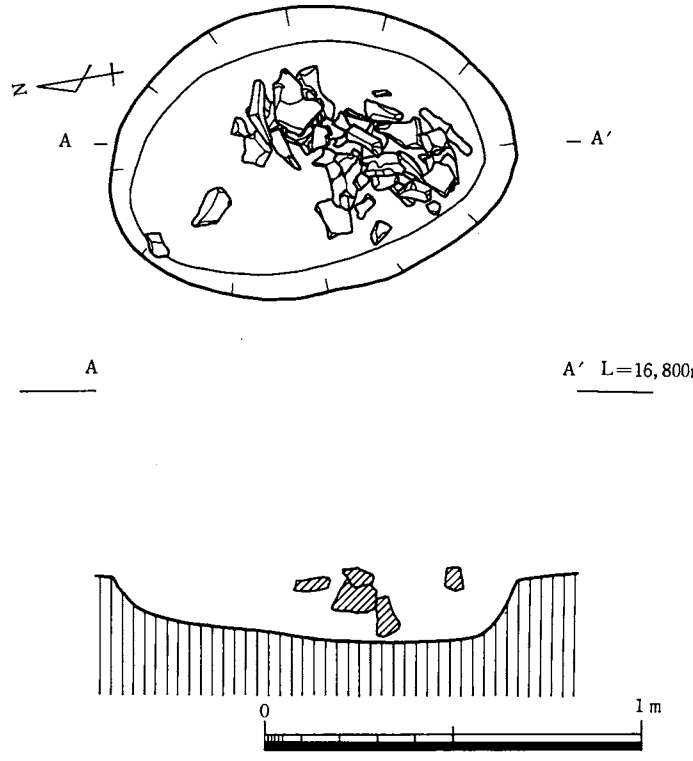
第25図　76－Oグリッド　4号集石実測図

着している礫も認められる。礫は、全体的にみると掘り込みの中心付近に集中する傾向がみられるが、特別に規則性は認められない。伴出土器は見られなかったが、遺構の検出層位及びレベル等より縄文時代後・晩期頃の遺構と考えられる。

7号集石（第27図）

調査Ⅶ区80－Pグリッドの Ⅲ層（黄褐色土）中より検出した集石遺構である。集石遺構には、北側部分の一部をSX－401により切られているが、長径およそ80cm、短径65cmの不整楕円形で深さ5cm程の、浅く断面形が皿状を呈した掘り込みが検出された。但し、掘り込みの深さは平面確認のために削平しているので現状よりさらに深くなる。集石は、10～15cm前後の砂岩質の礫が掘り込みの中にぎっしり詰まった状態で検

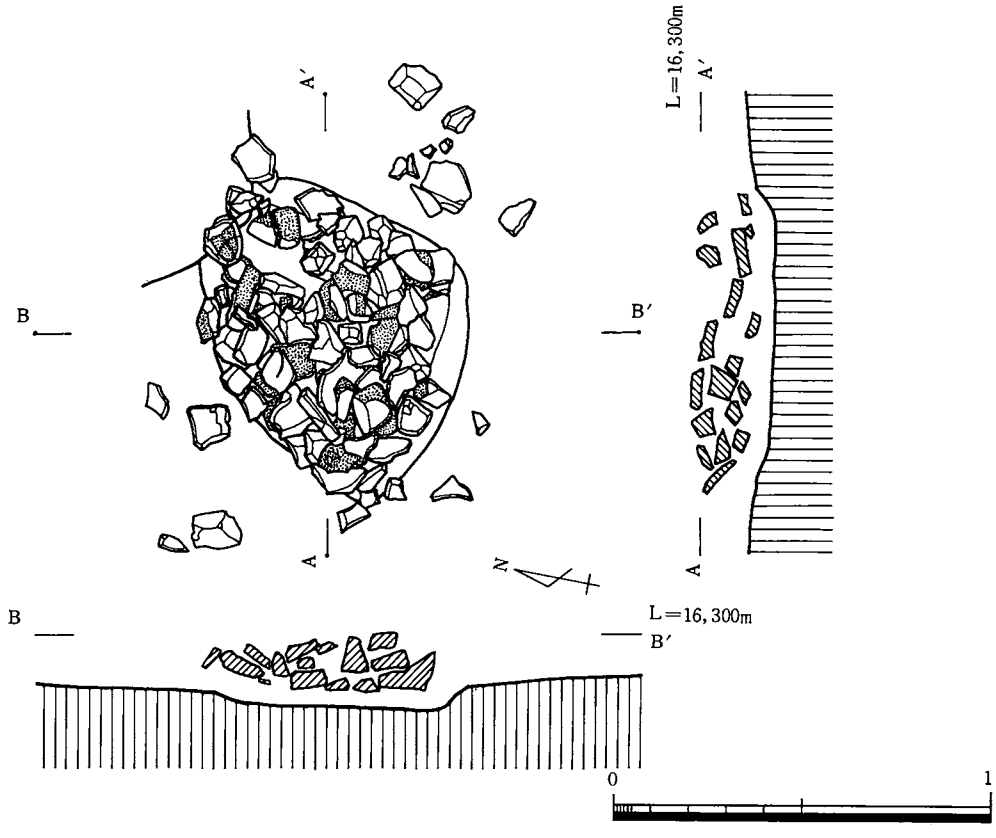
出された。遺構内の礫は、熱を受けているため赤色に変色し、またもろくなり剝離したり亀裂が生じたりしている。集石に規則性は認められない。伴出遺物がみられないため時期は不明であるが、検出層位等により縄文時代後・晩期頃の遺構と考えられる。



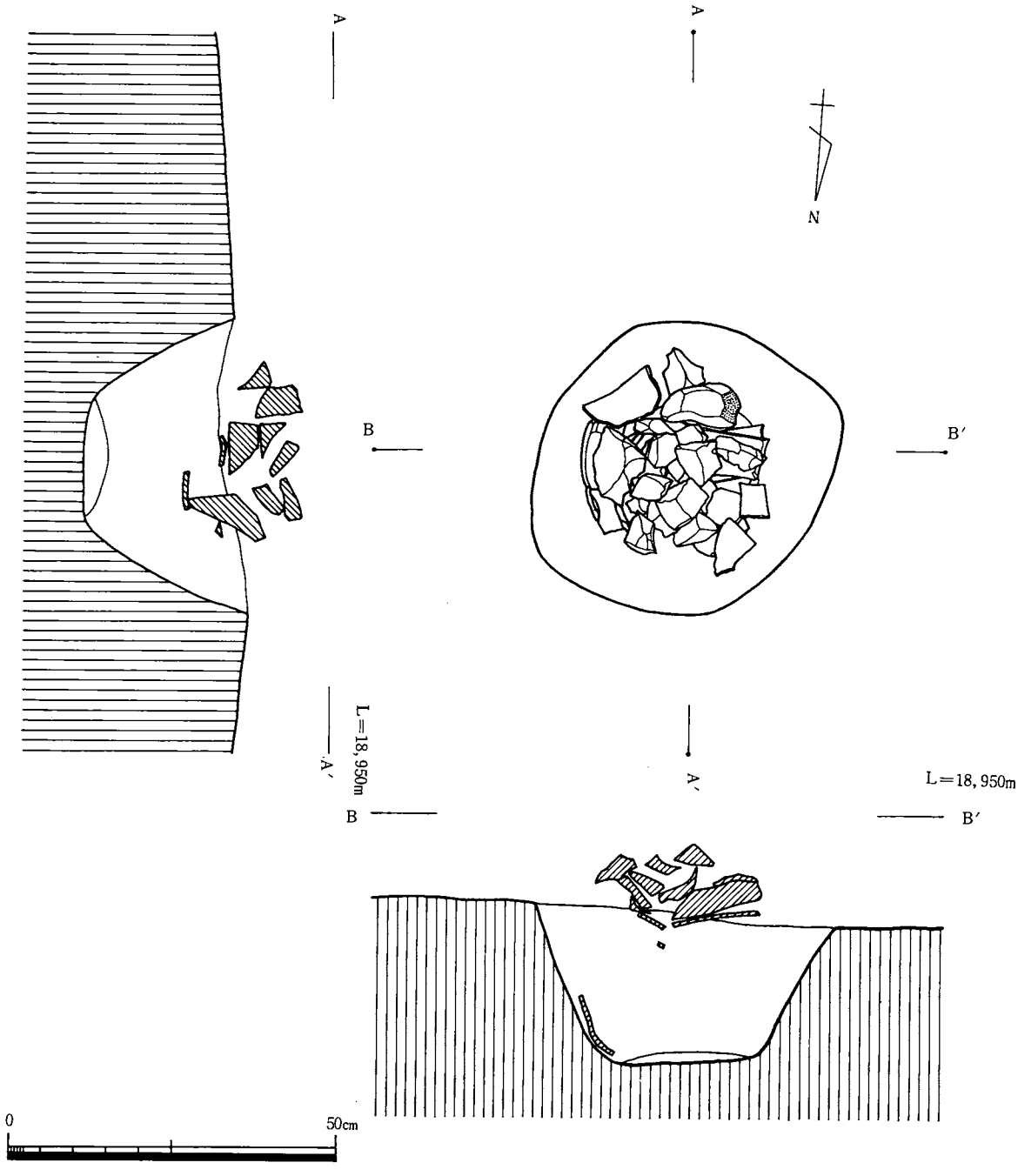
第26図　79・80—Pグリッド　6号集石実測図

9号集石（第28図）

調査Ⅴ区59—Pグリッド内より検出した集石遺構である。Ⅲ層（黄褐色土）の上面レベルにおいての確認で、遺構には、直径45cm、深さ23cmの平面形がほぼ円形を呈するピット状の掘り込みを有している。掘り込みの上面には、拳大程の砂岩礫が約20個積み上げてまとめられている。礫は、掘り込み上面のみの検出で、下部の方には入り込んでいない。ピット状の掘り込み内には、縄文土器の胴部片が、底面の壁にそって立て掛けた状態で出土した。土器の出土状態および礫の出土状態より当遺跡で検出されている他の集石遺構の性格とは違った性格も考えられる。一つは従来より考えられていた炉つまり煮炊き用の屋外炉としての性格、もう一つは埋葬遺構としての性格である。しかしこの集石では、遺構および遺物よりの判断が難しいため性格は不明だが、こ



第27図　80—Pグリッド　7号集石実測図



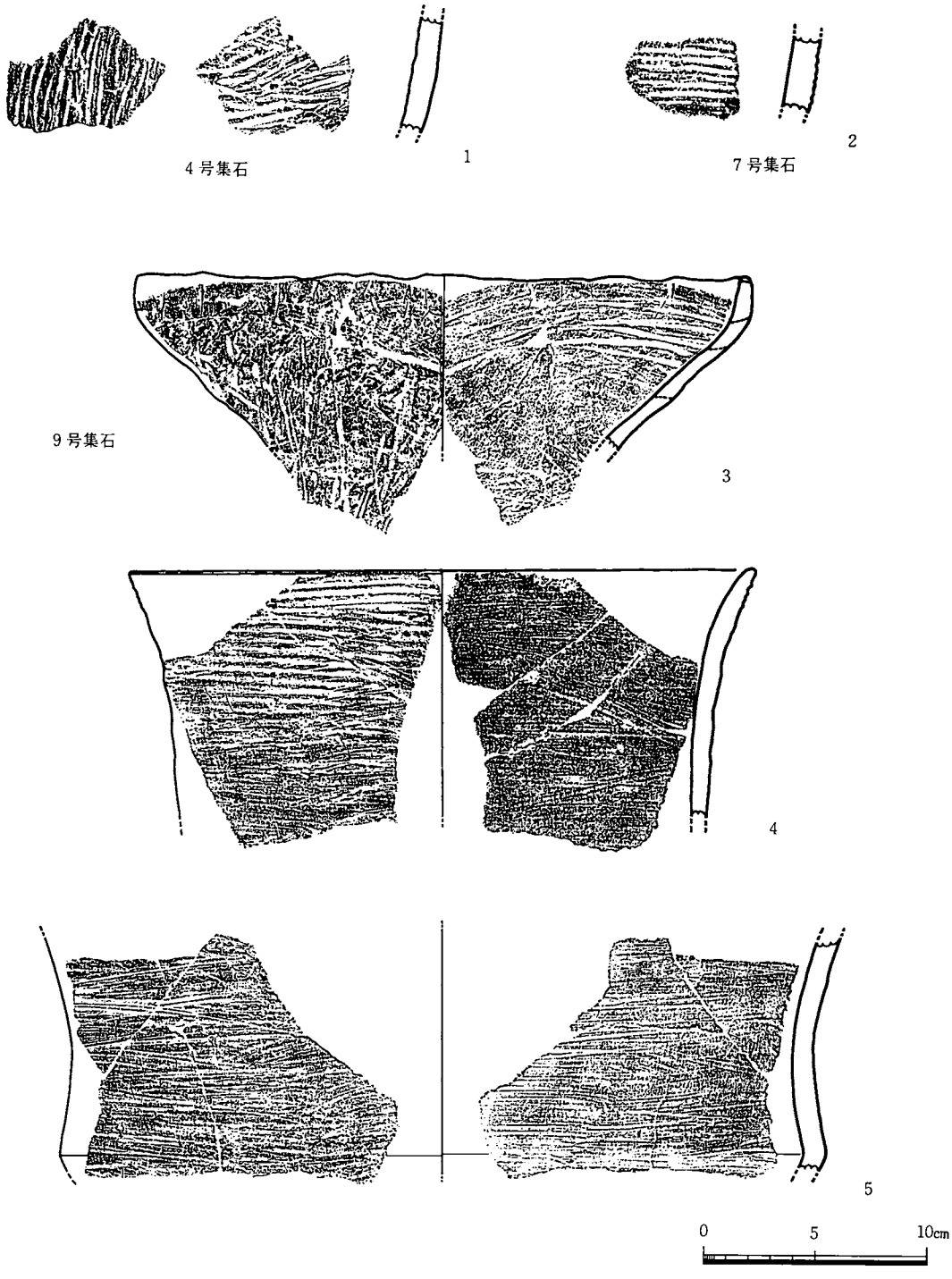
第28図　59—Pグリッド　9号集石実測図

の集石で考えられる一つの性格として記しておきたい。出土土器はすべて内外面に条痕調整の見られる縄文土器である。

出土遺物（第29図）

今回のⅣ次調査で検出した集石遺構は、Ⅴ区に1ケ所、Ⅶ区に6ケ所の計7ケ所であった。いずれの遺構からも遺物の出土は皆無で、3ヶ所の集石について1片または数片の遺物の共伴をみた。出土した土器は、すべて縄文式土器であることより、直ちに集石遺構がすべて縄文時代の遺構であるという結論を出すのは、早いと考えられるが、一応縄文時代の遺構としてとらえておきたい。

1.　4号集石より出土の深鉢胴部片である。表は縦方向、裏は横または斜方向の条痕調整を行っている。焼成は良で胎土は径2～4㎜程の小石及び砂粒を含んでいる。



第29図　集石内出土遺物実測図

2．7号集石より出土の深鉢胴部片である。調整は表に横方向の条痕調整を施し、裏はナデである。焼成は良で、胎土に径1㎜程の小石及び砂粒を含んでいる。

3．9号集石より出土の浅鉢片である。法量は、口径27.6cm、現在高7.7cmを測る。底部は欠失しているが、ほぼ完全に復原出来る。器形は底部より直線的に大きく広がっており、口縁端部近くにきて、直に立ち若干内傾する。当然口縁端部付近に最大径がくる形になる。口縁はさざ波状になっているが、これは意識的につくっているのではなく、整形のあらさからのものであると考えられる。器面調整は、内外面共に条痕調整を施している。胎土には、径1～2㎜程の小石及び砂粒を含み、焼成は良である。また外面にはスス

が付着している。

4. 同じく9号集石から出土の深鉢口縁部片で、胴部から口縁部にかけてゆるく外反する。口径は28.2cm、現存高10.9cmを測る。器面調整は内外面共に条痕調整で、胎土は黒雲母及び砂粒を含み、焼成は良である。

5. 同じく9号集石から出土の深鉢胴部片で、胴部は逆くの字状に屈曲し、口縁はゆるく外反し開いている。かなり大きな深鉢で胴部最大径は、34.4cmを測る。器面調整は、内外面共に条痕調整で、胎土には黒雲母び砂粒を含み、焼成は良である。

番号	器種	地区	グリッド	層位	石材	長さ(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
1	石鏃	Ⅳ次Ⅶ区	63－P	Ⅲ層	黒曜石	4.1	2.3	0.4	2.1	脚部一部欠損
2	石鏃	Ⅳ次Ⅶ区	73－P	Ⅲ層	黒曜石	4.2	2.2	0.3	2.1	
3	石鏃	Ⅳ次Ⅲ区	31－F	Ⅲ層上面表採	黒曜石	1.5	1	0.2	0.15	
4	石鏃	Ⅳ次	表採		黒曜石	1.7	1.2	0.2	0.4	
5	石鏃	Ⅳ次Ⅵ区	56－J	Ⅲ層	安山岩	2.8	1.4	0.3	0.9	脚部一部欠損
6	石鏃	Ⅳ次Ⅶ区	72－N	Ⅲ層上面一括	安山岩	2	1.4	0.3	0.5	脚部一部欠損
7	石鏃	Ⅳ次Ⅳ区	37－I SI－303		黒曜石	1.6	1.1	0.2	0.35	
8	石鏃	Ⅳ次Ⅶ区	77－R	Pit 2 内	黒曜石	1.6	1.4	0.4	0.75	先端部及び脚部欠損
9	石鏃	Ⅳ次Ⅶ区	75－P		安山岩	2.2	1.4	0.3	0.75	先端部一部欠損
10	石鏃	Ⅳ次Ⅶ区		SB403 Pit 2 内	チャート	1.1	1.9	0.3	0.7	先端部欠損
11	石鏃	Ⅳ次Ⅶ区	一括	Ⅲ層	黒曜石	2.4	1.5	0.4	1.4	
12	石鏃	Ⅳ次Ⅶ区		SX－401 覆土内	黒曜石	1.7	1.6	0.3	1.05	
13	石鏃	Ⅳ次Ⅴ区	63－P	Ⅲ層 No57	黒曜石	2.5	1.7	0.4	21.5	先端部欠損
14	石鏃	Ⅳ次Ⅶ区	74・75－O	SB－405 Pit 1 内	安山岩	3.3	1.1	0.3	1.05	
15	石鏃	Ⅳ次Ⅶ区	72－Q	Pit 6 内	チャート	2.4	2.3	0.5	2.55	脚部欠損
16	石匙	Ⅳ次Ⅵ区	56－I	Ⅲ層中	安山岩	5.6	2.7	0.8	14.0	
17	石匙	Ⅳ次Ⅵ区	56－I	Ⅲ層中	安山岩	6	5.8	0.9	31.45	
18	石匙	Ⅳ次Ⅴ区	63－P		安山岩	4.1	6.6	0.7	9.4	
19	石匙	Ⅳ次Ⅶ区	80－O	Ⅲ層上面表採	安山岩	3.3	4.8	0.6	9.85	
20	石匙	Ⅳ次Ⅴ区	63－P	No89	安山岩	4	6.6	0.6	15.1	
21	磨製石斧	Ⅳ次Ⅶ区	75－Q	Ⅲ層上面一括	砂岩	8.6	6.2	2.2	121.3	基部欠損
22	磨製石斧	Ⅳ次Ⅴ区	62－P	Ⅲ層中 No 1	頁岩	7.6	5.1	1.2	59.55	刃部欠損
23	磨製石斧	Ⅳ次Ⅶ区	74－O	Ⅲ層上面一括	蛇紋岩	6.6	3.4	1.4	40.4	
24	磨製石斧	Ⅳ次Ⅶ区	70－Q	Ⅲ層上面一括	片岩	14.5	7.2	1.3	215.75	
25	打製石斧	Ⅳ次Ⅴ区		長谷川3344表採	頁岩	8.2	4.5	1.8	67.95	
26	打製石斧	Ⅳ次Ⅴ区	59－P	Ⅲ層上面 No70	頁岩	6	3.1	0.9	13.6	
27	磨製石斧	Ⅳ次Ⅶ区		Ⅲ層中	頁岩	11.2	4.8	2.2	14.7	
28	打製石斧	Ⅳ次Ⅶ区		Ⅲ層上面一括	頁岩	8.6	4.1	0.8	31.9	
29	打製石斧	Ⅳ次Ⅴ区	59－P	Ⅲ層上表採	砂岩	9.9	5	1.4	89.5	
30	打製石斧	Ⅳ次Ⅴ区		長谷川3344表採	頁岩	9.7	3.9	1.4	60.0	刃部欠損
31	打製石斧	Ⅳ次Ⅴ区	62－P	Ⅲ層中 No10	安山岩	11.2	4.8	2	127.9	
32	打製石斧	Ⅳ次Ⅴ区		長谷川3344表採	安山岩	8.8	4.6	1.4	75.7	刃部欠損
33	打製石斧	Ⅳ次Ⅴ区		長谷川3344表採	安山岩	7.5	5.7	1.8	97.85	
34	打製石斧	Ⅳ次Ⅶ区		Ⅲ層上面一括	砂岩	11.9	5.5	2.4	160.75	
35	打製石斧	Ⅳ次Ⅶ区	81－P	Ⅲ層上面一括	安山岩	7.9	6.2	1.8	117.2	基部欠損
36	打製石斧	Ⅳ次Ⅶ区	72－O	Ⅲ層 No21	安山岩	7.1	5.8	2	119.55	基部欠損
37	打製石斧	Ⅳ次Ⅴ区		長谷川3344表採	片岩	10.8	5.4	0.8	60.9	
38	打製石斧	Ⅳ次Ⅴ区	62－P	Ⅲ層上面一括	安山岩	8.6	6.2	1.9	123.6	基部及び刃部欠損
39	打製石斧	Ⅳ次Ⅴ区	59－P	Ⅲ層中	安山岩	10.9	6	2.9	196.9	

第3表　出土石器観察表

3節　弥生時代の調査

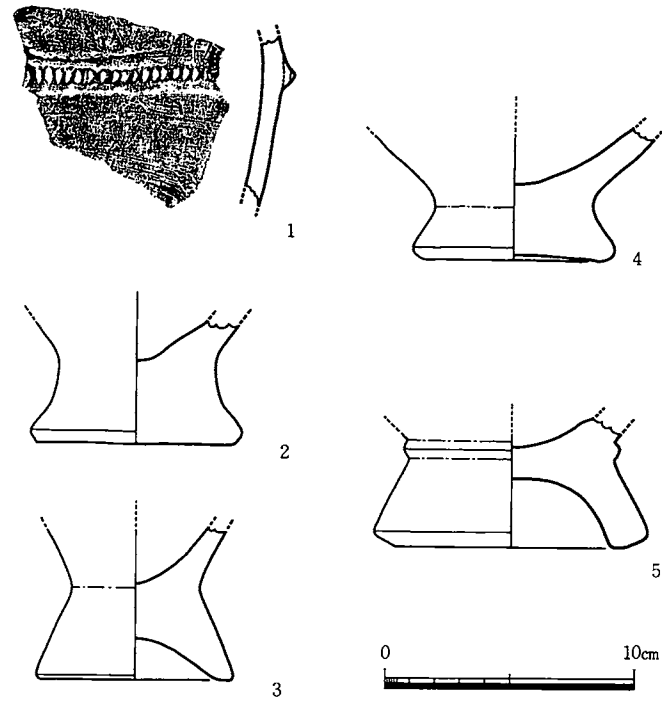
今回調査した地区には、弥生時代の遺構は何ら確認出来ず、遺物が数点出土しているだけである。この節では、遺物の説明だけにとどめておきたい。

遺　物（第30図）

1　胴部のゆるく屈曲する部分に1条の突帯を貼り付けた刻目突帯文甕胴部片である。突帯が貼り付けてある部分より口縁部にかけてゆるく内側に湾曲し、口縁部にはもう1条の刻目突帯が付くものと考えられる。調整は、内外面共にヨコナデである。

2　甕の高台部片で、高台の底面は平坦である。底径8㎝、現存高4.8㎝を測る。器面調整は、内外面共にナデて仕上げられており、底面はヘラ削りである。

3　2と同じく甕の高台部片で、高台は上げ底になる。法量は底径8㎝、現存高6㎝を測る。器壁は7㎜とかなり薄手の土器である。器面調整は、内面及び底面はヘラ削り、外面はナデ調整で、焼成は良である。



第30図　弥生土器実測図

4　甕の高台部片である。若干の上げ底を呈する。底径は8㎝を測り、内外面共にナデ、底面はヘラ削りによる器面調整を行っている。胎土は黒雲母粒、砂粒を多く含み、焼成は良である。

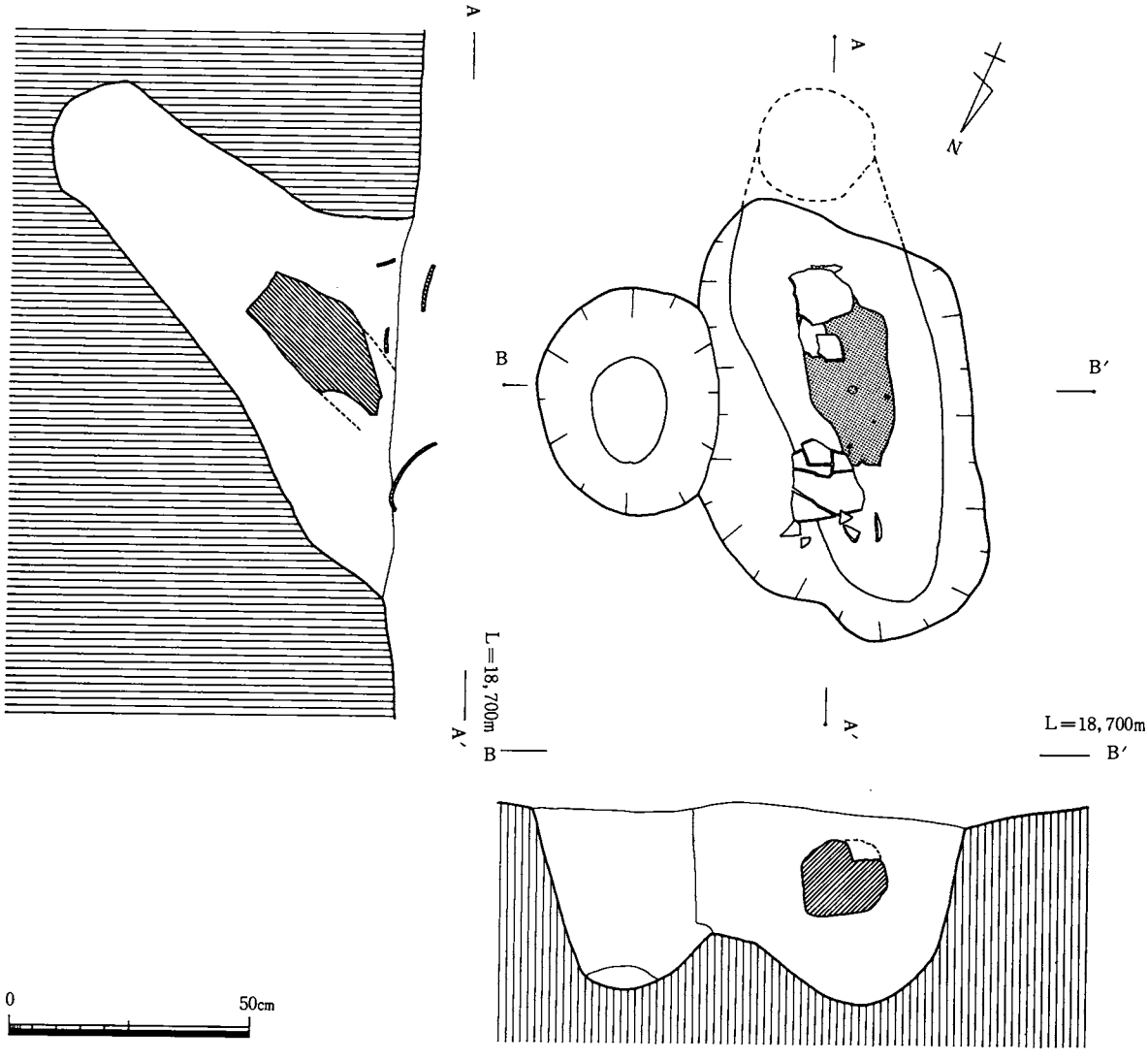
5　甕の高台部片と考えられ、上げ底を呈する。底径11㎝、厚さ1.7㎜を測りかなり厚手の土器である。器面調整は、内外面共にナデで、底面は削りにより仕上げられている。胎土は径1㎜程の小石および砂粒を多量に含み、焼成は良である。

ＳＸ－414（第31図）

調査Ｖ区59－Ｐグリッドに検出したピット状の遺構である。遺構は、長径88㎝、短径58㎝の不整楕円形を呈し、深さは75㎝を測り、斜め方向に掘り込まれている。遺構内より、直径15㎝程の丸太状の炭化物と、炭化物の上より土器の胴部、底部片などの遺物が出土した、建物に関係する遺構と考えられるが、周辺からはこれに関連するピット状の遺構は検出されなかった。遺構の埋土および出土遺物は弥生式土器片のみであることより、弥生時代の遺構と考えられる。周辺からは、この時期に属する遺構、遺物は全く検出されていないが、この地区は竹根および樹根によりかなり攪乱され、またかなりの削平も受けているため、同じような遺構が存在したと考えられるが詳細は不明である。

出土遺物（第32図）

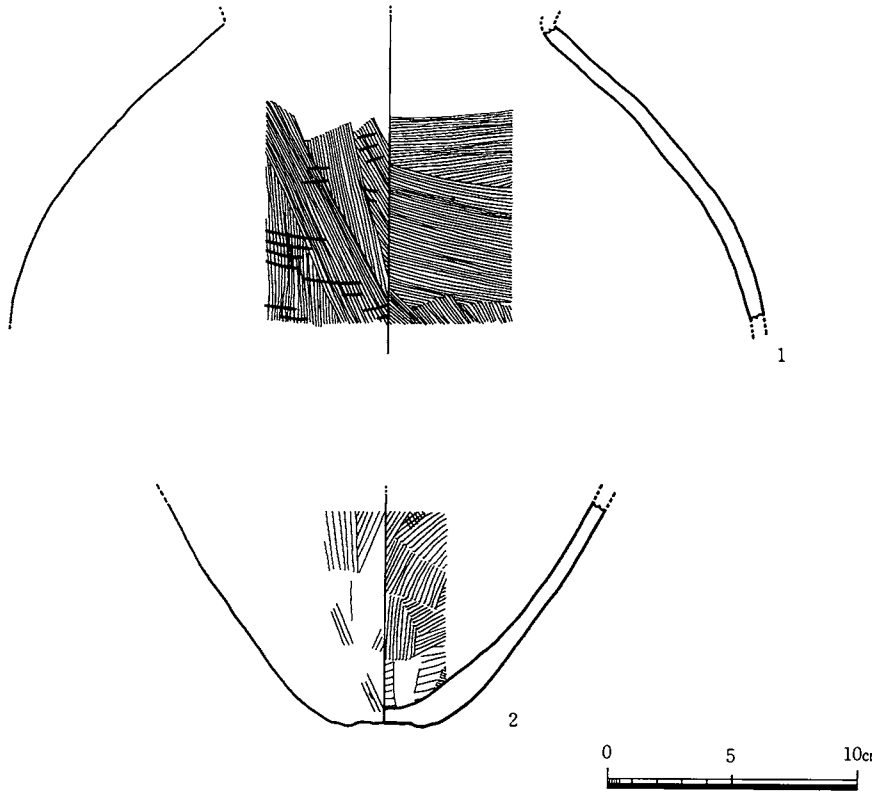
1　壺の胴部上半から頸部にかけての土器である。残存高11.4㎝を測り、頸部径は推定13.4㎝を測る。調整



第31図　59－Pグリッド SX－414内遺物出土状態実測図

は、内外面共に横及び斜方向のハケ目を施し、外面にはタタキによる調整の痕が残る。器壁が薄く、焼成は良好で、色調は内外面に橙色を呈している。

2　壺の底部片である。底部は尖底に近い丸底を呈し、残存高10.2cmを測る。調整は、内外面共にハケ目を施し、外面はハケ目調整の後にナデを施している。また、外面には部分的ではあるがススが付着している。焼成は良好で、色調は内外面共に浅橙色を呈する。遺物は、共に弥生時代後期終末の時期と考えられる。



第32図　SX－414内出土遺物実測図

4節　古墳時代の調査

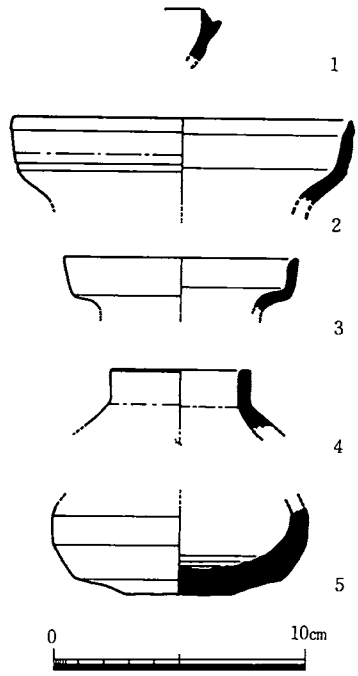
今回のⅣ次調査においては、古墳時代の遺構は全く検出されなかった。しかし古墳時代と考えられる須恵器片が5点出土しているので、ここに遺物の紹介のみ記しておくことにする。

遺　物（第33図）

1　Ⅶ区ＳＸ－405の覆土内出土で須恵器坏身の口縁部破片である。小破片であるため口径は不明、口縁の立ち上がりは低く内傾する。受け部は、比較的短く上方に引き出され、断面三角形を呈している。器面調整は、内外面ヨコナデで、胎土は緻密で砂粒を含み焼成は良好である。

2　Ⅶ区ＳＸ－405の覆土内出土で、須恵器瓶と考えられる口縁部の破片である。口径は13.4cm、現存高3.5cmを測る。頸部は細く締まり、頸部上半部から膨らみ始め口縁部に至る。口縁部は若干外反した後内傾し、端部断面は三角形を呈する。また頸部と口縁部の境には一条の沈線を施している。器面調整は、内外面共にヨコナデで、胎土は緻密、焼成は良好である。

3　Ⅶ区ＳＸ－404の覆土内出土で、須恵器瓶と考えられる口縁部の破片である。口径9.3cm、現存高2.1cmを測る。頸部は細く締まるものと考えられ2同様頸部上半部から膨らみ始め口縁部に至る。口縁部はやや外反し、端部は丸くなる。器面調整は内外面共にヨコナデで、胎土は緻密で砂粒を若干含み、焼成は良好である。



第33図　古墳時代の遺物実測図

4　Ⅴ区の遺構検出面より出土の坩口縁部で、口径は5.6cmを測り須恵器製である。頸部付近より下は欠失するが、胴部はほぼ球形になるものと考えられ、口縁部は頸部の細く締まった部分より短かく、直に立ち上がる。器面調整は内外面共にヨコナデで、胎土は緻密で砂粒を多く含み、焼成は良好である。

5　4と同じくⅤ区より出土の坩胴部片で、胴部最大径10.1cm、現存高3.5cmを測り須恵器製である。底部は平底のような丸底で胴部へ内湾しながら立ち上がる。外面には明瞭に稜が残っている。器面調整は内面ヨコナデ、外面ヘラ削りの後ヨコナデを行なっている。焼成は良好である。4とは別個体と考られる。

5節　奈良・平安時代の調査

本遺跡の調査の中で中心となる時代で、遺構の検出および遺物出土が最も多かった時代である。遺構および遺物の分布範囲は、調査区域の全域にわたり認められている。検出遺構は、掘立柱建物遺構16棟、大型土壙遺構８、竪穴住居址１、溝遺構7本の他にピット群多数が確認されている。遺構に伴う遺物は少なく、多量に出土した遺物は大部分が遺構外すなわち一括資料である。以下遺構外の一括資料を中心に分類を行い、遺構内の資料はそれを基に説明を行いたい。

１．一括遺物（第34図～第40図）

当遺跡出土の遺物の中で中心をなし、最も出土量の多い時期である。しかし大半の遺物が遺構確認面およびピット内からの出土で、掘立柱建物、土壙などの遺構に直接伴う遺物は少ない。ここでは、最初に遺構確認面およびピット内より出土の土師器、須恵器の分類を行い、後にこの分類に従い掘立柱建物、土壙などの主遺構出土の土師器、須恵器の説明を加えたい。なお本報告の奈良、平安時代の遺物の分類は、この時期の遺物の指標となる松橋町萩尾に所在する萩尾窯跡群出土の須恵器を基準に分類を行った昭和55、56年度（Ⅰ・Ⅱ次）調査報告書の分類をそのまま用い行った。詳細は「曲野遺跡Ⅰ」の報告書を御参照頂きたい。

蓋（第34図１～21）

鈕の有無によって大別し、鈕を持たないものをⅠ類、鈕のあるものをⅡ類とした。さらに鈕を持たないⅠ類を端部の形態により細分し、Ⅱ類の鈕を持つものを鈕の形態により細分した。

Ⅰ類（１～18）

ⅠＡ類　外面に明瞭な段を持ち、口縁部は屈曲し、端部は短く下方またはやや外反気味につまみ出され、先端は尖っているもので、１～３及び土師器であるが18がこれに属する。共に天井部が低く、口径が小さい。また外面全体に明瞭な稜が認められ、全体のプロポーションが角張っているのが特徴である。法量は１が口径11cm、器高2cm、２が口径13.6cm、器高1.9cm、３は口径14.8cm、器高1.5cmを測る。

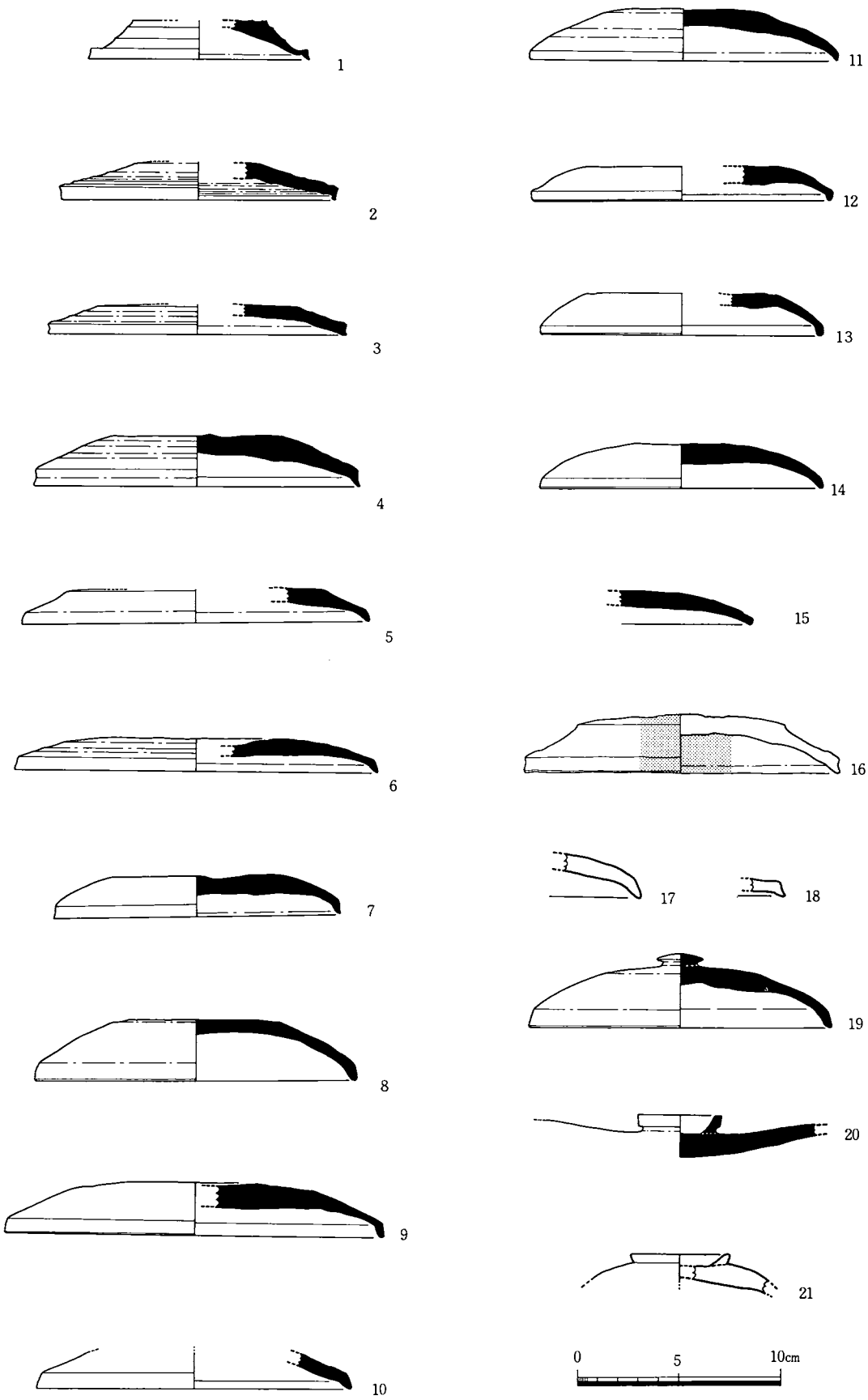
ⅠＢ類　ⅠＡ類同様外面に段を持ち、口縁部が屈曲し、端部は長く外反気味につまみ出され、先端部は尖っているもので４がこれに属する。天井部が低く肉厚であるのが特徴で、明瞭ではないが、稜が認められる。法量は口径が16.2cm、器高が2.5cmを測る。また、16は土師器であるが口縁部の特徴よりこの類に属するもので、４に比べつまみ出された端部がやや短く、内外面に赤色顔料を塗布している。法量は口径が15.6cm、器高が2.9cmを測る。

ⅠＣ類　口縁部は屈曲するが、ⅠＢ類程明瞭ではない。端部は外傾気味につまみ出され先端は尖がり気味である。５・６・10と土師器であるが17がこれに属し、５の口径17.2cm、器高1.7cm、６が口径18cm、器高1.6cmと径が他に比べ大きく、天井部が低い。10は５・６と違い、天井部が高くなる。

ⅠＤ類　口縁部が屈曲し端部は外反気味に直下につまみ出され先端は尖がっている。７がこれに属する。法量は口径が14.2cm、器高が２cmを測り、小型で天井部が低いのが特徴である。

ⅠＥ類　口縁部は屈曲するが明瞭ではなく、端部は外傾気味につまみ出され、先端は丸くなる。８・13がこれに属し、８は法量が口径16cm、器高が３cmを測り、天井部が高く、肉薄である。13は法量が口径14cm、器高2.1cmを測り、天井部は低くなる。

ⅠＦ類　口縁部は屈曲し、明瞭な段を持つ。端部はやや外傾気味につまみ出され、先端が丸くなる。９



第34図　一括遺物(蓋)実測図

がこれに属し、法量は口径18.8cm、器高2.6cmを測り、天井部が肉厚であるのが特徴である。

ＩＧ類　口縁部が屈曲し明瞭な段を持つ。端部は下方に向って短くつまみ出され、先端は丸くなる。12がこれに属し、法量は、口径15cm、器高1.7cmを測り、天井部が低く肉厚であるのが特徴である。

ＩＨ類　口縁端部がつまみ出されず屈曲が認められないもので、11・14・15がこれに属する。法量は11が口径15.2cm、器高2.6cm、14が口径14cm、器高2.2cmを測り、11は天井部が高く肉厚で、端部先端は尖がる。14は天井部が低く肉厚で、端部先端は丸くなる。15は破片であるが、天井部は低く先端は平坦である。

Ⅱ類（19～21）

ⅡＡ類　ボタン状の鈕を持つもので、19がこれに属する。法量は口径15cm、器高3.7cmを測り、天井部が高く、口縁部は小さく屈曲し、端部は外傾気味につまみ出され、先端は丸くなる。体部はなめらかで稜を持たない。

ⅡＢ類　輪状の鈕を持つもので、20・21がこれに属する。20は鈕径4.2cmを測り、天井部分が落ちこんでいる。21は鈕径4.9cmを測る。

ⅡＣ類　凝宝珠形の鈕を持つもので、ここには図化していないが、遺構に伴って出土しているので一応分類しておく。

坏（第35図22～第36図64）

高台の有無により大別し、高台の付くものをⅠ類、高台の付かないものをⅡ類とし、さらに高台の付くものを高台の断面形により、また高台のつかないものを口縁部の形状により細分した。

Ⅰ類（22～55）

ⅠＡ類　外方に開き、高台部分は断面が方形を呈し高く肉薄であり、畳付部分がほぼ水平である。22・40、また土師器であるが50・52がこれに属する。40・50・52はそれぞれ底径が10.4cm、16.4cm、11.4cmと大きいことより埦と考えられるが、口縁部が欠失した底部片であるため一応坏で分類を行った。50は内外面に赤色顔料を塗布している。高台の貼り付け位置は周縁部よりやや内側に貼り付けて、また底面はすべて回転ヘラ切りである。

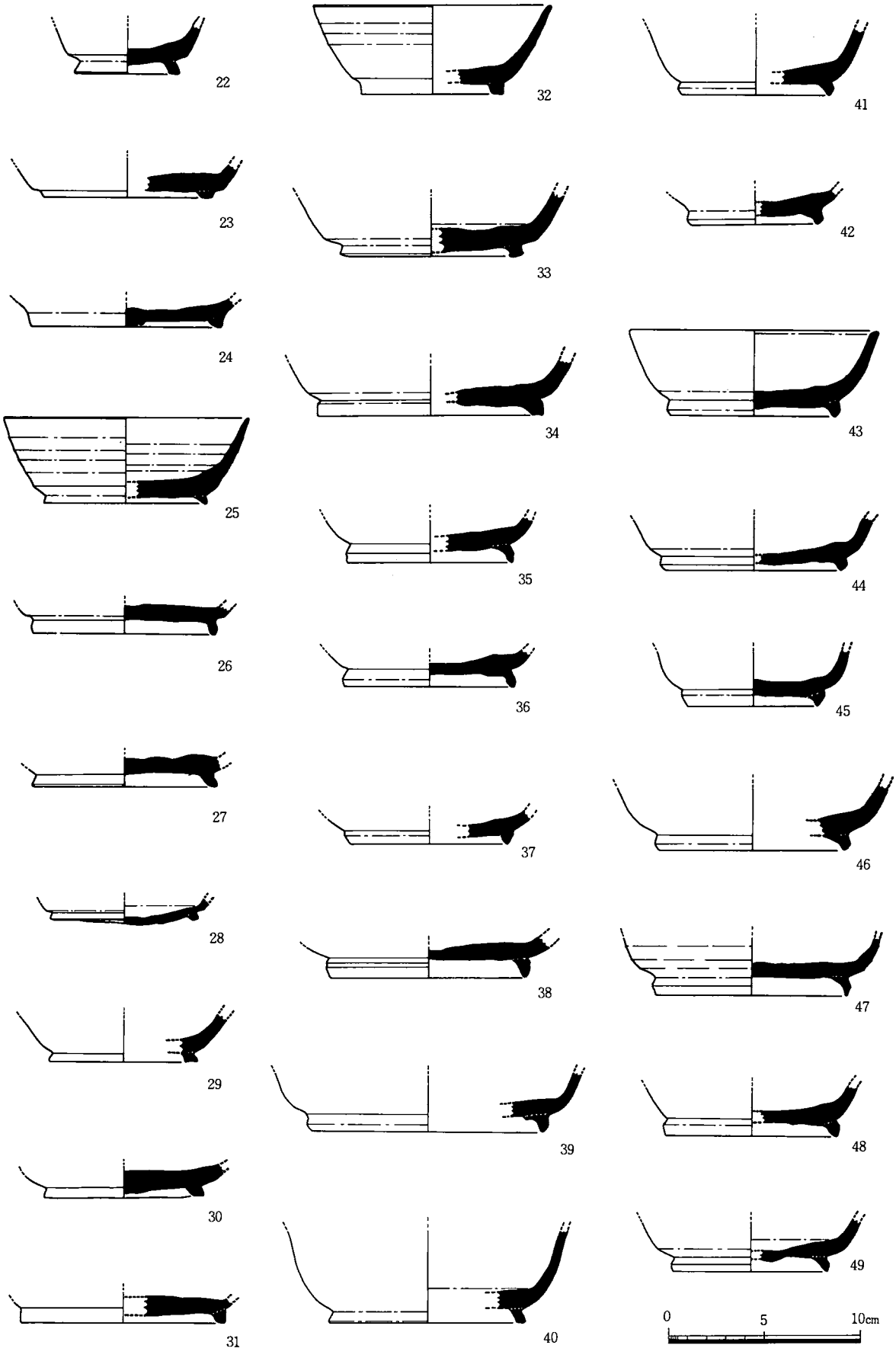
ⅠＢ類　断面形が扁平な台形を呈する、肉厚で低い高台を貼り付けたもので、畳付部分はほぼ水平である。23の１点がこれに属する。高台の貼り付け位置は周縁部よりやや内側に貼り付け、また底面は回転ヘラ切りである。

ⅠＣ類　断面形が方形を呈する肉厚の高台を貼り付けたもので、外側には開かず底面に対してまっすぐおりる。高台の高さはⅠＢ類より高い。24・31・32がこれに属し、いずれも高台が体部と底部の境界部に位置しており、体部と高台が一体となっているのが特徴である。24は赤焼き須恵器である。32は法量が口径12.6cm、底径7.6cm、器高が4.7cmを測り、体部から口縁部にかけて外傾しながら立ち上がり端部は丸くなる。底面はすべて回転ヘラ切りである。

ⅠＤ類　外方に向って若干内湾しながら開き、端部は尖り気味で、断面形が三角形を呈している。25がこれに属する。法量は口径12.9cm、底径8.6cm、器高が4.5cmを測り、体部から口縁部にかけて外傾しながら立ち上がる。底面は回転ヘラ切りである。

ⅠＥ類　ⅠＤ類と同じく肉薄の高台が外方に向って開くもので、ⅠＤ類より高台部が高くなり、端部は若干丸くなるもので、26・27がこれに属する。高台の貼り付け位置は周縁部よりやや内側に貼り付けて、底面はすべて回転ヘラ切りである。

ⅠＦ類　断面形が方形を呈する肉厚の高台を、外方に向って開くように貼りつけたもので、畳付部分は



第35図　一括遺物(坏)実測図

ほぼ水平である。28～30、33～34、土師器の51・53がこれに属する。51には、内外面に赤色顔料を塗布している。また、34・51・53はそれぞれ底径が12cm、12cm、11.2cmと大きいことより椀と考えられるが、底部付近の破片であるためここでは坏に分類しておく。底面はすべて回転ヘラ切りである。

ⅠG類　高台の基部は強くくびれ、外面に稜を有し外方に開く。高台の外面下端はナデて尖り気味になっており、逆くの字状に屈曲しているのがこの類の特徴で、萩尾窯跡より出土する坏の高台部分の特徴と一致することより、萩尾窯跡で生産され当遺跡に持ち込まれたものと考えられる。35～39、41～49、土師器の54・55がこれに属する。39・54・55はそれぞれ底径が12.2cm、10.8cm、11.4cmと大きいことより椀と考えられるが、底部片であるためここでは坏に分類しておく。43はほぼ完形品で、口径11cm、底径8.6cm、器高4cmを測り、体部から口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がり端部は若干外反気味である。また、38は高台の屈曲部分に一条の沈線を有している。底面はすべて回転ヘラ切りである。

Ⅱ類（56～64）

ⅡA類　器高が高いのが特徴で、56と土師器の57がこれに属する。いずれも底部が欠失するため底部の形状および器高は不明であるが8cm前後と考えられる。56は口径12.8cmを測る口縁部片で、底部より外傾しながら立ち上がり口縁部で外反する。端部は丸みを帯びている。57は口径13.2cmを測る口縁部片で、底部より内湾気味に直口して立ち上がり、端部は尖り気味である。

ⅡB類　底部は平らで、口縁部にかけてやや外傾しながらストレートに立ち上がるもので58・62・63がこれに属する。58は底部が欠失するため形状は不明であるが、口縁部付近の特徴がこの類に属することよりⅡB類に分類した。62は口径14.4cm、器高4cmを測る。63は小型の坏で、口径11cm、器高2.8cmを測る。いずれもナデにより仕上げられており、稜は認められない。また端部は丸くなる。

ⅡC類　底部は不明であるが、丸くなると考えられ、底部より口縁部にかけて外傾しながらストレートに立ち上がるもので、59がこれに属する。口径は17cmを測り、内外面に稜が認められる。また、端部は尖り気味である。

ⅡD類　基本的にはⅡC類と同じであるが、底部より外傾しながら立ち上がり口縁部付近で外反し端部は丸くなるもので、60がこれに属する。

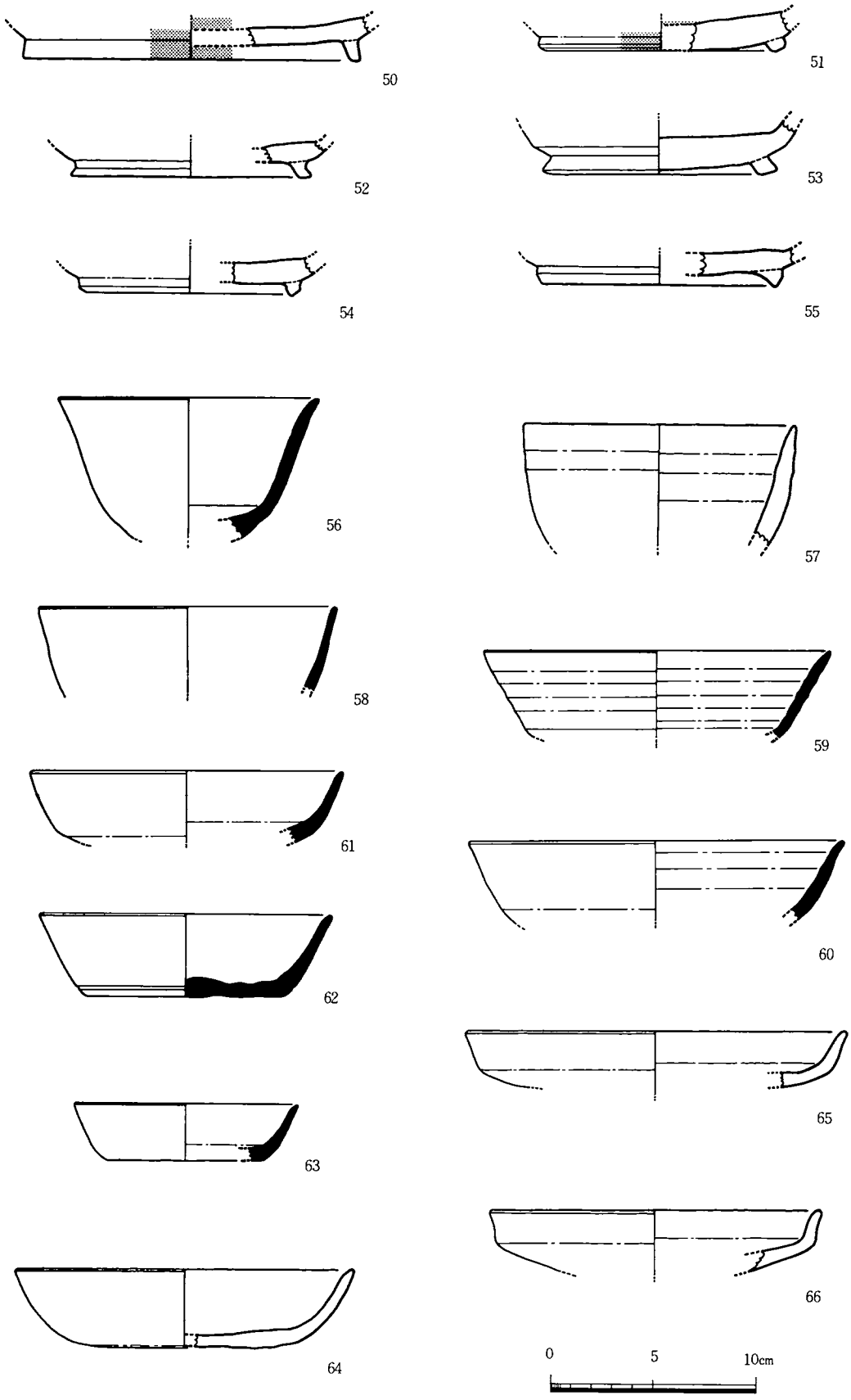
ⅡE類　底部は丸くなり、口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がるもので、61、土師器の64がこれに属する。61は底部が欠失しているが丸くなるものと考えられ、この類に分類した。64は口径16.6cm、器高3.8cmを測る。口縁端部は共に尖り気味である。

高坏（第36図65～第37図70）

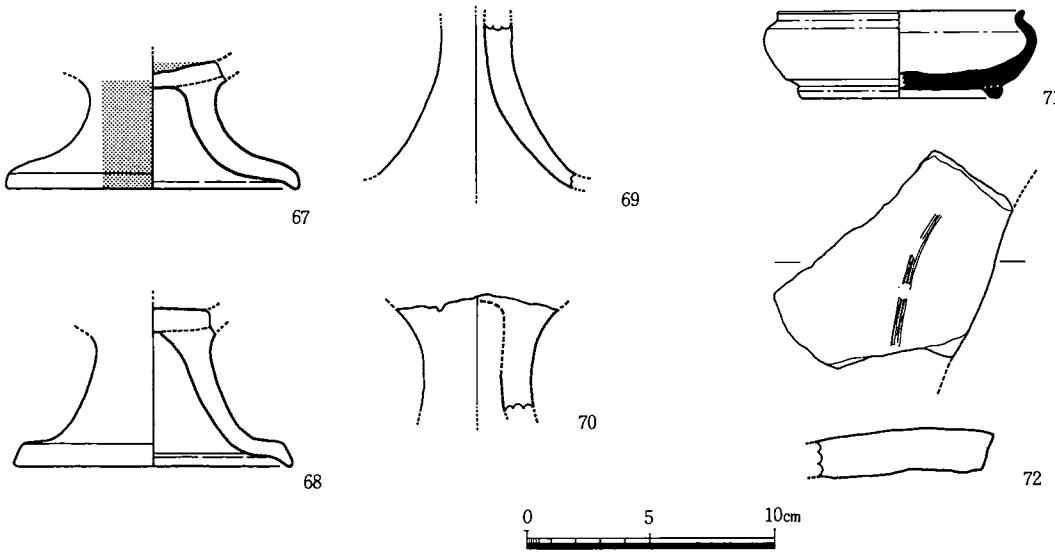
65・66は高坏の坏部と考えられるもので、いずれも口縁部が内側に屈曲し、やや外反気味に立ち上がる。65は口径18.6cm、66は口径16.2cmを測る。67～70はいづれも脚部片である。67・68は脚部が低く、端部が急に大きく開き内側に屈曲するものである。67には外面に赤色顔料を塗布している。70も破片であるため不明であるが、67・68と同じ形態の脚部と考えられる。69は脚部が高く、端部にかけてゆるやかに開く形態である。すべて土師器片である。

器種不明土器（第37図71）

71は、須恵器片で断面形が、方形を呈する高台を底面に外側に開くように貼り付けたもので、底部より外傾しながら立ち上がり、口縁部付近で内側に屈曲した後、口縁部が外側に外反気味に立ち上がるもので、端部はやや尖がり気味である。器種は坏と考えられるが、ここでは一応器種不明の土器として説明



第36図　一括遺物(坏・高坏)実測図



第37図　一括遺物(高坏・器種不明土器・カマド)実測図

をしておく。

カマド（第37図72）

72は土師質の土器でカマドの破片と考えられる。土器の厚さは1.7㎜と厚い。調整は、表がナデの後ハケ目、裏が指頭による整形で、カマドの焚き口部分と考えられる所は、ヘラにより斜めにカットしている。

土師器甕（第38図73～82）

口縁部の形状および全体のプロポーションより、3種に分類した。

Ⅰ類（73・81）

胴部より直口または、やや外反しながら立ち上がり、口縁部で屈曲せずそのままやや大きく外反するものである。73は口径28.8cmを測り、内面ヘラ削り、外面ハケ目の器面調整を行ない、81は口径24.6cmで、内面ヘラ削り、外面ナデの器面調整を行なっている。

Ⅱ類（74～80）

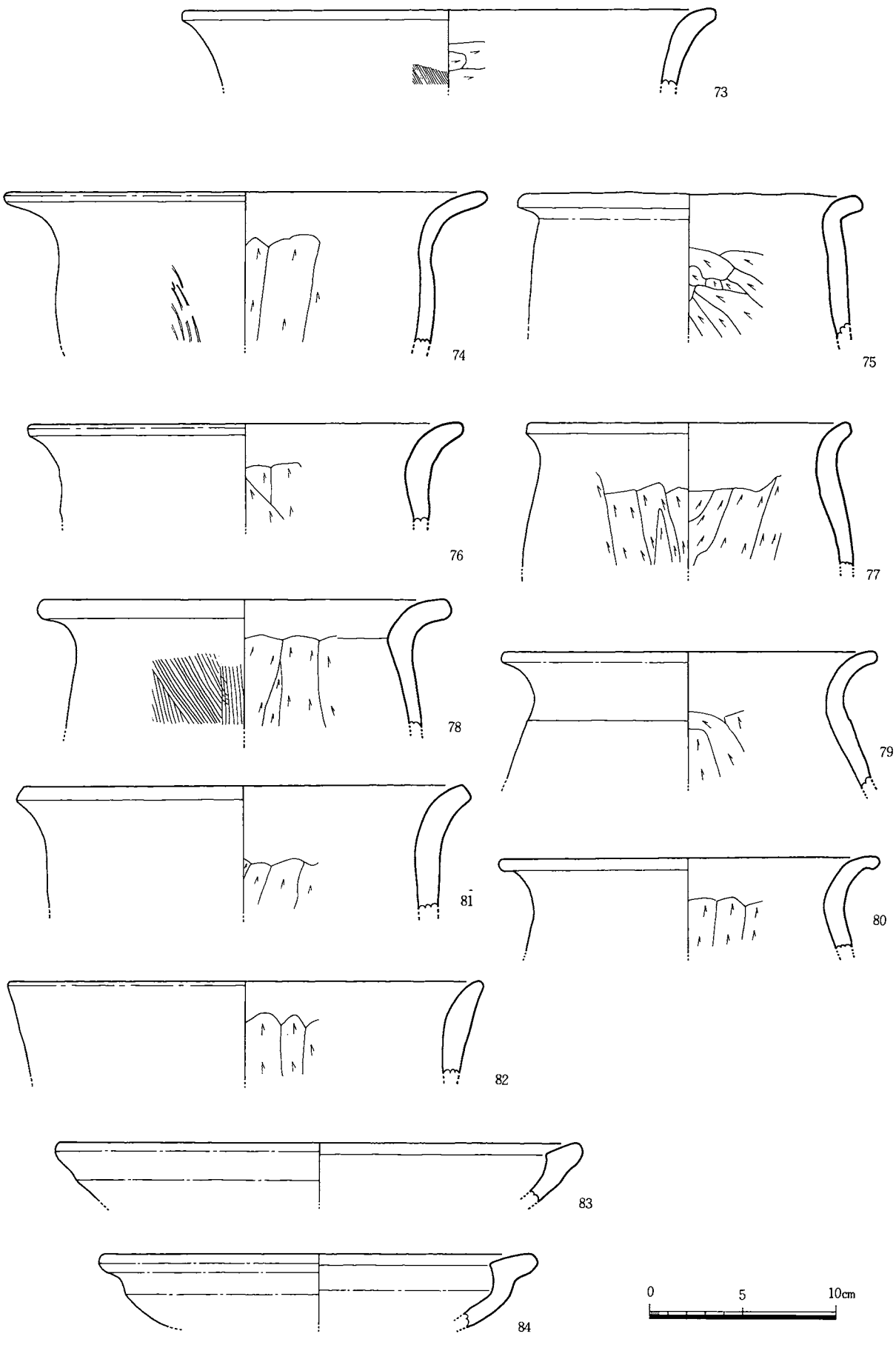
口縁部が強く屈曲しくびれた後、端部に向って大きく外反し、胴部が張るものである。器面調整は、74と78が内面ヘラ削り、外面ハケ目による調整を行ない、75～77・79～80は内面ヘラ削り、外面ナデによる調整を行なっている。

Ⅲ類（82）

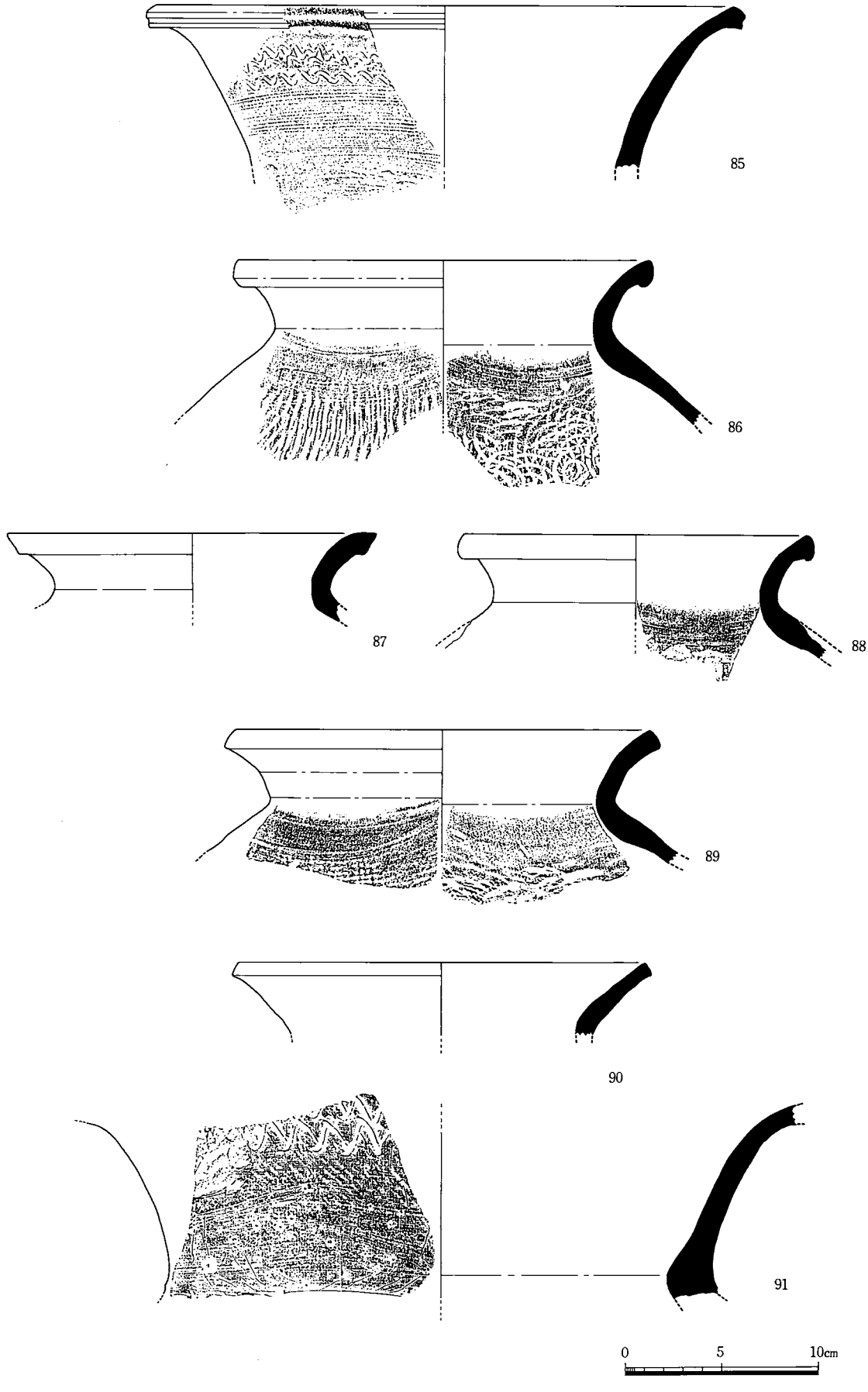
胴部よりやや外傾ぎみに直口して立ち上がり、そのまま口縁部に至るものである。器面調整は内面ヘラ削り、外面ナデによる調整を行なっている。口径は25.8cmを測る。ほぼ直口する口縁部であることより甑の可能性も考えられるが、小破片であることよりここでは一応、甕に分類しておく。

浅鉢（第38図83・84）

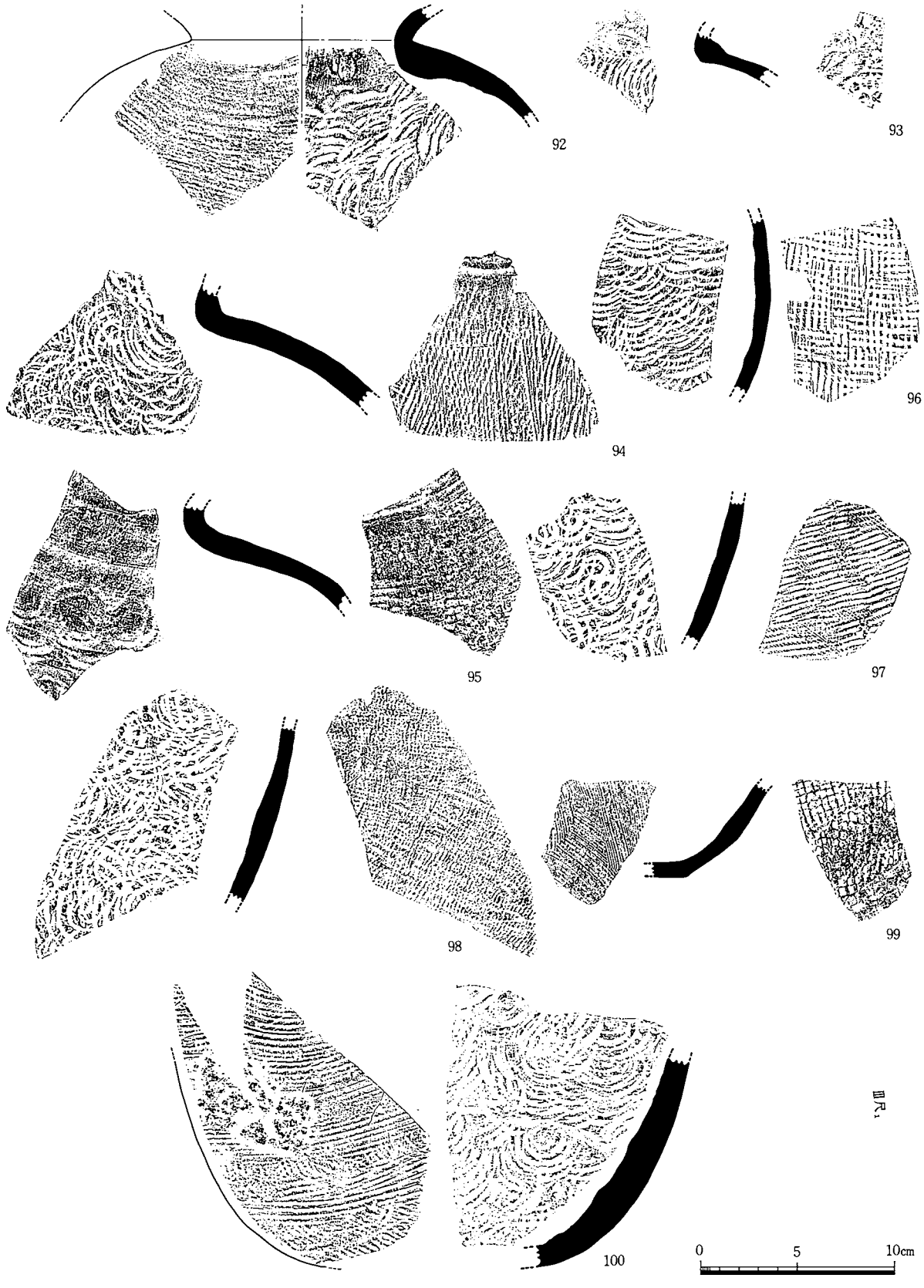
83は、底部より大きく内湾しながら立ち上がり、口縁部にはくびれを持たずそのまま端部に至る。口縁内面は斜めに削り一つの段を作り出している。口径28.2cmを測る。84は、同じく底部より大きく内湾しながら立ち上がり、口縁部には強いくびれを持ちあたかも口縁を外方へつまみ出したように見受けられる。



第38図　一括遺物(土師器・甕・浅鉢)実測図



第39図　一括遺物須恵器甕実測図



第40図　一括遺物須恵器甕実測図

また、口縁内面は斜めに削り一つの段を作り出している。口径は23.2cmを測る。共に土師器片である。

須恵器甕（第39図85～第40図100）

口縁部の形状より３つに分類した。

Ⅰ類（85・91）

口縁部が頸部よりやや外傾しながら立ち上がり高くなるもので、端部付近でもう一度外反し、端部は肥厚する。85・91がこれに属する。共に端部直下に、クシ状工具による流水文を施している。85の口径は30cmを測り、91は端部が欠失するため口径は不明である。

Ⅱ類（86～88）

頸部でくの字状に屈曲した後、外反しながら短く立ち上がり端部に至る。端部はⅠ類同様肥厚する。86～88がこれに属する。口径は、86が21.6cm、87が19.2cm、88が17.8cmを測り、いずれも口縁部をヨコナデ調整、外面を86はカキ目調整、内面を86・88は同心円の叩き調整を行なっている。

Ⅲ類（89～90）

Ⅱ類同様頸部でくの字状に屈曲した後、外反しながら短く立ち上がり端部に至るもので、端部は、肥厚せずそのまま終るものである。89・90がこれに属する。89・90は共に口縁部がヨコナデ調整で、89の胴部は外面格子目叩き、内面同心円叩き調整を行なっている。口径は、89が21.6cm、90が21.2cmを測る。

他に92～95は、口縁部を欠くが、甕の頸部付近の破片、96～98は胴部片、99～100は底部片がある。96～100は壺の可能性も考えられるが、破片で不明であるため、ここでは一応甕として説明を行なう。92～95は頸部がくの字に屈曲した後、外反する口縁部が続くものと考えられ、端部が欠失しているため、ⅡかⅢ類に属するものと考えられる。92・94は共に外面カキ目調整、内面同心円叩き調整を行ない、95は外面格子目叩き調整、内面同心円叩き調整、93も外面は荒れているため不明であるが、内面同心円叩き調整を行なっている。96～98は胴部片で、外面カキ目調整、内面同心円叩き調整を行なっている。97と98は破片の傾き具合より底部に近い部分と考えられる。99と100は共に底部片で、99は平底、100は丸底を呈している。調整は、99が内面カキ目、外面格子目叩きで、100が内面同心円叩き、外面カキ目である。

番号	区 グリッド	遺構	器種	法量（口径・底径・高さ又は現存高）	胎土	焼成	色調	調整及び特徴	備考
1	Ⅳ次Ⅶ区 73－O	Pit１内	蓋	口径 11cm 高さ 2cm	砂粒を若干含む 緻密	良好 堅緻	内面－緑灰色 外面－灰白色	内外面共に横ナデ調整	須恵器
2	Ⅳ次Ⅶ区 70－O	Pit15内	蓋	口径 13.6cm 現存高 1.9cm	砂粒を含む 緻密	良好 堅緻	内外面共に灰色	内外面共に横ナデ調整	須恵器
3	Ⅳ次Ⅶ区 73－O	Pit10内	蓋	口径 14.8cm 現存高 1.5cm	砂粒を含む 密	良	内面－灰黄色 外面－暗灰黄色	内外面共に横ナデ調整 上部はヘラ切り	須恵器
4	Ⅳ次Ⅴ区 63・64－Q	貝Pit内	蓋	口径 16.2cm 高さ 2.5cm	5mm径の小礫、 砂粒を含む 密	良好 堅緻	内外面共に灰白色	内外面共に横ナデ調整 全体にミズビキ痕が残る	須恵器
5	Ⅳ次Ⅶ区 73－O	Pit２内	蓋	口径 17.2cm 現存高 1.7cm	砂粒を少量含む 密	良 堅緻	内面－灰オリーブ 外面－灰色	内外面共に横ナデ調整 上部はヘラ切り	須恵器
6	Ⅳ次Ⅶ区	Ⅲ層一括	蓋	口径 18cm 高さ 1.6cm	砂粒を含む 緻密	良好 堅緻	内面－灰色 外面－オリーブ灰	内外面共に横ナデ調整	須恵器
7	Ⅳ次Ⅶ区 73－O	Pit２内	蓋	口径 14.2cm 高さ 2cm	砂粒を含む 緻密	良好 堅緻	内外面共に灰白色	内外面共に横ナデ調整 上部はヘラ切り後ナデ調整	須恵器
8	Ⅳ次Ⅶ区 73－O	Pit２内	蓋	口径 16cm 高さ 3cm	緻密	良好 堅緻	内外面共に灰白色 一部に釉がかかる （褐色の自然釉か？）	内外面共に横ナデ調整 上部はヘラ切り	須恵器
9	Ⅳ次Ⅴ区	長谷川表採	蓋	口径 18.8cm 高さ 2.6cm	密	良好 堅緻	内面－灰色 外面－灰白色		須恵器
10	Ⅳ次Ⅶ区 73－O	Pit１内	蓋	口径 15.6cm 現存高 1.8cm	砂粒を含む 緻密	良好 堅緻	内外面共に灰色	内外面共に横ナデ調整	須恵器
11	Ⅳ次Ⅶ区 73－O	Pit10内	蓋	口径 15.2cm 高さ 2.6cm	砂粒を含む 密	やや不良	内外面共に灰白色	内外面共に横ナデ調整 上部は回転ヘラ切り	須恵器
12	Ⅳ次Ⅴ区	長谷川表採	蓋	口径 15cm 高さ 1.7cm	砂粒を含む 密	良好 堅緻	内外面共に灰色	内外面共に横ナデ調整 上部はヘラ削り	須恵器
13	Ⅳ次Ⅴ区 61－P	Ⅲ層一括	蓋	口径 14cm 高さ 2.1cm	砂粒を含む 緻密	良好 堅緻	内面－灰色 外面－暗青灰色	内外面共に横ナデ調整 上部はヘリ切り後ヘラ削り	須恵器
14	Ⅳ次Ⅶ区	Ⅲ層一括	蓋	口径 14cm 高さ 2.2cm	砂粒を含む 密	良好 堅緻	内面－灰白色 外面－灰白色・一 オリーブ黒	内外面共に横ナデ調整 上部はヘラによる切り離し	須恵器

番号	区 グリッド	遺構	器種	法量（口径・底径・高さ又は現存高）	胎土	焼成	色調	調整及び特徴	備考
15	Ⅳ次Ⅶ区 71－P	Pit25内	蓋	現存高 1.6cm	砂粒を含む 緻密	良好 堅緻	内外面共に灰色		須恵預
16	Ⅳ次Ⅴ区 59－P	Ⅲ層 P-37	蓋	口径 15.6cm 底径 10.2cm 高さ 2.9cm	砂粒を多く含む	良好	内外面共に赤褐色	内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り後横ナデ調整	土師器
17	Ⅳ次Ⅶ区 70－N	Pit 2 内	蓋		長石片及び砂粒を含む	やや良	内外面共に浅黄橙色	内外面共に横ナデ調整	土師器
18	Ⅳ次Ⅶ区 70－O	Pit18内	蓋		雲母片及び砂粒を若干含む	良	内外面共に橙色	内外面共に横ナデ調整	土師器
19	Ⅳ次Ⅶ区	Ⅲ層一括	蓋		砂粒を含む 密	良好 堅緻	内外面共に灰色	ボタン状の鈕が付く	須恵器
20	Ⅳ次Ⅴ区	長谷川表採	蓋	ツマミ径 4.2cm	砂粒を含む 緻密	良好 堅緻	内面ーにぶい赤褐色 外面ー灰色	輪状の鈕（ツマミ）が付く	須恵器
21	Ⅳ次Ⅶ区 68－O	Pit 5 内	蓋	鈕径 4.8cm 鈕高 0.4cm 現存高 1.3cm	1mm径の小石、砂粒及び雲母片を含む	やや不良	内外面共に橙色	内外面共に横ナデ調整	土師器
22	Ⅳ次Ⅶ区	Ⅲ層一括	坏	底径 5.6cm 現存高 2.5cm	砂粒を含む 緻密	良好 堅緻	内外面共にオリーブ黒色	外面底部に緑色の釉がかかっている 自然釉か？ 高台付 底部は回転ヘラ切り	須恵器
23	Ⅳ次Ⅶ区 73－Q	Ⅲ層一括	坏	底径 8.8cm 現存高 1.5cm	砂粒を含む 緻密	良好 堅緻	内外面共に灰色	底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整	須恵器
24	Ⅵ次Ⅶ区	Ⅲ層一括	坏	底径 10cm 現存高 1.5cm	2～5mm径の小石 砂粒を含む 緻密	良	内外面共に浅黄橙色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器 （赤焼き）
25	Ⅳ次Ⅶ区 73－O	Pit11内	坏	口径 12.9cm 底径 8.6cm 高さ 4.5cm	砂粒を多く含む 密	良好 堅緻	内面ー灰黄色 外面ー灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
26	Ⅳ次Ⅶ区 73－O	Pit10内	坏	底径 9.6cm 現存高 1.5cm	砂粒を若干含む 緻密	良好 堅緻	内面ー灰色 外面ーオリーブ色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
27	Ⅳ次Ⅴ区	長谷川表採	坏	底径 9.8cm 現存高 1.5cm	砂粒を含む 緻密	良好 堅緻	内外面共に灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
28	Ⅳ次Ⅶ区 73－O	Pit16内	坏	底径 7.8cm 現存高 1.1cm	砂粒を含む 緻密	良好 堅緻	内面ー灰白色 外面ー灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り後ナデ調整	須恵器
29	Ⅳ次Ⅶ区 70－O	Pit50内	坏	底径 7.8cm 現存高 2.2cm	砂粒を若干含む 緻密	良好 堅緻	内面ー灰オリーブ色 外面ー灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整	須恵器
30	Ⅳ次Ⅶ区 74－R	Pit 1 内	坏	底径 8.4cm 現存高 1.8cm	砂粒を多く含む 緻密	良好 堅緻	内面ー明オリーブ灰色 外面ー極暗赤褐色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
31	Ⅳ次Ⅶ区 72－N	Pit 3 内	坏か 埦？	底径 10.8cm 現存高 1.4cm	1mm径の小石及び砂粒を若干含む 緻密	良	内面ー浅黄色 外面ー灰オリーブ色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
32	Ⅳ次Ⅶ区 70－O	Pit10内	坏	口径 12.6cm 底径 7.6cm 高さ 4.7cm	砂粒を若干含む 緻密	良好 堅緻	内面ー灰白色 外面ー緑灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
33	Ⅳ次Ⅶ区 72－O	Pit22内	坏	底径 9.6cm 現存高 3.1cm	砂粒を若干含む 緻密	良好 堅緻	内面ー灰白色 外面ー灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整 内面はミズビキ痕残る	須恵器
34	Ⅳ次Ⅶ区 73－O	Pit12内	坏か 埦？	底径 12.0cm 現存高 2.8cm	砂粒を若干含む 緻密	良好 堅緻	内外面共に灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
35	Ⅳ次Ⅴ区	長谷川表採	坏	底径 8.8cm 現存高 2.2cm	砂粒を含む 密	良好	内面ー灰白色 外面ー灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
36	Ⅳ次Ⅴ区	長谷川表採	坏	底径 9.8cm 現存高 1.5cm	砂粒を含む 緻密	良好 堅緻	内外面共に灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
37	Ⅳ次Ⅴ区 62－N	Ⅲ層一括	坏	底径 8.4cm 現存高 1.3cm	砂粒を含む 密	良好 堅緻	内面ー灰オリーブ色 外面ー灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
38	Ⅳ次Ⅶ区 73－P	Pit 4 内	坏か 埦？	底径 10.4cm 現存高 2.2cm	砂粒を若干含む 緻密	良好 堅緻	内外面共に灰黄色	高台付、内外面共に横ナデ調整 高台外側に一条の沈線を施し緑色の釉がかかる、自然釉か？	須恵器
39	Ⅳ次Ⅶ区 76－O	Pit15内	坏か 埦？	底径 12.2cm 現存高 3.1cm	砂粒を含む 密	良好 堅緻	内面ーオリーブ灰色 外面ー暗オリーブ灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
40	Ⅳ次Ⅶ区 72－O	Pit22内	坏か 埦？	底径 10.4cm 現存高 4.9cm	砂粒を含む 密	良好 堅緻	内面ー灰黄色 外面ー明褐灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
41	Ⅳ次Ⅶ区 68－O	Pit 4 内	坏	底径 7.8cm 現存高 3.4cm	砂粒を多量に含む 緻密	良好 堅緻	内面ーオリーブ灰色 外面ー灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
42	Ⅳ次Ⅶ区 74－P	Ⅲ層一括	坏	底径 6.6cm 現存高 1.8cm	砂粒を若干含む 緻密	良好 堅緻	内面ーオリーブ黄色 外面ー灰オリーブ色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り後ナデ調整	須恵器
43	Ⅳ次Ⅶ区 76－P	Pit 5 内	坏	口径 11.0cm 底径 8.6cm 高さ 4.5cm	砂粒を含む 緻密	良好 堅緻	内面ー灰色 外面ー暗灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り 内外面共にミズビキ痕残る	須恵器
44	Ⅵ次Ⅶ区 73－Q	Pit 9 内	坏	底径 9.2cm 現存高 2.6cm	砂粒を多量に含む 緻密	良好 堅緻	内面ー灰色 外面ー灰白色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り、緑色の釉がかかっている、自然釉か？	須恵器
45	Ⅳ次Ⅶ区 70－O	Pit60内	坏	底径 6.8cm 現存高 2.9cm	砂粒を若干含む 緻密	良好 堅緻	内外面共に灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整 内面にはミズビキ痕が残る 底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整	須恵器
46	Ⅳ次Ⅶ区 76－O	Pit 7 内	坏	底径 9.6cm 現存高 3.3cm	砂粒を含む 緻密	良好 堅緻	内面ー黄灰色 外面ー灰白色	高台付、内外面共に横ナデ調整	須恵器
47	Ⅳ次Ⅶ区 71－N	Ⅲ層一括	坏	底径 10.0cm 現存高 3.0cm	砂粒を含む 緻密	良好 堅緻	内外面共に灰白色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り、外面及び底部に緑色の釉がかかる、自然釉か？	須恵器
48	Ⅳ次Ⅴ区	長谷川表採	坏	底径 9.0cm 現存高 2.5cm	砂粒を若干含む 密	良好 堅緻	内面ー灰オリーブ色 外面ー灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
49	Ⅳ次Ⅴ区 63－O	Pit 2 内	坏	底径 8.2cm 現存高 2.6cm	砂粒を含む 緻密	良好 堅緻	内外面共に灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
50	Ⅳ次Ⅶ区 70－O	Pit18内	坏か 埦？	底径 16.4cm 現存高 1.4cm	雲母片及び1～1.5mm径の小石・砂粒を含む	良好	内外面共に明赤褐色 地は浅黄橙色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り 内外面共に赤色顔料を塗布	土師器
51	Ⅳ次Ⅴ区	長谷川表採	坏か 埦？	底径 12cm 現存高 0.9cm	1～2mm径の小石及び砂粒を含む	良好	内外面共に赤色	高台付、内外面共にヘラケズリ調整 底部は回転ヘラ切りの後ヘラケズリ調整、全体に赤色顔料を塗布	土師器
52	Ⅳ次Ⅶ区 73－P	Pit 7 内	坏か 埦？	口径 11.6cm 現存高 1.3cm	1～2mm径の小石及び砂粒を含む	やや良	内外面共に橙色	高台付、内外面共に横ナデ調整	土師器
53	Ⅳ次Ⅶ区 75－P	Pit25内 P－4	坏か 埦？	底径 11.2cm 現存高 2.1cm	1～4mm径の小石及び砂粒を含む	良好	内外面共に橙色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り 一部回転ヘラ切りの後ナデ調整	土師器
54	Ⅳ次Ⅴ区 63－O	Ⅲ層一括	坏か 埦？	底径 10.8cm 現存高 1.1cm	1mm径の小石、長石、黒雲母、砂粒を含む	良好	内外面共に浅黄橙色	内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り、高台付	土師器
55	Ⅳ次Ⅶ区 70－O	Pit27内	坏か 埦？	底径 11.4cm 現存高 1.1cm	1～1.5mm径小石及び砂粒を含む	良好	内外面共に黄橙色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	土師器
56	Ⅳ次Ⅶ区	Ⅲ層一括	坏か 埦？	口径 12.8cm 現存高 6.8cm	1mm径の小石、砂粒を若干含む 密	良好 堅緻	内面ー灰オリーブ色 外面ーオリーブ黄色		須恵器
57	Ⅳ次Ⅶ区 70－O	Pit18内	坏か 埦？	口径 13.2cm 現存高 5.8cm	雲母粒及び砂粒を若干含む	良	内外面共に浅黄橙色	内外面共に横ナデ調整	土師器

番号	区 グリッド	遺　構	器種	法量（口径・底径・高さ又は現存高）	胎　土	焼　成	色　調	調整及び特徴	備　考
58	Ⅳ次Ⅶ区 71－N	Pit 4 Pit 5 内	坏	口　径　14.6cm 現存高　4.1cm	砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内面－灰オリーブ色 外面－灰白色	口縁、内外面共に横ナデ調整	須恵器
59	Ⅵ次Ⅶ区 69－O	Pit 1 内	坏	口　径　17cm 現存高　4.2cm	砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内外面共に灰白色	内外面共に横ナデ調整	須恵器
60	Ⅳ次Ⅶ区 68－P	Pit20内	坏か 埦？	口　径　18.4cm 現存高　4 cm	砂粒を若干含む 緻密	良好　堅緻	内面－灰色 外面－オリーブ灰色	内外面共に横ナデ調整	須恵器
61	Ⅳ次Ⅶ区 74－Q	Pit10内	坏	口　径　15.2cm 現存高　3.5cm	砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内面－灰色 外面－オリーブ黒色		須恵器
62	Ⅳ次Ⅶ区 73－O	Pit 1 内	坏	口　径　14.4cm 底　径　9.8cm 高　さ　4 cm	1～2mm径の小石 砂粒を多量に含む　緻密	良好　堅緻	内面－灰色 外面－暗赤褐色	内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
63	Ⅳ次Ⅶ区 71－N	Pit12内	坏	口　径　11cm 底　径　7.6cm 高　さ　2.8cm	砂粒を若干含む 緻密	良好　堅緻	内面－灰色 外面－オリーブ黒色	内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
64	Ⅳ次Ⅶ区 73－O	Pit 2 内	坏	口　径　16.6cm 底　径　9.4cm 高　さ　3.8cm	雲母粒、砂粒を含む	やや不良	内外面共に橙色	内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り 内面口縁付近にススが付着している	土師器
65	Ⅳ次Ⅶ区	Ⅲ層一括	高坏	口　径　18.6cm 現存高　2.7cm	砂粒、長石粒を含む	やや不良	内外面共に浅黄色	内外面共に横ナデ調整	土師器
66	Ⅳ次Ⅶ区 71－N	Ⅲ層一括	高坏	口　径　16.2cm 現存高　2.9cm	砂粒を少量含む	良好	内外面共に浅黄橙色	内外面共に横ナデ調整	土師器
67	Ⅳ次Ⅶ区	Ⅲ層一括	高坏	底　径　11.6cm 現存高　5 cm	1.5～2mm径の小石、雲母、石英を多量に含む	やや不良	内面－浅黄橙色 外面－地は浅黄橙 明赤褐色	脚部、坏部を回転ヘラ切りで離した後脚部を取り付けている 坏底部・脚部外面に赤色顔料を塗布	土師器
68	Ⅳ次Ⅶ区 71－N	Ⅲ層一括	高坏	底　径　11cm 現存高　6.2cm	1～2.5mm径の小石、石英粒、砂粒などを多量に含む	良	内外面共に浅黄橙色	脚部杯部を回転ヘラ切りで切り離した後脚部を付けている、粘土のつぎ目を確認できる 脚部は内外面共に横ナデ調整	土師器
69	Ⅳ次Ⅶ区	長谷川表採	高坏	現存高　6.5cm	砂粒を含む	良	内外面共に黄橙色	脚部、内外面共に横ナデ調整	土師器
70	Ⅳ次Ⅶ区 73－P	Pit16内	高坏	現存高　4.5cm	雲母、石英粒、砂粒を含む	良	浅黄橙色	坏部と脚部との接合部より剥離している、接合部はソケット状になっており、脚部を杯部にはめ込むように作られている、横ナデ調整	土師器
71	Ⅳ次Ⅶ区 71－P	Pit 6 内	不明	口径9.8cm 底径7.8cm 高さ3.5cm 胴部最大径10.8cm	砂粒を若干含む 密	良好　堅緻	内面－黄灰色 外面－灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
72	Ⅳ次 71－P	Pit 7 内	カマド		雲母粒、石英粒及び砂粒を含む	良	内外面共に橙色	上部は指頭による整形、粘土帯の単位が確認できる、側面はヘラ切り 下部は横ナデの後ハケ目調整	土師器
73	Ⅳ次Ⅶ区 70－O	Pit19・20内	カメ	口　径　28.8cm 現存高　4 cm	雲母粒、1mm径の砂粒を含む	良好	内外面共に浅黄橙色	口縁、内面口縁付近は横ナデ調整、下方に近ずくと横方向のヘラケズリ、外面は口縁付近横ナデ、下方はハケ目調整	土師器
74	Ⅳ次Ⅶ区 72－Q	Pit 7 内	カメ		雲母片、石英粒1～1.5mm径の小石、砂粒を含む	やや良	内外面共に橙色	口縁、口縁付近は内外面共に横ナデ調整、胴部に近ずくと内面はヘラケズリ、外面はハケ目調整であるが、器面が荒れているためはっきり確認できない	土師器
75	Ⅳ次Ⅶ区 72－O	Pit 3 内	カメ	口　径　18.4cm 現存高　7 cm	雲母粒及び1～5mm径の小石、砂粒を含む	良好	内外面共に浅黄橙色	口縁、口縁部付近は内外面共に横ナデ調整 胴部に近づくと内面はヘラケズリ、外面は横ナデの後縦ナデ調整	土師器
76	Ⅳ次Ⅶ区 73－P	Pit19内	カメ	口　径　23.6cm 現存高　5.1cm	雲母粒、石英粒 砂粒を含む	良	内外面共に浅黄橙色	口縁、内面は上部のみ横ナデ、胴部に近づくとヘラケズリ、外面は横ナデ調整	土師器
77	Ⅳ次Ⅶ区 72－O	Ⅲ層一括	カメ	口　径　17.2cm 現存高　7.7cm	1～3mm径の小石 雲母片、砂粒を多く含む	良好	内外面共に浅黄橙色	口縁、口縁部付近は内外面共に横ナデ調整、胴部付近内面はヘラケズリ 外面はヘラ状工具によるナデ調整	土師器
78	Ⅳ次Ⅶ区	Ⅲ層一括	カメ	口　径　21.8cm 現存高　6.8cm	2～5mm径の小石 雲母片、砂粒等を多量に含む	良好	内外面共に橙色	口縁、口縁部付近は内外面共に横ナデ調整 頸部より内面は縦方向のヘラケズリ、外面はハケ目の後横ナデに続いて縦及び斜方向のハケ目調整	土師器
79	Ⅳ次Ⅴ区	長谷川表採	カメ	口　径　20.1cm 現存高　6.8cm	1～1.5mm径の小石、雲母片、砂粒を含む	良好	内外面共に黄橙色	口縁、口縁部は内外面共に横ナデ調整、頸部のくびれ付近より内面は縦方向ヘラケズリ、外面はナデ調整	土師器
80	Ⅳ次Ⅶ区 71－N	Pit19内	カメ	口　径　24.6cm 現存高　6.4cm	雲母粒及び砂粒を若干含む	良	内面－浅黄橙色 外面－にぶい橙色	口縁、口縁部は内外面共に横ナデ調整、頸部のくびれ付近より内面は縦方向のヘラケズリ、外面はナデ調整	土師器
81	Ⅳ次Ⅴ区	長谷川表採	カメ	口　径　20.4cm 現存高　4.8cm	1～2mm径の小石 雲母片等、砂粒を多量に含む	良好	内面－黄橙色 外面－橙色	口縁、口縁部は内外面共に横ナデ調整、胴部に近づくと内面はヘラケズリ、外面は横ナデの後縦ナデ調整	土師器
82	Ⅳ次Ⅶ区 73－P	Pit16内	カメ	口　径　25.8cm 現存高　5 cm	雲母粒1～2mm径の小石砂粒含む	良	内外面共に浅黄橙色	口縁、内面口縁部は横ナデに続いてヘラケズリ、外面は横ナデ調整	土師器
83	Ⅳ次Ⅴ区 63－O	Pit12内	浅鉢	口　径　28.2cm 現存高　3.1cm	1mm径の小石、雲母片、長石片 砂粒を含む	良好	内外面共に黄橙色	口縁、口縁上部の平坦面は横ナデ 内面横方向ヘラケズリ 外面は横ナデ調整	土師器
84	Ⅳ次Ⅴ区	長谷川表採	浅鉢	口　径　23.2cm 現存高　3.9cm	1～3mm径の小石を多量に、雲母片、長石片、砂粒を含む	良好	内外面共に橙色	口縁、口縁上部平坦面横ナデ 内面は口縁直下横方向のヘラケズリに続いて横ナデ調整、外面横ナデ	土師器
85	Ⅳ次Ⅶ区 73－P	Pit23内	カメ	口　径　30cm 現存高　8.3cm	緻密	良好　堅緻	内面－灰白色 外面－灰色	内面・口縁共に横ナデ調整であるが頸部に沈線を一本、外面頸部に横ナデの後櫛状工具により4段の波状文を施す、頸部外面下方付近は櫛状工具による横方向のナデ	須恵器
86	Ⅳ次Ⅶ区 73－P	Pit11内	カメ	口　径　21.6cm 頸部径　17.6cm 現存高　7.8cm	砂粒を少量含む 緻密	良好　堅緻	内面－暗緑灰色 外面－オリーブ灰色 口縁部－暗灰色	口縁、内外面共に横ナデ調整 肩部より内面同心円タタキ 外面はタタキ調整	須恵器
87	Ⅳ次Ⅶ区	Ⅲ層一括	カメ	口　径　19.2cm 現存高　4.5cm	砂粒を若干含む 密	良好　堅緻		口縁、内外面共に横ナデ調整	須恵器
88	Ⅳ次Ⅶ区 73－P	Pit11内	カメ	口　径　17.8cm 頸部径　14.8cm 現存高　5.9cm	砂粒を若干含む 緻密	良好　堅緻	内面－緑灰色 外面－暗オリーブ灰色	内外面共に横ナデ調整であるが、肩部付近は内面に同心円タタキ調整を行う	須恵器
89	Ⅳ次Ⅶ区 78－Q	Pit 7 内	カメ	口　径　21.6cm 頸部径　17.9cm 現存高　6.3cm	砂粒を多量に含む　緻密	良好　堅緻	内面－灰白色 外面－口縁～頸部にかけて灰色、胴部－灰白色	内外面共に口縁から頸部にかけて横ナデ調整であるが、肩部は内面同心円外面は格子目のタタキ調整を施す	須恵器
90	Ⅳ次Ⅶ区 74－R	Ⅲ層一括	カメ	口　径　21.2cm 現存高　3.7cm	砂粒を含む 密	良好　堅緻	内面－灰黄色 外面－暗灰色	内外面共に横ナデ調整	須恵器
91	Ⅳ次Ⅴ区	長谷川表採	カメ	頸部径　28.8cm 現存高　10cm	緻密	良好　堅緻	内面－オリーブ灰色 外面－灰色	口縁、内面は横ナデ調整、外面口縁直下にヘラ状工具により流水文を描き、頸部は横ナデ調整	須恵器
92	Ⅳ次Ⅶ区 73－P	Pit 4 内	カメ	頸部径　11.4cm 現存高　4.9cm	砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内面－灰色 外面－灰褐色	口縁は内外面共に横ナデ 頸部より外面はカキ目、内面は同心円タタキを施す	須恵器
93	Ⅳ次Ⅴ区	長谷川表採	カメ		砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内面－灰色 外面－オリーブ灰色	口縁部内面横ナデ、肩部に同心円タタキを施す、外面全体・内面頸部付近に釉がかかる、自然釉か？	須恵器
94	Ⅳ次Ⅶ区 76－P	Pit 2 内	カメ		砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内面－灰色 外面－灰オリーブ色	口縁部内外面共に横ナデ 肩部内面同心円タタキ 外面にはカキ目調整	須恵器
95	Ⅳ次Ⅶ区 70－O	Ⅲ層一括	カメか 壺？		緻密	良好　堅緻	内外面共に灰色	頸部内外面共に横ナデ、肩部内面同心円タタキ、外面は格子目タタキ調整、外面は褐色の釉が残っている	須恵器
96	Ⅳ次Ⅶ区 69－O	Pit 7 内	カメ		砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内外面共に灰色	胴部、内面同心円タタキ、外面にカキ目調整を施す	須恵器
97	Ⅳ次Ⅶ区	Ⅲ層一括	カメか 壺？		砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内面－灰オリーブ色 外面－暗黄灰色	胴部、内面同心円タタキ調整 外面はタタキ調整	須恵器
98	Ⅳ次Ⅶ区	Ⅲ層一括	カメか 壺？		砂粒を含む 密	良好　堅緻	内面－灰色 外面－暗緑灰色	胴部、内面同心円タタキ、 外面は格子目(？)タタキ調整	須恵器
99	Ⅳ次Ⅶ区	長谷川表採	カメか 壺？		砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内外面共に灰色	底部？、内面底部は横ナデ、胴部はカキ目、外面胴部は格子目タタキ	須恵器
100	Ⅳ次Ⅴ区	長谷川表採	カメか 壺？	現存高　10.6cm	緻密	良好　堅緻	内面－オリーブ灰色 外面－オリーブ黄色	底部付近、内面同心円タタキ 外面にはカキ目調整を施す	須恵器

第４表　一括遺物須恵器・土師器観察表

2．遺構と遺物

掘立柱建物遺構

ＳＢ－401（第41図）

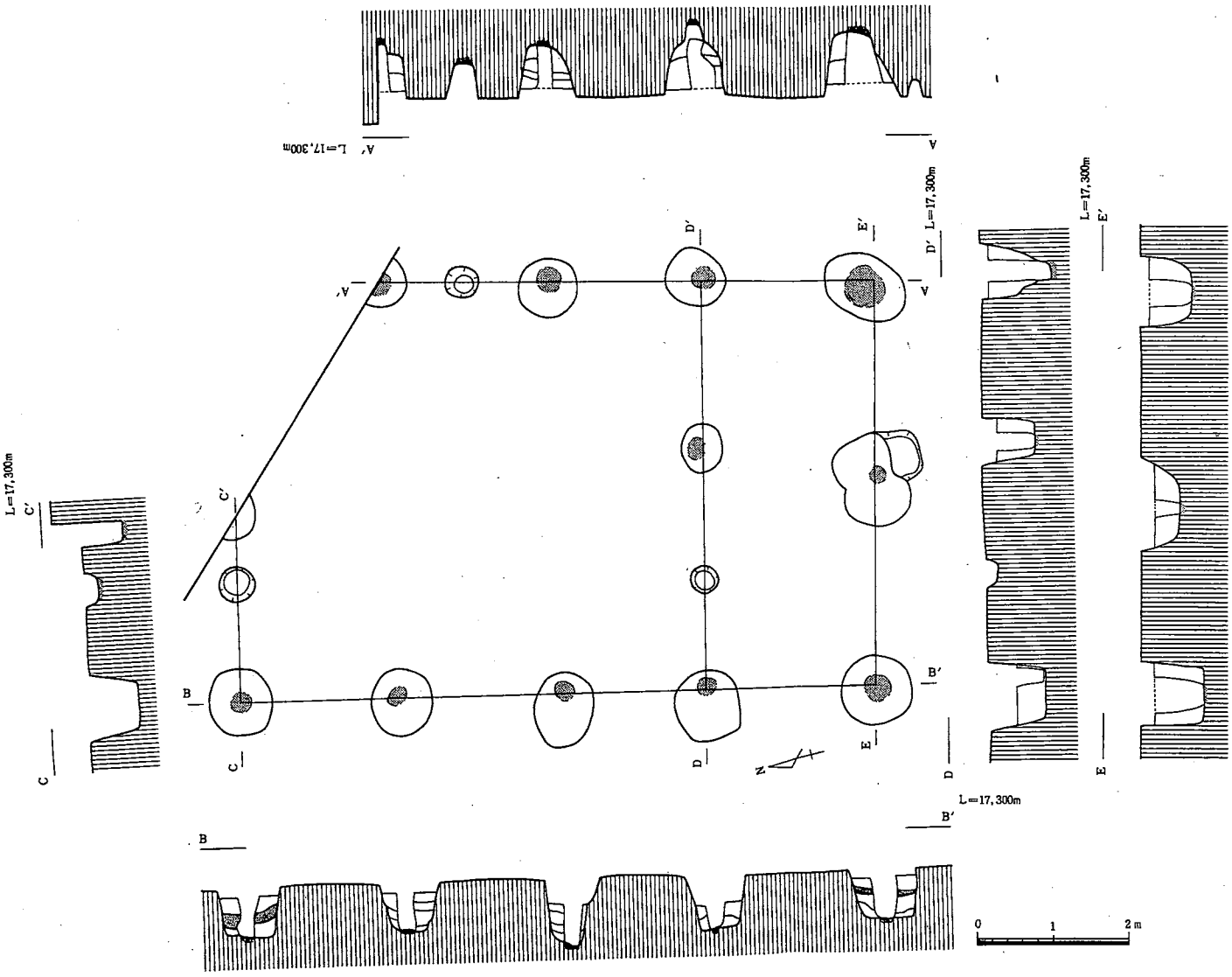
調査Ⅶ区81－Ｏ・Ｐグリッド内より検出された掘立柱建物遺構である。棟方向は、Ｎ－49°00′－Ｅの方向を取り、桁行３間で13尺(3.92m)、梁行２間で13尺（3.94cm）の規模で建てられている。身舎面積は、15.4㎡（4.7坪）で平面形はほぼ正方形を呈している。本建物には、庇は有していない。建物の構成柱穴は、12個を数え総柱建物となる。柱穴の最大平面規模は直径76cmを測り、他の柱穴も直径50～70cm前後と比較的大型で、柱穴内には直径25～35cm程の柱痕跡が全柱穴内より確認された。柱痕跡の埋土は、柱穴の埋土に比べると軟質で色調も若干の差異が認められる。柱穴を半割し土層の観察を行なうと、柱痕の周囲には、埋土が互層になっておりいわゆる版築状をなしていることが確認できる。柱痕は、柱穴底面の地山までのもの、柱穴底面の地山よりさらに１段掘り下げたもの、柱穴底面の地山より上で止まり柱穴底面まで土を入れているものが見られ、いずれも柱穴底面及び埋土は突き固めており硬化している。柱穴の深さは、それぞれ30～40cm程と柱穴の直径等と比べると比較的浅く感じられることより、後世に削平を受けている可能性が強い。柱穴内からは、数点であるが土師器、須恵器の高台付坏、甕等が出土していることより、掘立柱建物遺構は奈良時代末から平安時代初頭頃の時期に建てられたものと考えられる。

ＳＢ－402（第41図）

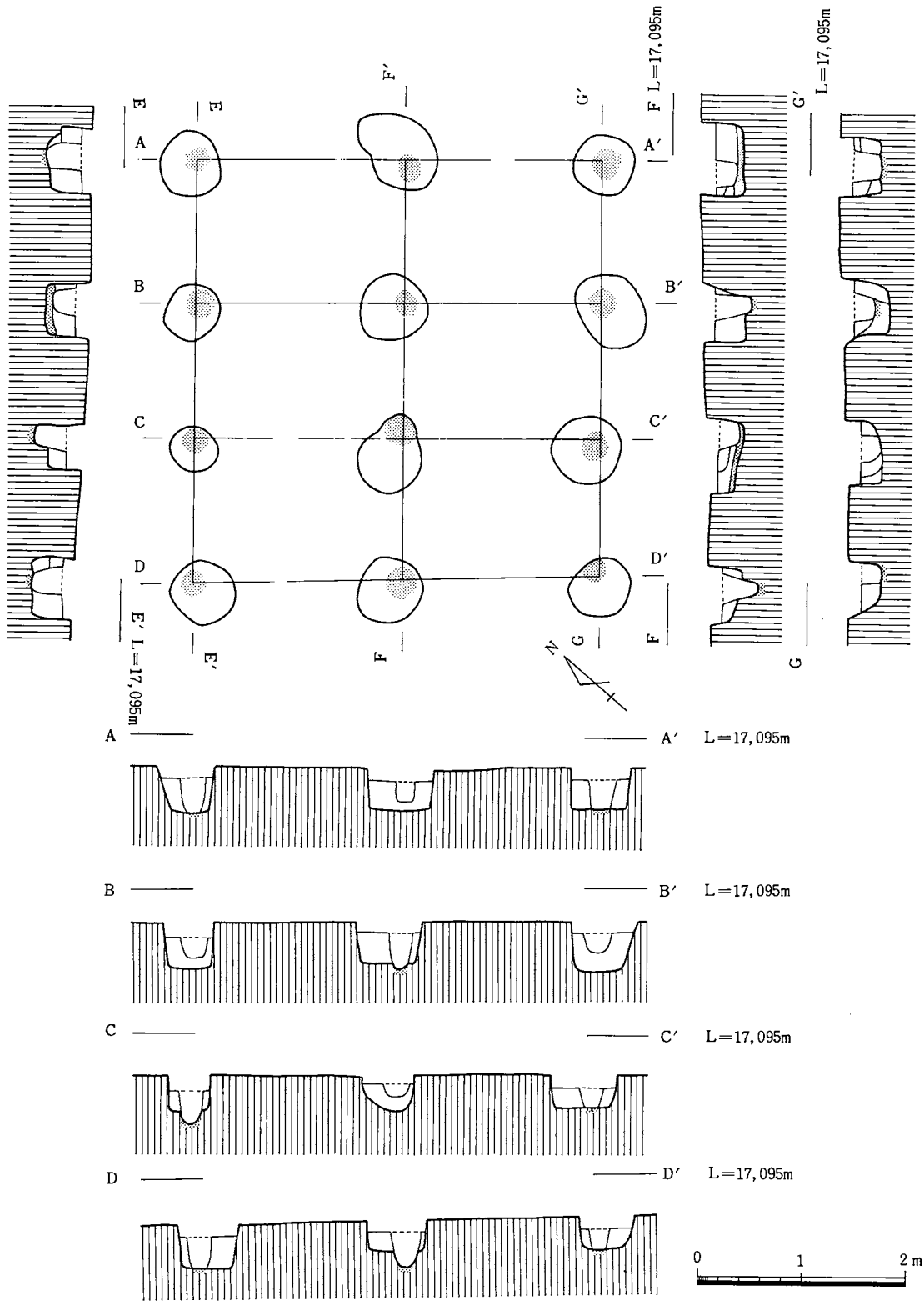
調査Ⅶ区80－Ｐ・Ｑグリッド内より検出された掘立柱建物遺構である。棟方向は、Ｎ－48°00′－Ｗの方向を取り建てられている。北側桁行の北西側角柱の柱穴をＳＸ－401（大型土壙遺構）により切られており、柱穴１個を欠いているが、桁行３間で推定13尺（約3.9m）、梁行２間で14.5尺（4.40m）の規模で建てられていると考えられる。身舎面積は、約17.2㎡（5.2坪）で庇は有していない。建物の一部を大型土壙によって切られているため、建物の構成柱穴は11個であるが、総柱建物となる。柱穴の最大平面規模は、直径72cmを測り、他の柱穴も直径50～70cm前後と1号掘立柱建物遺構の柱穴とほぼ同規模の柱穴である。柱穴内には、直径20～30cm程の柱痕跡が確認された。柱痕の埋土は柱穴の埋土に比べると軟質で、色調も若干の差異が認められる。柱穴を半割し土層の観察を行うと、柱痕の周囲には、埋土が互層になっておりいわゆる版築状をなしていることが確認できる。柱痕底面及び埋土は1号掘立柱建物遺構同様突き固めており硬化している。柱穴の深さもやはり１号掘立柱建物遺構同様30～50cm前後と比較的浅く感じられ、後世に削平を受けている可能性が強い。柱穴内からは、遺物の出土がない為、遺構の時期は不明であるが、1号掘立柱建物遺構と位置的に1.1m程しか離れておらず、また、棟方向も90度変えて作っていること、柱穴埋土が類似していることなどより、１号掘立柱建物遺構と同時期の建物で奈良時代末期から平安時代初頭頃と考えられる。

ＳＢ－403（第43図）

調査Ⅶ区79・80－Ｏグリッド内より検出された掘立柱建物遺構である。棟方向は、Ｎ－18°10′－Ｗの方向を取り建てられている。建物の一部が調査区外へ延びるため北東側角柱の柱穴を欠くが、桁行３間で推定20尺（約5.9m）、梁行２間で14尺（4.2m）の規模で建てられていると考えられる。身舎面積は、約24.9㎡（7.5坪）で庇は有していない。柱穴の最大平面規模は直径56cmを測り、他の柱穴も直径40～50cm前後と１号、２号掘立柱建物に比べると若干小さくなり、柱穴内には直径20～30cm程の柱痕跡が確認された。柱穴内埋土は互層になっており版築状をなしていることが確認された。柱痕底面及び埋土は、１号、２号掘立柱建物遺構同様突き固めており硬化している。柱穴の深さも40cm前後と比較的浅く、本遺構周辺も後世に削平を受け



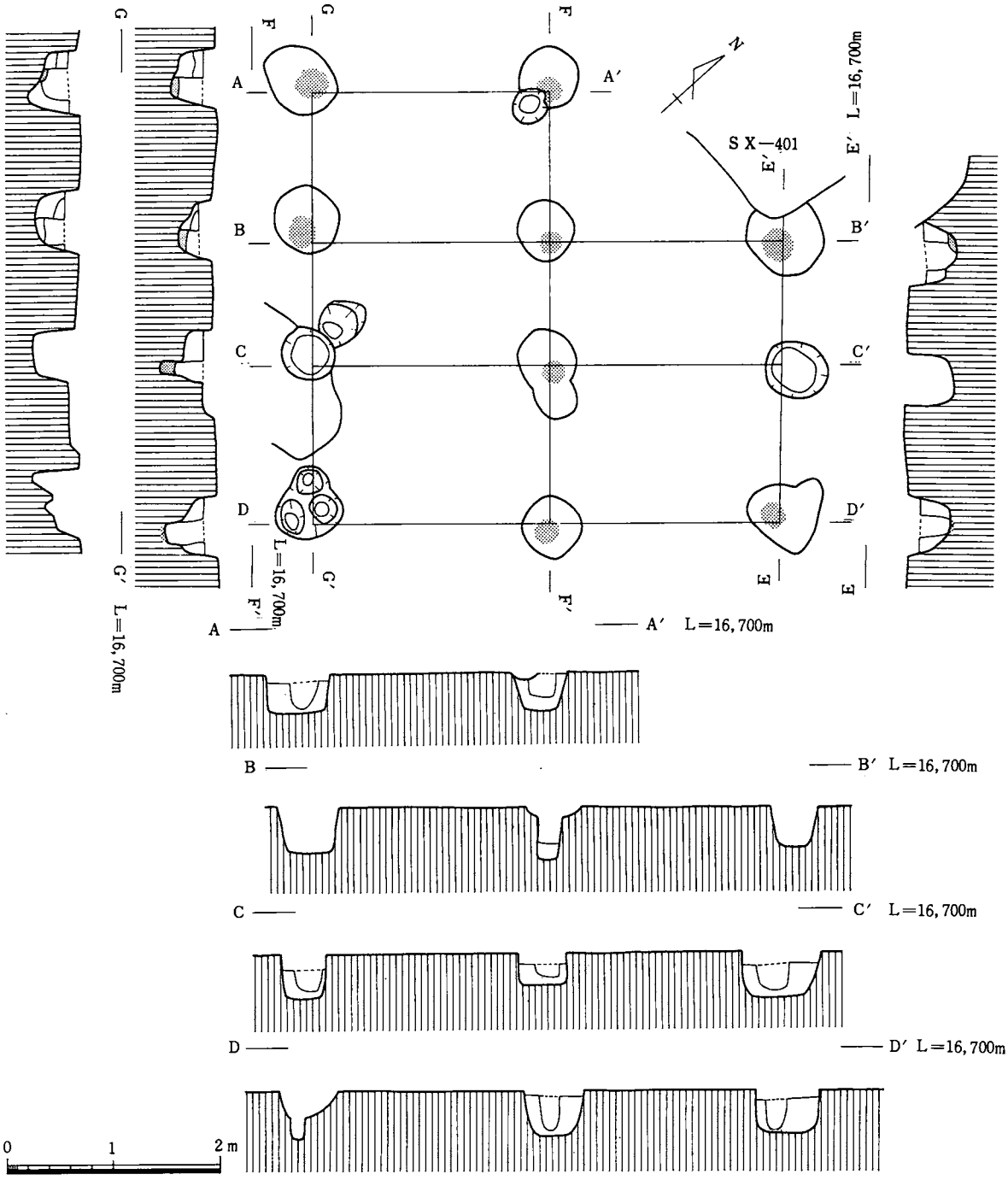
第44図　SB－404実測図



第41図　SB－401実測図

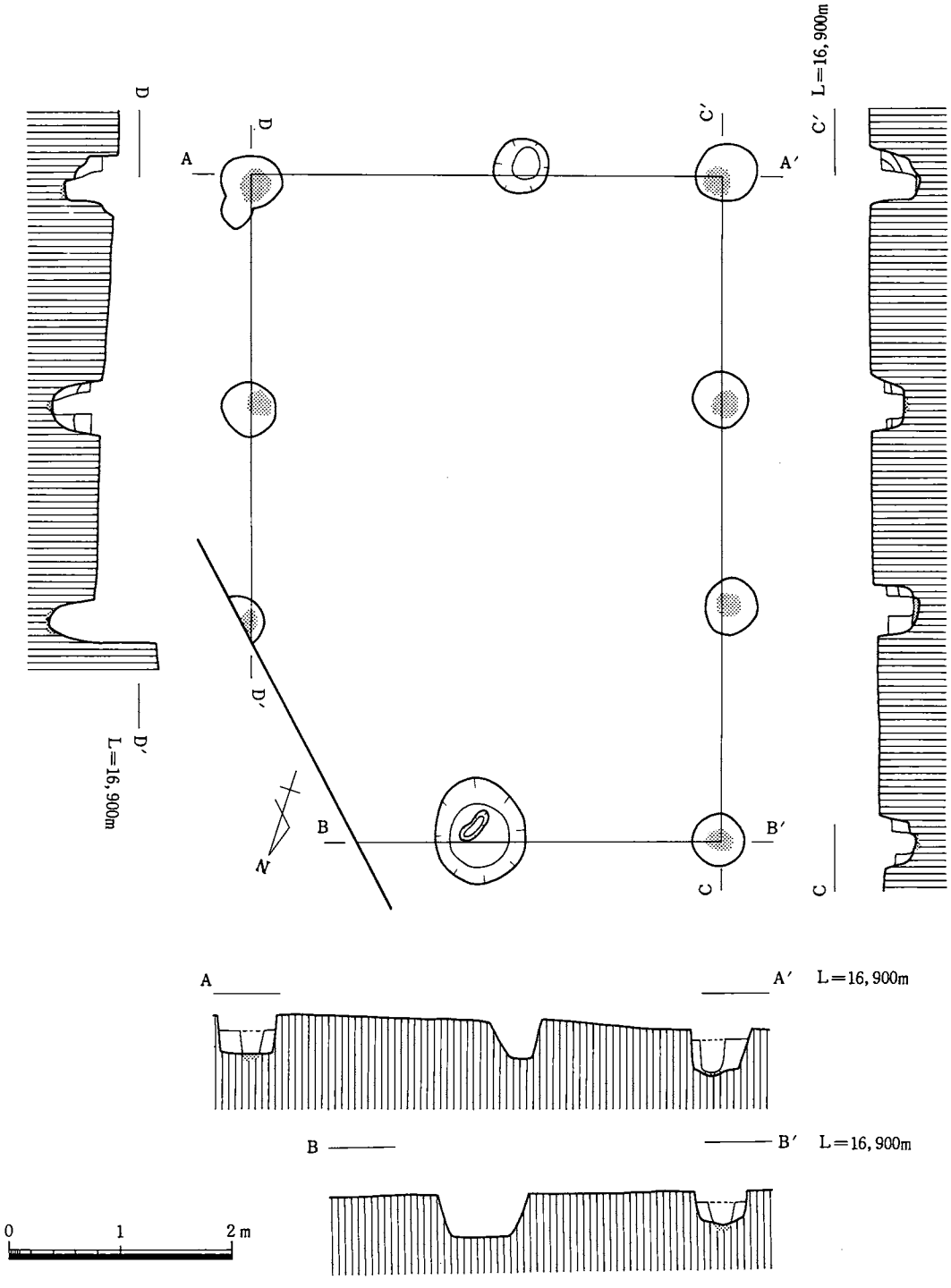
ている可能性が強い。柱穴内から遺物の出土がないため、遺構の時期は不明であるが、柱穴埋土が他の掘立柱建物遺構の埋土と類似していることより、他の掘立柱建物遺構と同時期もしくは若干前後する時期で、奈良時代末から平安時代初頭頃に押さえられるものと考えられる。

ＳＢ－404（第44図）



第42図　SB—402実測図

調査Ⅶ区78・79—O・Pグリッド内より検出された掘立柱建物遺構である。棟方向は、N—13°30′—Eの方向を取り建てられている。建物の北側桁行の北東角部分が調査区外へ延びるため角柱の柱穴1個を欠くが、桁行4間推定28尺（8.4m）、梁行2間17.5尺（5.3m）の規模で、当遺跡Ⅳ次調査で検出した掘立柱建物遺構中最大のものである。身舎面積は、44.3㎡（13.4坪）で庇は有していない。桁行柱穴の南側より1間目に間仕切り柱が見られる。建物の構成柱穴最大平面規模は直径93cmで深さ90cmを測り、他の柱穴も平面規模直径80～90cm、深さ80cm前後と大型の円形柱穴である。柱穴内より直径35cmほどの柱痕跡が間仕切り柱の1個を除く全柱穴内より確認された。柱穴を半割して観察すると、柱痕跡の周囲は埋土が互層になっており、また間には突き固めた硬い層が見られ、いわゆる版築状をなしている。柱痕跡底面は、すべて柱穴底面の地山



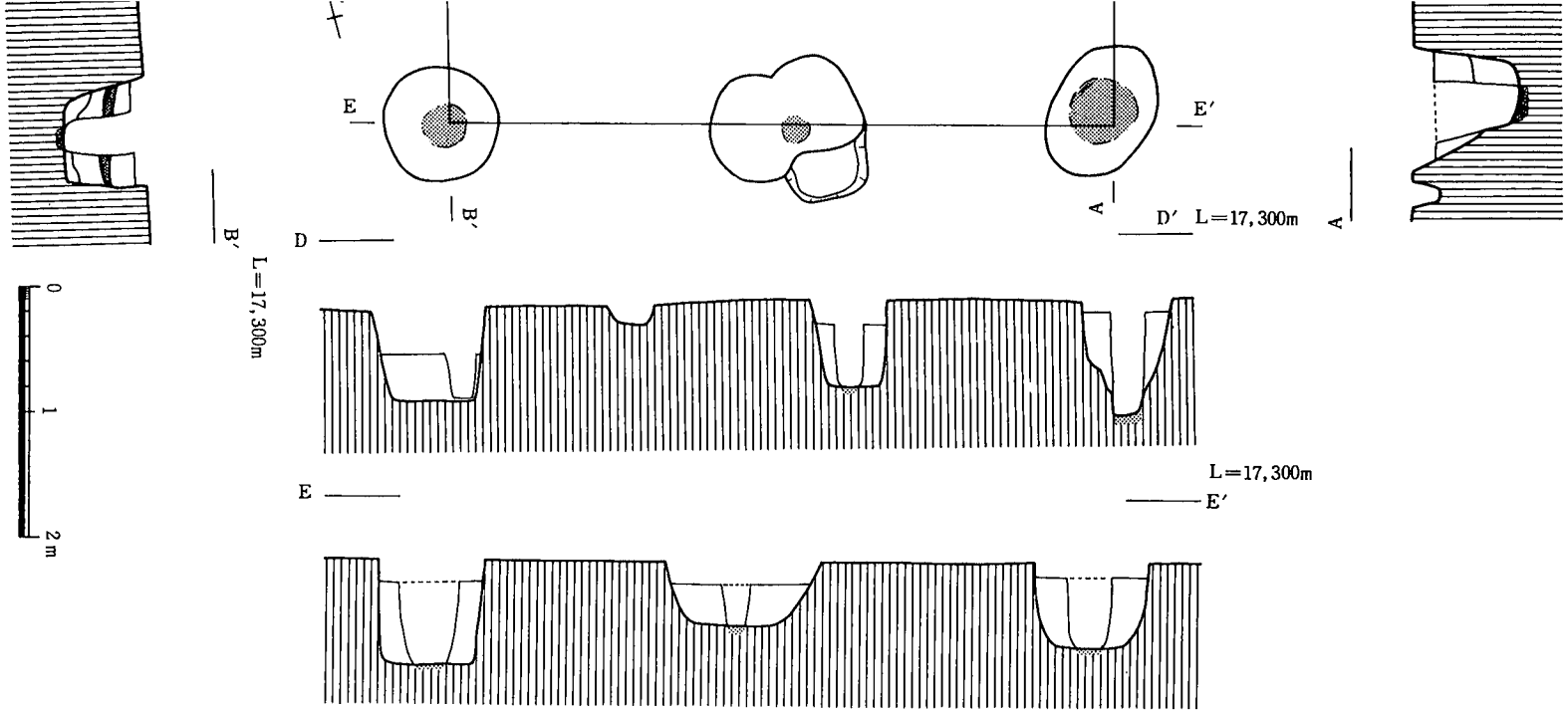
第43図　SB－403実測図

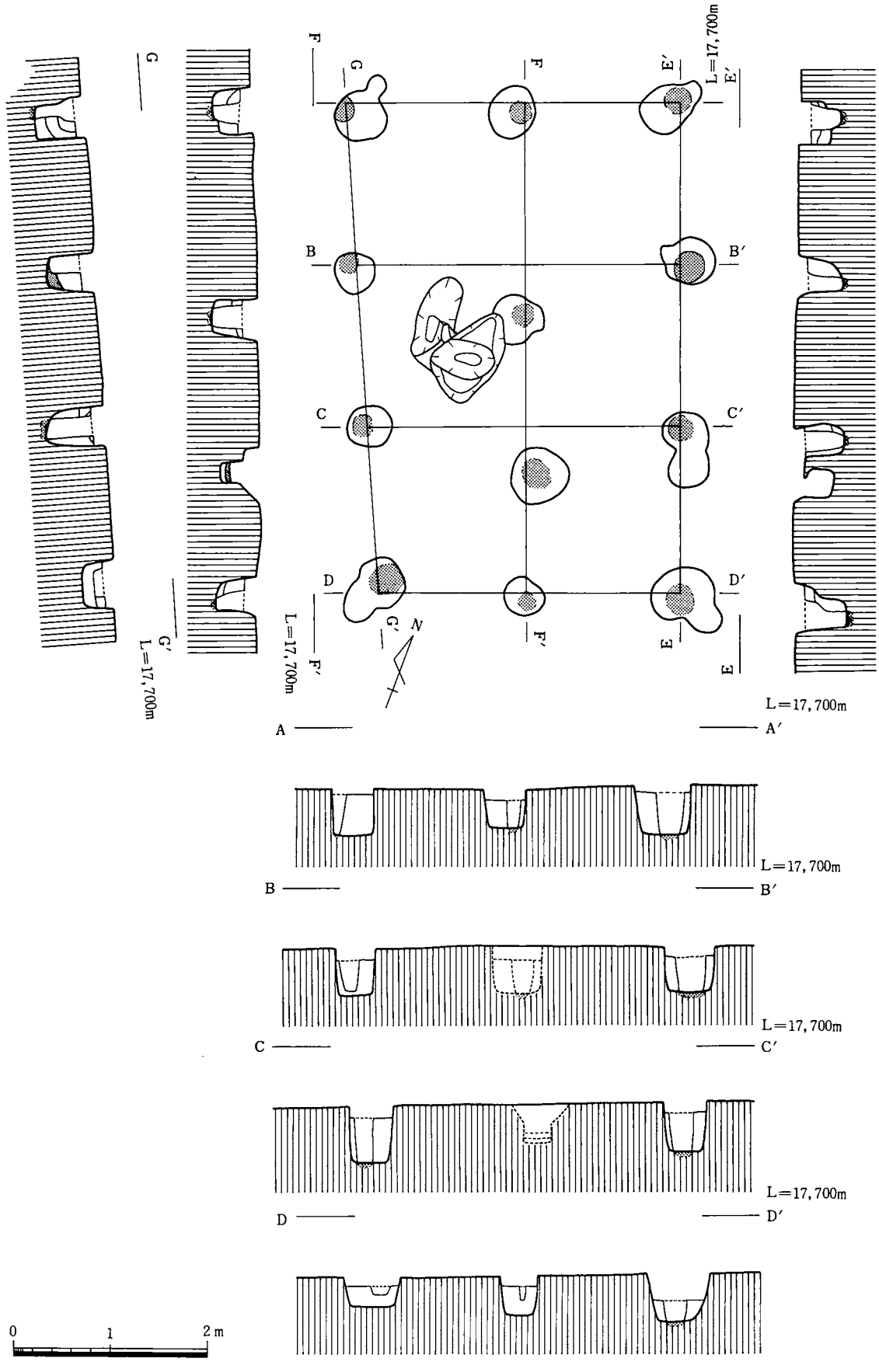
まで達しており、柱痕跡底面は固く硬化している。柱間寸法は、桁行の西側柱列で北より（7尺＋7.5尺＋6尺＋7.5尺）で、梁行は、南側柱列で西より（9尺＋8.5尺）である。遺物は、ピットNo.1内より須恵器坏が1点出土しているだけであるため、遺構の時期は断定できないが、遺物、埋土等より、他の掘立柱建物遺構と同時期もしくは若干前後する時期で、奈良時代末から平安時代初頭頃に押さえられるものと考えられる。

ＳＢ－405（第45図）

調査Ⅶ区74・75－Ｏグリッド内より検出された掘立柱建物遺構である。本建物は、ＳＸ－410(竪穴住居址)の東南側約1ｍ離れた場所に、棟方向は、Ｎ－27°00′－Ｗの方向を取り、桁行3間で17尺（5.03ｍ）、梁行

第44図　SB－404実測図


E
E′
B′
A
D′ L=17,300m
A
D
B′
L=17,300m
0
1
2m
L=17,300m
E
E′

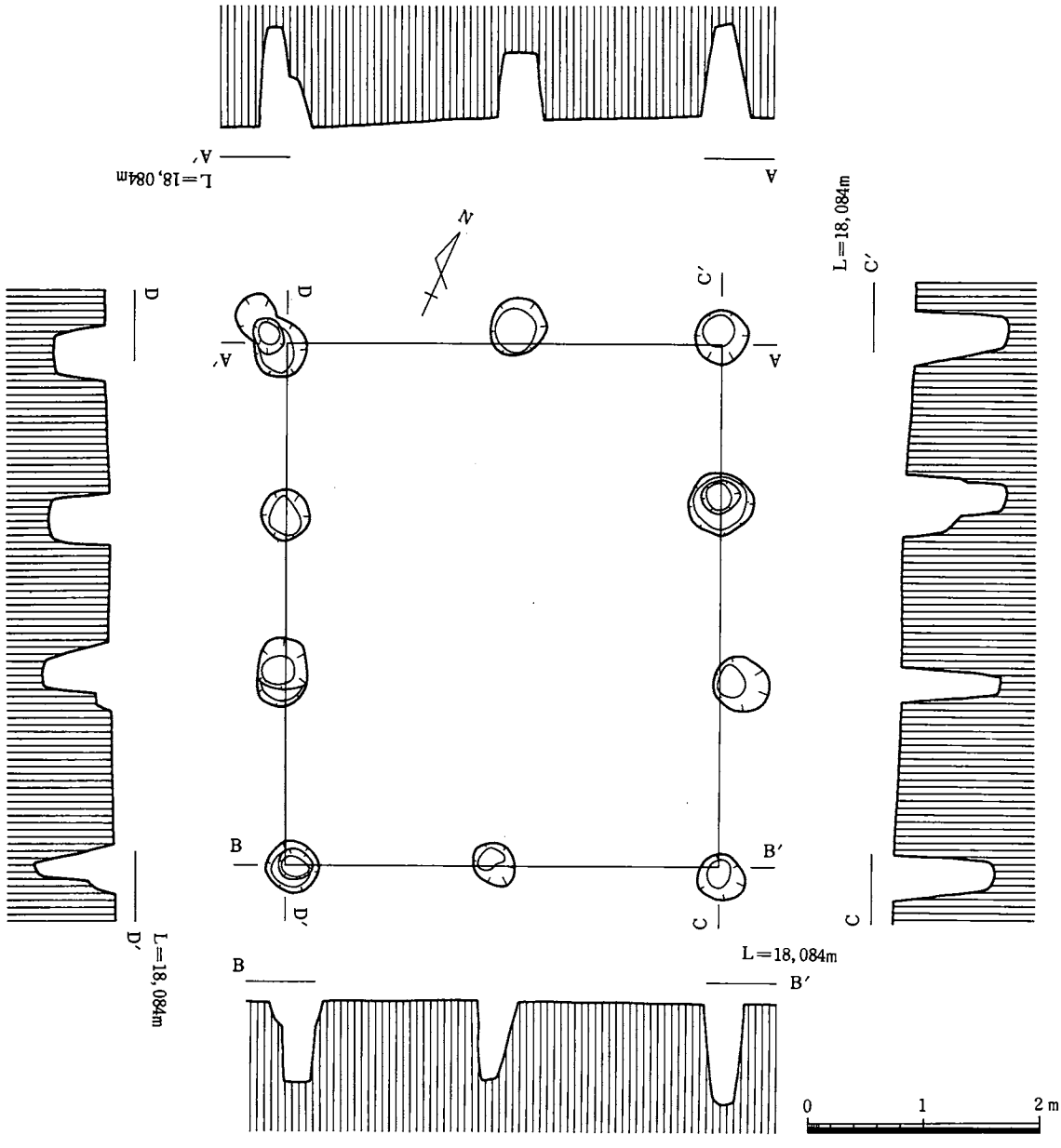


第45図　SB－405実測図

2間で11.5尺（3.46m）の規模で建てられている。柱間寸法は、桁行の西側柱列で北側より（6尺＋5尺＋6尺）で、梁行は、北妻柱列で西より（5尺＋6.5尺）である。身舎面積は、17.4㎡（5.2坪）で庇は、有していない。建物の構成柱穴は、12個を数え総柱建物となる。構成柱穴の最大平面規模は、直径60cmで深さ60cmを測り、他の柱穴も40～50cm前後と、比較的小型の柱穴である。柱穴内には、直径30cm前後の柱痕跡が認められ、柱痕跡の周囲は埋土が互層になっており、いわゆる版築状をなしていて、柱痕跡底面及び埋土は突き固めており硬化している。柱穴内からは、遺物の出土がないため遺構の時期は不明であるが、柱穴埋土および位置関係より、他の掘立柱建物と同時期または、若干前後する時期で、奈良時代末から平安時代初頭頃に押えられるものと考えられる。

ＳＢ－406（第46図）

調査Ⅶ区74－Ｏ・Ｐグリッド内より検出された掘立柱建物遺構である。本建物は、５号掘立柱建物遺構より南西方向へ２ｍ程離れて建てられており、７号掘立柱建物遺構と重複している。棟方向は、Ｎ－24°30′－Ｗ

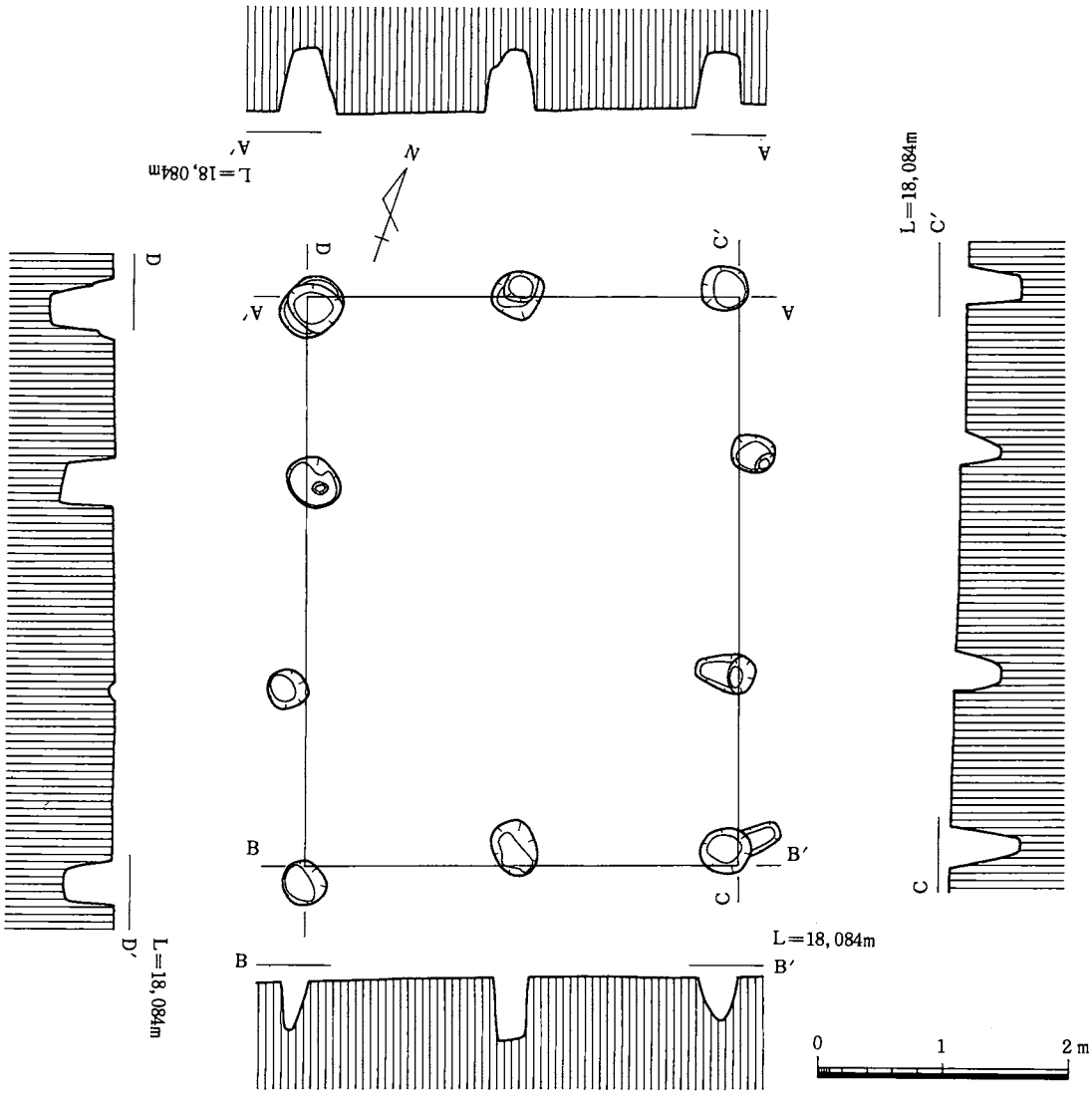


第46図　SB－406実測図

の方向を持ち、桁行３間で15尺（4.53m ）、梁行２間で13尺（3.85m ）の規模で、棟方向を５号掘立柱建物遺構とほぼ同じくして建てられている。建物の身舎面積は、17.4㎡（5.2坪）で庇は有していない。建物の構成柱穴は、10個を数え、構成柱穴の最大平面規模は直径56cm、深さ86cmを測る。柱穴内には、柱痕跡は確認できなかった。本建物の時期は、柱穴の埋土色などより、他の掘立柱建物遺構と同時期または若干前後する時期で、奈良時代末から平安時代初頭頃の時期に押えられるものと考えられる。本建物は７号掘立柱建物遺構と重複関係にあるが、柱穴と柱穴が互いに切り合っていないこと、柱穴内から遺物の出土がなく互いの遺構の正確な時期がつかめないこと等より、前後関係は不明である。

ＳＢ－407（第47図）

調査Ⅶ区74・75－Ｐグリッド内より検出した掘立柱建物遺構である。本建物は、６号掘立柱建物遺構と重複関係にあるが、前後関係及び時期差については不明である。ただ時期差についてはそう開かないものと考えられる。棟方向は、Ｎ－19°00′－Ｗの方向を取り、桁行３間で15.5尺（4.10m ）、梁行２間で12尺（3.56m）の規模で建てられている。建物の身舎面積は、16.7㎡（5.1坪）で庇は有していない。本建物は、６号掘立柱建物遺構と、身舎面積、柱間寸法などをほぼ同規模で建てられており、建物の建て替えを行った可能性が考えら

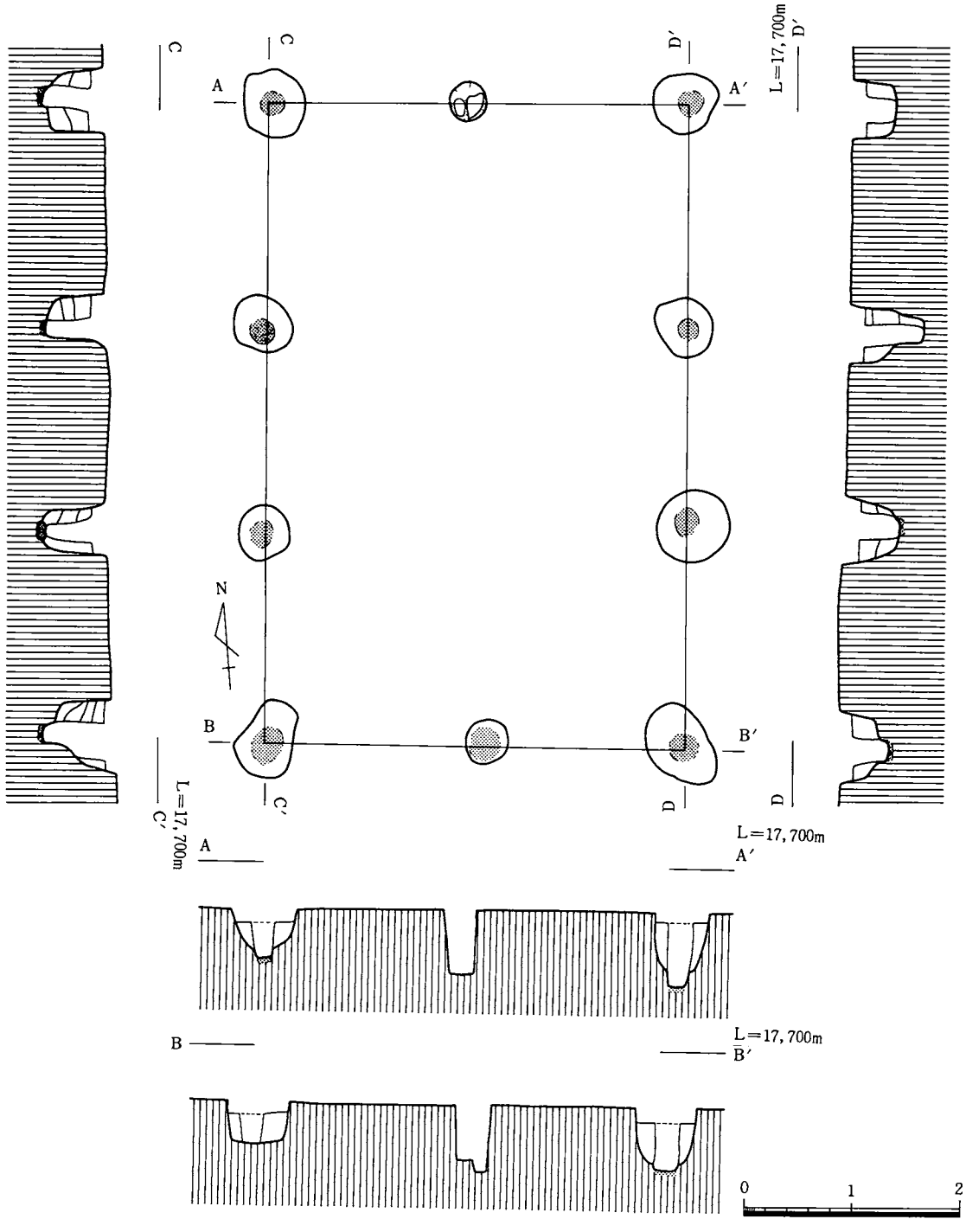


第47図　SB－407実測図

れる。建物の構成柱穴最大平面規模は、直径52cmで深さ55cmを測り、構成柱穴は10個数える。柱穴内には柱痕跡は確認出来なかった。柱穴内からの遺物の出土がないことより、遺構の正確な時期は不明であるが、柱穴の埋土色が同じであることより他の掘立柱建物遺構と同時期、または若干前後する時期で奈良時代末から平安時代初頭頃と考えられる。

ＳＢ－408（第48図）

調査Ⅶ区73・74－Ｏ・Ｐグリッド内より検出した掘立柱建物遺構である。本建物は、ＳＢ－405の南側約

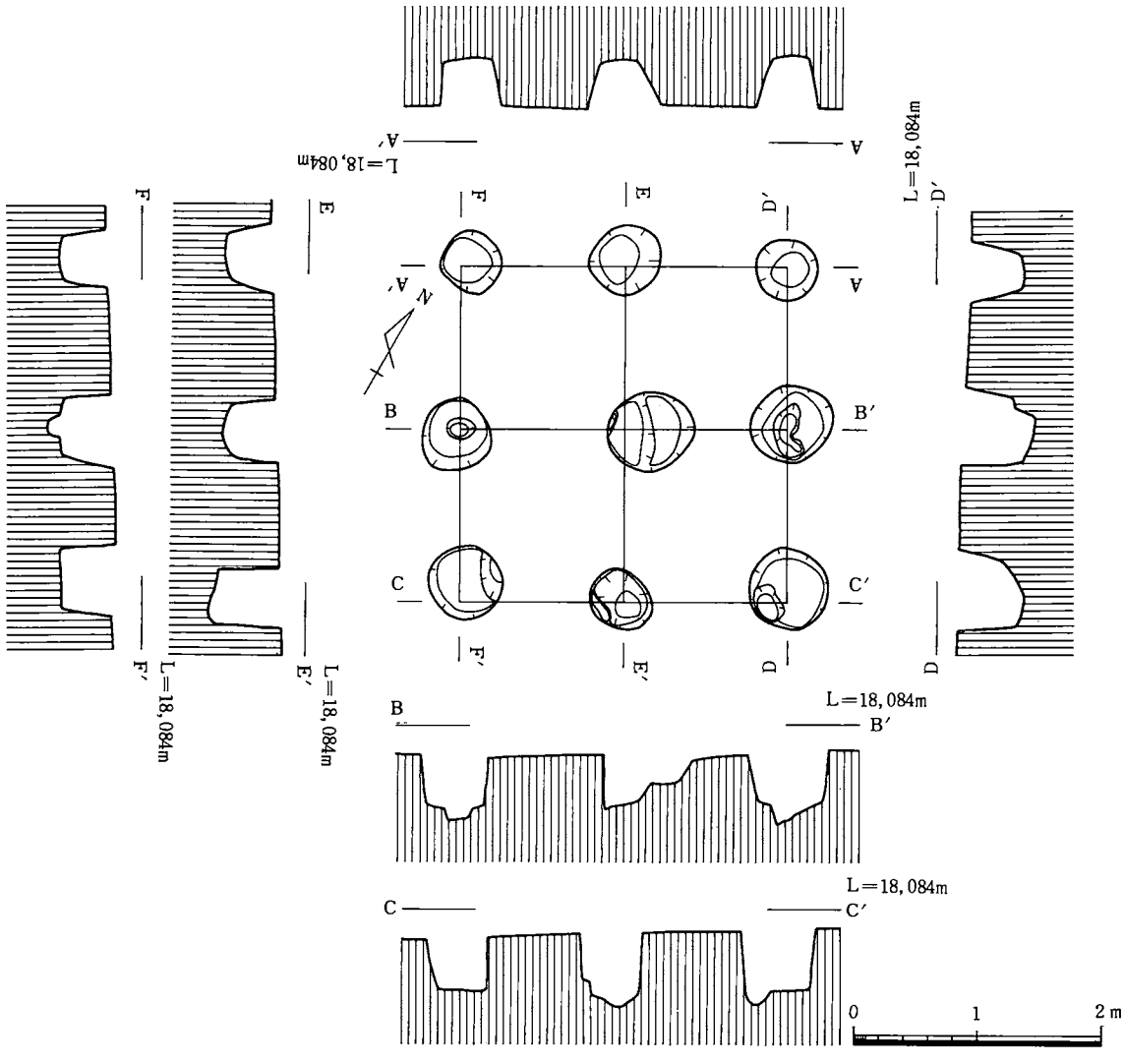


第48図　SB－408実測図

3m、6号掘立柱建物遺構の東側約2mの位置に棟方向は、N－5°30′－Eの方向を取り、桁行3間で19.5尺（5.87m）、梁行2間で13尺（3.90m）の規模で建てられている。建物の身舎面積は、22.9㎡（6.9坪）で庇は有していない。建物構成柱穴の最大平面規模は直径70cmで深さ65cmを測り、構成柱穴は10個を数える。本建物は、今回調査した掘立柱建物遺構の中で中型の建物の部類に属する。桁行柱穴からは、直径20～35cm程の柱痕跡が確認された。柱痕跡の周囲は、互層になっており、いわゆる版築状をなしていることが土層断面より観察された。柱痕跡が確認された柱穴のほとんどは、柱穴底面の地山まで柱痕跡が達しており底面は固く硬化している。柱穴内からは、遺物の出土が全くないため遺構の時期は不明であるが、他の掘立柱建物遺構と柱穴の埋土色が同じであることより、同時期もしくは若干前後する時期で、奈良時代末から平安時代初頭頃と考えられる。

SB－409（第49図）

調査Ⅶ区72－0グリッド内より検出した掘立柱建物遺構である。棟方向は、N－27°50′－Wの方向を取り、桁行2間で9尺（2.77m）、梁行同じく2間で8.5尺（2.55m）の規模で建てられ、平面形はほぼ正方形を呈している。建物の身舎面積は6.9㎡（2.1坪）で、庇は有していない。建物構成柱穴は9個を数え総柱建物で

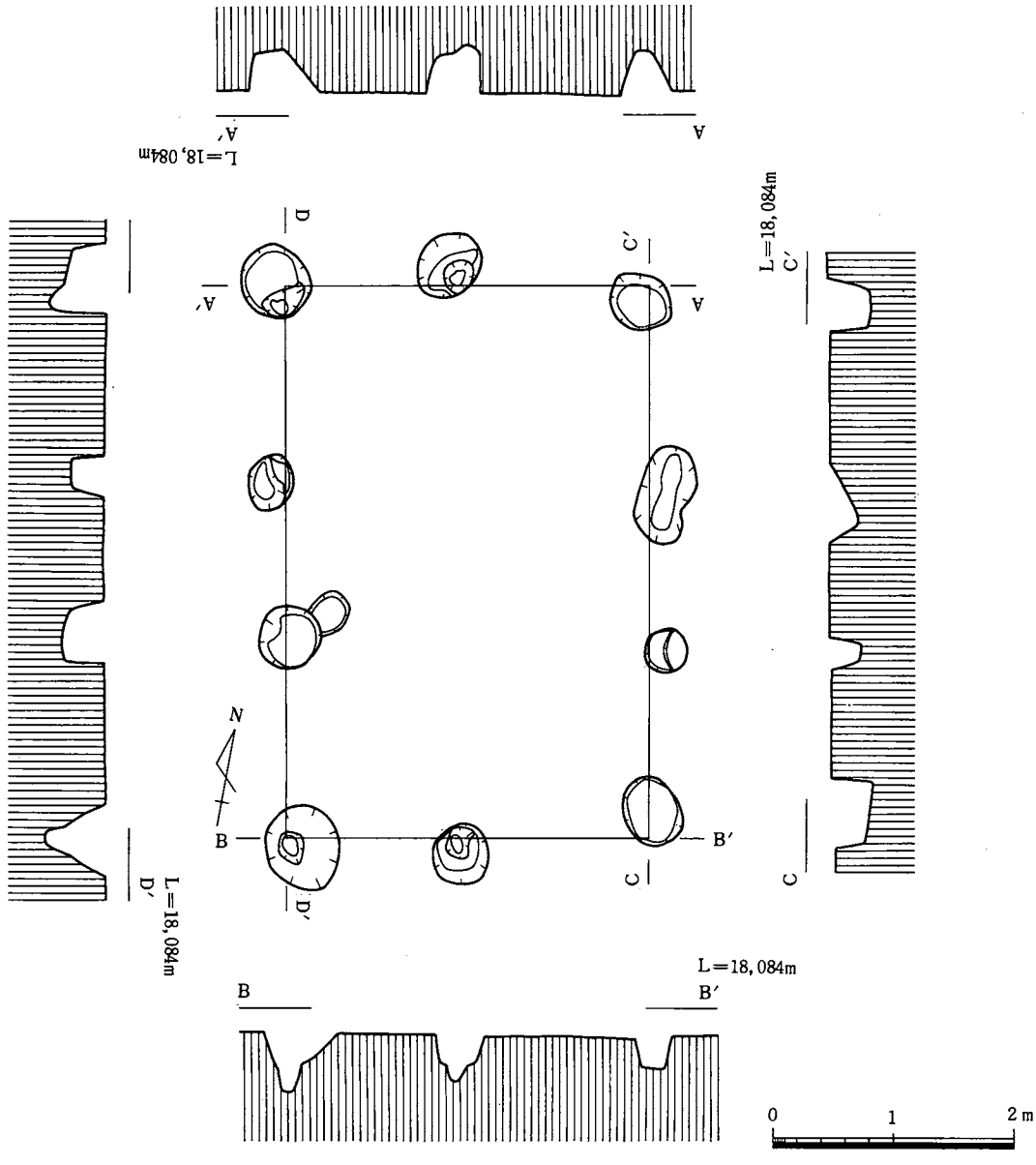


第49図　SB－409実測図

ある。建物構成柱穴最大平面規模は直径71cmを測り、検出した建物遺構の柱穴の中でもかなり大型の部類に属する。柱穴内からは、遺物の出土がないため、遺構の時期は不明であるが他の掘立柱建物遺構と柱穴の埋土色が同じであることより、同時期もしくは若干前後する時期で奈良時代末から平安時代初頭頃と考えられる。

ＳＢ－410（第50図）

調査Ⅶ区71・72－Ｐ・Ｑグリッド内より検出した掘立柱建物遺構である。棟方向は、Ｎ－78°30′－Ｅの方向を取り、桁行３間で15尺（4.48m）、梁行２間で10尺（3.07m）の規模で建てられている。建物の身舎面積は、13.7m²（4.2坪）で庇は有していない。建物構成柱穴は10個で、建物構成柱穴最大平面規模は、直径71cmを測り建物遺構群の柱穴の中でもかなり大型の部類に属する。柱穴内からは遺物の出土がないため、遺構の時期は不明であるが、他の掘立柱建物遺構と柱穴の土色が同じであることより同時期もしくは若干前後する時期で、奈良時代末から平安時代初頭頃と考えられる。



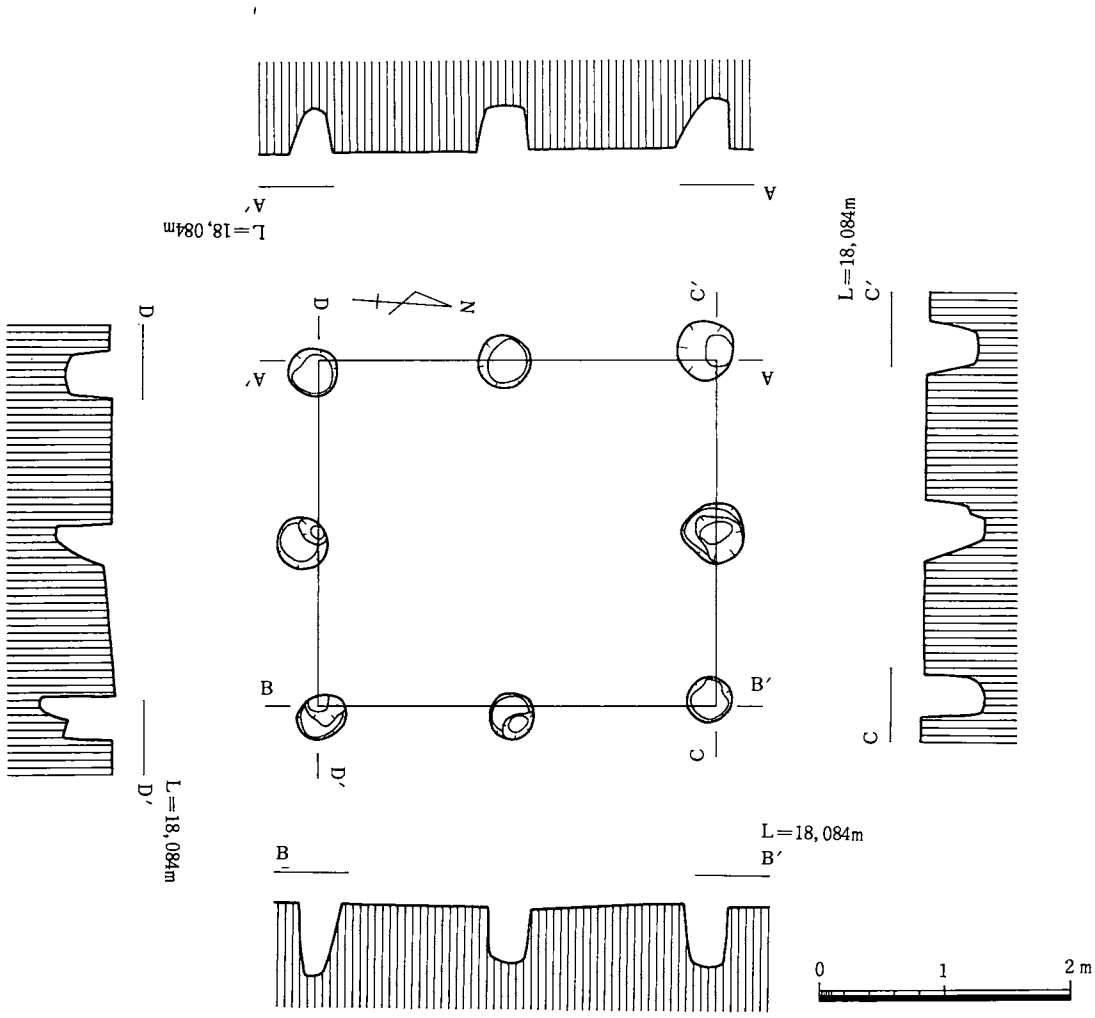
第50図　SB－410実測図

ＳＢ－411（第51図）

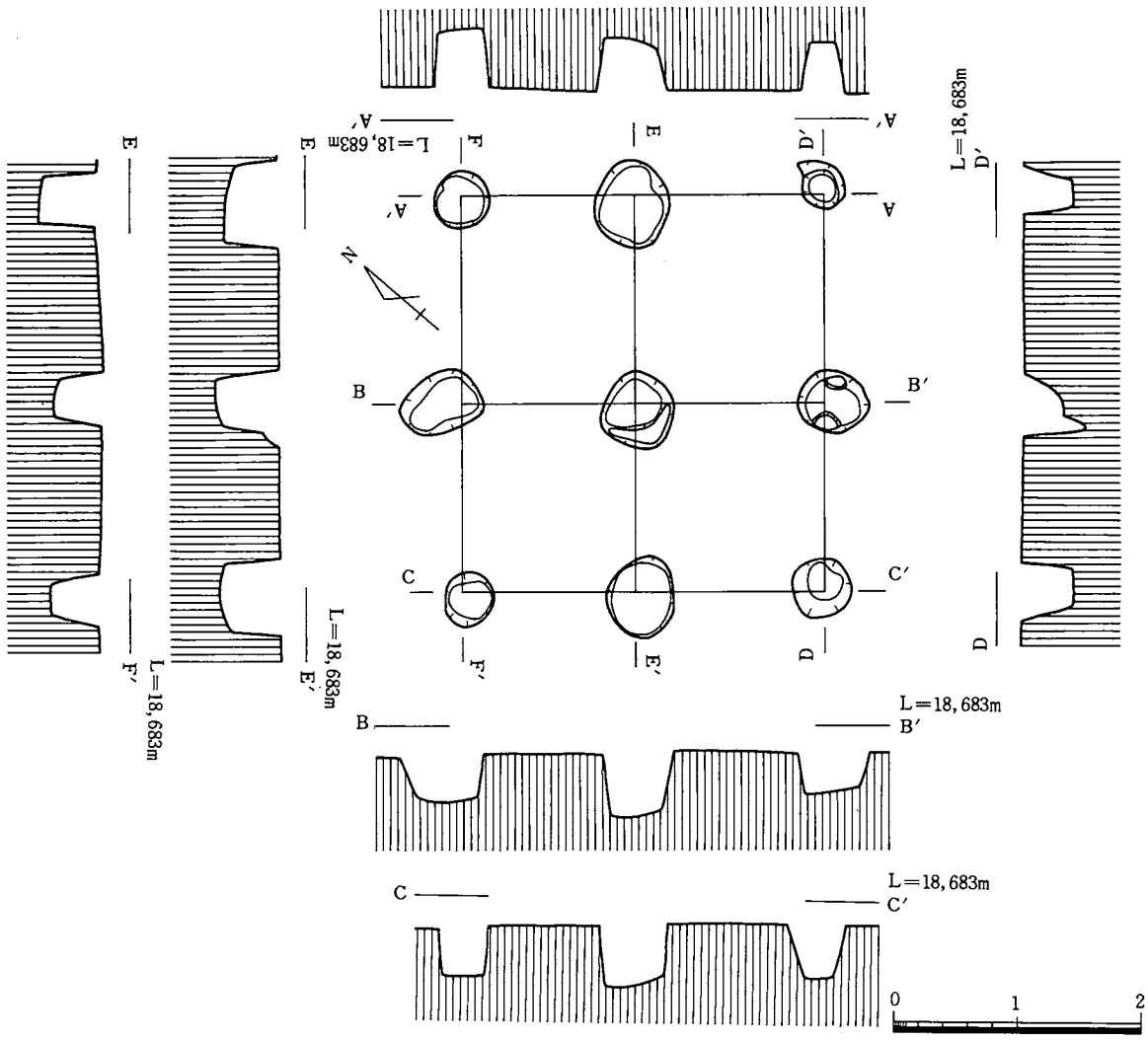
調査Ⅶ区71－Ｐ・Ｑグリッド内より検出した掘立柱建物遺構である。棟方向は、Ｎ－5°10′－Ｗの方向を取り、桁行２間で11尺（3.23m）、梁行２間で９尺（2.7m）の規模で建てられている。建物の身舎面積は8.7m²（2.6坪）で庇は有していない。本建物は、10号掘立柱建物遺構の南側で２m程離れた所に、棟方向を約90度違えて建てられており、同時期に建てられたものと考えられる。建物構成柱穴は８個で、建物構成柱穴最大平面規模は、直径47cmを測り、今回調査した掘立柱建物遺構群の柱穴の中では、一番小型である。柱穴内からは、２点であるが、須恵器製の坏、土師器製の壺口縁が出土している。建物の正確な時期は不明であるが、遺物の特徴および柱穴の埋土色より、他の掘立柱建物遺構と同時期もしくは若干前後する時期で、奈良時代末から平安時代初頭頃と考えられる。

ＳＢ－412（第52図）

調査Ⅶ区69・70－Ｐ・Ｑグリッド内より検出した掘立柱建物遺構である。棟方向は、Ｎ－65°00′－Ｅの方向を取り、桁行２間で10.5尺（3.2m）、梁行２間で10尺（2.97m）の規模で建てられている。建物の身舎面積は9.5m²（2.9坪）で庇は有していない。建物構成柱穴は９個を数え総柱建物である。構成柱穴最大平面規模は直径65cmを測る。柱穴内から遺物の出土がないため、遺構の正確な時期は不明であるが柱穴の埋土色が同じであることより、他の掘立柱建物遺構と同時期もしくは若干前後する時期で、奈良時代末から平安時代初頭頃と考えられる。



第51図　SB－411実測図



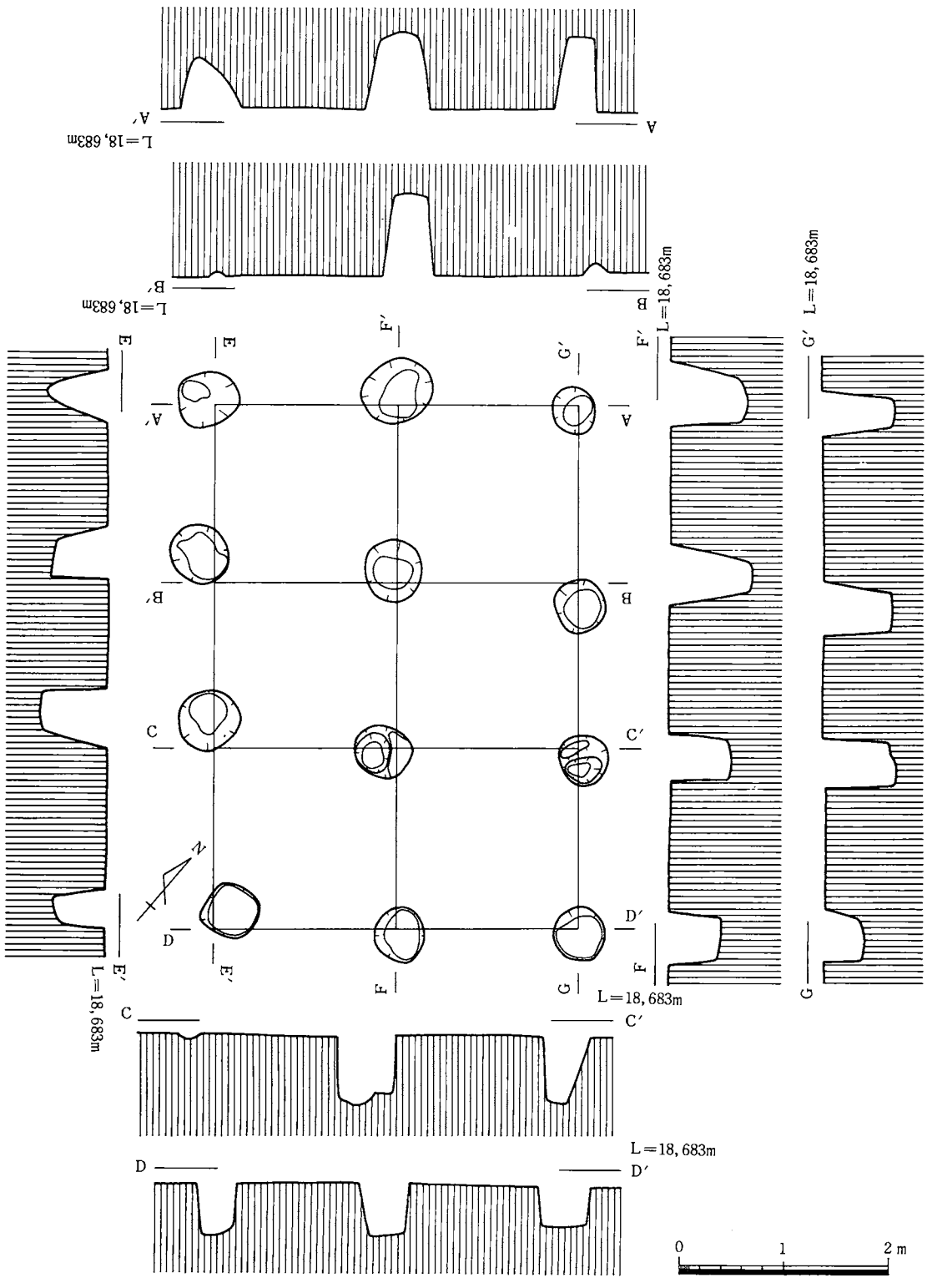
第52図　SB－412実測図

SB－413（第53図）

調査Ⅶ区69・70－O・Pグリッド内より検出した掘立柱建物遺構である。棟方向は、N－28°00′－Wの方向を取り、12号掘立柱建物遺構と棟方向を約90度違えて東へ6m程離れた地点に建てられている。建物の規模は、桁行3間で16.5尺（4.98m）、梁行2間で11.5尺（3.48m）、身舎面積は17.3m²（5.2坪）で庇は有していない。建物構成柱穴は12個を数え、この建物は総柱建物となる。構成柱穴最大平面規模は、直径57cmを測る当遺跡より検出の掘立柱建物の中では身舎面積は中型に属しているが、柱穴は小型である。柱穴内からは、須恵器製の蓋が出土している。遺物の特徴および柱穴の埋土色が同じであることより、他の掘立柱建物遺構と同時期もしくは若干前後する時期で、奈良時代末から平安時代初頭頃と考えられる。

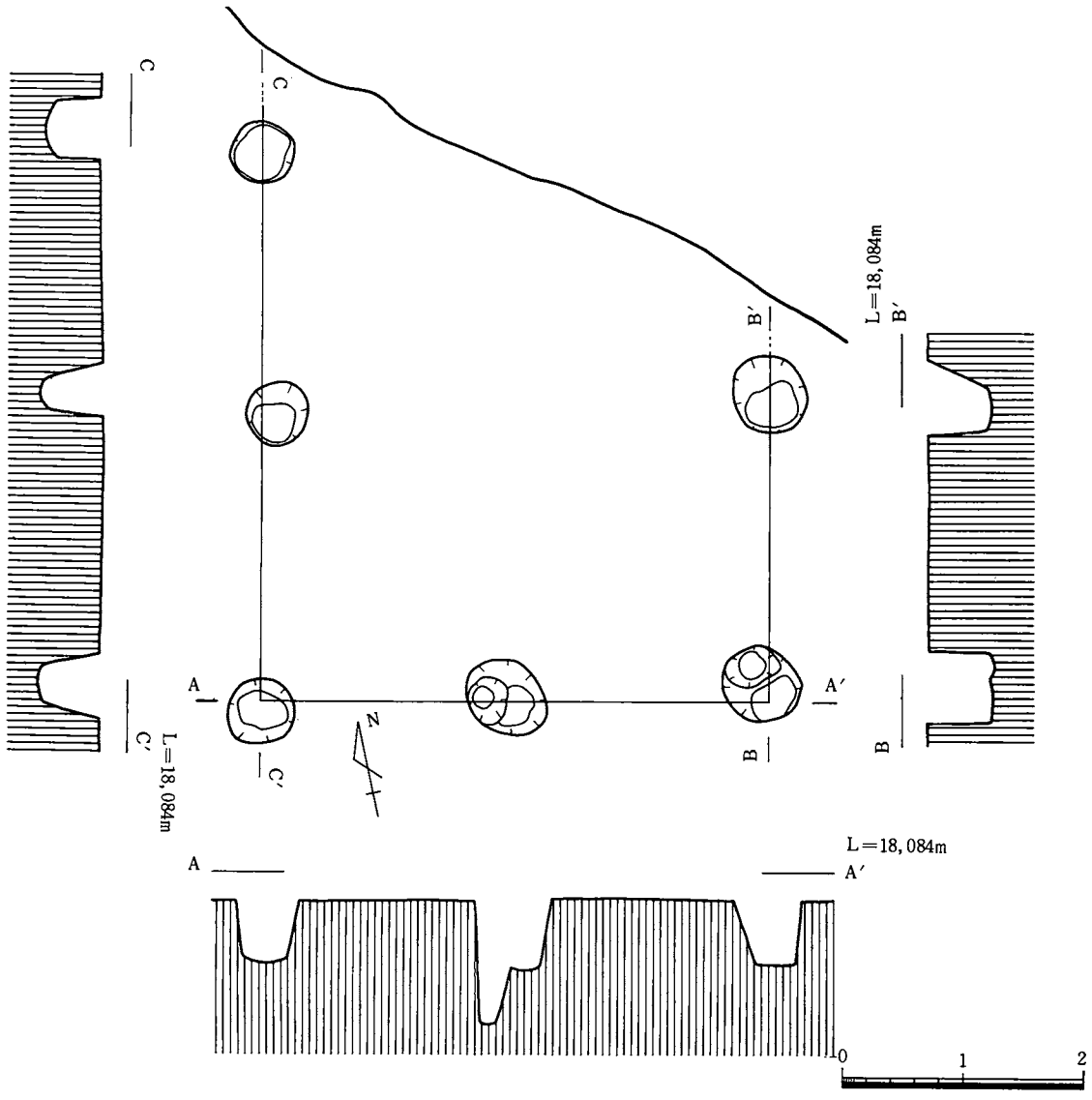
SB－414（第54図）

調査Ⅶ区70－Nグリッド内より検出した掘立柱建物遺構である。調査区内と調査区外の境付近の検出であるため全体の⅔程の検出で北側は調査区外へ延びている。棟方向は、N－10°20′－E の方向を取り、検出分だけで桁行2間＋αで15尺＋α（4.6m＋α）、梁行2間で14尺（4.17m）の規模で建てられている。身舎面積は19.2m²＋α（5.8坪＋α）で庇は有していない。規模は、建物の北側部分が調査区外へ延びているた



第53図　SB－413実測図

め正確には不明であるが、桁行３間、梁行２間の建物と考えられる。構成柱穴数は、検出分で６個、推定10個と考えられ、総柱建物ではない。構成柱穴最大平面規模は65cmを測り、柱穴内からは遺物の出土がないため、建物の正確な時期は不明であるが、４号掘立柱建物遺構・８号掘立柱建物遺構と棟方向がほぼ同じであることや柱穴の埋土色が同じであることより、４号掘立柱建物遺構・８号掘立柱建物遺構とほぼ同時期の一連の建物で、奈良時代末から平安時代初頭頃と考えられる。



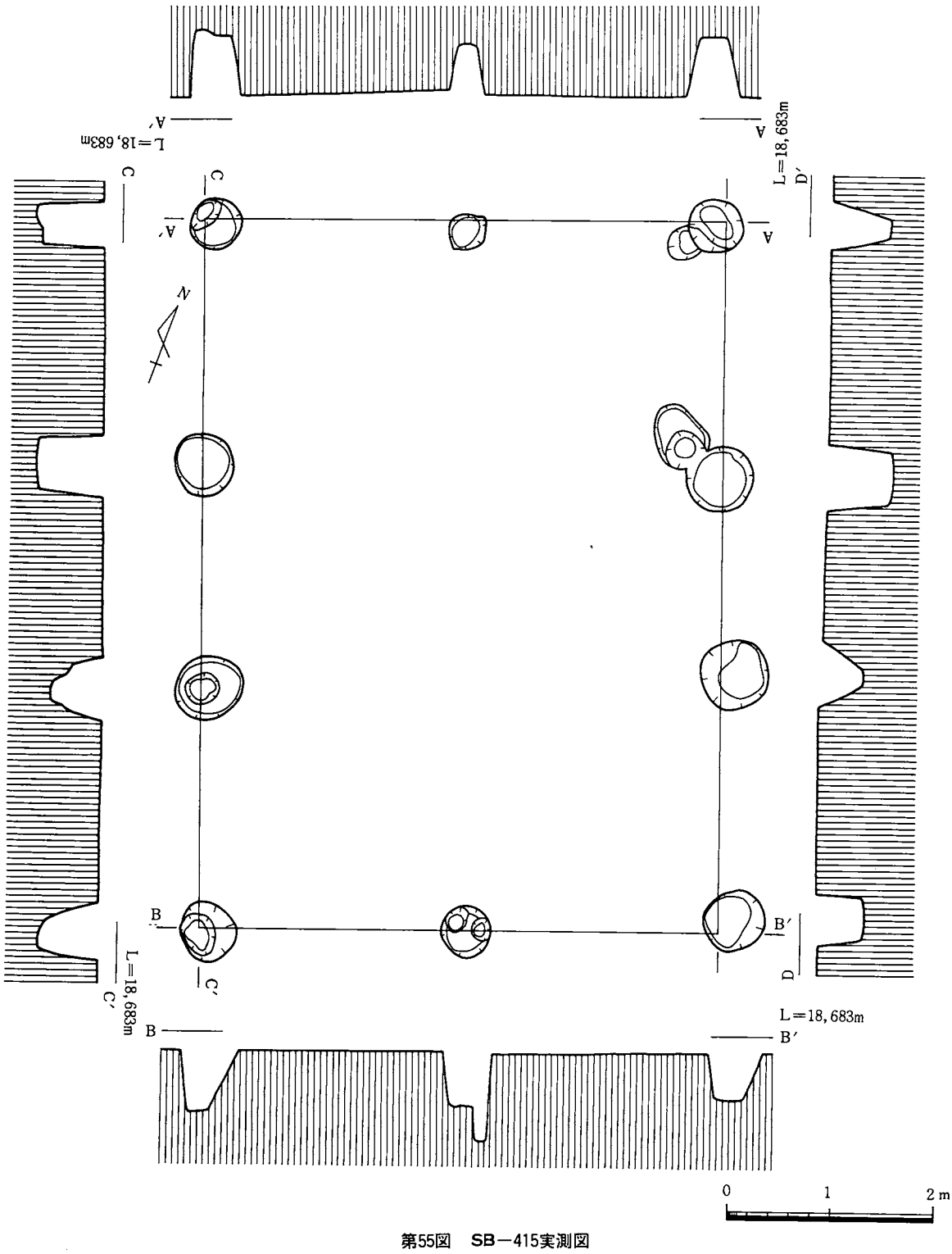
第54図　SB－414実測図

ＳＢ－415（第55図）

調査Ⅶ区69・70－Ｎ・Ｏグリッド内より検出した掘立柱建物遺構である。棟方向は、Ｎ－20°40′－Ｗの方向を取り、桁行３間で23尺（6.89m）、梁行２間で17尺（5.05m）の規模で建てられている。身舎面積は34.8㎡（10.5坪）で庇は有していない。本建物の棟方向は、13号掘立柱建物遺構、３号掘立柱建物遺構、７号掘立柱建物遺構、９号掘立柱建物遺構の各々がほぼ同じくしており、建物規模は、当遺跡検出の建物の中で最大規模の部類にはいる。構成柱穴数は10個を数え、構成柱穴最大平面規模は直径66cmを測る。本建物は、大型規模の建物である割には、柱穴は小型である。柱穴内からは、１点であるが土師器製の坏高台部分が出土しており、また、柱穴の埋土色および棟方向などより、13号掘立柱建物遺構、３号掘立柱建物遺構、５号掘立柱建物遺構、７号掘立柱建物遺構、９号掘立柱建物遺構と同時期に建てられた一連の掘立柱建物遺構と考えられ、建物の時期は奈良時代末から平安時代初頭頃と考えられる。

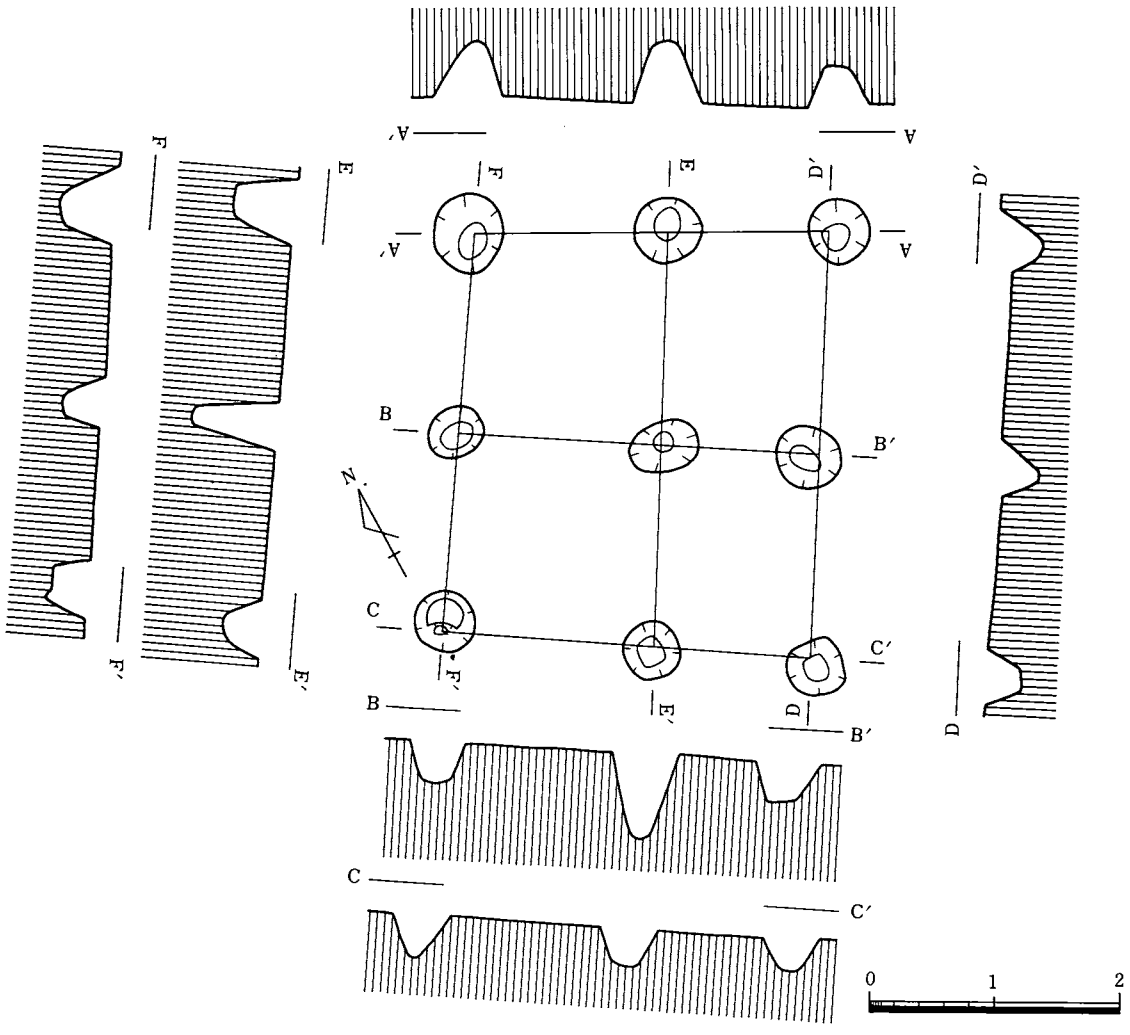
ＳＢ－416（第56図）

調査Ⅴ区長谷川地区63－Ｑグリッド内より検出した掘立柱建物遺構である。棟方向は、Ｎ－41°15′－Ｅの方向を取り、桁行２間で11尺（3.21m）、梁行２間で9.5尺（2.84m）の規模で建てられている。身舎面積は、



第55図　SB－415実測図

9.1㎡（2.6坪）で庇は有していない。構成柱穴は9個を数え総柱建物である。構成柱穴最大平面規模は直径64cmを測り、柱穴内には柱痕跡等は確認出来なかった。柱穴内からは、遺物の出土が全くないことより建物の正確な時期は不明であるが、柱穴の埋土色がⅦ区で検出した掘立建物遺構群と同じであること、1号掘立柱建物遺構と棟方向をほぼ同じくしていることより、1号掘立柱建物遺構・2号掘立柱建物遺構と同時期期に建てられた建物と考えられ、建物の時期は奈良時代末から平安時代初頭頃と考えられる。



第56図　SB－416実測図

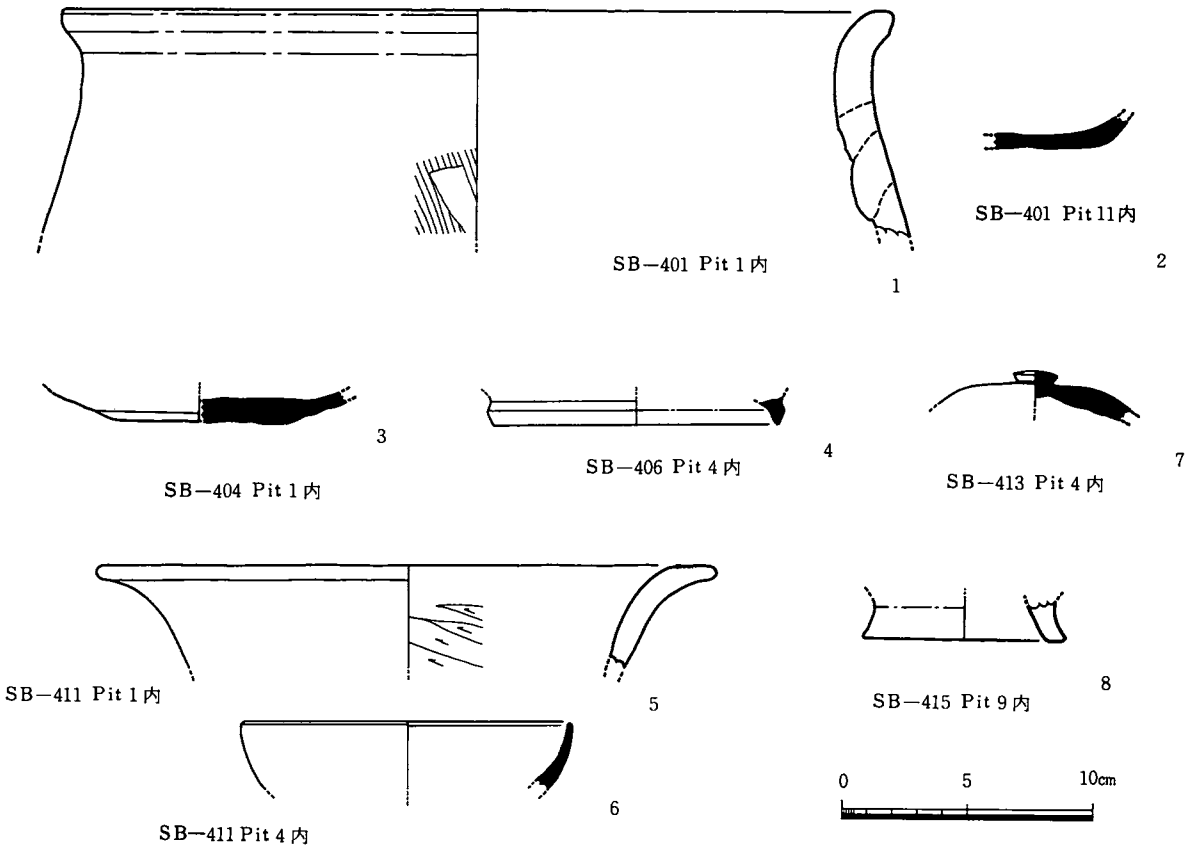
出土遺物（第57図）

1・2　ＳＢ－401柱穴内からの出土遺物である。1は、ピット１内から出土の土師器甕片で法量は、口径33.4cm、現存高９cmを測る。胴部から頸部にかけてゆるく内傾し口縁部は外反する。口縁端部は丸くなっている。器面調整は、外面をハケ目調整の後にナデを行ない、内面はナデ調整を行なっている。内面口縁部には、若干ススの付着が認められる。2は、ピット11内から出土の須恵器で坏の底部片と考えられる。底面は回転ヘラ切り離し痕が明瞭に残り、又、底部と体部の境には明確な稜は認められず、高台は有していない。胎土は緻密で焼成は良好である。

3　ＳＢ404、ピット１内から出土の須恵器坏底部片である。胎土は緻密で砂粒を含み、焼成は良好である。

4　ＳＢ－406、ピット４内から出土の須恵器坏高台部片である。高台部は坏身との継ぎ目よりはがれており断面はあたかも鳥の嘴状を呈している。内外面共にヨコナデ調整を行なっており、胎土は緻密で砂粒を含み、焼成は良好である。底部径は11.6cmを測る。

5　ＳＢ－411・ピット１内から出土の土師器片で頸部から口縁部にかけて外反する、甕の口縁部片である。



第57図　掘立柱建物跡柱穴内出土遺物実測図

法量は、口径25cm現存高 4.1cmを測る。調整は外面をナデ、内面へラケズリを行なっており、胎土に黒雲母、砂粒を多量に含み焼成は良好である。

6　同じくＳＢ—411、ピット４内から出土の須恵器で、口縁端部が若干内傾する。坏の口縁部片である。器壁は薄く、口径13.2cm、現存高 3.2cmを測る。器面調整は、内外面共にヨコナデで、胎土は緻密で、砂粒を少々含み焼成は良好である。

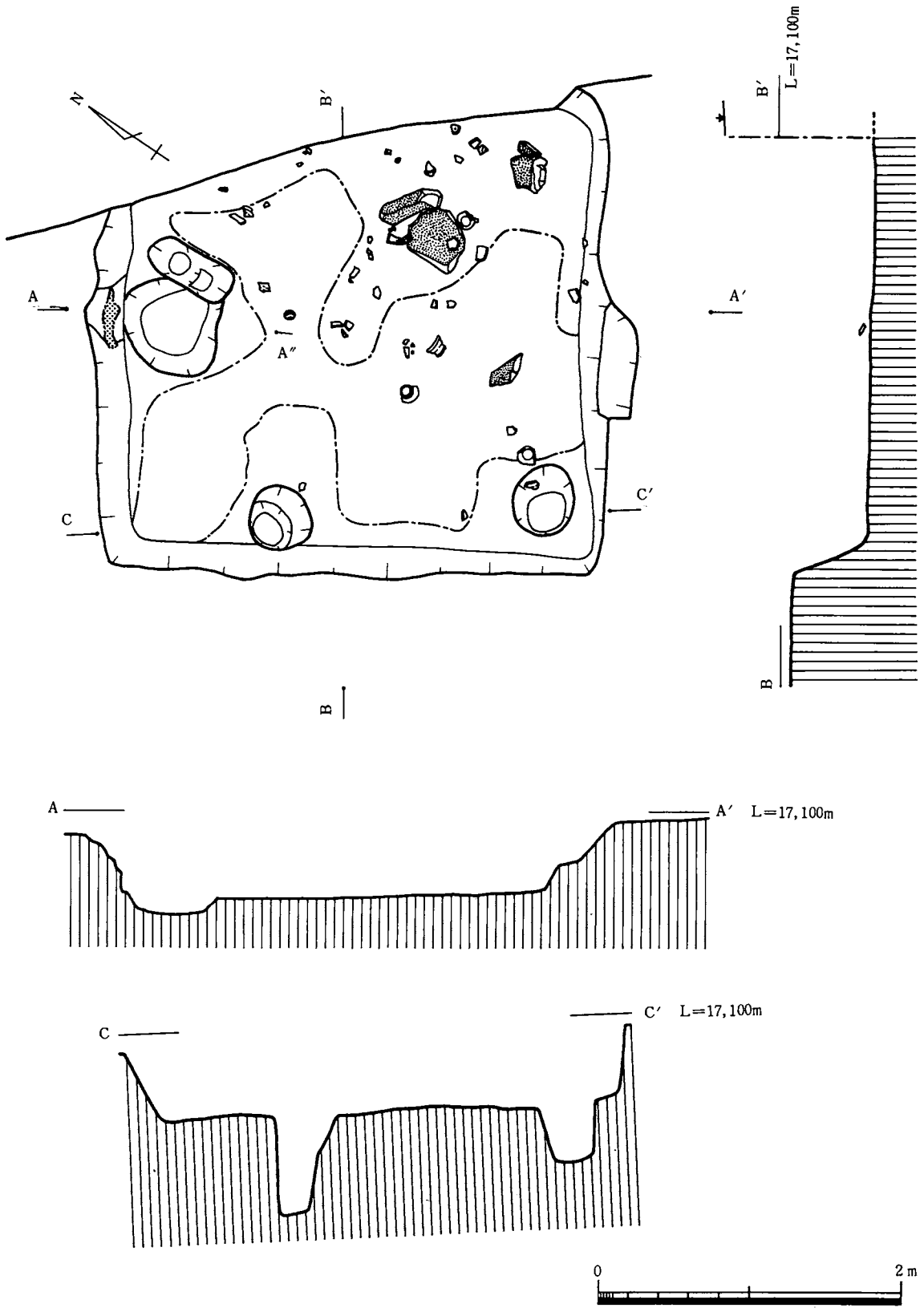
7　ＳＢ—413、ピット４内出土の須恵器片で、天井にボタン状の鈕を有する蓋である。内外面共にナデ調整を行なっており、胎土は緻密で砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

8　ＳＢ—415、ピット９内出土の土師器片で坏の高台部片と考えられる。底径は８cmを測る。胎土は砂粒を含み、焼成は良である。

竪穴住居址

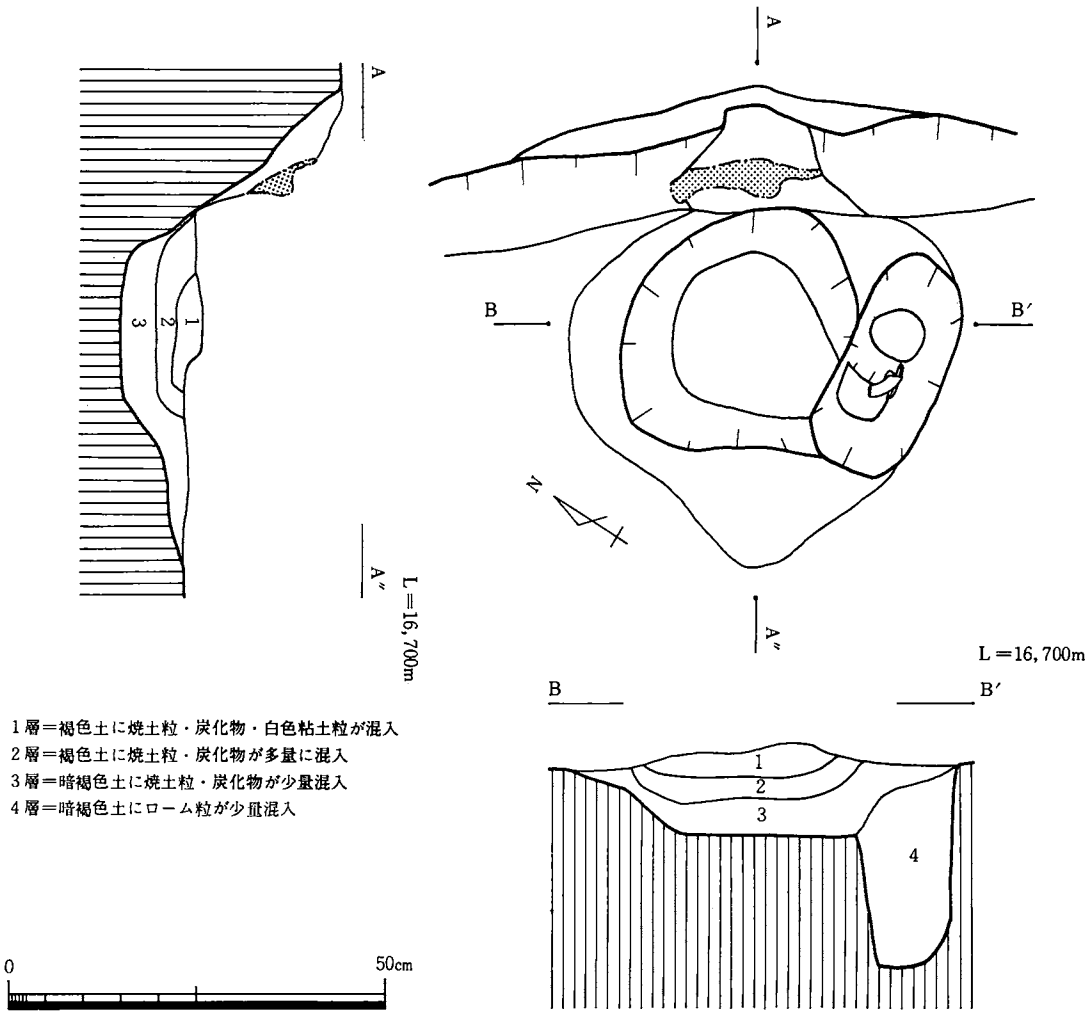
ＳＸ—410（第58図・第59図）

調査Ⅶ区75—０グリッド内より検出したⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ次調査通しての当遺跡唯一の竪穴住居址である。住居址北側壁の一部が、調査区外へ延びているため完全に調査することができなかったが、北東側の壁コーナー部分が確認できたことより、住居址の規模をほぼ知ることができた。住居址は、長辺3.38m、推定短辺約3.17m、深さ約 0.5m を測り、平面形はほぼ隅丸方形を呈するものと考えられ、主軸をＮ—43°15′—Ｗに取り掘り込まれている。住居址の残存状態は非常に良好で住居址東側壁の中央付近から、幅60～80cm程の階段状のステップが２段検出され、またステップの壁際より住居址中央付近に向って延びる硬化面が確認された。これらのことより、階段状のステップは昇降口と考えられる。住居址の壁は外側に向って緩やかに傾斜



第58図　75—Oグリッド SX—410実測図

して掘り込まれている。また、ほぼフラットな面を呈した床面には、東側壁の階段状のステップ際より、中央付近及び西壁際炉址付近まで延びる、硬く踏み締められた硬化面が確認された。また、東南側コーナー付近と西南側コーナーより1 m 程離れた南側壁際の床より、形状、規模、位置関係等により住居址の柱穴と考えられる、直径40～50cm、深さ40～60cm程の円形ピットが2個検出された。ピットは2個の検出であり、



第59図　SX－410内カマド実測図

他に柱穴、貯蔵穴と考えられるピットは検出されなかった。住居址の出入口とは反対方向の西壁中央付近より、壁面中央程に粘土が横幅40cm、縦幅20cmにわたって張り付けてあり、粘土直下の床面には、覆土に多量の焼土、炭化物を含んだ直径約60cm、深さ15cm程の皿状凹みが検出された。残存状態が非常に悪いが、壁面に粘土を張り付けていることや位置関係より、本住居址のカマド（第59図）と考えられる。住居址内からは、多くの土師器、須恵器の坏、高台付坏・皿・高台付椀・蓋・壺・甕片等が出土しており、これらの遺物は、住居址中央付近を中心に集中して出土する傾向が見られる。遺物に特徴的な差は認められないことより、ほぼ同時期のものと考えられ、遺物の特徴、埋土色、住居址の特徴及び他のＳＸ遺構との関連より奈良時代末から平安時代初頭頃の住居址であろうと考えられる。

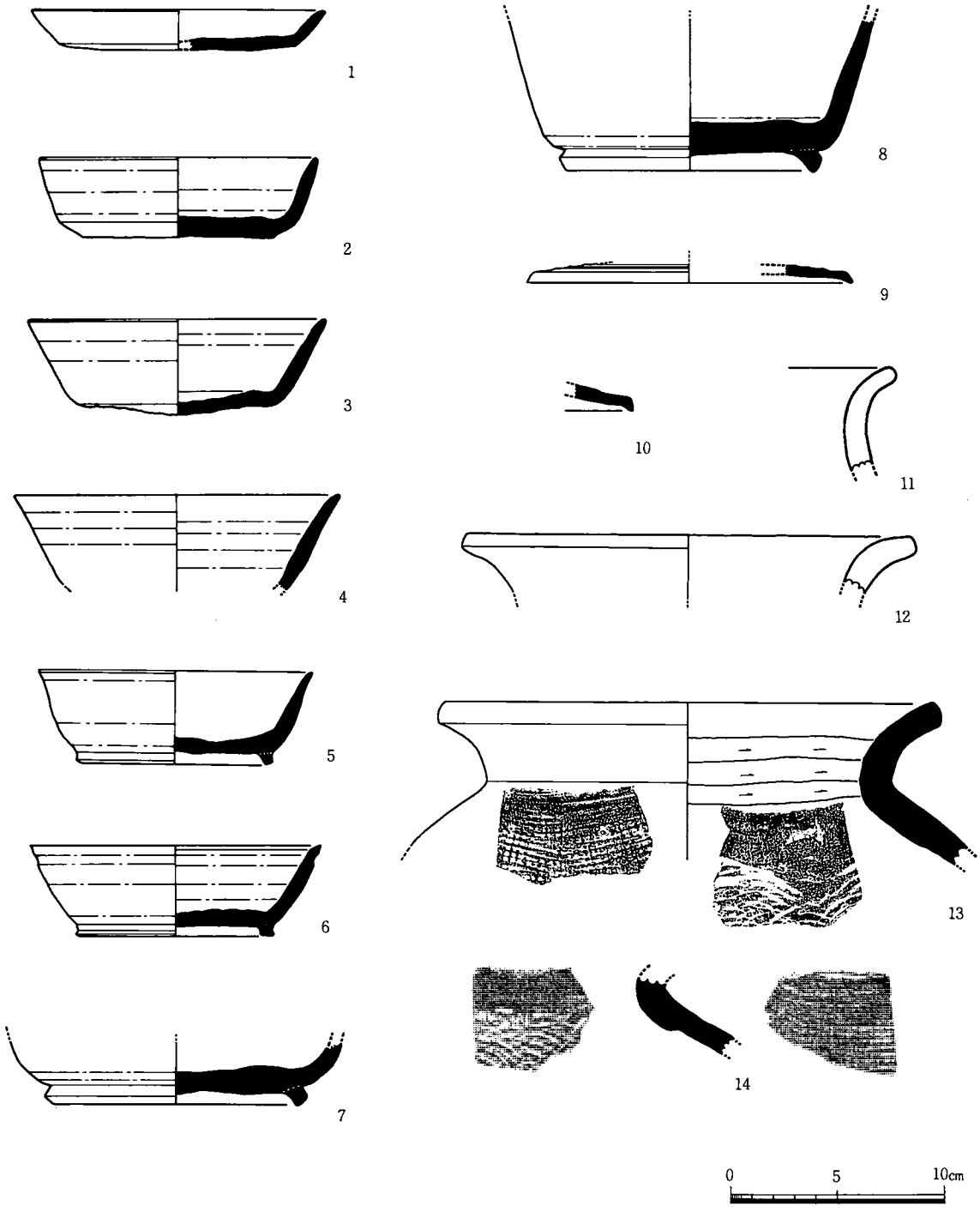
出土遺物　（第60図）

皿　（1）

1は、口径13.7cm、器高 1.9cmを測り、体部は外傾しながら大きく開き、端部に至る。端部はやや尖り気味である。底部には、ヘラによる回転切り離し痕が残る。

坏　（2～7）

2と3は高台を持たないもので、4も底部を欠くため一応持たない方に分類した。2は口径13cm、器高3.7cmを測り、底部は平底で、口縁部にかけて外傾しながらストレートに立ち上がるもので、3も特徴は一致する。3の底部は、中心付近がやや突出しているが、切り離し時の歪みと考えられることより、いずれも



第60図　SX－410(竪穴住居址)内出土遺物実測図

ⅡＢ類に属するものである。４は口径15.2cmを測り、底部より外傾しながらストレートに立ち上がり、さらに口縁部付近で外反するものでⅡＤ類に属するものである。５～７は高台が付くもので、５は断面が、方形を呈する肉厚の高台をやや外方に向って貼り付け、体部は外傾しながら立ち上がり、さらに縁部付近で外反する、ＩＦ類に属するものである。６は断面が、方形を呈する肉厚の高台を真下に向けて貼り付けたもので、ＩＣ類に属する。体部はやや内湾気味に外傾しながら立ち上がる。７は高台基部が強くくびれ、高台外面下端をナデて逆くの字状に屈曲しており、畳付部分は尖っている。Ｉｇ類に属するものである。

椀　(8)

基部がくびれ、外面が逆くの字状に屈曲し、畳付部分が尖った高台を貼り付けたもので、体部はやや外傾しながらストレートに立ち上がる。口縁部が欠失するが、現存高7cmと器高は高い。

蓋　(9・10)

9は口縁部が屈曲し、端部は外傾気味につまみ出され外側に開き、先端は尖がり気味である。口径15.2cmで、天井部はかなり低い。10も特徴は同じで共にⅠC類に属するものである。

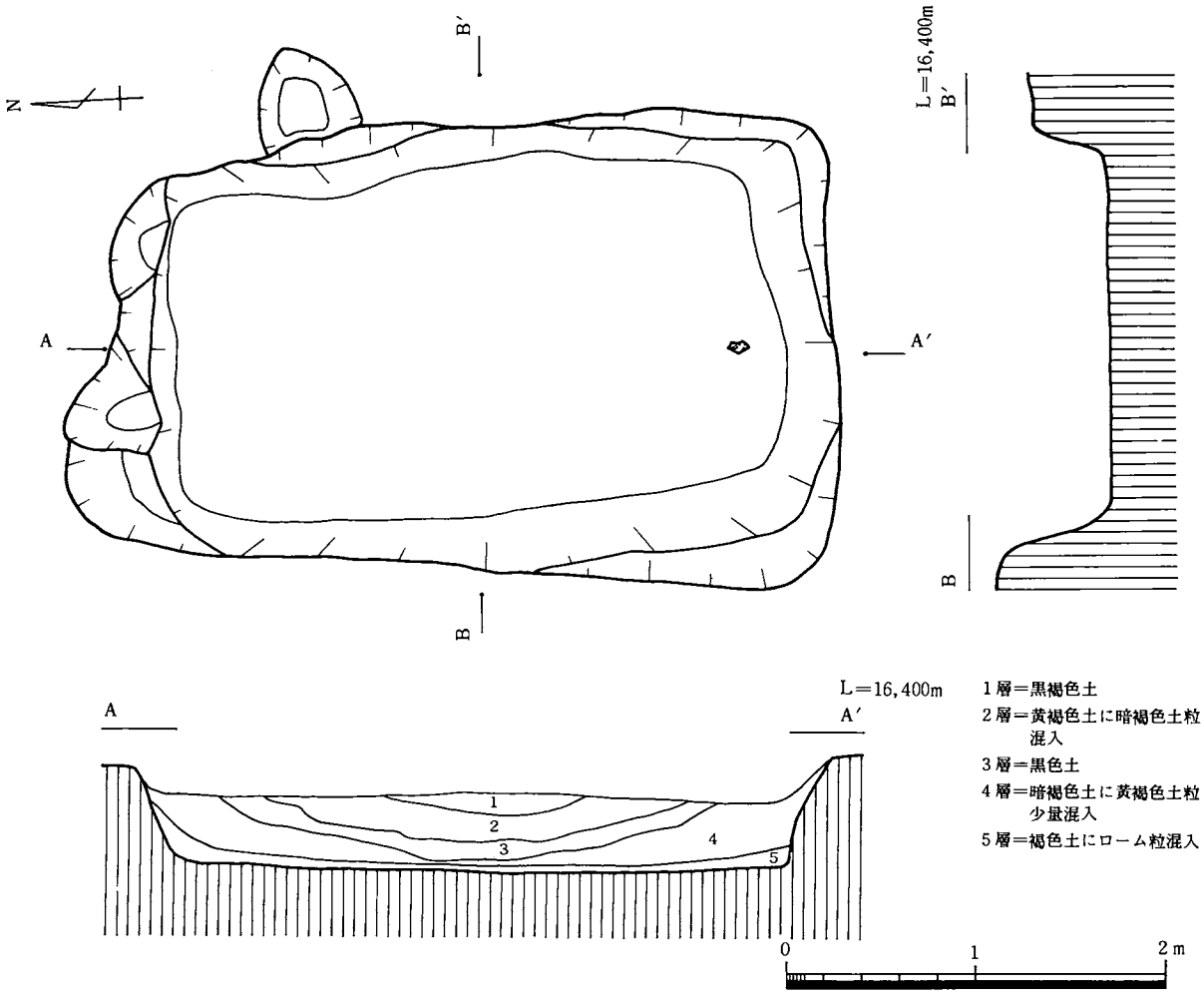
甕　(11～14)

11・12は共に土師器の甕で、口縁部が屈曲しくびれた後、端部に向って大きく外反している。特徴より共にⅡ類に属するものである。12の口径は20.8cmを測る。13・14は共に須恵器の甕で、13は口径22.8cmを測り、頸部でくの字状に屈曲した後、短かく外反し、端部は肥厚せずそのまま終っている。Ⅲ類に属するものである。14は口縁部を欠くため不明であるが、Ⅱ類または、Ⅲ類に属するものであろう。共に器面調整は内面同心円叩き、外面格子目叩き調整である。

大型土壙

ＳＸ－401　(第61図)

調査Ⅶ区80・81－Ｐグリッド内より検出した大型土壙遺構である。土壙は、長辺3.87m、短辺2.46m、深さ 0.6m を測り平面形は隅丸長方形を、断面形は上部が開くＵ字形を呈しており、主軸をＮ－2°50′－Ｅに



第61図　80・81－Ｐグリッド SX－401実測図

取り、掘り込まれている。土壙の上面は、多くのピットにより切られているため、上面の平面形はかなり変形しているが、底面はきれいな隅丸長方形を呈している。底面はローム層まで掘り込み、丁寧に整形を行ないフラットな面を呈している。また底面には硬化面、ピットなどの内部施設の痕跡は、全く認められなかった。土壙は、土層断面の観察によると、長時間かけて自然に埋没したものと考えられ、土壙内からは数点ではあるが、土師器、須恵器の高台付坏、埦、蓋、壺破片等が覆土下層床面近くより出土している。土壙内から床面密着の遺物がないことより土壙の時期は不明であるが、覆土内出土の遺物の特徴及び埋土色よりおおよそ奈良時代末から平安時代初頭頃と考えられる。土壙の外部施設は、周辺に多数のピットが存在し、そのピットの埋土が同色であるため、遺構に伴うものと判断されるピットの確認が難しく、また、土壙にピットなどの外部施設があったのかを確認するのも不可能である。

出土遺物　(第62図)

蓋　(1・2)

1・2とも外面に明瞭な段を有し、口縁部は屈曲し端部に至る。端部は短かくやや外反しているⅠA類に属するものである。1は須恵器、2は土師器である。

坏　(3)

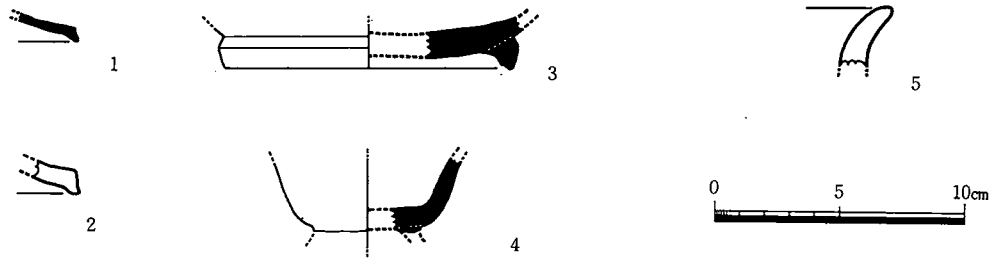
3はⅠG類に属するもので、外面が逆くの字状に屈曲し、畳付き部が尖がった高台を貼り付けている。須恵器である。

小型坏　(4)

須恵器で、高台部・底部・口縁部を欠失するが体部より口縁部にかけて外傾しながら立ち上がり、端部近くでさらに外反するもので小型の埦とも考えられる。

土師器甕　(5)

口縁部が短かく外反するもので、内外面共にナデ調整を行っている。ここでは一応甕にしたが鉢とも考えられる。

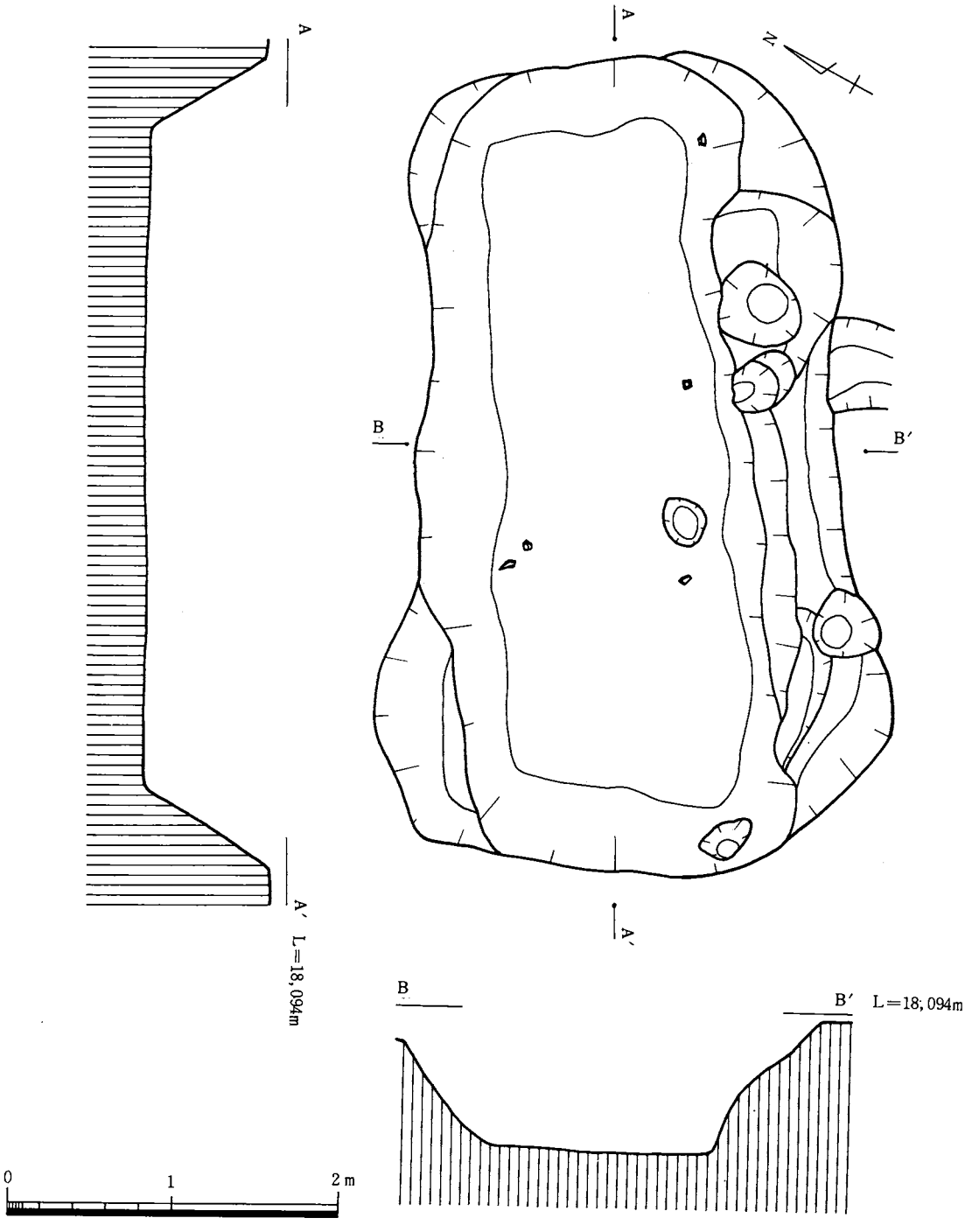


第62図　SX－401内出土遺物実測図

SX－402　(第63図)

調査Ⅶ区78－Qグリッド内より検出した大型土壙遺構である。土壙は、長辺4.87m、短辺2.94m、深さ0.75mを測り平面形は隅丸長方形を、断面形は上部が開くU字形を呈しており、主軸をN－57°30′－Eに取り掘り込まれている。土壙上面及び壁面には、ピットが多く掘り込まれているため上面の平面形はかなり変形しているが、底面はきれいな隅丸長方形を呈している。底面は、ローム層まで掘り込み丁寧に整形しており、凹凸は見られずフラットな面を呈している。また、底面には硬化面、ピットなどの内部施設の痕跡は全く認められなかった。土壙は土層断面の観察によると長期間にわたって自然に埋没したものと考えられ、土壙内からは、細片で図化出来ないが数点の土師器片、須恵器片が覆土下層より出土している。土壙の正確な時期

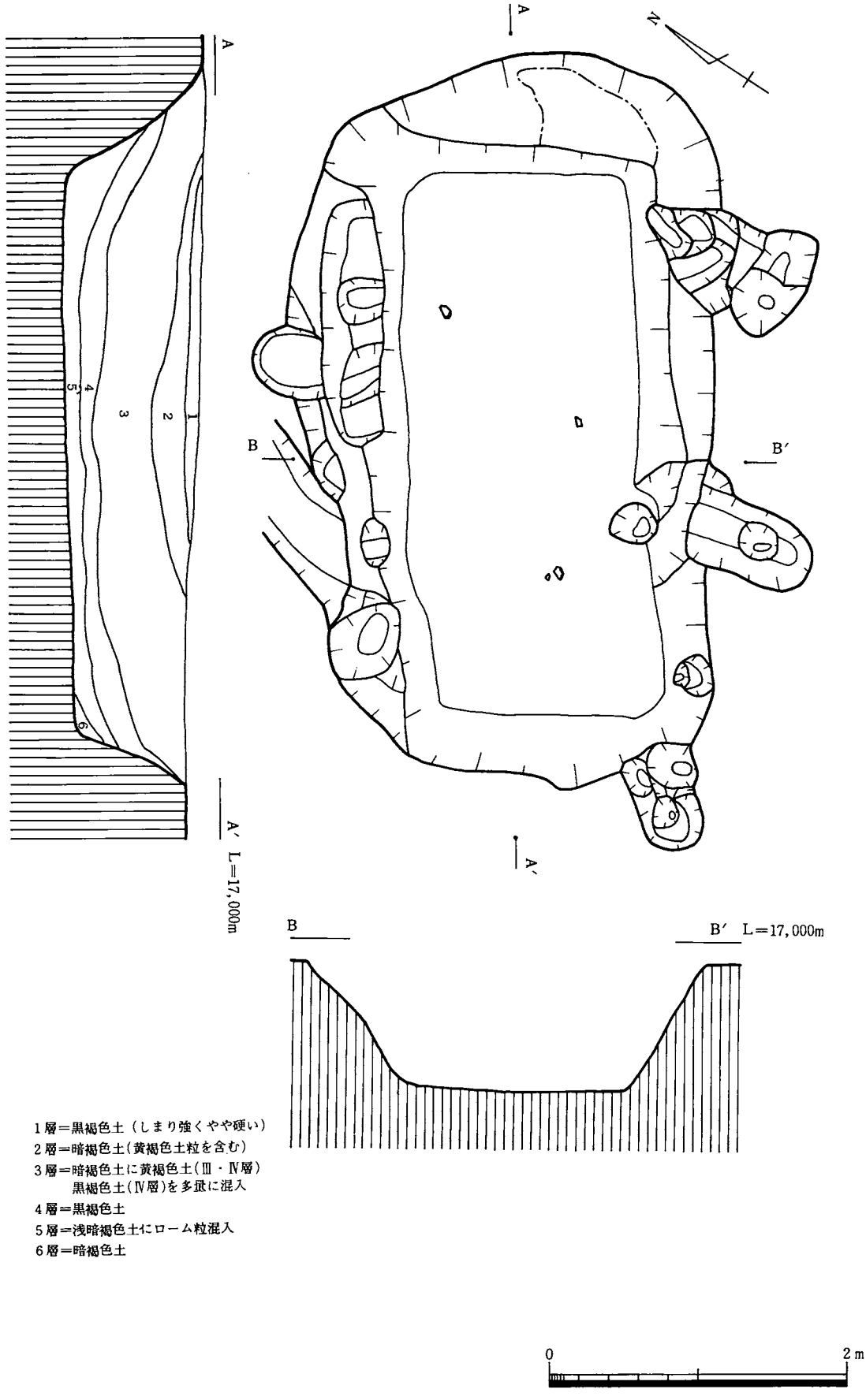
は床面密着出土の遺物がないため不明であるが、出土遺物および他の大型土壙と考え合わせて、おおよそ奈良時代末から平安時代初頭頃と考えられる。遺構周辺には多くのピットが検出されたが、ピット内から遺物の出土がなくピットの数が多い。また、ピットの埋土が同色であることなどより、土壙に伴うピットがどれであるか特定出来ずに、また土壙にピットなどの外部施設があったかどうかを確認するのは不可能である。



第63図　78・79—Qグリッド　SX—402実測図

SX—404　(第64図)

調査Ⅶ区77—Q・Rグリッド内より検出した大型土壙遺構である。遺構は、長辺4.88m、短辺2.85m、深さ0.85mを測り平面形は隅丸長方形を、断面形は上部が開くU字形を呈しており、主軸をN—54°00′—Eに



1層＝黒褐色土（しまり強くやや硬い）
2層＝暗褐色土（黄褐色土粒を含む）
3層＝暗褐色土に黄褐色土（Ⅲ・Ⅳ層）
黒褐色土（Ⅳ層）を多量に混入
4層＝黒褐色土
5層＝浅暗褐色土にローム粒混入
6層＝暗褐色土

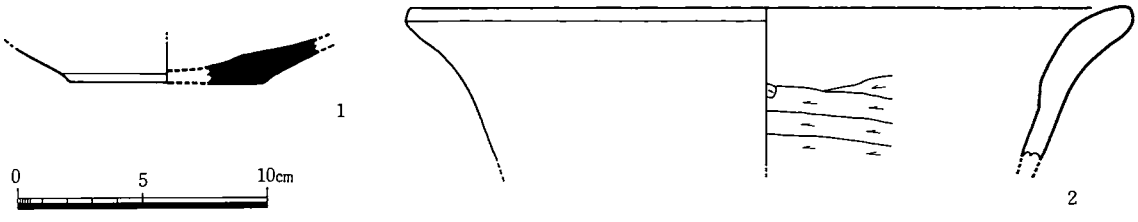
第64図　77－Qグリッド　SX－404実測図

取り、掘り込まれている。土壙上面及び壁面にはピットが多く掘り込まれているため、上面の平面形はかなり変形しているが、底面はきれいな隅丸長方形を呈している。底面はローム層まで掘り込み、丁寧に整形しており凹凸は見られずフラットな面を呈している。また床面には、硬化面は認められないが、東壁近くの底面に直径30cm程で深さ50cm程の円形ピットが1個掘り込まれている。ピットはこの土壙に伴うものと考えられるが確認していない。土壙は、土層断面の観察によると長期間にわたって自然に埋没したものと考えられ、遺構内からは、土師器、須恵器の坏、甕、壺等が覆土下層より出土している。土壙の時期は正確には押さえられないが、覆土内出土の遺物の特徴及び埋土色によりおおよそ奈良時代末から平安時代初頭頃と考えられる。土壙周辺には多くのピットが検出されたが、ピット内からの遺物の出土がなくピットの数が多い。また、ピットの埋土が同色であるなどより、土壙にピットなどの外部施設を伴っていたかどうかを確認するのは難しく、伴うピットがあっても特定するのは不可能である。

出土遺物　(第65図)

1は器種不明の須恵器底部片である。底部は平底で体部は大きく外傾し開きながら立ち上がる。底径は7.7cmを測り、回転ヘラ切り離し痕が残る。

2は、口径29cmを測る口縁部片で、傾きより考えて底部が浅くなる鉢または浅鉢ではないかと思われる。胴部は膨らまず大きく外傾しながらストレートに立ち上がり、口縁部が外反する。内面ヘラ削り、外面ヨコナデの器面調整を行っている。



第65図　SX－404内出土遺物実測図

SX－405　(第66図)

調査Ⅶ区76－P・Qグリッド内より検出した大型土壙遺構である。土壙は、長辺5.88m、短辺3.50m、深さ0.90mを測り平面形は隅丸長方形を、断面形は上部が開くU字形を呈しており、主軸をN－60°00′－Eに取り、掘込まれている。この土壙の規模は検出した大型土壙遺構中最大のものである。土壙上面及び壁面には、ピットが多く掘り込まれているため、上面の平面形はかなり変形しているが底面はきれいな隅丸長方形を呈している。底面は、ローム層まで掘込み丁寧に整形しており、凹凸は見られずフラットな面を呈している。又、床面には、硬化面、ピットなどの内部施設の痕跡は全く認められなかった。土壙は、土層断面の観察によると長期間にわたって自然に埋没したものと考えられ、土壙内からは、土師器、須恵器の坏、高台付坏、高台付椀、蓋や図化できなかったが、壺、甕片等が多く覆土下層より出土している。土壙の正確な時期は床面直上出土の遺物がないため不明であるが、覆土内出土の遺物の特徴及び埋土色によりおおよそ奈良時代末から平安時代初頭頃と考えられる。土壙周辺には、多くのピットが検出されたが、ピット内からの遺物の出土がなく、ピットの数が多い。又、ピットの埋土が同色であるなどより、土壙にピットなどの外部施設を判っていたかどうかを確認するのは難しく、伴うピットがあっても特定するのは不可能である。

出土遺物　(第68図)

蓋　(1)

口縁部片であるが、鈕が付くかどうかは不明であるため一応鈕を持たないⅠ類に分類した。口縁部は屈曲

し、端部は外傾気味につまみ出され大きく開いていて、天井部が低いことよりＩＣ類に属するものである。

坏　（２～５）

２は高台外面が逆くの字状に屈曲し、外方に開き端部が尖り気味の高台を貼り付けている、ＩＧ類に属するものである。体部はやや内湾気味に外傾して立ち上がる。３は断面が方形を呈した肉薄の高台を貼り付けたもので、外方に開き高い。ＩＡ類に属する底部片である。４および５は高台を持たないもので、大小の差はあるが底部がやや丸味を持ち、体部がやや内湾気味に立ち上がっている。ⅡＥ類に属するものである。５は土師器で内外面に赤色顔料を塗布している。坏はすべて回転ヘラ切り離しである。

椀　（６）

底部は丸く、口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり端部はやや尖り気味である。形状は不明だが高台を貼り付けていた痕跡が認められる。

長頸壺　（７）

胴部から底部にかけての破片で、底部より外傾しながらほぼストレートに立ち上がり、頸部近くで内側に大きく屈曲する。頸部より口縁部までを欠くが、頸部が細く締まり、さらに外側にくの字に屈曲した後口縁部がやや外傾しながら長く立ち上がる長頸壺と考えられる。底部には、形状は不明だが高台を貼り付けた痕跡が認められる。調整は内外面共にヨコナデである。

須恵器甕　（８～10）

８は、頸部でくの字に屈曲し、外反しながら立ち上がるもので、頸部は短く、端部は肥厚している。Ⅱ類に属するものである。９・10は共に頸部付近の破片で、くの字状に屈曲していることよりⅡかⅢ類に属するものと考えられる。器面調整は共に内面同心円叩き、外面カキ目調整である。

ＳＸ－406（第67図）

調査Ⅶ区75－Ｐグリッド内より検出した大型土壙遺構である。土壙は、長辺4.98m、短辺2.70m、深さ0.85mを測り平面形は隅丸長方形を、断面形は上部が開くＵ字形を呈しており、主軸をＮ－47°40′－Ｗに取り、掘り込まれている。土壙上面及び壁面には、ピットが多く掘り込まれているため上面の平面形はかなり変形しているが、床面はきれいな隅丸長方形を呈している。床面はローム層まで掘り込み、丁寧に整形しており、凹凸は見られずフラットな面を呈している。床面には、硬化面は認められないが、南壁西南コーナー近くの床面に直径35cm程で深さ10cm程の円形ピットが１個掘り込まれている。ピットは土壙に伴うものと考えられるが確認できなかった。土壙は、土層断面の観察によると、長時間にわたって自然に埋没したものと考えられ、土壙内からは、土師器、須恵器の坏、皿、甑、壺、甕片等が覆土下層より出土している。土壙の正確な時期は、床面密着出土の遺物がないため不明であるが、遺物の特徴及び埋土色よりおおよそ奈良時代末から平安時代初頭頃と考えられる。遺構周辺には、多くのピットが検出されたが、ピットからの遺物の出土がなく、ピットの埋土が同色であるなどより、土壙にピットなどの外部施設を伴っていたかどうかを確認するのは難しく、又、伴うピットがあっても特定するのは不可能である。

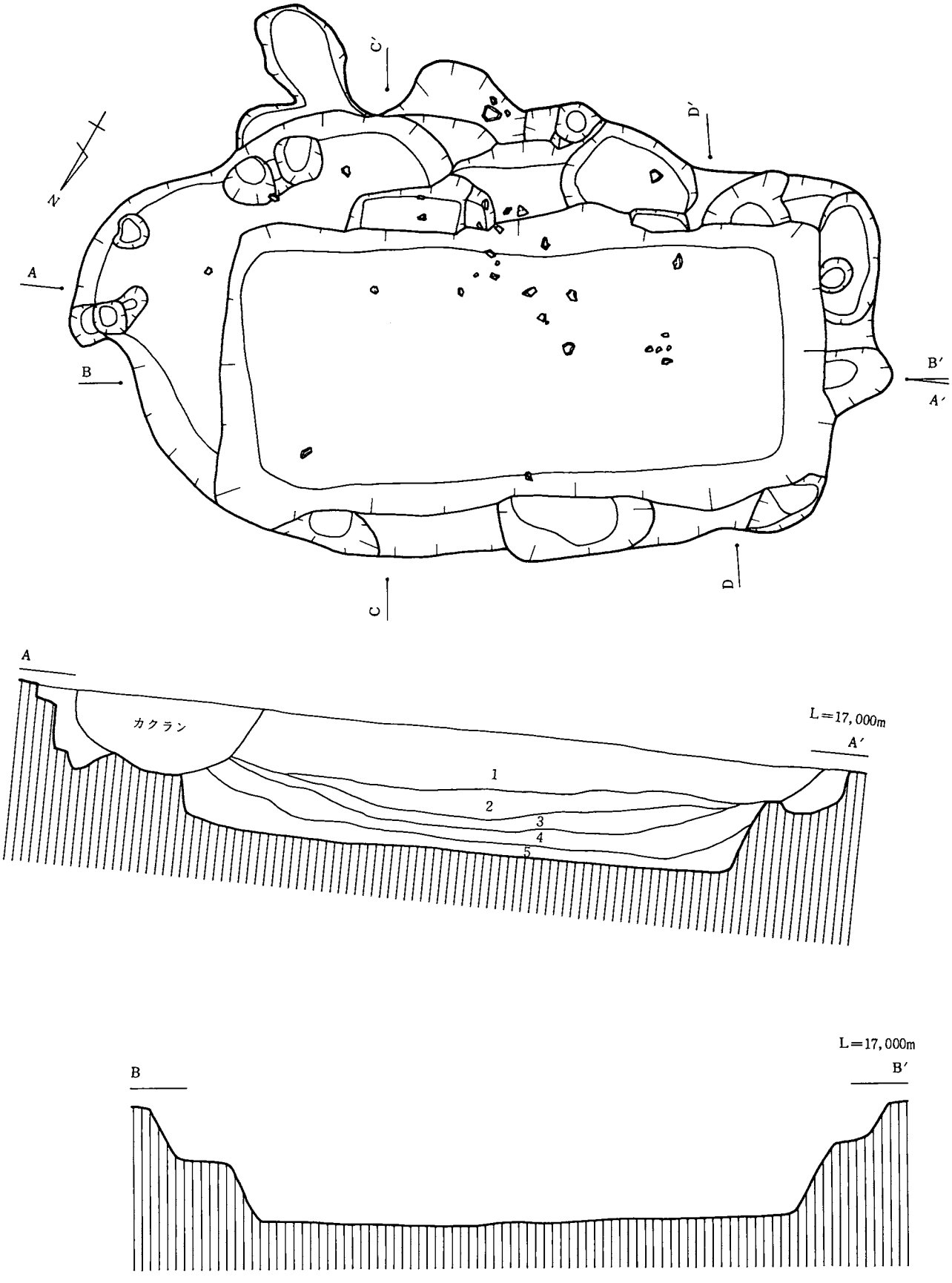
出土遺物　（第69図）

坏　（１）

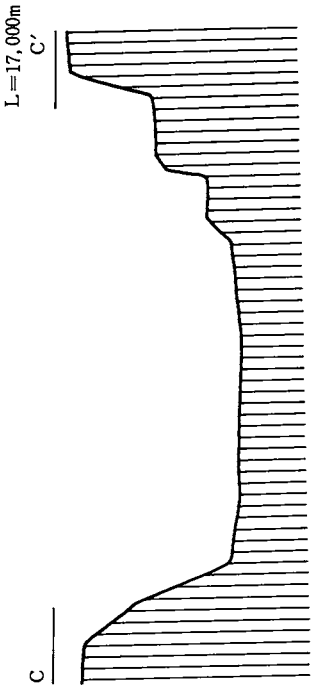
外面が逆くの字状に屈曲し、畳付部分が尖がっている高台を、外方に開くハの字状に貼り付けたもので、ＩＧ類に属する。

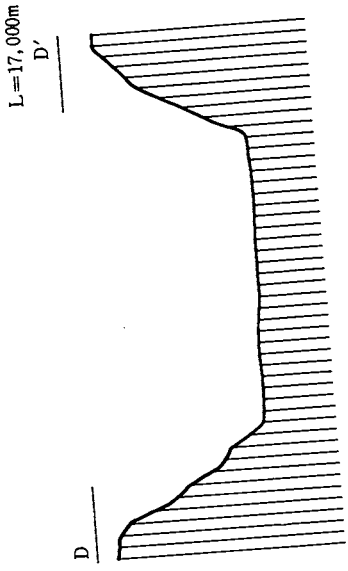
器種不明土器　（２）

平底を呈した、復原径が16.6cmとかなり大型の土師器底部片で、体部に向って外傾しながら立ち上がる。椀または皿ではないかと考えられるが不明である。

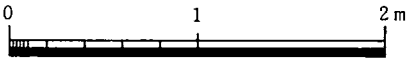


第66図　76－P，Qグリッド　SX－405実測





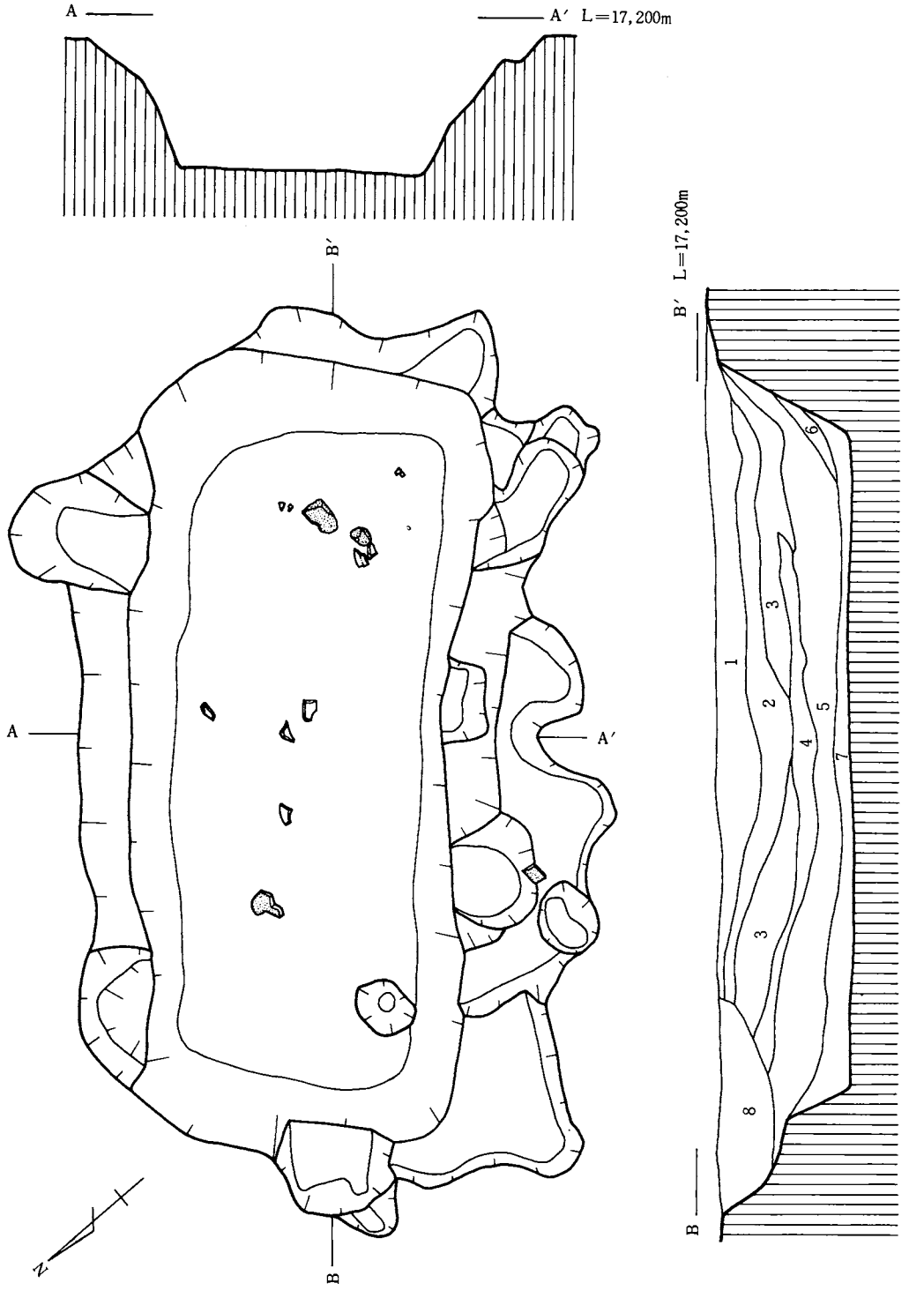
1層＝暗褐色土に黄褐色土(遺跡Ⅲ層)混入
2層＝暗褐色土に黄褐色土粒多量に混入
3層＝黒褐色土に黄褐色土粒多量に混入
4層＝暗褐色土に黄褐色土粒少量混入
5層＝暗褐色土にローム粒多量に混入



図

甑　（3）

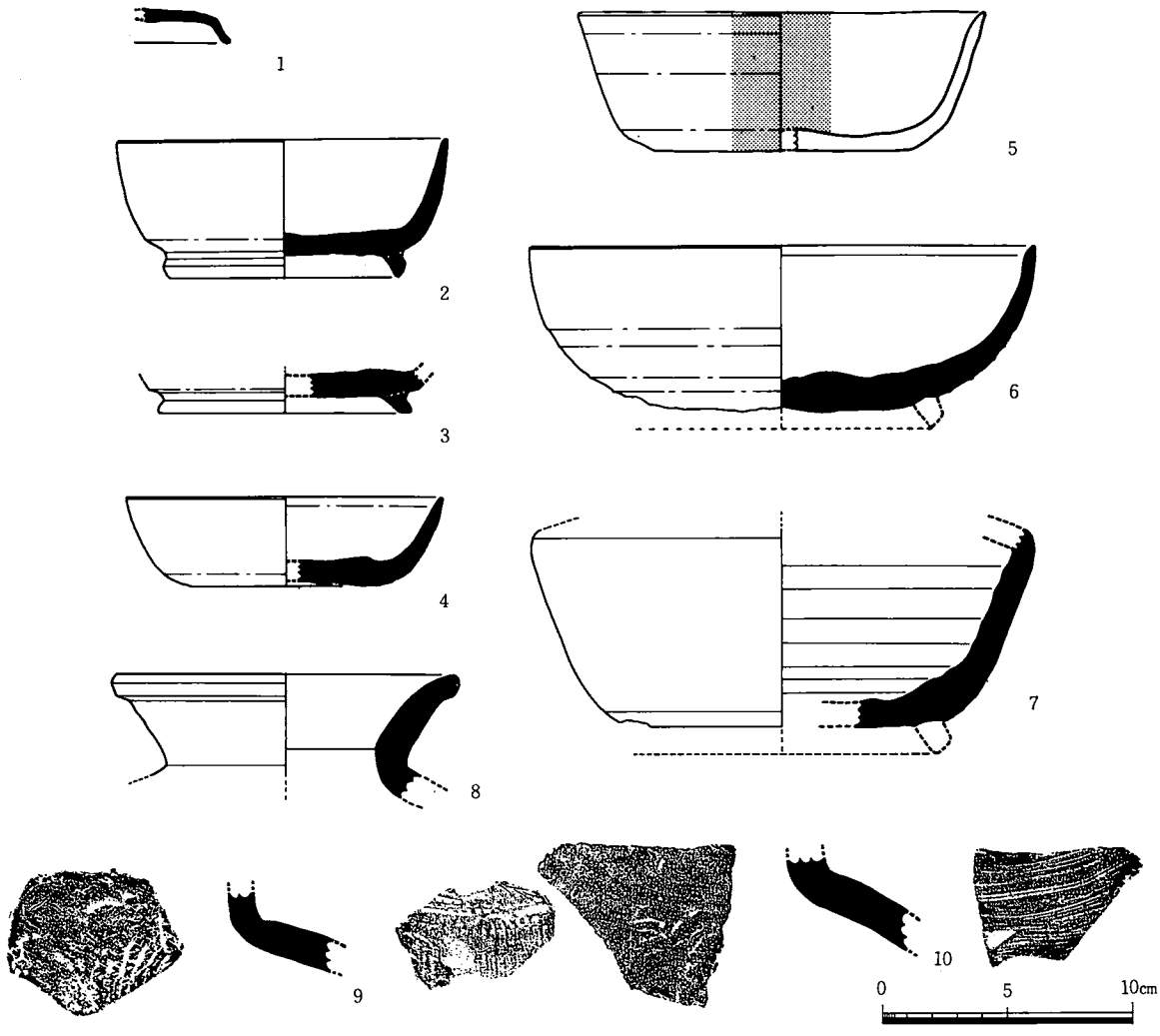
両端を欠くが、幅3.6cm、厚さ1.5cmを測る板状の土師器で、甑の底部片である。器面調整はナデ調整である。



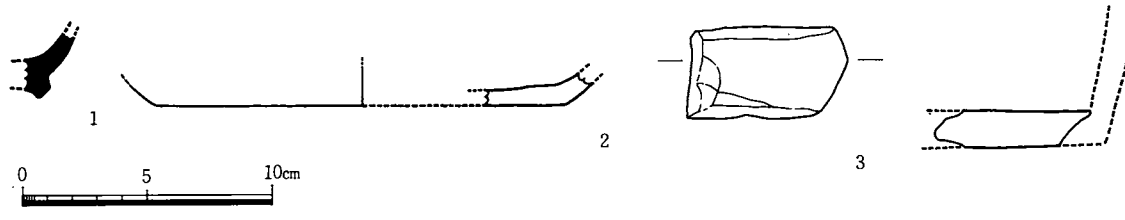
1層＝黒褐色土
2層＝黄褐色土に暗褐色土混入
3層＝暗褐色土に黄褐色土混入
4層＝黒色土
5層＝暗褐色土に黄褐色土混入（3層にくらべ黄褐色土黄褐色土が大きい。やや茶色っぽい）
6層＝黄褐色土（3層がくずれたもの）
7層＝褐色土にローム粒混入
8層＝黒褐色土（1層に似るが、SK－406を切った遺構の埋土）

0　2m

第67図　75－Pグリッド　SX－406実測図



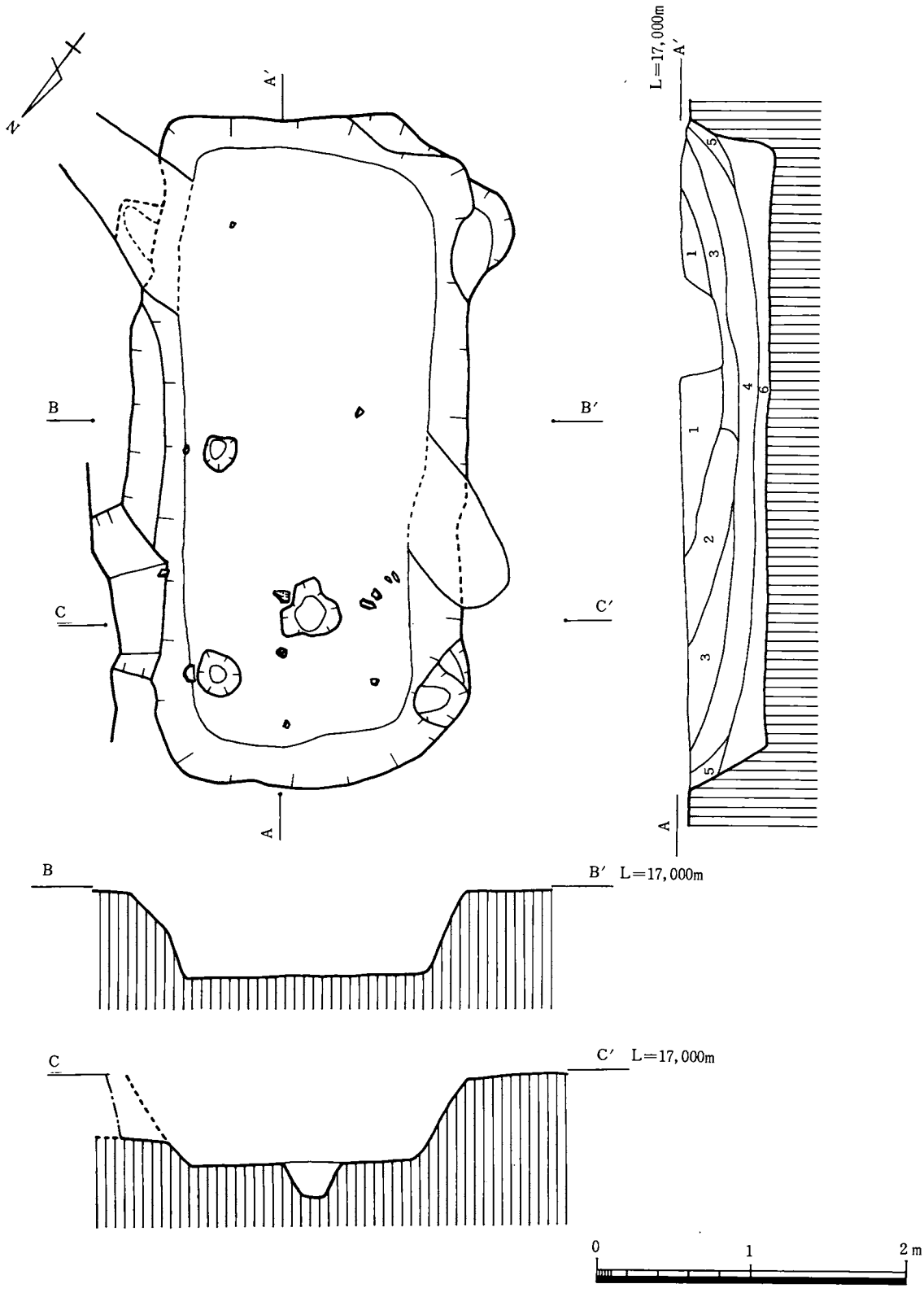
第68図　SX－405内出土遺物実測図



第69図　SX－406内出土遺物実測図

ＳＸ－409　(第70図)

調査Ⅶ区75・76－０グリッド内より検出した大型土壙遺構である。土壙は、長辺4.30m、短辺2.12m、深さ 0.6m を測り、平面形は隅丸長方形を、断面形は上方が緩やかに開くＵ字形を呈し、主軸をＮ－45°30′－Ｗに取り掘り込まれている。土壙東側は、溝遺構ＳＤ－404と重複しており、プラン確認時において埋土色に若干の違いが認められ新旧関係が確認できた。プラン確認による両遺構の新旧関係は、本土壙内にＳＤ－404が走っているのが認められることより、土壙の埋没後にＳＤ－ 404が掘り込まれている。両遺構の時期差は、ＳＤ－404に遺物の出土がないことから不明であるが、両遺構とも平安時代の遺構であり、そう開かないものと考えられる。土壙上面および壁面にはピットが後世に掘り込まれているが、他の大型土壙遺構程多くなく、



第70図　75・76－Oグリッド　SX－409実測図

当初の平面形を保っている。また、床面には硬化面は認められないが、北壁際に直径20～30cm程の円形ピットが2個、西壁近くに直径30cm程の円形ピットが1個、計3個のピットが検出された。これら3個のピットはいずれもこの土壙に伴うものと考えられ、何らかの施設が存在した可能性が考えられるが、確認ができず不明である。遺構内からは、土師器・須恵器の蓋、高坏・坏・鉢・壺片等が覆土下層より出土している。土壙の正確な時期は床面よりの遺物の出土がないため不明であるが、遺物の特徴および埋土色より、おおよそ

奈良時代末から平安時代初頭頃と考えられる。また、土壙東側には竪穴住居址（ＳＸ－410）が主軸をほぼ同じくして併設しているが、近接しすぎていることより、若干の時期差がある可能性が考えられる。遺物の特徴、遺構埋土色等が同じであるため前後関係は不明であるが、時期的には同じかそう開かないものと考えられる。

出土遺物　（第71図）

蓋　（１・２）

１は端部を短く直下につまみ出したもので、明瞭な稜が認められる。天井部は欠失するが低くなると考えられる。分類ではＩＡ類に属するものである。２は端部がやや屈曲するが明瞭ではなく、外傾気味につまみ出され尖っているもので、分類ではＩＣ類に属するもので、いずれも須恵器片である。

土師器甕　（３）

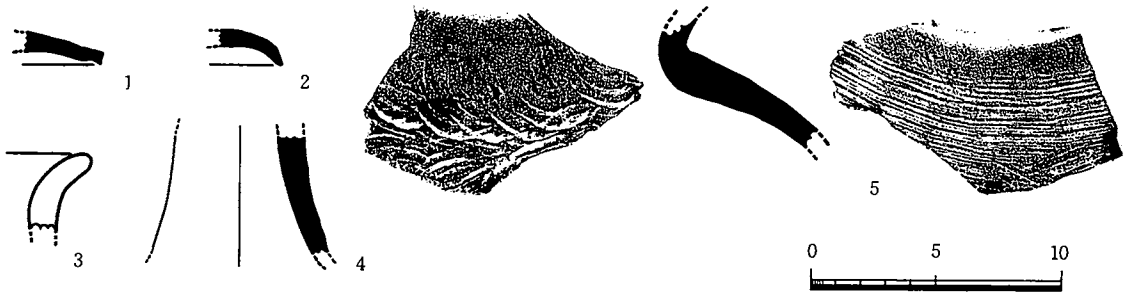
土師器口縁部片で、端部に向って短かく外反するものである。

高坏　（４）

土師器で、下方に向ってゆるやかに開いている脚部片である。内外面共にナデによる器面調整を行っている。

須恵器甕　（５）

頸部付近の破片で、くの字に屈曲した後口縁端部に向って大きく外反しながら開くものと考えられ、分類ではⅡまたはⅢ類に属するものである。内面同心円叩き、外面カキ目による器面調整を行っている。



第71図　SX－409内出土遺物実測図

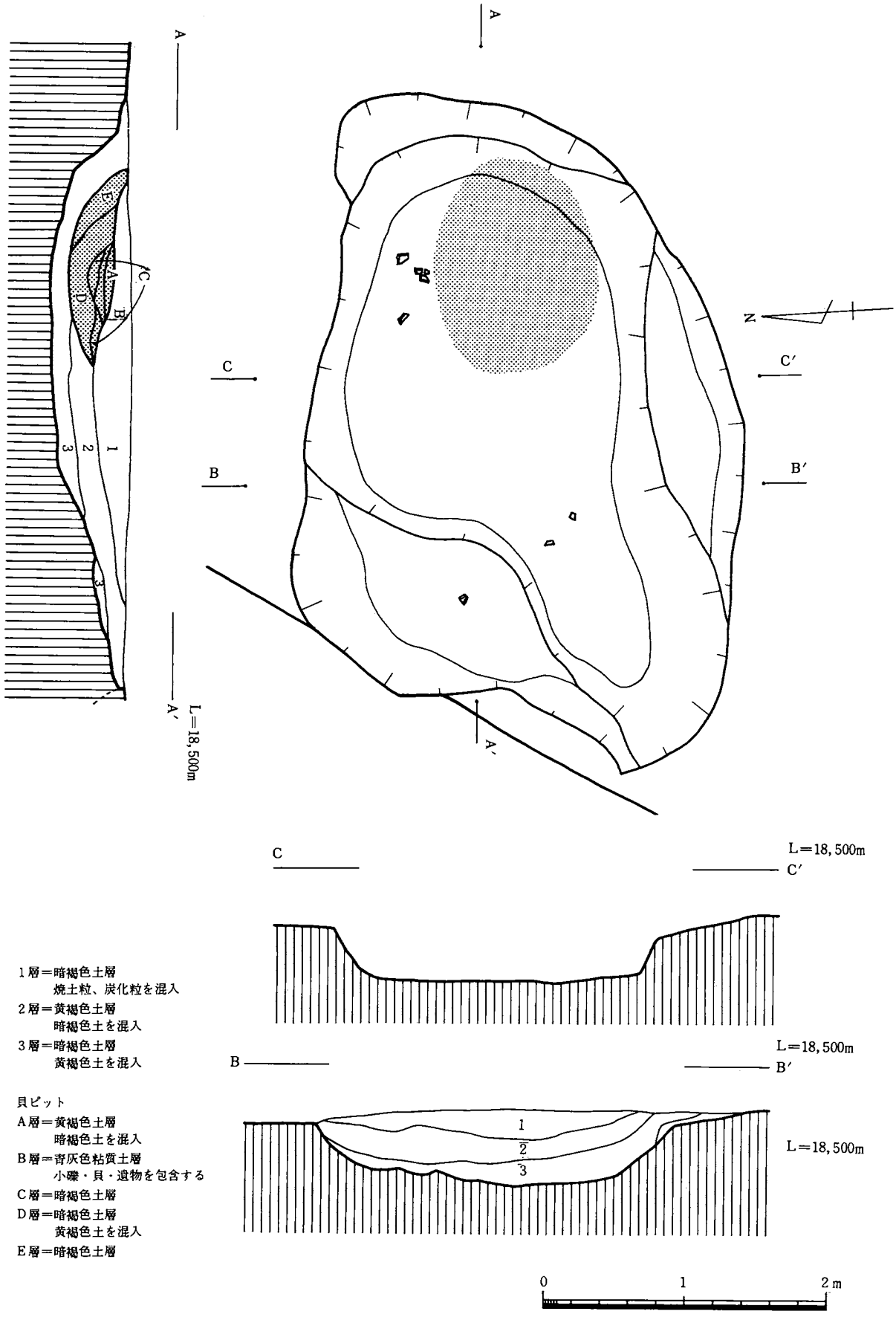
ＳＸ－412　（第72図）

調査Ⅴ区63・64－Ｑグリッド内より検出した大型土壙遺構である。土壙西側は調査区外へ延びているが、ほぼ西壁面まで完全に調査ができた。遺構は、推定長径約4.27m、短径3.12m、深さ0.54mを測り、平面形は不整楕円形、断面形は皿状を呈し、主軸をＮ－86°10′－Ｗに取り掘り込まれている。遺構外側及び内側には、ピットなどの掘り込みはないが、遺構壁上面に二段掘りしている部分が認められるが、これは、掘り込み当初からと考えられる。また調査Ⅶ区の大型土壙群のように上面平面形および底面平面形が定形化された掘り込みは行っていないようである。遺構内からは、土師器、須恵器の蓋、椀、高坏、壺、鉢、甕片等が出土している。これら遺物の特徴より、土壙の時期は、他の大型土壙群と同じ、奈良時代末から平安時代初頭頃と考えられる。他に、染付等の近世陶磁器類、貝類等が東壁面付近の土壙上面より多数出土しているが、土壙の時期とは直接関係がなく、土層の断面観察により、楕円形の掘り込みを持った近世時期の塵捨て穴と考えられる。

出土遺物　（第73図）

蓋　（１・２）

１は外面に稜を有するが端部は屈曲せず、天井部よりほとんどストレートに端部へ至るもので、端部はや



1層＝暗褐色土層
　　焼土粒、炭化粒を混入
2層＝黄褐色土層
　　暗褐色土を混入
3層＝暗褐色土層
　　黄褐色土を混入

貝ピット
A層＝黄褐色土層
　　暗褐色土を混入
B層＝青灰色粘質土層
　　小礫・貝・遺物を包含する
C層＝暗褐色土層
D層＝暗褐色土層
　　黄褐色土を混入
E層＝暗褐色土層

第72図　63・64－Oグリッド　SX－412実測図

や尖がり気味で、天井部は低い。特徴よりＩＨ類に属する。２は外面に明瞭な段を持ち屈曲する。端部は外傾気味にハの字状につまみ出され尖がっている。また天井部は低い。特徴よりＩＣ類に属するものである。共に須恵器である。

坏　（３）

土師器で底部が欠失する。体部はやや内湾気味に膨らみながら立ち上がり、口縁部がやや外反するもので、特徴よりⅡ類に属するものである。

高坏　（４）

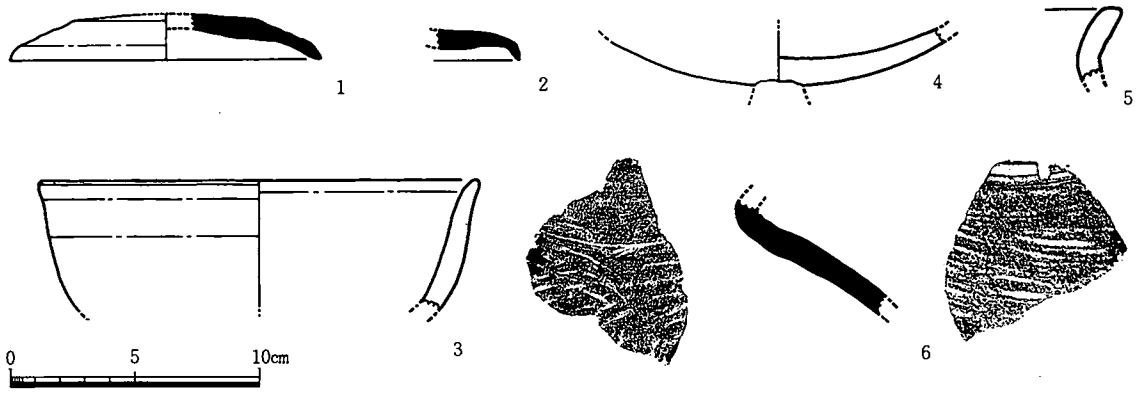
脚部および口縁部を欠失するが、形状より坏部と考えられる。土師器で内外面共に研磨の器面調整を行っている。

土師器甕　（５）

口縁部が外反するもので、鉢とも考えられる。

須恵器甕　（６）

頸部でくの字状に屈曲し、口縁部が外反しながら開くものと考えられ、ⅡまたはⅢ類に属すると思われる。内面同心円タタキ、外面はカキ目の器面調整を行なっている。



第73図　SX－412内出土遺物実測図

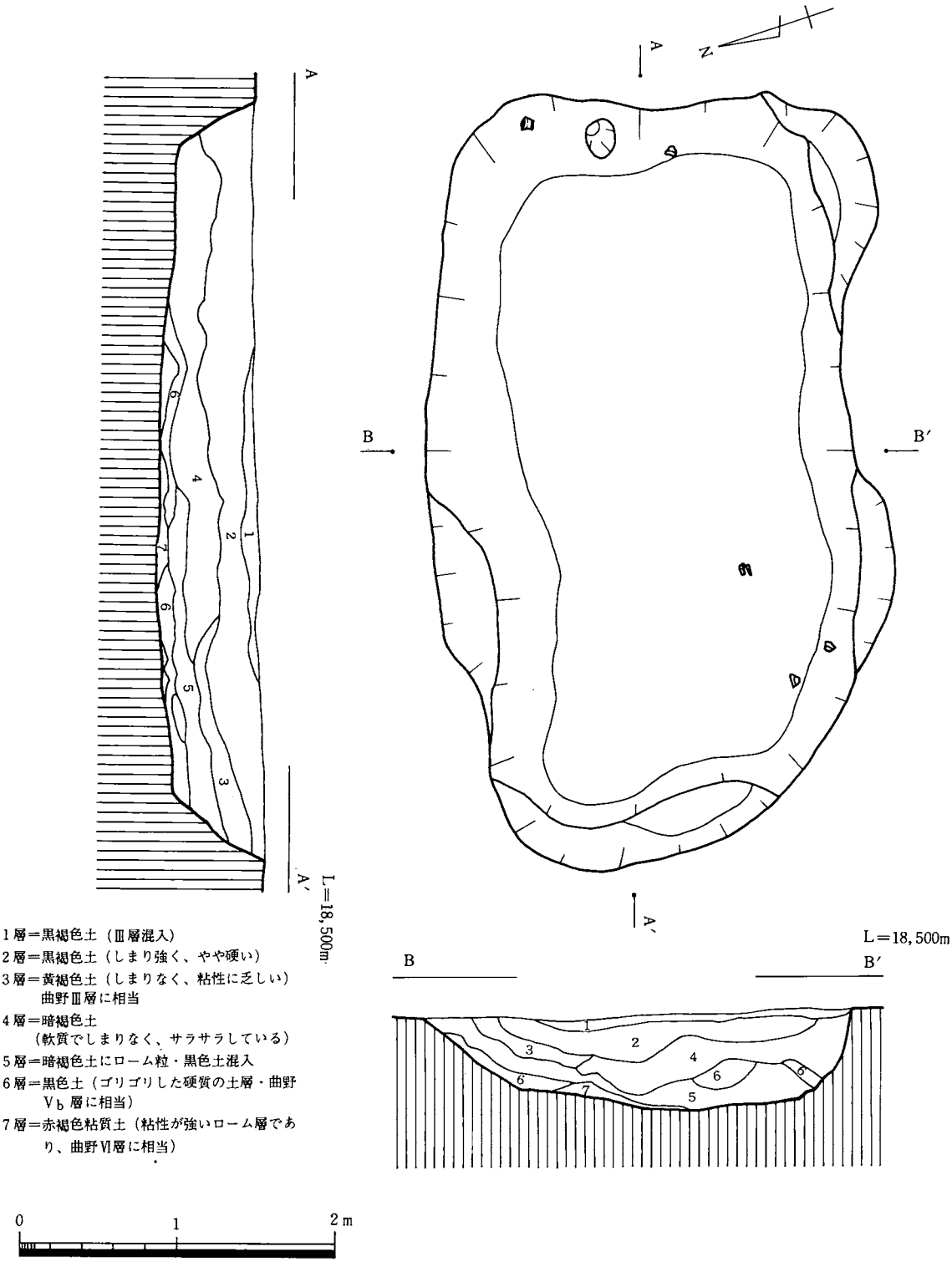
ＳＸ－413　（第74図）

調査Ｖ区60・61－Ｐグリッド内より検出した大型土壙遺構である。この土壙は、Ⅶ区の大型土壙遺構と一連のものと考えられる。土壙は、長辺4.88m、短辺2.89m、深さ0.51mを測り、平面形はやや不整形な隅丸長方形を、断面形は上方が緩やかに開くＵ字形を呈し、主軸をＮ－71°20′－Ｗに取り、掘り込まれている。土壙東側壁には、長径24cm、短径18cm、深さ50cm程の楕円形ピットが掘り込まれているが、これは埋土色の違いより土壙埋没後に掘り込まれたもので、土壙には直接関係のない遺構と考えられる。他に土壙内にピット及び硬化面等、また遺構外側にもピット等は全く認められなかった。土壙内の覆土からは、土師器、須恵器の高台付坏、蓋、甑、壺片等が出土している。土壙の時期は出土遺物の特徴及び埋土色より奈良時代末から平安時代初頭頃と考えられる。

出土遺物　（第75図）

蓋　（１～３）

１は、凝宝珠形の鈕を天井部に持つもので、口縁部は欠失している。分類ではⅡＣ類に属する。２は、口縁部が屈曲し段を持ち、端部は尖っており、長く外反気味につまみ出されている。分類ではＩＢ類に属する。３は、天井部が低く端部がつまみ出されずそのままストレートに端部に至るものでＩＡ類に属する。



第74図　60・61－Pグリッド　SX－413実測図

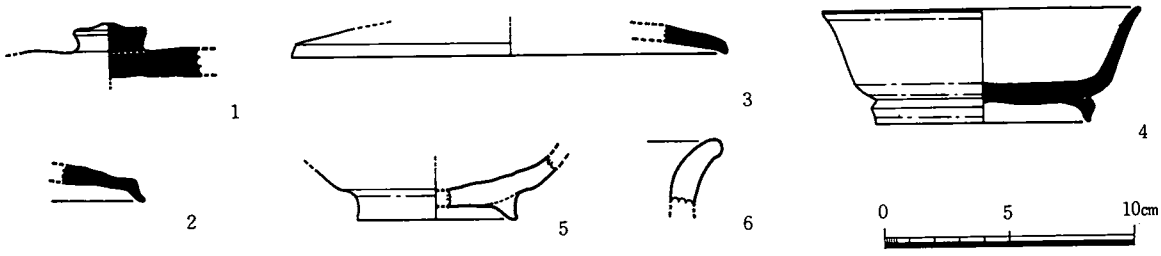
いずれも須恵器である。

坏　（4・5）

4は、外面が内側に屈曲し畳付き部分が尖がった高台を貼り付けたもので、体部は外傾しながらストレートに立ち上がり、口縁部は外反し端部に至るＩＧ類に属する。口径は12.8cmを測り、須恵器である。5は断面が三角形を呈する高台を貼り付けたものでＩＤ類に属する。土師器である。

土師器甕　（6）

口縁部が短かく緩やかに外反する破片で鉢とも考えられる。

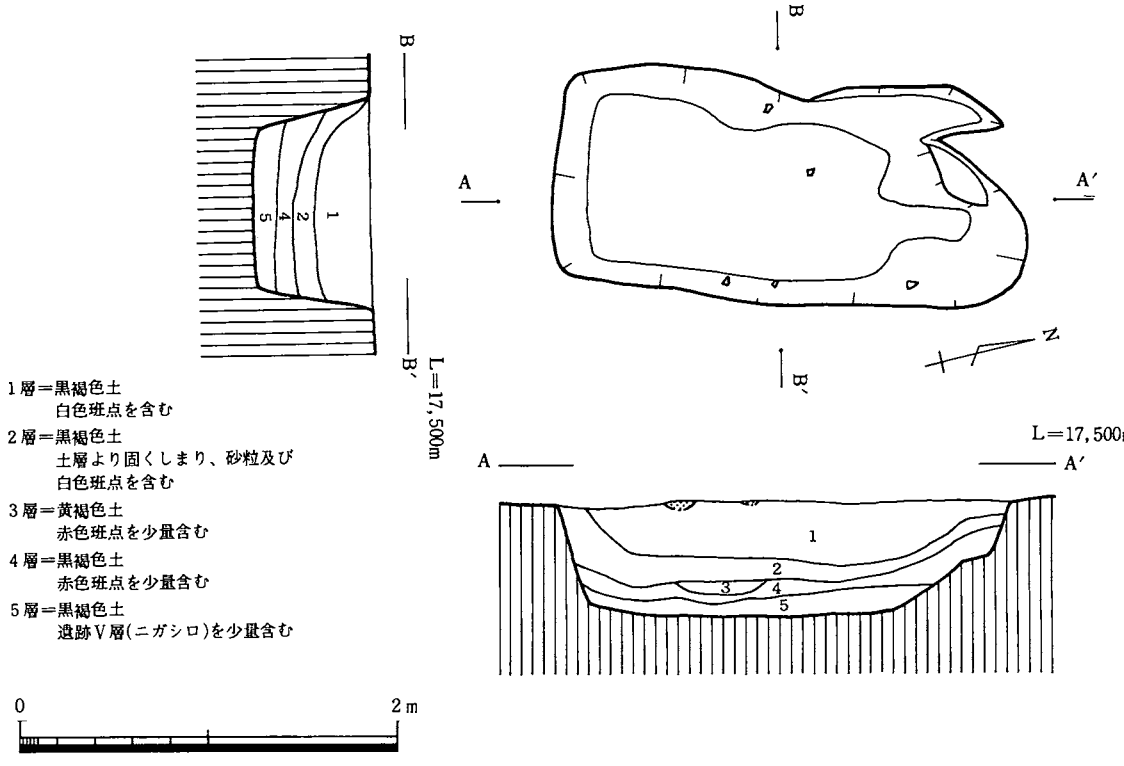


第75図　SX－413内出土遺物実測図

土　壙

ＳＸ－408　（第76図）

調査Ⅶ区72－Ｐグリッド内より検出した土壙遺構である。土壙は、長辺2.51m、短辺1.18m、深さ0.60mを測り、平面形はほぼ隅丸長方形を、断面形は上方が緩やかに開くＵ字形を呈し、主軸をＮ－17°10′－Ｅに取り掘り込まれている。土壙は、土層断面の観察によると自然に埋没したものと考えられ、遺物の出土は主に中層付近に集中しており下層および底面よりの出土はない。土壙内からは、土師器、須恵器の高台付坏片等が出土していること、埋土色が他の大型土壙遺構と同色であることより、時期はおおよそ奈良時代末から平安時代初頭頃と考えられる。

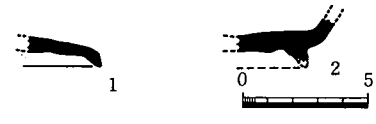


第76図　72－Ｐグリッド　SX－408実測図

出土遺物　（第77図）

蓋　（1）

口縁部が屈曲し、端部は外傾気味につまみ出され先端は尖がっている。分類ではＩＣ類に属する破片である。



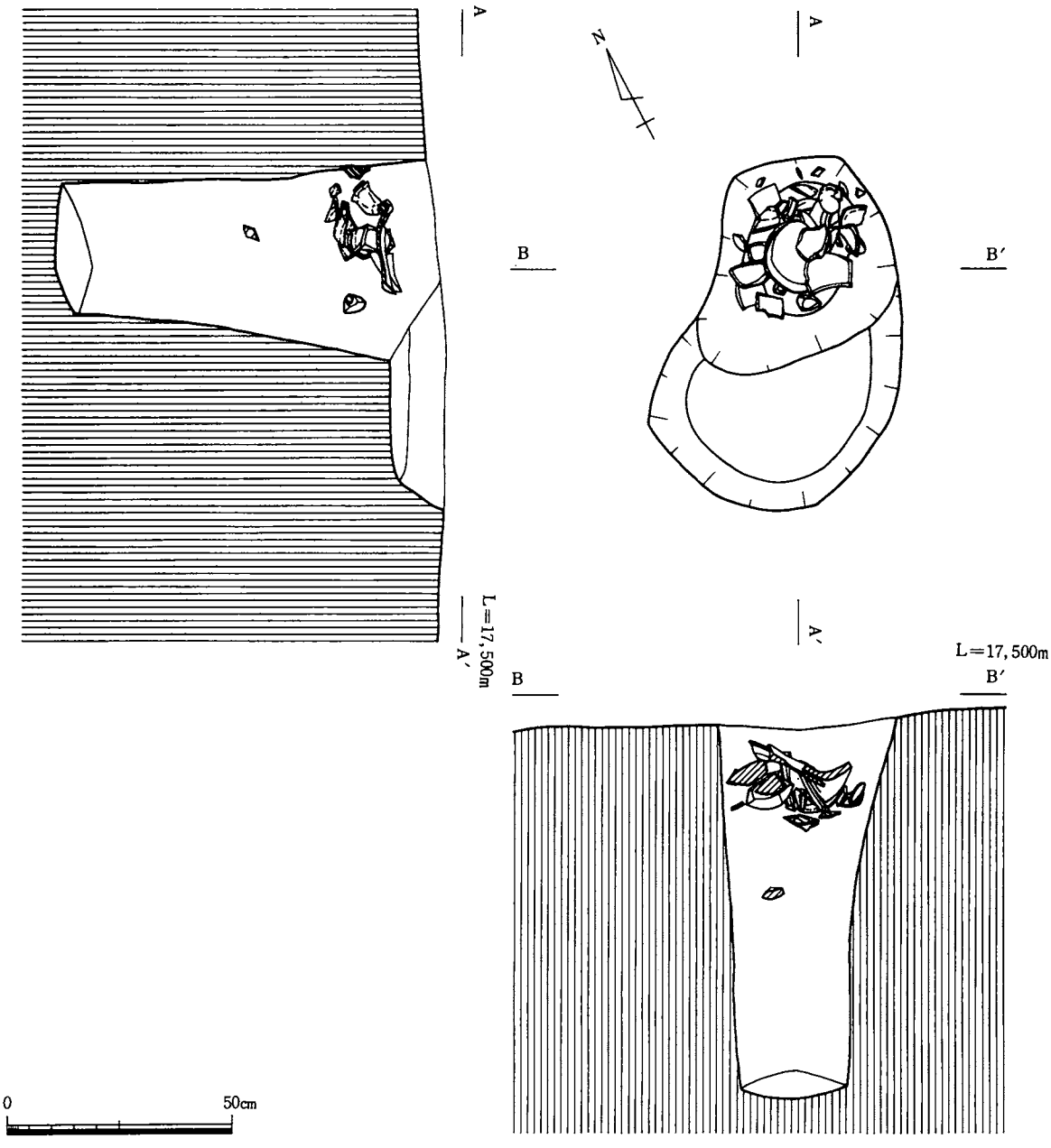
第77図　SX－408内出土遺物実測図

坏　(2)

外面が逆くの字状に屈曲し、外方に開くハの字状の高台を貼り付けたもので、畳付き部は尖がっていると考えられ、分類ではＩｇ類に属するものであろう。

71－Ｐ グリッド内ピットNo.1　(第78図)

長径44cm、短径40cm、深さ85cmを測る平面形が不整円形を呈したピットである。このピットは、時期的に先行すると考えられる。直径50cm程の浅い円形ピットを切って掘り込んでいるがただ２つのピットの埋土は共に黒色土であり確認時には前後関係が分らなかったことより時期的な差はそう大きくないと考えられる。このピット内より土師器、須恵器製の高台付坏、坏、蓋、皿、壺、甕、甑把手などが一括して出土した。出土土器はすべて破片であり、復原が可能な土器の出土はないこと。出土土器はすべてピット上部付近より一括して出土していることより、ピットがある程度埋まった段階において破損して使用不可能な土器を、一括



第78図　71－Ｐグリッドピット内遺物出土状態実測図

して一度に投棄したものと考えられる。なお、このピットは掘立柱建物遺構の復原作業においては、建物の柱穴として使用していない。なお遺物より掘立柱建物遺構と同じ奈良時代末から平安時代初頭の遺構と考えられる。

出土遺物　(第79図)

蓋　(1)

口縁部はつまみ出されず、天井部よりストレートに端部に至り、端部は丸くなるもので、分類ではⅠH類に属するものである。口径は15cmを測る。

坏　(2～4)

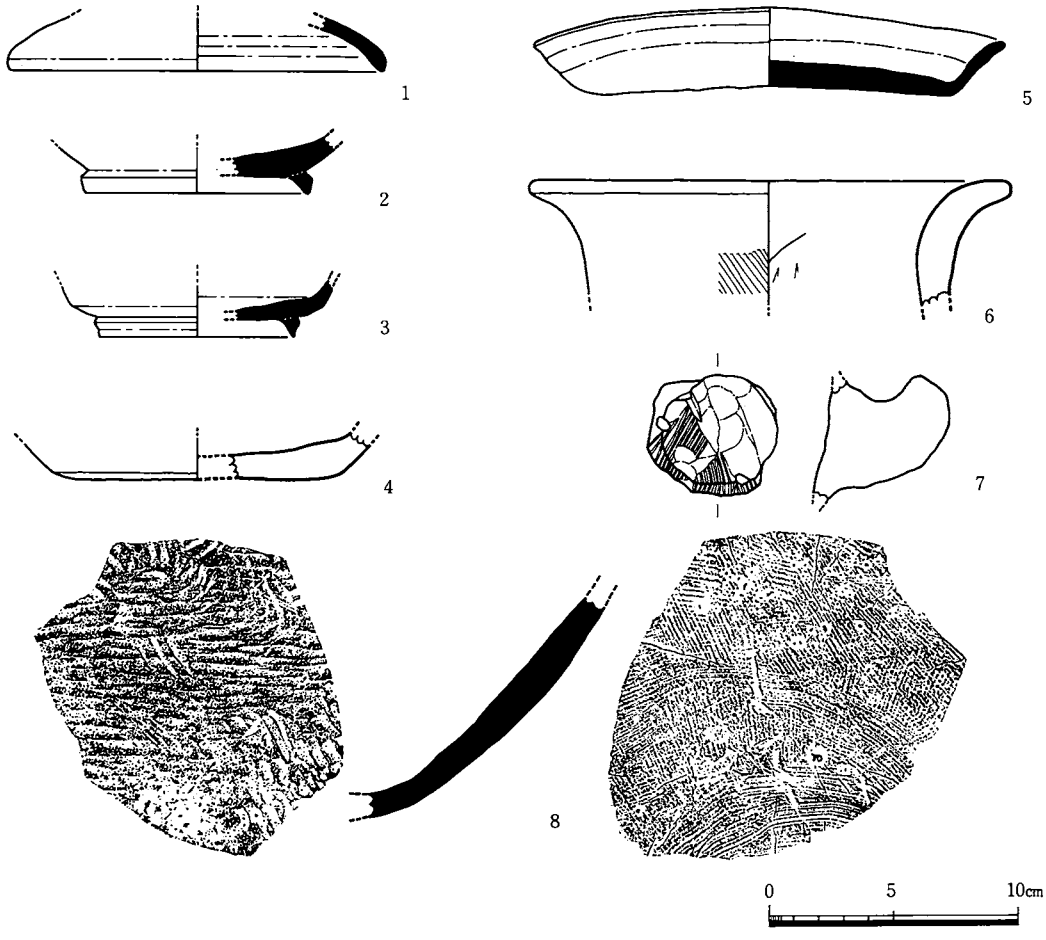
2・3は、共に高台の基部は強くくびれ、外面はナデにより逆くの字状に屈曲し畳付部分は尖っている高台を、外方に開くハの字状に貼り付けたものでⅠG類に属する。4は高台を持たないもので、口縁部が欠出するため形状が不明であることより、Ⅱ類の中のどれに属するかは分からない。4は土師器である。

皿　(5)

口径19.2cmを測る大型の皿である。体部は、底部より外傾しながらストレート気味に立ち上がり口縁部が外反する。底部は回転ヘラ切り離し痕が残る。

土師器甕　(6)

口縁部が屈曲した後、端部に向って大きく外反したもので、Ⅱ類に属する。器面調整は、内面削り、外面ハケ目調整を行っている。



第79図　71－Pグリットピット1内出土遺物実測図

甑把手　（7）

甑の出土は少なく、当遺跡からはこれを含め２点の出土である。把手は指頭による調整を行った後、部分的にハケ目調整が見られる。

須恵器甕　（8）

底部は丸底になると考えられる、底部付近の破片である。内面叩き、外面カキ目による器面調整を行っている。

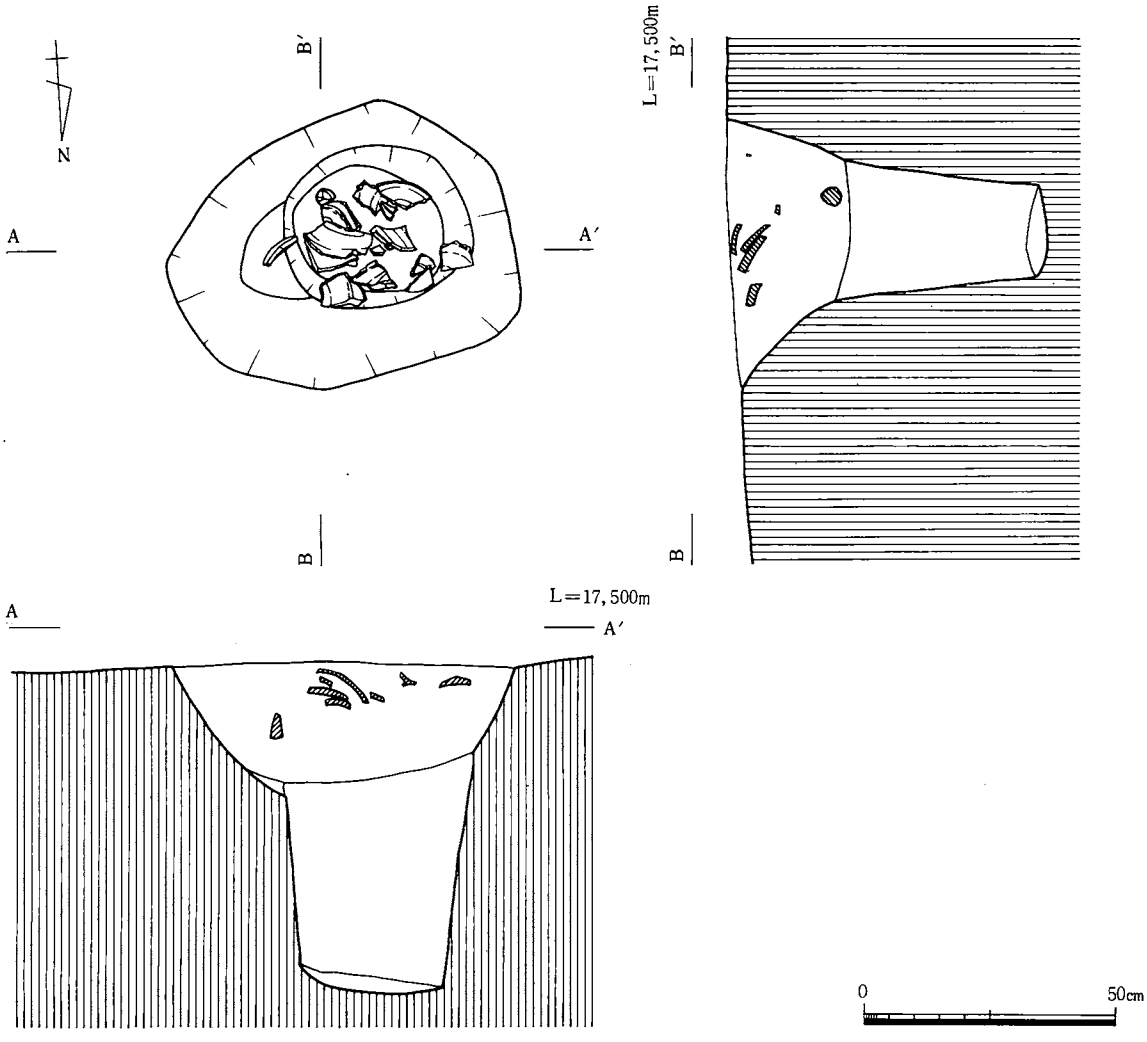
71－Ｐグリッド内ピットNo.２　（第80図）

長径68cm、短径52cm、深さ66cmを測る、平面形が楕円形を呈した２段掘りのピットである。ピット内からは、No.１ピットと同じくピット上部より土師器、須恵器製の椀、高台付坏・坏・蓋・皿・壺・甕などが一括して出土した。出土土器はすべて破片であり、復原可能な土器の出土はない。このピットも、No.１ピット同様、ピットがある程度埋まった段階において破損して使用不可能な土器を一括して一度に投棄したものと考えられる。なお、このピットも掘立柱建物遺構の復原作業においては、建物の柱穴として使用していない。なお遺物より掘立柱建物遺構と同じ奈良時代末から平安時代初頭の遺構と考えられる。

出土遺物　（第81図）

高坏　（1）

口縁部が、内側に大きく屈曲した後やや外傾して立ち上がるもので、口径20.8cmを測る。



第80図　71－Ｐグリッドピット２内遺物出土状態実測図

坏　（2～6）

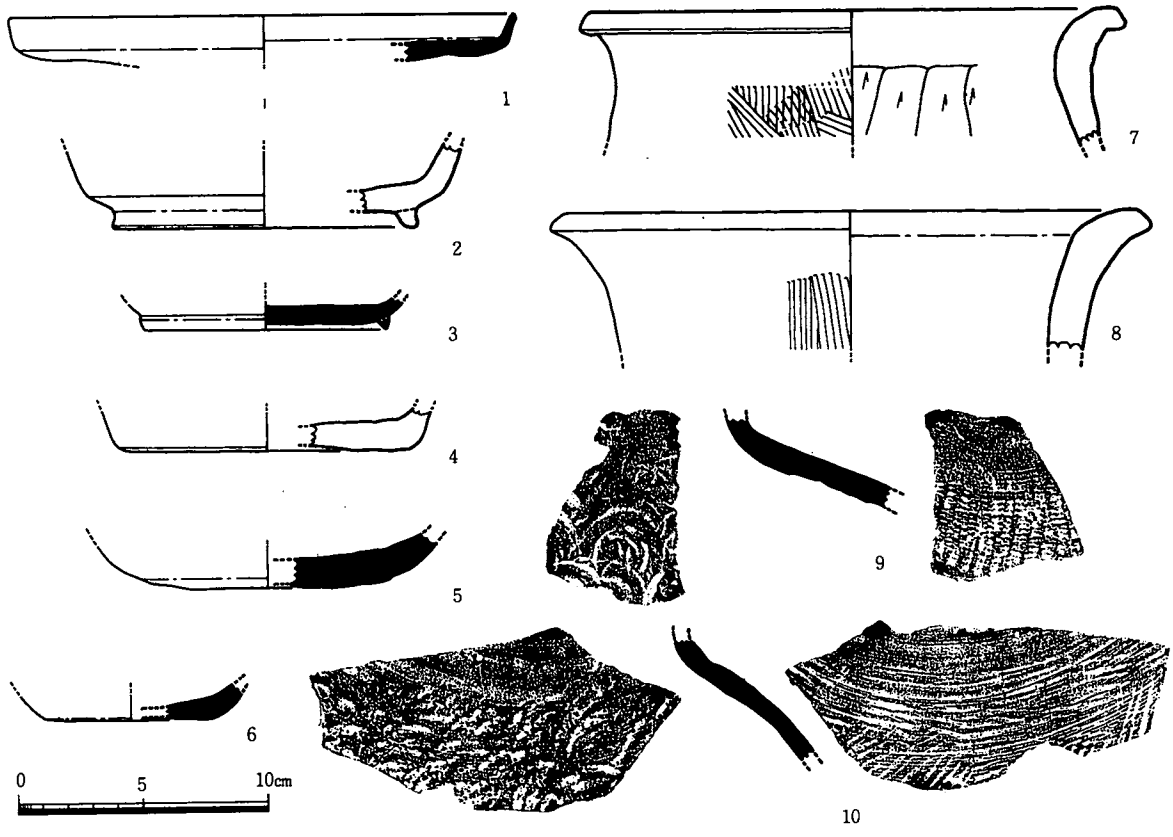
2・3は高台を貼り付けたものでⅠ類に、4～6は高台が付かないものでⅡ類に分類できる。2は底径が大きくなることより椀とも考えられるが、口縁部が欠失するためここでは一応坏に分類した。断面形が方形を呈した肉厚の高台を外方に向って開くように貼り付けたもので、分類ではⅠF類に属するものである。土師器である。3は須恵器で、高台は外面下端を強くナデているため逆くの字状に屈曲し稜を有しており、また外方に開き畳付き部分は尖っている。ⅠG類に分類できる。4～6は口縁部を欠失するためⅡ類のどれに属するかは不明である。4は土師器である。

土師器甕　（7・8）

7は口縁部近くで内側に屈曲しくびれた後、端部に向って大きく外反しているもので、分類ではⅡ類に属するものである。口径は21.8cmを測り、器面調整は、内面ヘラ削り、外面ハケ目調整を行っている。8は、胴部よりほぼ直口して立ち上がり口縁部でそのまま外反するもので、口径24cmを測る。Ⅰ類に属するものである。

須恵器甕　（9・10）

共に胴部が張り、頸部より上を欠失するため口縁部の形状は不明だが、頸部がくの字状に屈曲するものと考えられ、ⅡまたはⅢ類に属する破片と考えられる。器面調整は、9が内面同心円叩き、外面格子目叩きで、10が内面同心円叩き、外面カキ目調整を行っている。



第81図　71—P グリッドピット2内出土遺物実測図

番号	区 グリッド	遺　構	器種	法量（口径・底径・高さ又は現存高）	胎　土	焼　成	色　調	調整及び特徴	備考
1	Ⅳ次Ⅶ区 81-O.P	SB−401 Pit 1 内	甕	口　径　33.4cm 現存高　9 cm	3 mm径の小石及び砂粒を含む	良	内面一褐色所々橙色 外面一橙色	口縁部は内外面共に横ナデ 外面胴部は縦方向のハケ目の後ナデ調整	土師器
2	Ⅳ次Ⅶ区 81-O.P	SB−401 Pit11内	坏		砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内外面共に灰白色	内外面共に横方向のナデ調整 底部はヘラ切り離し、底部	須恵器
3	Ⅳ次Ⅶ区 76.79-O.P	SB−404 Pit 1 内	坏	現存高　1 cm	砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内面一灰白色 外面一青灰色	内外面共にナデ調整 底部はヘラ切り	須恵器
4	Ⅳ次Ⅶ区 74-O.P	SB−406 Pit 4 内	坏	底　径　11.6cm 現存高　1.1cm	砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内外面共に灰色	坏高台部 内外面共に横ナデ調整	須恵器
5	Ⅳ次Ⅶ区 71-P.Q	SB−411 Pit 1 内	甕	口　径　25cm 現存高　4.1cm	黒雲母、砂粒を多量に含む	良	内外面共に浅黄橙色	口縁、内面口縁下部付近よりヘラケズリを施すが、他は内外面共に横ナデ調整	土師器
6	Ⅳ次Ⅶ区 71-P.Q	SB−411 Pit 4 内	坏	口　径　13.2cm 現存高　2.6cm	砂粒を若干含む 密	良	内外面共に灰白色	内外面共に横方向のナデ調整	須恵器
7	Ⅳ次Ⅶ区 69.70-P.Q	SB−413 Pit11内	蓋	現存高　1.4cm	砂粒を多量に含む　緻密	良好　堅緻	内面一灰白色 外面一暗緑灰色	内外面共に横ナデ調整 ボタン状の鈕を有する	須恵器
8	Ⅳ次Ⅶ区 69.70-N.O	SB−415 Pit 9 内	坏		砂粒を含む	良	内外面共に浅橙色	坏の高台？　内外面共に横ナデ調整 継目よりはがれている	土師器

第５表　掘立柱建物跡柱穴内出土遺物観察表

番号	区 グリッド	遺　構	器種	法量（口径・底径・高さ又は現存高）	胎　土	焼　成	色　調	調整及び特徴	備考
1	Ⅳ次Ⅶ区 75—O	SX−410	皿	口　径　13.7cm 高　さ　1.9cm	砂粒を含む 緻密	やや不良	内外面共に灰白色	内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り後横ナデ調整	須恵器
2	Ⅳ次Ⅶ区 75—O	SX−410	坏	口径13cm 底径9cm 高さ3.7cm	砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内外面共に灰白色	内外面共に横ナデ調整、底部は回転ヘラ切離し全体にミズビキ痕残る	須恵器
3	Ⅳ次Ⅶ区 75—O	SX−410 Pit 3	坏	口径14cm 底径9.4cm 高さ4.4cm	砂粒を多量に含む　緻密	良好　堅緻	内外面共に灰白色	内外面共に横ナデ調整、底部は回転ヘラ切離し全体にミズビキ痕残る	須恵器
4	Ⅳ次Ⅶ区 75—O	SX−410	坏	口　径　15.2cm 現存高　4.4cm	砂粒を少量含む 緻密	良好　堅緻	内外面共に灰色	内外面共に横ナデ調整 全体にミズビキ痕残る	須恵器
5	Ⅳ次Ⅶ区 75—O	SX−410 1 層	坏	口径12.8cm底径9.2cm 高さ4.4cm	砂粒を含む 密	不良	内面一黄橙色 外面一赤褐色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
6	Ⅳ次Ⅶ区 75—O	SX−410	坏	口径13.6cm底径9.3cm 高さ4.2cm	砂粒を少量含む 緻密	良好　堅緻	内外面共に灰白色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り離し 全体にミズビキ痕残る	須恵器
7	Ⅳ次Ⅶ区 75—O	SX−410	坏	底　径　11.4cm	砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内面一灰白色 外面一灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
8	Ⅳ次Ⅶ区 75—O	SX−410	埦	底　径　11.5cm 現存高　6.9cm	砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内面一灰白色 外面一灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り離し	須恵器
9	Ⅳ次Ⅶ区 75—O	SX−410	蓋	口　径　15.2cm	砂粒及び１mm径の小石を若干含む　緻密	良好　堅緻	灰色	内外面共に横ナデ調整	須恵器
10	Ⅳ次Ⅶ区 75—O	SX−410	蓋		砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	灰白色	内外面共に横ナデ調整	須恵器
11	Ⅳ次Ⅶ区 75—O	SX−410	甕		砂粒及び１mm径の小石を若干含む　密	良好	内外面共に橙色	口縁、外面横ナデ、内面口縁部付近は横ナデ、他は横ナデの後ヘラケズリ、全面にススが付着	土師器
12	Ⅳ次Ⅶ区 75—O	SX−410	甕	口　径　20.8cm	砂粒及び黒雲母等を含む　密	良好	内外面共に黄橙色	口縁、内外面共に横ナデ調整	土師器
13	Ⅳ次Ⅶ区 75—O	SX−410	甕	口　径　22.8cm 現存高　6.7cm	砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内外面共に灰白色	口縁部片、内面口縁上部横ナデに続いて頸部のくびれまで横方向のヘラケズリ、肩部は横ナデ、胴部横ナデの後タタキ、外面は頸部くびれまで横ナデ、その他は横ナデ	須恵器
14	Ⅳ次Ⅶ区 75—O	SX−410	甕		砂粒を含む 密	やや不良	内外面共に灰白色	頸部片、内面肩部上部は横ナデに続いてナデの後タタキ、外面は頸部のくびれ部のみ横ナデ、他はナデの後格子目タタキ調整	須恵器

第６表　ＳＸ-410（竪穴住居址）内出土遺物観察表

番号	区 グリッド	遺　構	器種	法量（口径・底径・高さ又は現存高）	胎　土	焼　成	色　調	調整及び特徴	備考
1	Ⅳ次Ⅶ区 80.81-P	SX−401	蓋		砂粒を含む 密	良好	内外面共に灰白色	内外面共に横ナデ調整	須恵器
2	Ⅳ次Ⅶ区 80.81-P	SX−401	蓋		砂粒を含む	良好	内面一浅黄橙色 外面一橙色	内外面共に横ナデ調整	土師器
3	Ⅳ次Ⅶ区 80.81-P	SX−401	坏	底　径　11.6cm	砂粒を若干含む 密	やや不良	内外面共に灰黄色土	内外面共に横ナデ調整、底部は回転ヘラ切りの後横ナデ、高台付	須恵器
4	Ⅳ次Ⅶ区 80.81-P	SX−401	坏		砂粒を含む 密	良好	内外面共に灰色	内外面共に横ナデ調整	須恵器
5	Ⅳ次Ⅶ区 80.81-P	SX−401	甕		小石及び砂粒を含む	良	内外面共に橙色	内外面共に横ナデ調整	土師器

第７表　ＳＸ-401内出土遺物観察表

番号	区 グリッド	遺　構	器種	法量（口径・底径・高さ又は現存高）	胎　土	焼　成	色　調	調整及び特徴	備考
1	Ⅳ次Ⅶ区 77-Q-R	SX−404	器種 不明	底　径　7.7cm 現存高　1.3cm	砂粒を若干含む 緻密	良好　堅緻	内外面共に灰色	内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
2	Ⅳ次Ⅶ区 77-Q-R	SX−404	鉢	口　径　29cm 現存高　6cm	砂粒及び鉱物を含む　密	良好	内面一黄橙色 外面一橙色	外面横ナデ調整、内面は口縁部付近は横ナデ、他は横方向のヘラケズリ	土師器

第８表　ＳＸ-404内出土遺物観察表

番号	区 グリッド	遺構	器種	法量（口径・底径・高 き又は現存高）	胎土	焼成	色調	調整及び特徴	備考
1	Ⅳ次Ⅶ区 76-P.Q	SX—405	蓋		砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内外面共に灰色	内外面共に横ナデ調整	須恵器
2	Ⅳ次Ⅶ区 76-P.Q	SX—405	坏	口径13.3cm 底径 9.2cm 高さ5.5cm	砂粒を少量含む 密	不良	内外面共に灰色	高台が付く、回転ヘラ切り 内外面共に横ナデ調整	須恵器
3	Ⅳ次Ⅶ区 76-P.Q	SX—405	坏	底径 10.2cm 現存高 1.7cm	砂粒を少量含む 緻密	良好　堅	内外面共に灰色	内外面共に横ナデ、底部は回転ヘラ切り、高台が付く	須恵器
4	Ⅳ次Ⅶ区 76-P.Q	SX—405	坏	口径12.8cm 底径 7.7cm 高さ3.6cm	1mm径の小石及び砂粒を少量含む　緻密	良好　堅緻	内外面共に灰白色	内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
5	Ⅳ次Ⅶ区 76-P.Q	SX—405	坏	口径16.5cm 底径 10cm 高さ5.5cm	砂粒を多量に含む　密	やや不良	内外面共に浅黄橙色	内外面共に横ナデの後、赤色顔料塗布、底部は回転ヘラ切り	土師器
6	Ⅳ次Ⅶ区 76-P.Q	SX—405	埦	口径 20.4cm 現存高 6.6cm α	砂粒を含む 緻密	良好	内面—灰白色 外面—灰色	高台が付く、回転ヘラ切り 内外面共に横ナデ調整	須恵器
7	Ⅳ次Ⅶ区 76-P.Q	SX—405	長頸壺	頸部最大径20.3cm 底径13cm 現存高7.9cm	砂粒を若干含む 緻密	良好　堅緻	内外面共に灰色	内外面共に横ナデ調整 高台が付く、回転ヘラ切り	須恵器
8	Ⅳ次Ⅶ区 76-P.Q	SX—405	甕	口径 13.6cm 現存高 4.1cm	砂粒を多く含む 緻密	良	内外面共に灰白色	内外面共に横ナデ調整	須恵器
9	Ⅳ次Ⅶ区 76-P.Q	SX—405	甕		砂粒を含む 密	やや不良	内面—灰白色 外面—灰色	内面同心円叩き、外面カキ目調整	須恵器
10	Ⅳ次Ⅶ区 76-P.Q	SX—405	甕		砂粒を多量に含む	良	内面—黄灰色 外面—灰白色	内面同心円叩き、外面カキ目調整	須恵器

第９表　ＳＸ-405内出土遺物観察表

番号	区 グリッド	遺構	器種	法量（口径・底径・高 き又は現存高）	胎土	焼成	色調	調整及び特徴	備考
1	Ⅳ次Ⅶ区 75—P	SX—406	坏		砂粒を若干含む 密	良好　堅緻	内面—灰色 外面—暗青灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整	須恵器
2	Ⅳ次Ⅶ区 75—P	SX—406	器種 不明	底径16.6cm	砂粒を含む	やや不良	内外面共に黄橙色	内外面共に横ナデ調整 底部はヘラ切りか？	土師器
3	Ⅳ次Ⅶ区 75—P	SX—406	甑		砂粒を含む	やや不良	内外面共に橙色	内外面共に横ナデ調整	土師器

第10表　ＳＸ-406内出土遺物観察表

番号	区 グリッド	遺構	器種	法量（口径・底径・高 き又は現存高）	胎土	焼成	色調	調整及び特徴	備考
1	Ⅳ次Ⅶ区 75.76-O	SX—409	蓋		砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内外面共に灰色	内外面共に横ナデ調整	須恵器
2	Ⅳ次Ⅶ区 75.76-O	SX—409	蓋		砂粒を若干含む 密	良好　堅緻	内面—灰白色 外面—灰色	内外面共に横ナデ調整 天井部はヘラケズリ	須恵器
3	Ⅳ次Ⅶ区 75.76-O	SX—409	甕		砂粒を多く含む	良	内外面共に橙色	内外面共に横ナデ調整	土師器
4	Ⅳ次Ⅶ区 75.76-O	SX—409	高坏	現存高 4.6cm	砂粒を含む 密	良好　堅緻	内面—暗灰色 外面—灰色	脚部、内外面共に横ナデ調整	須恵器
5	Ⅳ次Ⅶ区 75.76-O	SX—409	甕		砂粒を含む 密	良好　堅緻	内面—灰色 外面—灰白色	内面頸部は横ナデ、肩部はタタキ 外側は櫛状工具によるカキ目調整	須恵器

第11表　ＳＸ-409内出土遺物観察表

番号	区 グリッド	遺構	器種	法量（口径・底径・高 き又は現存高）	胎土	焼成	色調	調整及び特徴	備考
1	Ⅳ次Ⅴ区 63.64-Q	SX—412	蓋	口径 12.5cm 現存高 1.8cm	砂粒を含む 密	良好　堅緻	内面—表橙色 外面—灰白色	内外面共に横ナデ調整	須恵器
2	Ⅳ次Ⅴ区 63.64-Q	SX—412	蓋		砂粒を若干含む 緻密	良好	内外面共に灰色	内外面共に横ナデ調整	須恵器
3	Ⅳ次Ⅴ区 63.64-Q	SX—412	坏	口径 17.6cm 現存高 5.2cm	砂粒を含む	良好	内面—浅黄橙色 外面—橙色	内外面共に横ナデ調整	土師器
4	Ⅳ次Ⅴ区 63.64-Q	SX—412	高坏		砂粒を多量に含む　密	良好	内外面共に橙色	杯部？　内外面共に研磨調整	土師器
5	Ⅳ次Ⅴ区 63.64-Q	SX—412	甕		砂粒及び雲母を含む	良好	内外面共に橙色	口縁、内外面共に横ナデ調整	土師器
6	Ⅳ次Ⅴ区 63.64-Q	SX—412	甕		砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内面—灰白色 外面—緑灰色	内面頸部は横ナデ、肩部はタタキ、外面はタタキ調整、外面には自然釉がかかる	須恵器

第12表　ＳＸ-412内出土遺物観察表

番号	区 グリッド	遺構	器種	法量（口径・底径・高 き又は現存高）	胎土	焼成	色調	調整及び特徴	備考
1	Ⅳ次Ⅴ区 60.61-P	SX—413	蓋		砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内外面共に灰白色	内外面共に横ナデ調整	須恵器
2	Ⅳ次Ⅴ区 60.61-P	SX—413	蓋		砂粒を含む 密	良好　堅緻	内外面共に灰白色	内外面共に横ナデ調整	須恵器
3	Ⅳ次Ⅴ区 60.61-P	SX—413	蓋	口径 17.6cm 現存高 1.1cm	砂粒を含む 密	良好　堅緻	内外面共に灰白色	内外面共に横ナデ調整	須恵器
4	Ⅳ次Ⅴ区 60.61-P	SX—413	坏	口径12.8cm 底径 8.6cm 高さ4.5cm	砂粒を含む 密	良好　堅緻	内面—青灰色 外面—灰色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部はヘラ切り	須恵器
5	Ⅳ次Ⅴ区 60.61-P	SX—413	坏	底径 6.4cm 現存高 2.0cm	砂粒を含む 密	不良	内面—黒色 外面—黄橙色	高台付、内外面共にナデ調整	土師器
6	Ⅳ次Ⅴ区 60.61-P	SX—413	甕		砂粒、黒雲母、金雲母等を含む	良好	内外面共に黄褐色	内外面共に横ナデ調整	土師器

第13表　ＳＸ-413内出土遺物観察表

番号	区 グリッド	遺　構	器種	法量（口径・底径・高 き又は現存高）	胎　土	焼　成	色　調	調整及び特徴	備　考
1	Ⅳ次Ⅶ区 72－P	SX－408	蓋		砂粒を若干含む 緻密	良好　堅緻	内外面共にオリーブ黒、内外面共に自然釉がかかる	内外面共に横ナデ調整	須恵器
2	Ⅳ次Ⅶ区 72－P	SX－408	坏		砂粒を若干含む 緻密	良好　堅緻	内外面共に灰オリーブ色	高台付、内外面共に横ナデ調整 底部はヘラ切り	須恵器

第14表　ＳＸ-408内出土遺物観察表

番号	区 グリッド	遺　構	器種	法量（口径・底径・高 き又は現存高）	胎　土	焼　成	色　調	調整及び特徴	備　考
1	Ⅳ次Ⅶ区 71－P	Pit 1 内	蓋	口　径　15cm 現存高　2.2cm	砂粒を多量に含む　緻密	良好　堅緻	内面一灰黄色	内外面共に横ナデ調整	須恵器
2	Ⅳ次Ⅶ区 71－P	Pit 1 内	坏	底　径　9 cm 現存高　1.8cm	2～3mm径の小石及び砂粒を少量含む　密	良好　堅緻	内外面共に灰色	内外面共に横ナデ調整、底部は回転ヘラ切後横ナデ調整	須恵器
3	Ⅳ次Ⅶ区 71－P	Pit 1 内	坏	底　径　7.8cm 現存高　2 cm	砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内外面共に灰色	内外面共に横ナデ調整、底部は回転ヘラ切り後ナデ調整	須恵器
4	Ⅳ次Ⅶ区 71－P	Pit 1 内 P－32	坏	底　径　9.4cm 現存高　、1.4cm	1～1.5mm径の小石及び砂粒を多量に含む	やや不良	内面一橙色 外面一灰褐色	内外面共に横ナデ調整、底部はナデの前底部片にヘラ切か？	土師器
5	Ⅳ次Ⅶ区 71－P	Pit 1 内	皿	口径18.9cm 底部 14.6cm 高さ3.2cm	砂粒を若干含む 緻密	良好　堅緻	内面一灰黄色 外面一灰色	内外面共に横ナデ調整、底部は回転ヘラ切り後ナデ調整	須恵器
6	Ⅳ次Ⅶ区 71－P	Pit 1 内	甕	口　径　19.2cm 現存高　4.5cm	長石、雲母粒、砂粒を含む	良	内面一黄橙色 外面一浅橙色	口縁、内面口縁上部から端部まで横ナデ 胴部はヘラケズリ、外面上部はハケ目の後横ナデ、下部は縦方向のハケ調整	土師器
7	Ⅳ次Ⅶ区 71－P	Pit 1 内 P－8	甑 把手		雲母、長石粒及び砂粒を含む	良	内外面共に橙色	指頭による形の成形を行った後、ハケ目調整、内外面に指頭痕が残る 甑把手	土師器
8	Ⅳ次Ⅶ区 71－P	Pit 1 内	甕		砂粒を含む 密	良好　堅緻	内面一灰オリーブ色 外面一オリーブ黒	底部片か？　内面タタキ、外面はタタキ調整の後カキ目	須恵器

第15表　71-Ｐグリッド・ピット１内出土遺物観察表

番号	区 グリッド	遺　構	器種	法量（口径・底径・高 き又は現存高）	胎　土	焼　成	色　調	調整及び特徴	備　考
1	Ⅳ次Ⅶ区 71－P	Pit 2 内	高坏	口　径　20.4cm 現存高　1.9cm	砂粒を含む 緻密	良好　堅緻	内面一褐灰色 外面一黒色	内外面共に横ナデ調整	須恵器
2	Ⅳ次Ⅶ区 71－P	Pit 2 内 P－3	坏	底　径　12.1cm 現存高　3.1cm	1～1.5mm径の小石及び砂粒を若干含む	良	内外面共に橙色	内外面共に横ナデ調整 底部はヘラ切り	土師器
3	Ⅳ次Ⅶ区 71－P	Pit 2 内	坏	底　径　9.8cm 現存高　1.1cm	1 mm径の小石及び砂粒を若干含む　緻密	良好　堅緻	内面一灰色 外面一灰白色	内外面共に横ナデ調整	須恵器
4	Ⅳ次Ⅶ区 71－P	Pit 2 内 P－2	坏	底　径　11.6cm 現存高　1.5cm	1 mm径の小石、砂粒を含む	良好	内外面共に浅黄橙色	内外面共に横ナデ調整 底部はヘラ切り	土師器
5	Ⅳ次Ⅶ区 71－P	Pit 2 内	坏	底　径　9.8cm 現存高　1.8cm	砂粒を若干含む 緻密	良好	内面一灰オリーブ色 外面一オリーブ黒	内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り、外面には自然釉（緑色）がかかる	須恵器
6	Ⅳ次Ⅶ区 71－P	Pit 2 内	坏	底　径　6.8cm 現存高　1 cm	砂粒を含む 密	良　堅緻	内面一褐灰色 外面一灰白色	内外面共に横ナデ調整 底部は回転ヘラ切り	須恵器
7	Ⅳ次Ⅶ区 71－P	Pit 2 内 P－11	甕	口　径　21.8cm 現存高　5 cm	長石、角セン石及び砂粒を多量に含む	良	内外面共に黄橙色	口縁、内外面共に横ナデ、内面は頸部のくびれ部分より縦方向のヘラケズリ、外面は端部ハケの後横ナデ、胴部はハケ目調整	土師器
8	Ⅳ次Ⅶ区 71－P	Pit 2 内 P－6	甕，	口　径　24cm 現存高　5.5cm	1～1.5mm径の小石、角セン石、砂粒を含む	良好	内面一にぶい橙色 外面一黄橙色	口縁、内外面共にほぼ横ナデ調整を施すが外面胴部付近は縦方向のハケ目調整	土師器
9	Ⅳ次 71－P	Pit 2 内	甕		砂粒を含む 密	良好　堅緻	内外面共に灰色	内外面共にタタキ調整を施すが、頸部付近は内外面共にタタキの後横ナデ調整	須恵器
10	Ⅳ次Ⅶ区 71－P	Pit 2 内	甕		砂粒は殆んど含まない　緻密	良好　堅緻	内面一暗赤褐色 外面一黄灰色	内面上部は横ナデ、続いてタタキの後横ナデ調整をし外側は上部横ナデに続いてカキ目調整が胴部へ	須恵器

第16表　71-Ｐグリッド・ピット２内出土遺物観察表

溝

ＳＤ－401

調査Ⅶ区82－Ｏグリッド内より検出した溝遺構である。溝の東側、西側は共に調査区外へ延びるため全長は不明であるが、検出長9.50m、幅0.79m、深さ17～11cmを測り、溝断面は皿状を呈している。溝の流方向はＮ－72°00′－Ｗを取り掘り込まれ、溝埋土は黒色土の単一層である。本溝遺構は、ＳＤ－ 402と切合い関係にあり、土色及び表面観察の結果、本溝遺構が埋没後にＳＤ－402が切って掘られていることが確認され、時期的にはＳＤ－402が新しく、本溝遺構が古いことが判明した。本溝遺構は、流方向でＳＤ－404とほぼ同じくしており同時期の遺構と考えられるが、他の溝遺構と同じく遺物の出土がないため、時期判定は困難であるが、埋土より他の溝遺構と同じく奈良時代末から平安期頃の遺構と考えられる。

ＳＤ－403

調査Ⅶ区75・76－Ｏグリッド内より検出した溝遺構である。溝の北側部分が調査区外へ延びるため、全長は不明であるが、検出長8.52m、幅0.45m、深さ９cmを測り、溝断面は皿状を呈している。溝の流方向は、Ｎ－７°50′－Ｅであり、溝埋土は、黒色土の単一層である。本溝遺構は、ＳＤ－405、406と流方向をほぼ

同じくしており、また埋土も同色で断面形状も同じであることより同一時期の溝と考えられる。溝の時期は、遺構内から遺物の出土がないため不明であるが、遺構埋土より奈良時代末から平安期頃の遺構と考えられる。

ＳＤ－404

調査Ⅶ区75・76－Ｏ・Ｐグリッド内より検出した溝遺構である。溝の東側部分が調査区外へ延びるため、全長は不明であるが、検出長16.7m、幅0.54～0.36m、深さ22～12cmを測り、溝断面は皿状を呈している。溝の流方向は、Ｎ－80°40′－Ｗである。溝の埋土は、黒色土の単一層である。本溝遺構は、ＳＤ－403とほぼ直交する形で掘り込まれており、また埋土が同色であることより、関連を持って同時期に掘られた可能性が強い。溝は、途中数個所で途切れている部分が見られるが、これは溝の深さが浅いことより削平を受けた可能性が強く、同一の溝であろうと考えられる。溝の時期は、遺構内から遺物の出土がないため不明であるが、東側部分がＳＸ－409(大型土壙遺構) と切り合い関係にあり、検出段階での表面観察の結果両遺構の埋土に差異が認められ、ＳＸ－409がほぼ完全に埋没した後に溝が掘り込まれていることより、ＳＤ－403と同時期で大型土壙群より新しい時期、奈良時代末から平安期頃の遺構と考えられる。

ＳＤ－405

調査Ⅶ区72－Ｎ・Ｏグリッド内より検出した溝遺構である。溝の北側部分は、一部調査区外へ延びるため全長は不明であるが、検出長5.26m、幅0.54～0.17m、深さ８～３cmを測り、溝断面は皿状を呈している。溝の流方向は、Ｎ－７°00′－Ｅを取り掘り込まれ、溝埋土は、黒色土の単一層である。本溝遺構は、ＳＤ－406と12m程離れているが、流方向がほぼ同じであり埋土が同色であることより同時期の溝と考えられ、また溝の深さが浅いことより、削平を受けＳＤ－406までの間が消滅している可能性も考えられ、同一の遺構である可能性も考えられる。時期は、遺構内からの遺物の出土がないため不明であるが、遺構埋土より奈良時代末から平安期頃の遺構と考えられる。

ＳＤ－406

調査Ⅶ区71－Ｐグリッド内より検出した溝遺構である。溝は完結しており、全長5.58m、幅0.35～0.15m、深さ10～８cmを測り、溝断面は皿状を呈している。溝の流方向は、Ｎ－５°30′－Ｅを取り掘り込まれている。溝埋土は、黒色土の単一層である。本溝遺構は、ＳＤ－405と流方向がほぼ同じであり、埋土が同色であることより、同時期の本来一本につながる溝と考えられる。時期は、遺構内から遺物の出土がないため不明であるが、遺構埋土や他溝遺構との関連より奈良時代末から平安期頃の遺構と考えられる。

ＳＤ－408

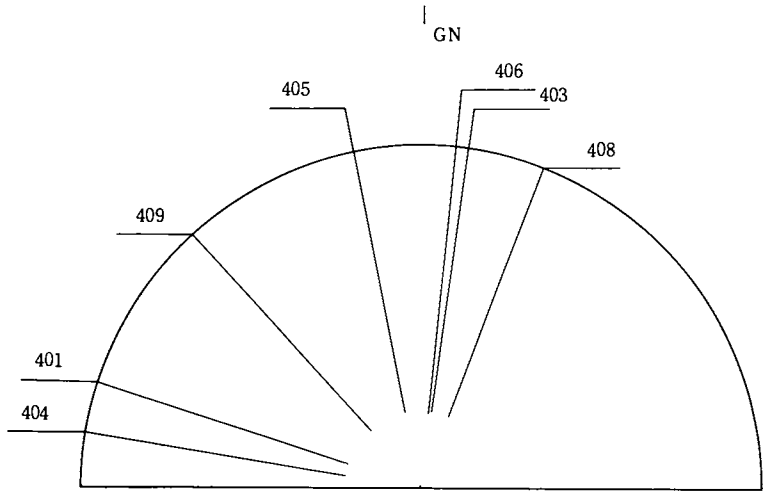
調査Ⅶ区81－Ｐ・Ｑグリッド内より検出した溝遺構である。溝は完結しており全長4.58m、幅0.46m、深さ９～７cmを測り、溝断面は皿状を呈している。溝の流方向はＮ－２°40′－Ｅで、溝埋土は黒色土の単一層である。溝の時期は、遺物の出土がないため不明であるが、埋土より他の溝遺構と同じ奈良時代末から平安期頃と考えられる。

ＳＤ－409

調査Ⅶ区69・70－Ｑグリッド内より検出した溝遺構である。溝は完結しており全長7.39m、幅0.75～0.33m、深さ７cmを測り、溝断面は皿状を呈している。溝の流方向はＮ－42°45′－Ｗで、溝埋土は黒色土の単一層である。溝の時期は、遺物の出土がないため不明であるが、埋土より他の溝遺構と同じ奈良時代末から平安期頃の遺構と考えられる。

	位　置	規　模 現存　長さ × 幅 × 深 (m)	流　向	備　考
SD-401	Ⅶ 82－O	9.50＋α　×0.79×0.17～0.11	72° N－W 00′	SD-402により切られており、SD-402より古い、断面は皿状を示す。 東西側は調査区外に延びる為、全長は不明。断面は皿状を呈する。
SD-403	Ⅶ 75.76－O	8.52＋α　×0.45×0.09	7° N－W 50′	SD-404と直交し、埋土より同時期と考えられる。 断面は皿状を呈する。
SD-404	Ⅶ 75.76－O	16.7＋α　×0.54～0.36 × 0.22～0.12	80° N－W 40′	途中で一部途切れるが、これは遺構が上部より埋込まれる為、Ⅲ層にはあまり達していず、又確認段階でとばしたものと考えられる。断面は皿状を呈している。
SD-405	Ⅶ 72－N.O	5.26＋α　×0.54～0.17 × 0.03～0.08	7° N－W 00′	埋土の土色よりSD-403、404と同時期と考えられる。 断面は皿状を呈している。
SD-406	Ⅶ 71－P	5.58 × 0.35～0.16 × 0.08～0.10	5° N－W 30′	埋土の土色よりSD-403、404、405と同時期と考えられる。 断面は皿状を呈している。
SD-407				
SD-408	Ⅶ 81－P Q	4.58×0.46×0.09～0.07	2° N－W 40′	断面は皿状を呈している。
SD-409	Ⅶ 69.70－Q	7.39×0.75～0.33×0.07	42° N－W 45′	

第17表　溝（SD）遺構一覧表



第82図　溝(SD)流方向方位図

6節　平安時代以降の調査

溝

SD－402

調査Ⅶ区81・82－O・Pグリッド内より検出した溝遺構である。溝は完結しており、全長10.8m、幅1.97m、深さ17～5cmを測る。断面は皿状を呈し、溝の流方向はN－0°00′で真北方向に取り掘られている。溝は、SD－401と切り合い関係にあり、土層断面観察の結果、SD－401を切って掘られていることが確認され、時期的には、本遺構が新しくSD－401が古い溝遺構であることが判明した。本溝遺構の時期は、遺物の出土がないため不明であるが、埋土色やSD－01と切り合い関係にあることより、上限は平安期でSD－401が埋没した後の時期以降から近世期までの間の時期と考えられる。

土　壙

SK－401　（第83図1）

調査V区63－Qグリッド内より検出した土壙である。土壙は、長辺2.21m、短辺1.76m、深さ0.28mを測り、平面形は隅丸長方形を呈し、主軸をN－64°30′－Wに取り、掘り込まれている。土壙内から図化出来るものはないが、平瓦片、瓦質土器片、近世時期の陶磁器類が多く出土していることにより、この土壙は近世時期の土器溜めであろうと考えられる。

SK－402　（第83図2）

調査V区62・63－Qグリッドに検出した土壙である。土壙は、長径1.97m、短径1.47m、深さ0.33mを測り、平面形はほぼ楕円形を呈し、主軸をN－34°20′－Eに取り、掘り込まれている。土壙の西側壁際には、直径約50cm程の円形ピットが1個掘り込まれているが、土壙に伴うものか、別の時期に掘り込まれたものかは、埋土が同じであるため調査時には確認できなかった。土壙内からの出土遺物がないため、遺構の時期は不明であるが、覆土の土色等より他の土壙同様中世期以降の時期の遺構と考えられる。

SK－404　（第83図3）

調査V区63－Pグリッドに検出した土壙である。土壙は、長辺1.64m、短辺1.12m、深さ0.22mを測り、平面形は隅丸長方形を呈し、主軸をN－20°20′－Eに取り、掘り込まれている。土壙内からは、出土遺物が全くないため遺構の時期は不明であるが、覆土の土色等より、他の土壙同様中世期以降の時期の遺構と考えられる。

SK－405　（第83図4）

調査V区63－Pグリッド内より検出した土壙である。土壙は、長径1.30m、短径1.00m、深さ0.33mを測り、平面形は楕円形を呈し、主軸をN－48°40′－Eに取り、掘り込まれている。土壙は、SK－406と切り合っているが、調査時において前後関係は確認できなかったため不明である。土壙内からは、器種不明の瓦質土器片、土師器片が数点出土していることにより、他の土壙同様中世期以降の時期の遺構と考えられる。

SK－406　（第83図5）

調査V区63－Pグリッド内より検出した土壙である。土壙は、長径1.15m、短径0.86m、深さ0.37mを測

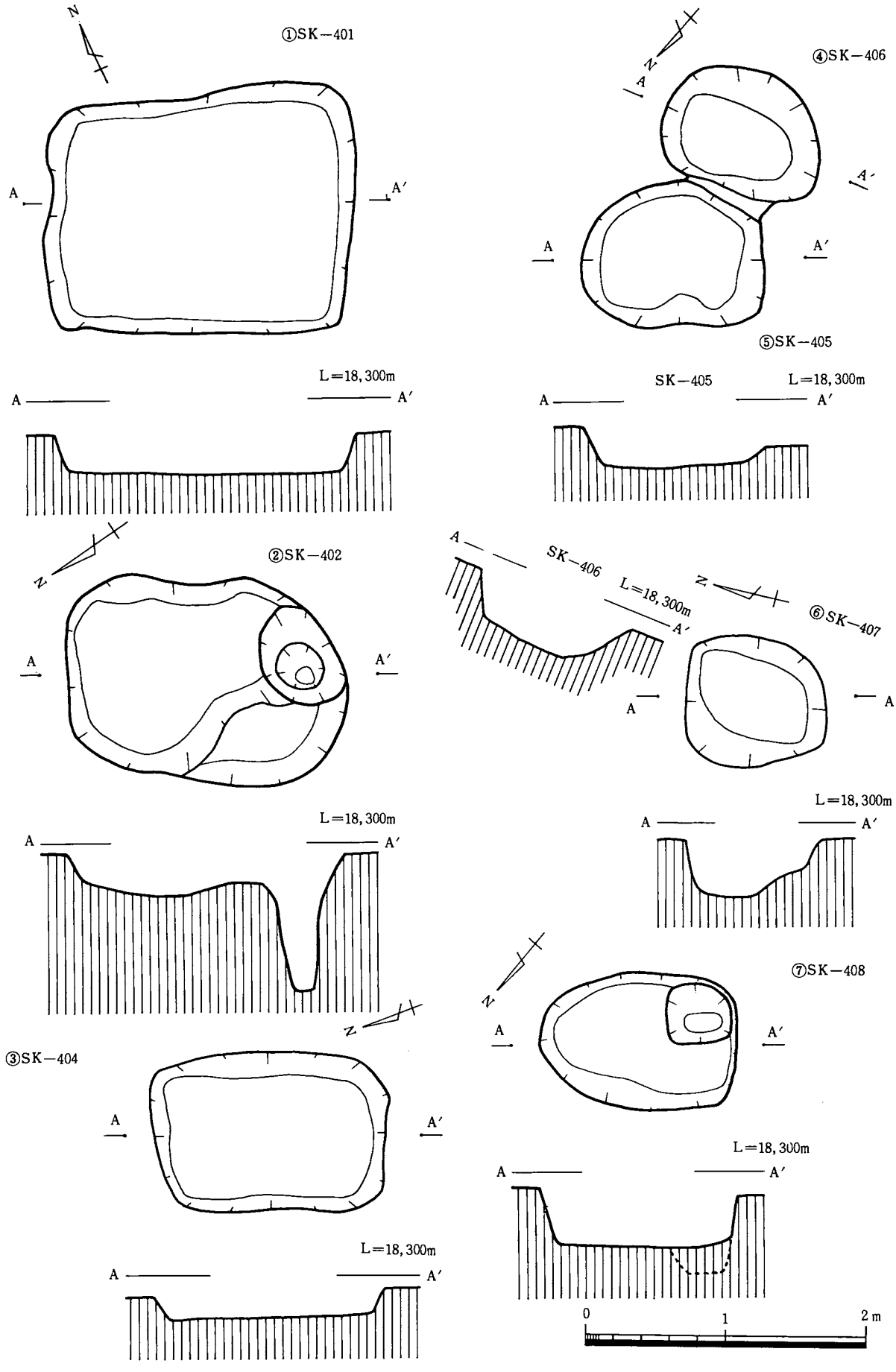
り、平面形は不整楕円形を呈し、主軸をN－71°50′－Eに取り、掘り込まれている。土壙は、SK－405と切り合っているが前後関係は確認できず不明である。土壙内からは、器種不明の瓦質土器片が数点出土していることより、SK－405同様中世期以降の時期の遺構と考えられる。

SK－407　（第83図6）

調査V区63－Pグリッド内より検出した土壙である。土壙は、長径0.97m、短径0.93m、深さ0.40mを測り、平面形は不整円形を呈し、主軸をN－13°15′－Wに取り、掘り込まれている。土壙内からは、器種不明の瓦質土器片、須恵質土器片が出土していることより、他の土壙同様中世期以降の時期の遺構と考えられる。

SK－408　（第83図7）

調査V区63－Pグリッド内より検出した土壙である。土壙は、長径1.39m、短径0.97m、深さ0.42mを測り、平面形は不整楕円を呈し、主軸をN－50°15′－Eに取り、掘り込まれている。土壙の西側壁際には、SK－402同様直径50cm程の円形ピットが1個掘り込まれているが、土壙に伴うものかどうかは調査時に確認できなかったために不明である。土壙内からは、出土遺物がないため、遺構の時期は不明であるが、覆土の土色等より他の土壙同様中世期以降の時期の遺構と考えられる。



第83図　土壙(SK)実測図

第 V 章 総 括

下益城郡松橋町大字曲野字法華寺・長谷川・鳴渕に所在する当曲野遺跡の発掘調査は、昭和55年度の試掘・調査（第Ⅰ次）を初年度とする継続調査で　今回の58年度調査が最終年度調査となった。今回の調査地区は、遺跡の位置する曲野台地を南北に分断する県道145号（松橋〜城南）線の西側部分で　道路近くより調査第Ⅴ区・Ⅵ区・Ⅶ区と調査区を設定し調査を実施した。今回調査した調査区面積は三地区合計約9,000㎡に及んだ。今回の調査地区は、事前の踏査及び試掘調査に結果により縄文時代早期の押型文土器や晩期の粗製土器、古代の須恵器や土師器が認められ　各時代の住居址等の遺構検出が予想されることからこの点を重視し遺構検出に努めた。東西400m にも及ぶ調査地は、野菜や樹木栽培の畑地が主なるものであったが第Ⅴ調査区は根の深い竹山であり、表土剝ぎに難渋の時を過ごさねばならなかったことは思いでの一つでもある。

●旧石器時代

調査の結果、予想以上に旧石器時代の分布域が西側に広がることが判明した。それは、昭和57年度（第Ⅲ次）の発掘調査によって第Ⅲ調査区を主として　むしろ第Ⅰ調査区を越えて東側に広がる傾向と見ていたもので、台地北縁に沿う状況を呈していたのである。第Ⅳ調査区にはっきりした遺物分布が見られず、約100m の空間位をもって　第Ⅴ調査区に再度石器群が分布する事実が判明したのである。第Ⅲ次調査時と同じく石器群の包含層は、第Ⅵ層赤褐色粘質土層である。しかし、その分布密度は薄くなり西側への広がりの終止を物語るのであろう。剝片、砕片を主した中に極めて特徴的な２点の石器が現れる。それは、局部磨製石斧の出土であり　刃部にかすかに見れる磨製は従来のナイフ型石器、台形石器、削器、石核らの石器組成に局部磨製石斧を確実に加えることになる。衝撃的な出現をなした「ＡＴ」下位曲野第Ⅵ層石器群は、改めて以上の石器組成を明確にしたのである。ここで今一度、ナイフ形石器、台形石器の特色を記しておきたい。剝片剝離技術を見ると、大型の剝片も認められることにより　その技術も当然展開を見ていたものと判断しているが、ナイフ形石器、台形石器が示すその素材は、小形かつ不定形のものと捉られる。剝片の鋭い縁辺を刃部として側縁の加工はナイフ形石器には急角度をなすブランティングと平坦剝離が特徴的である。台形石器は、剝片を折り取り急角度の二側縁加工を原則とし、ごくわずかに腹、背面への平坦剝離が認められる。下縁の未加工も特色の一つである。

九州の代表的な石器の一つとしてイメージが強い二側縁加工を施し、斜め整形の端正な大形のナイフ形石器の出現期は、「下城第Ⅱ文化層」すなわち「第Ⅵ層黒色土層」相当の時期と考えている。大形剝片剝離技術の恒常化と曲野第Ⅵ層石器群の展開期の二側縁加工及び平坦剝離とが合いまっての自然的発生とも読み取れようか。否、もう一時期上場第Ⅵ層、石飛分校第Ⅵ層出土に知られる切り出し状ナイフ形石器や、やや大形の二側縁加工をなす斜め整形のナイフ形石器らが介在をなすのであろうか。

下城第Ⅵ層「Ｂ・Ｂ」＝曲野第Ⅴ－ｂ層＝百花台第Ⅶ層＝上場第Ⅵ層＝石飛分校第Ⅵ層等の「Ａ・Ｔ」下位の石器群と明確に比較できる日がやってきてくれればと考えている。

今回の調査でもう一点、それは横剝ぎの剝片を素材とした国府型ナイフ形石器の出土である。第Ⅲ層に出土したものであり、全くの本来の出土層位を示しているものではない。本来的にはどこであるのか確認できていない。

熊本県地域には、未だ明確に国府型ナイフ形石器とされたものの出土はない。いずれにしろ、第Ⅵ層出土石器群との差異が指摘されよう。この石器は、端正な素材の獲得に基ずくもので、剝ぎ取りの連続性の可能

性もあろう。刃部は、長く綿密なブランティングである。この石器に類似する資料を「曲野Ⅰ」で報告している。第Ⅱ次調査時に出土した２点の石器である。三稜尖頭器とナイフ形石器各一点を報告したが、後者は横剝ぎの剝片を素材とし、二側縁加工が優れている。奇しくも３点共出土を明確にしていないのである。しかし、前者の存在から３点を、時期を同じくするものとすれば、三稜尖頭器から「下城第Ⅰ文化層」の時期が求められる。とすれば曲野遺跡で、第Ⅵ層石器群に後行するもう一枚の石器群の存在があることを述べておきたい。層位的には第Ⅴ－ａ層が最もふさわしいものと考えられる。

●縄文時代

縄文時代は、全体的に薄い包含状態であり　土器埋納土壙や前期土器集中部の検出程度に止どまる。層位的な識別も充分ではないが、土器片は各時期を示している。早期の押型文、撚糸文の塞ノ神式土器で　第Ⅲ次調査と相重なる出土状態を示すが、旧石器時代と同じく遺物の包含が薄くなっている。前期に轟式と曽畑式土器が出土している。轟式土器は内外面に条痕が見られ、尖底の底部は轟Ａ式尖底の事例を一つ増やしたことになる。伴うＢ式の状況を知りたく思える。曽畑式土器は集中部の検出が出来ており、出土層は第Ⅲ層中である。第Ⅲ層下部が「アカホヤ」の本来時期と考え、上部は同様の色調を呈するが　土壌化した部分や「アカホヤ」以外の火山灰が混じっている可能性があり。第Ⅲ層に時間差が考えられる。このことで、第Ⅲ層中に含まれる曽畑式土器は「アカホヤ」以降のものと捉られる。南九州地域に続いて曽畑式土器出土位置を確認した一つの事例とできよう。その曽畑式土器は、胴部から底部にかけての大型の深鉢片で口縁部は欠失する。器面の施文は、乱雑そのもので内面も条痕の調整痕をそのまま残している。ほかに出土した破片も口縁部刺突文の省略が進み沈線の粗雑化が著しい。曽畑式土器の中でも古い時期のものではないことを述べておきたい。県内に中期遺跡が少ないことは周知のことであるし、今回の調査でもわずかに竹崎式土器一片が見れるだけである。後・晩期は、条痕文、精製研磨、組織痕文、粗製突帯文、刻目突帯文土器と揃う。土器埋納土壙は、外面全体に赤色顔料を塗布した壺形土器であり口縁部や底部に意図的な打ち欠きが見られ、埋置状態と相まり埋葬遺構とされる。晩期終末期における埋葬の一形態として提示される。

●弥生・古墳時代

弥生・古墳時代の遺物は、量的に少ないことからここではまとめて述べることにする。遺跡立地の変化を如実に示す周囲の主たる古墳群として古保山古墳群、古保里古墳群、松山・柏原古墳群・当尾古墳群等が上げられるが、奇妙なことに曲野地区には古墳がない。水利を伴った可耕地が広がる地域が要求されたものであろうか。

●古代

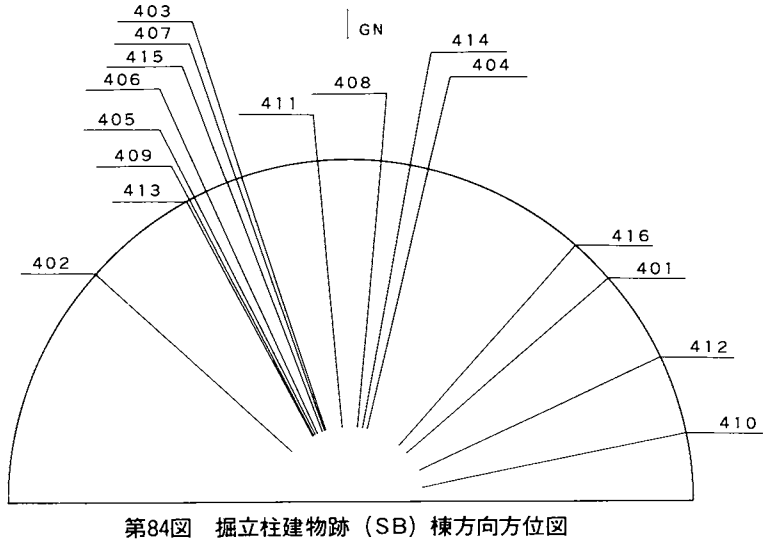
今回当遺跡において検出した遺構、出土した遺物の中心となるのは、土師器、須恵器と掘立柱建物遺構及び竪穴住居址、土壙、溝群である。特に掘立柱建物跡は、調査Ⅶ区に15棟　調査Ⅴ区に１棟の合計16棟が検出され特に調査Ⅶ区に集中している。掘立柱建物跡には、２間×２間の建物で総柱の建物２棟と総柱でない建物１棟の合計３棟、３間×２間の建物で総柱の建物５棟と総柱でない建物７棟の合計12棟、特殊な大型の建物として４間×２間のものが１棟検出された。

大型の建物ＳＢ―404は、Ⅶ区の78・79―Ｏ・Ｐグリッド内に検出されほぼ磁北近くに棟方向をとり建てられている。この建物は、柱穴が大きく直径が約１ｍを測り中の柱痕は直径約35cmを測る。柱穴の埋土は、途中に数枚の堅い層が見られることから　土をつき固めながら埋める版築の技法が使われているようである。このＳＢ―404は、建物群の中でも中心的なもので主屋ではないかと考えられる。また、このＳＢ―404を取り囲むように小さな溝が検出された。溝は、幅が約30cm前後と狭くまた深さもかなり浅いことや、遺構内より遺物の出土が全く無いことから時期の決定および性格付けは出来ないが一辺約50ｍを測り、建物を囲むように掘られている。溝の主軸方向は、ＳＢ―404の主軸方向とほぼ同じであることから、同時期に作られたもの

で建物を取り囲む区域境の溝ではないかと考えられる。この主建物に付属する建物であるが、建物の主軸方向で見てみた場合同方向またはこれに似たような方向の建物は、東側でやや離れた所に位置しているＳＢ—408とＳＢ—414がある。この建物は、２棟共にこの遺跡ではＳＢ—404についで大型のもので総柱の建物ではない。またこの２棟の建物の間にも、南北に小さい溝が走っていることから主建物と考えられるＳＢ—404と何等かの関連が大いにあるものと考えられるが、この３棟の建物の柱穴内からは遺物の出土が無いため時期的な比較検討が出来ず不明である。次に、主軸方位を北北西に取り作られている建物群がある。この建物群は当遺跡より検出されたもののほとんどが含まれＳＢ—403、ＳＢ—405、ＳＢ—406、ＳＢ—407、ＳＢ—409、ＳＢ—413、ＳＢ—415の南北棟と、これらの建物にほぼ直角に方向を違えたＳＢ—410、ＳＢ—412の東西棟で計９棟が上げられる。これら建物の主軸方向には、多少の差はあるが一応許容範囲内とし同じグループとして考えてもよかろう。しかし建物の規模から見た場合２間×２間で総柱のものとそうでないもの、３間×２間で総柱のものとそうでないものがあり、また、同じ規模の建物の中にも面積に大小があり規則性は認められない。最後に、ＳＢ—401とＳＢ—402、２棟の建物のグループがある。この建物のグループは、ＳＢ—402が主軸方向をほぼ北西に取り立てられ　ＳＢ—401がＳＢ—402の主軸方向と直角に方向を違えて建てており、建物の規模も３間×２間の総柱で柱穴の大きさや柱間間隔もほぼ同一で、建物をコの字型に配していることから規格のもとに同時に建てられたもので倉庫と考えられる。以上検出した建物群を、主軸方向を中心に３つのグループに分けたが建物の柱穴内からは遺物の出土がほとんど無いため各建物が建てられた時期を特定することは困難である。しかし、柱穴内の埋土色や遺構周辺より出土した須恵器の形態的特徴より、建物群の時期を奈良時代の終わり頃から平安時代の初め頃に押さえても間違いはないものと考えられる。また、建物間に切り合い関係がほとんど見られないことから、建物相互の前後関係や、同時に併存していた建物を割り出すことは出来ない。しかし、逆に考えれば建物間に切り合い関係が無いということは、建物が建てられた時期が近接しており同時期または、あまり時間差が開かないものと考えられるのではなかろうか。

掘立柱建物跡の時期決定の目安となったのは、前述したように周辺より出土した須恵器と土師器片で、特に須恵器坏の高台部の特徴である。須恵器坏の高台部の特徴は、独特のもので外側を削り、畳付き部分を鳥の嘴状に三角に尖らせたもので、この特徴は下益城郡松橋町萩尾に所在し萩尾窯跡群より出土する通称『萩尾型』と呼ばれる須恵器坏の高台部の特徴と同じで、この窯跡より出土する須恵器は肥後の須恵器編年によると第Ⅶ様式に編年されており、実年代では八世紀代に押さえられている。また、混在して第Ⅷ様式で九世紀代に押さえられている須恵器も出土している。このことから、掘立柱建物跡が建てられた年代を一応奈良時代の終わりから平安時代の始め頃とした。

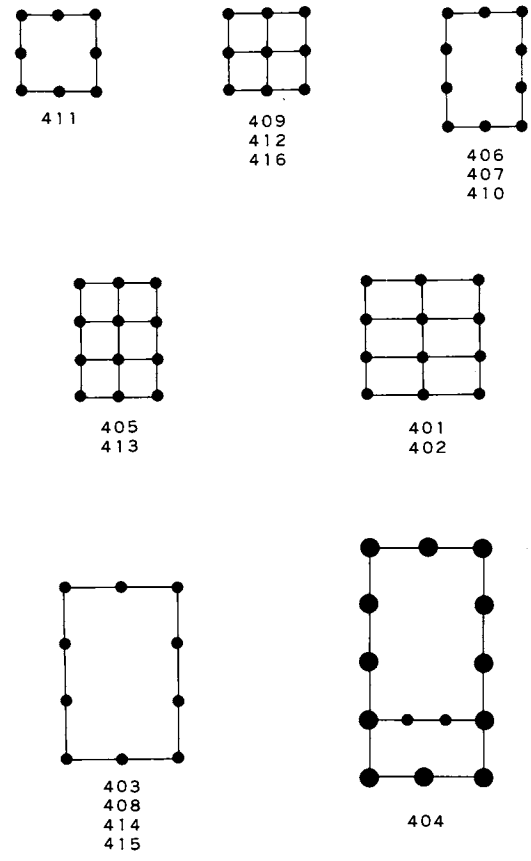
次に、これらの掘立柱建物群が建てられた時期とほぼ同時期と考えられる遺構が、昭和55年度（第Ⅰ次）と昭和56年度（第Ⅱ次）調査のおり検出されたＲＳＤ—01と遺構名が付けられた大溝である。大溝は、調査Ⅰ区から調査Ⅱ区にかけて検出され幅が約２ｍ～３ｍ、深さが約１ｍ～１.2ｍの一辺が約115ｍを測り、ほとん



第84図　掘立柱建物跡（SB）棟方向方位図

どの部分は未調査であるが方形になるものと考えられる。この四至を巡る大溝の内側には、板塀を立てたと考えられる小さな溝が大溝に沿って掘られ、溝の東北コーナー近くには通路となる陸橋部が確認された。

この大溝の時期は、溝の基底部より萩尾窯産の須恵器が出土していることより八世紀の終わり頃に押さえられている。調査者はこの大溝を、作られた時期および規模や周囲に所在する遺跡の性格等から、その特殊性を訴え古代の郡衙またはそれに関連した遺構ではないかと考えられている。今回調査し当地区より検出した掘立柱建物群の時期は、その大溝の時期と合致する。ただし、直接的にこの大溝と関連する掘立柱建物の特定は出来ない。しかし、大溝と関連のある遺構は、溝に囲まれた大型の建物であるＳＢ―404、またはコの字型に建物を配したＳＢ―401、ＳＢ―402の倉庫群のどちらかと考えられるが、コの字型に建物を配した２棟の倉庫群の方が同時併存の可能性は大きい。それは、もし大溝を郡衙関係の遺構と考えた場合、位置関係や建物の役割より郡倉ではないかと考えられるからである。しかし、建物の時期を特定出来ないことや主軸方位の違いより断定は出来ない。また、調査した台地は、現在道路によって東西に分断されているが、道路東側には方形に巡ると考えられる大溝、道路の西側には同じ時期の掘立柱建物群および竪穴住居址があり、両者の間200m程は遺構が全く無い空白地帯となっている。つまり、溝域や倉庫域、居住域と区域別に独立しており、なおかつ広い空間おいていることから、大溝のある所が重要性を帯びた区域ではないかという可能性もでてくる。しかし、今回調査した掘立柱建物群の柱穴内やその周辺、さらには、Ⅰ次・Ⅱ次調査で検出した大溝内およびその周辺からも、墨書土器や木簡等、遺構の特殊性を裏付けるような遺物の出土は全く無い。このことから、上記の一連の遺構を即座に郡衙もしくはそれに関連したものと肯定は出来ない、むしろ否定する材料が多いかもしれないが、特殊性などを考えた場合その可能性も考えられるとしておきたい。

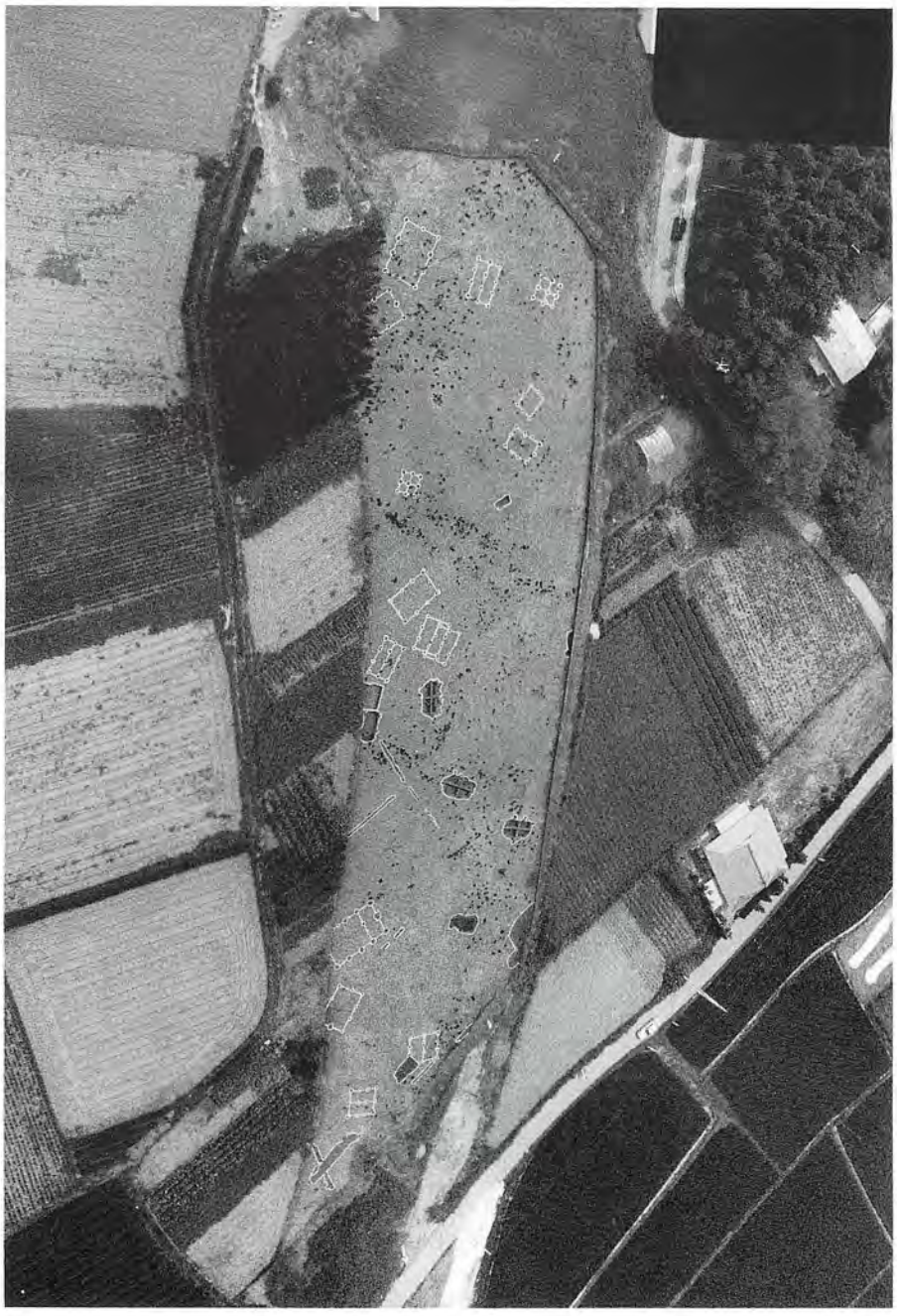


第85図　掘立柱建物（SB）模式図

最後に、今回の調査は昭和55年度からの継続調査で最終年度にあたり、一応台地の末端まで調査を終えることが出来た。しかし、道路敷地内の調査ということで調査範囲が狭く限られていたことから、台地全体の遺構の広がりを明らかに出来なかったが、ある程度は押さえられたと思う。ただ、道路敷地内には数ヵ所の未買収地が残っており、特に調査Ⅰ区に検出された大溝の中心部に当たる部分がまだ未調査であることから、この部分の調査および大溝の周辺、調査Ⅻ区の建物群の周辺の調査を実施すれば、大溝の性格や遺跡全体の性格を解明出来る手掛かりが得られるものと考えられ、今後に期待したい。

図　版

図版1



調査Ⅶ区全景

図版2

Ⅴ区表土はぎ

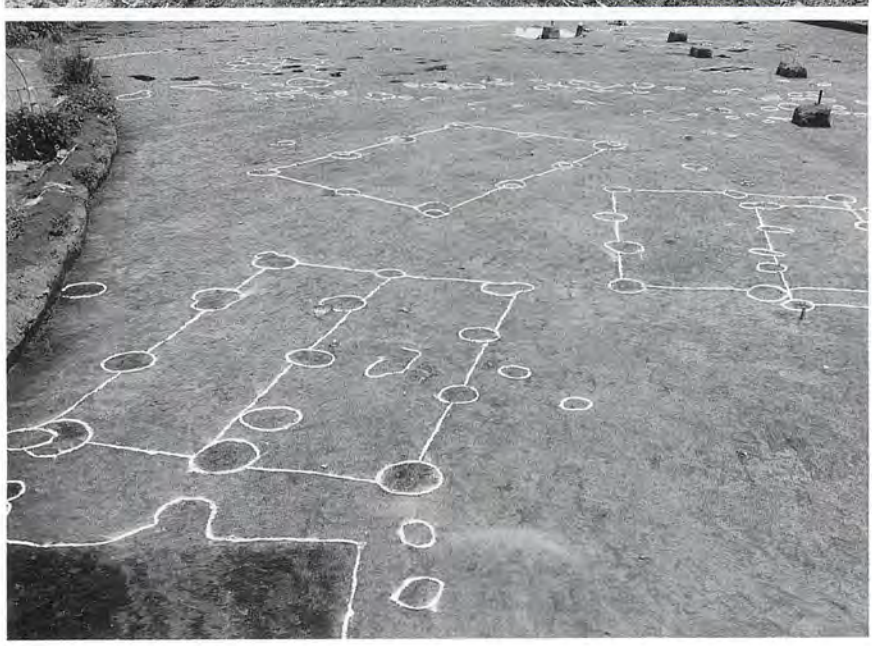
Ⅶ区遺構検出

雪の中の調査風景

図版3

Ⅶ区 75・76－O・P
遺構検出状態

Ⅶ区 70－N～Q
遺構検出状態



Ⅶ区 73・74－O・P
遺構検出状態

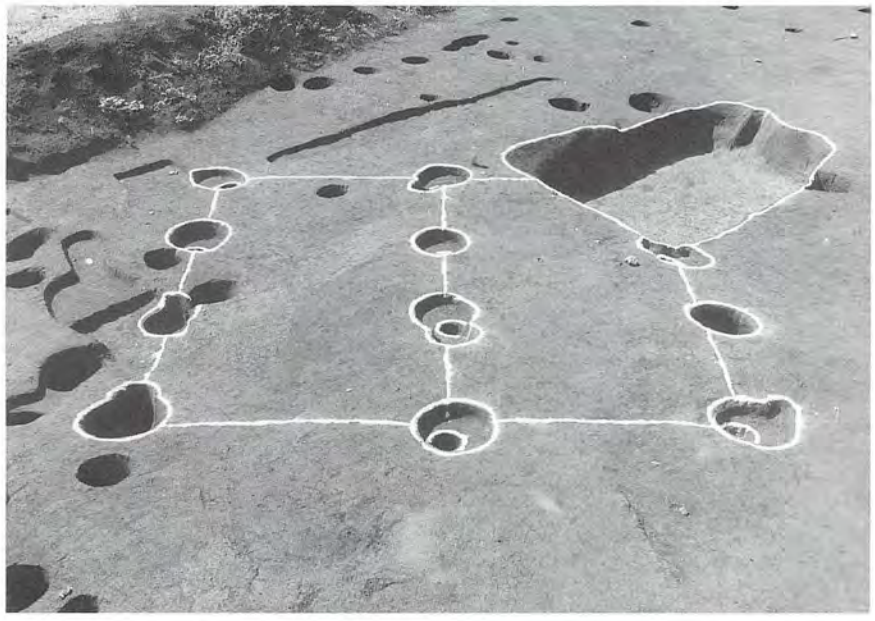
図版4

Ⅴ区 長谷川－3344
全体仕上げ

Ⅵ区 鳴渕－1036・1037
仕上げ（東ヨリ）

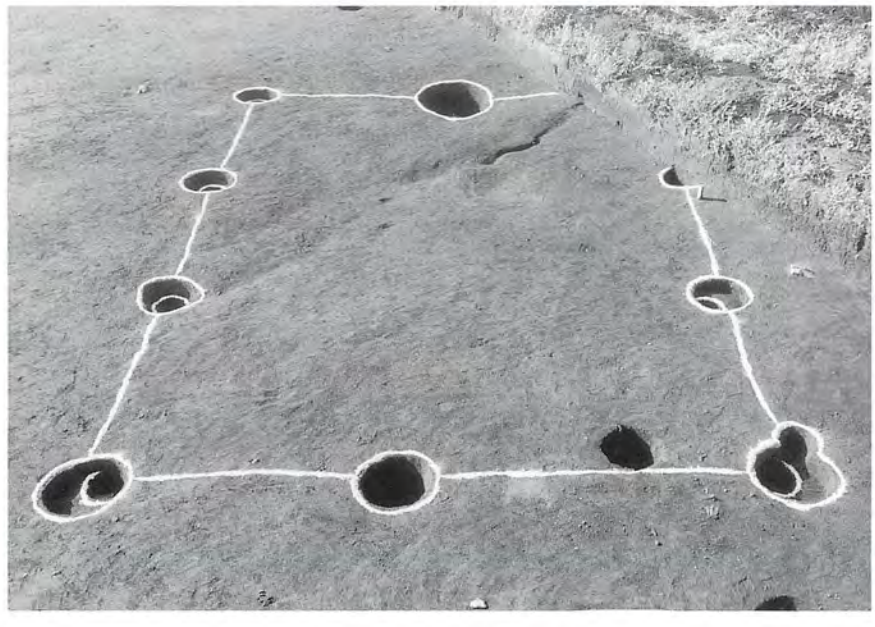
Ⅵ区 鳴渕－1035
仕上げ（東ヨリ）

図版5



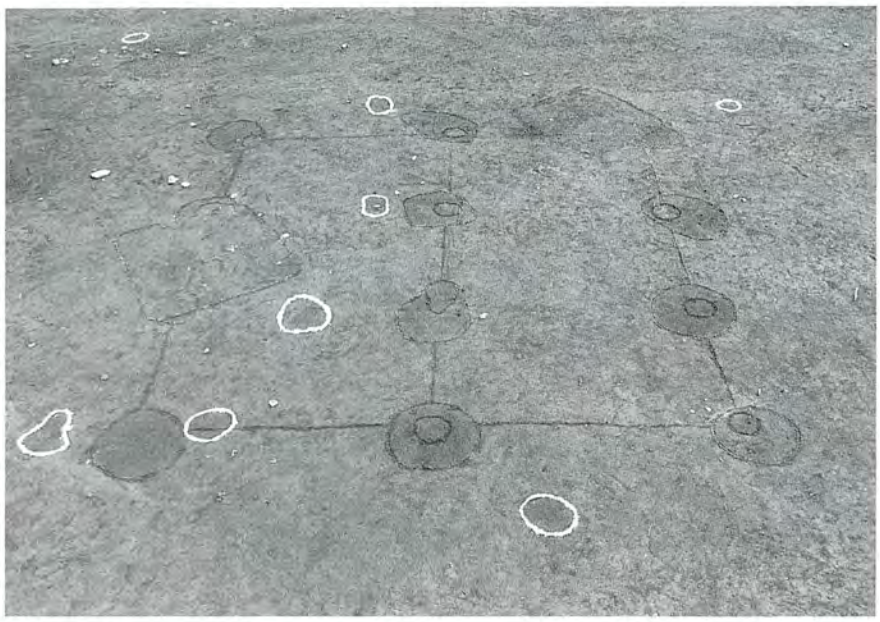
Ⅶ区 81－O・P
ＳＢ－401検出状態
（南ヨリ）

Ⅶ区 81－O・P
ＳＢ－401仕上げ
（北ヨリ）

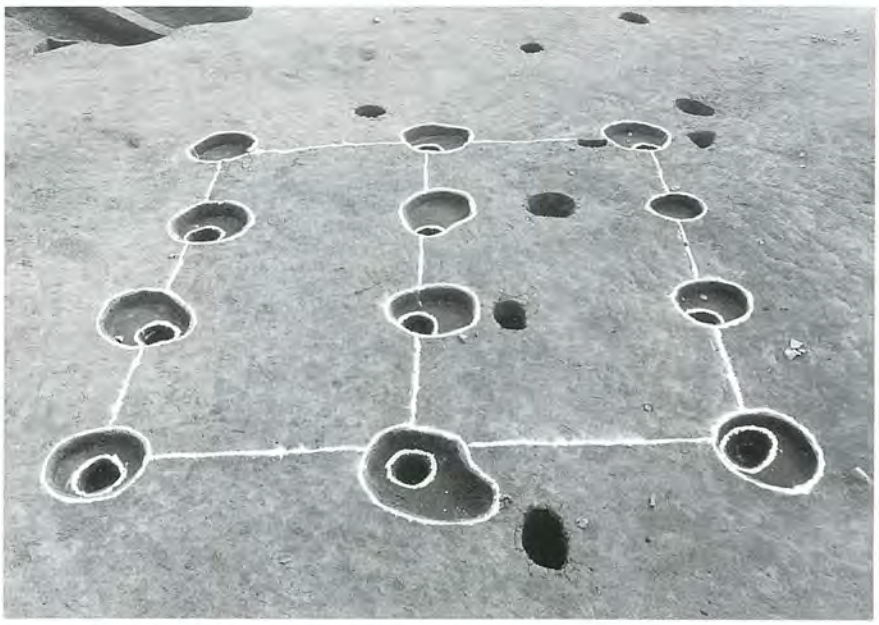


Ⅶ区 80－P・Q
ＳＢ－402検出状態
（東ヨリ）

図版6



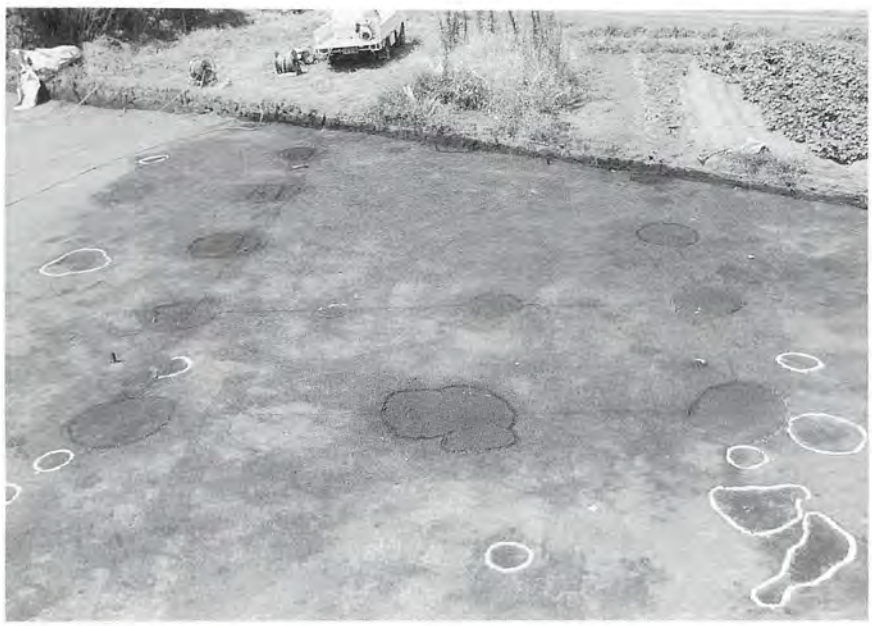
Ⅶ区 80－P・Q
ＳＢ－402仕上げ



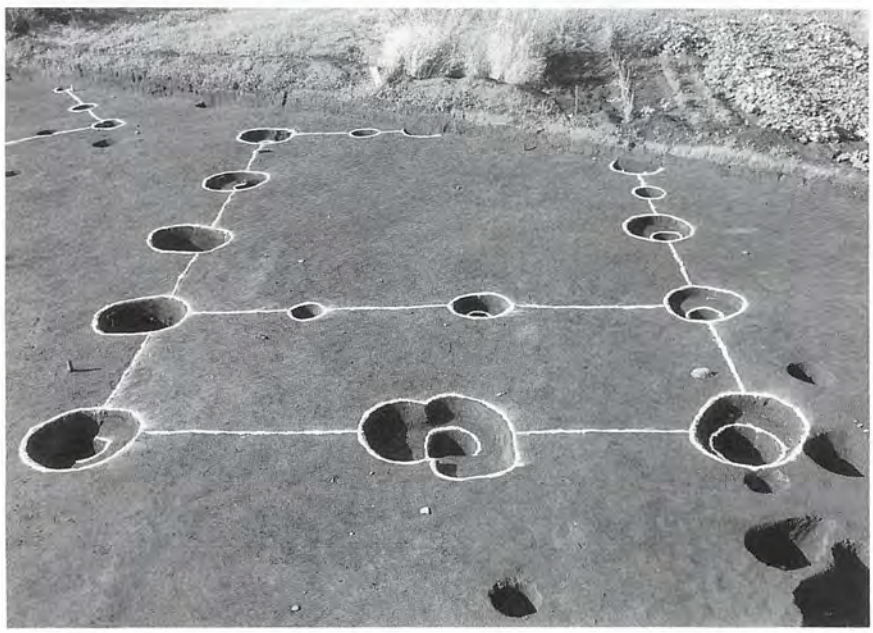
Ⅶ区 79・80－O
ＳＢ－403検出状態
（東南ヨリ）

Ⅶ区 79・80－O
ＳＢ－403仕上げ

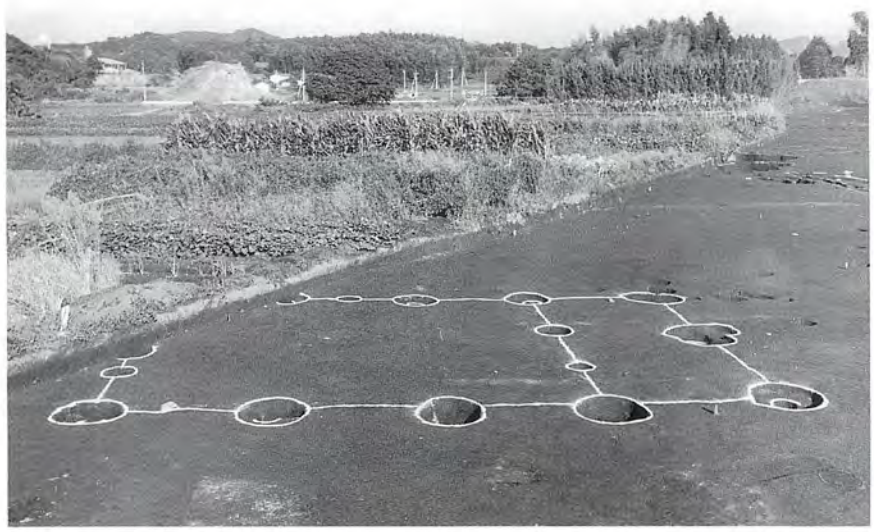
図版7



Ⅶ区 78・79－O・P
ＳＢ－404発掘前



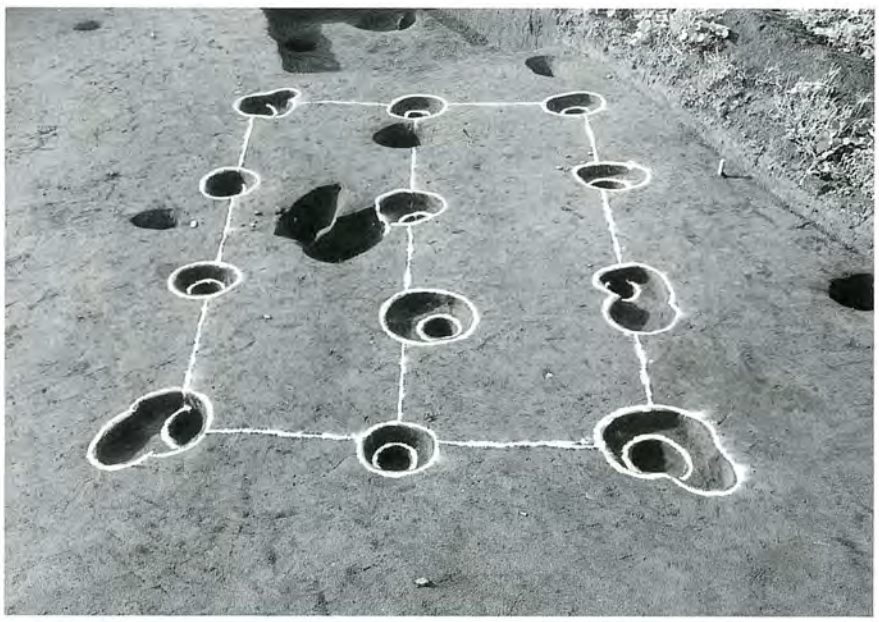
Ⅶ区 78・79－O・P
ＳＢ－404仕上げ
（南ヨリ）



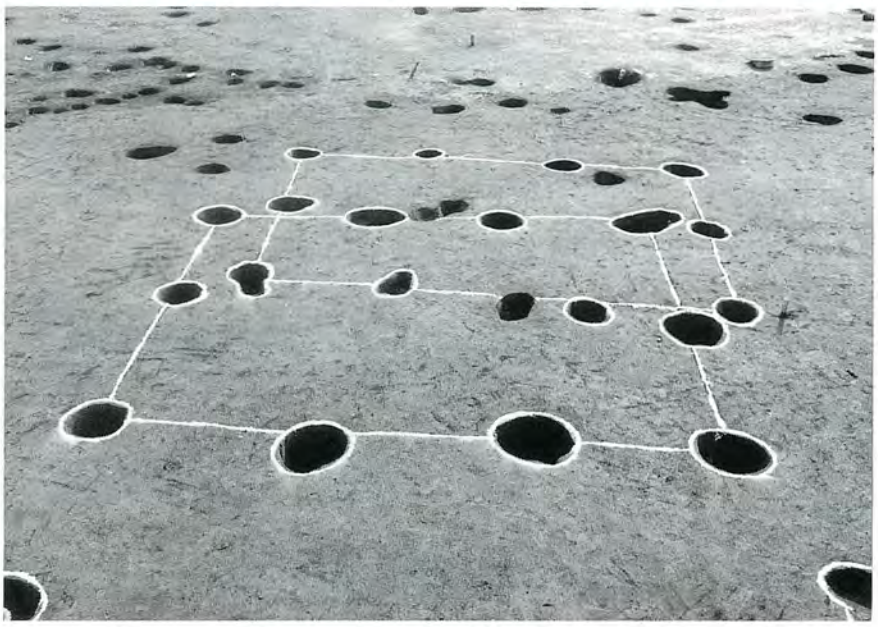
Ⅶ区 78・79－O・P
ＳＢ－404仕上げ
（西ヨリ）

図版8

Ⅶ区 75－O
ＳＢ－405 発掘前
（南東ヨリ）

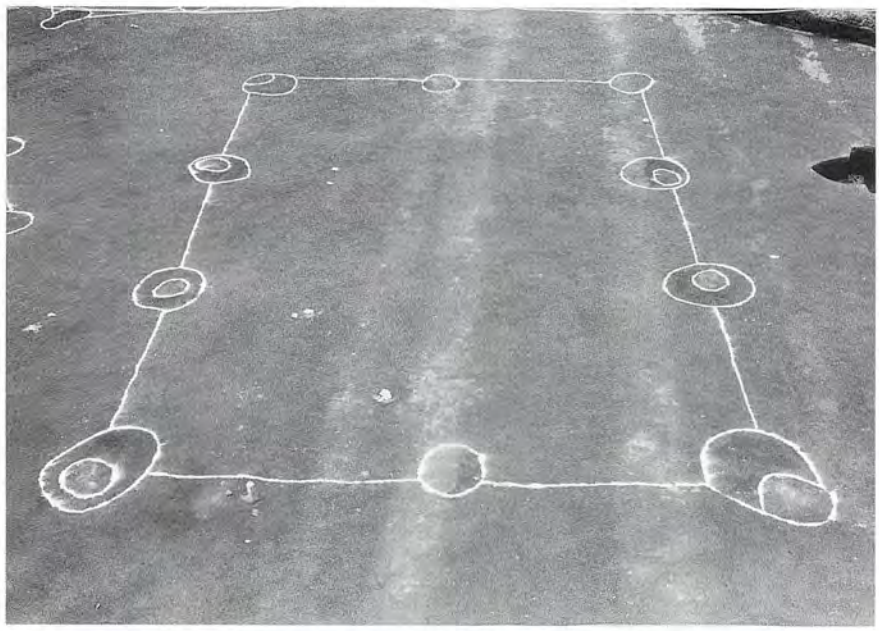


Ⅶ区 74・75－O
ＳＢ－405仕上げ

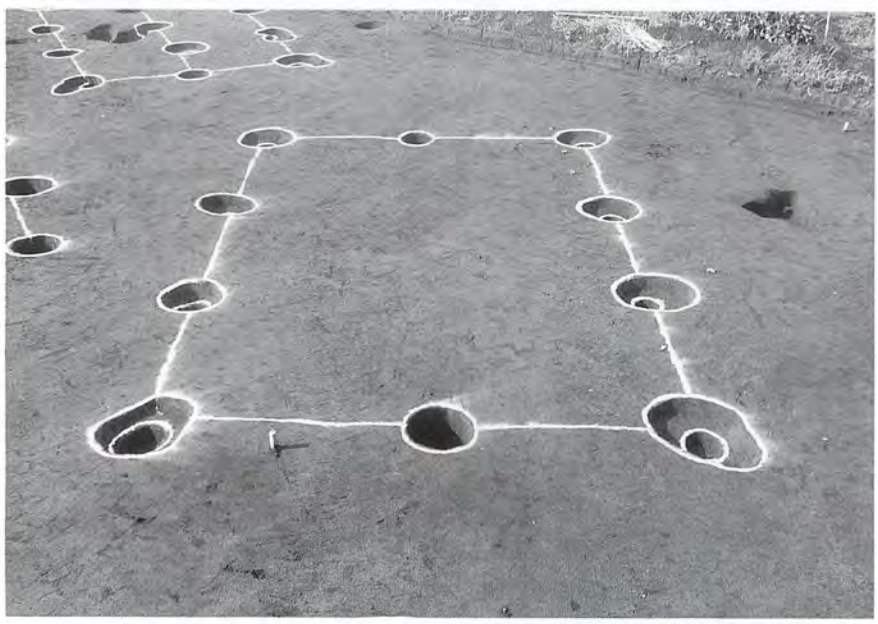


Ⅶ区 74・75－O・P
ＳＢ－406・407仕上げ

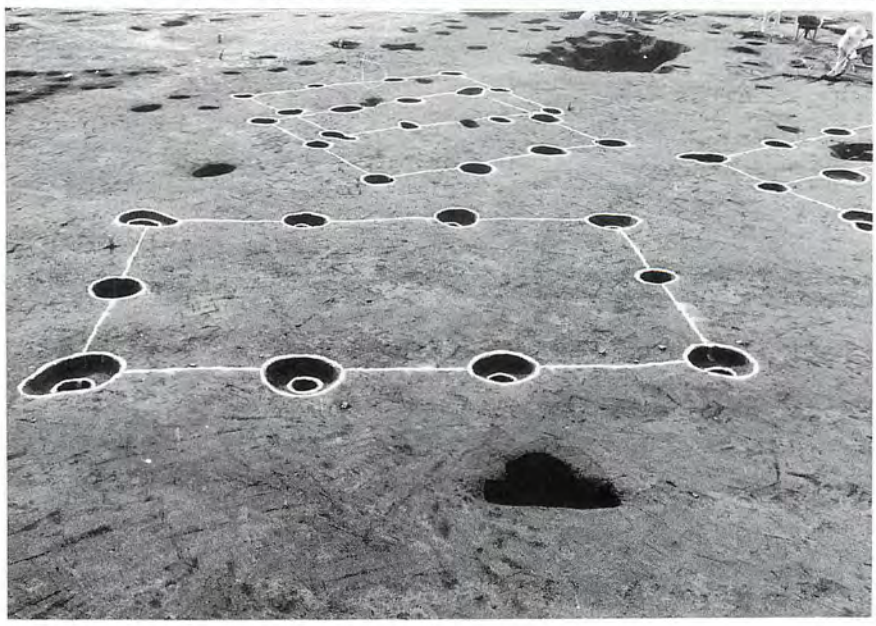
図版9



Ⅶ区 73・74－O・P
ＳＢ－408発掘前
（南ヨリ）

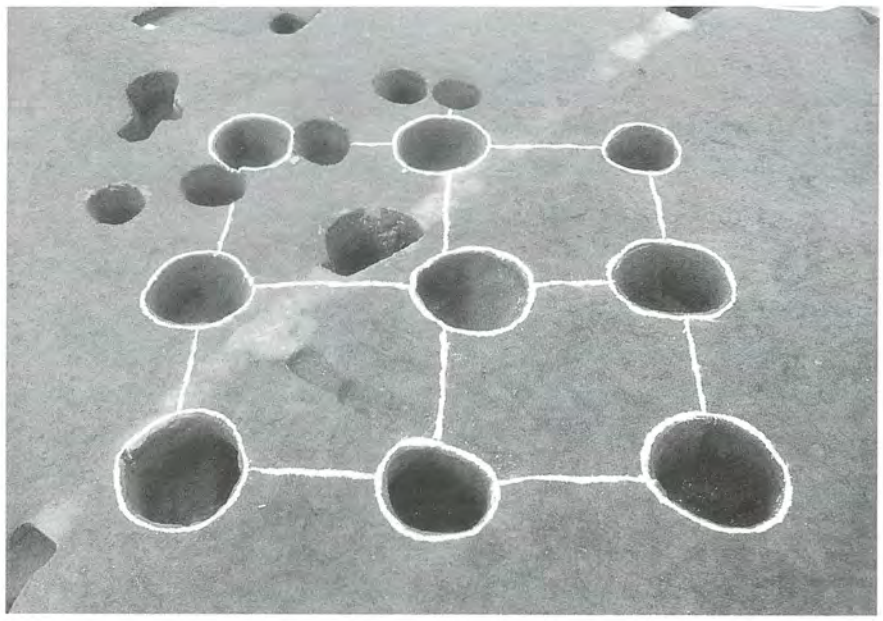


Ⅶ区 73・74－O
ＳＢ－408仕上げ
（南ヨリ）

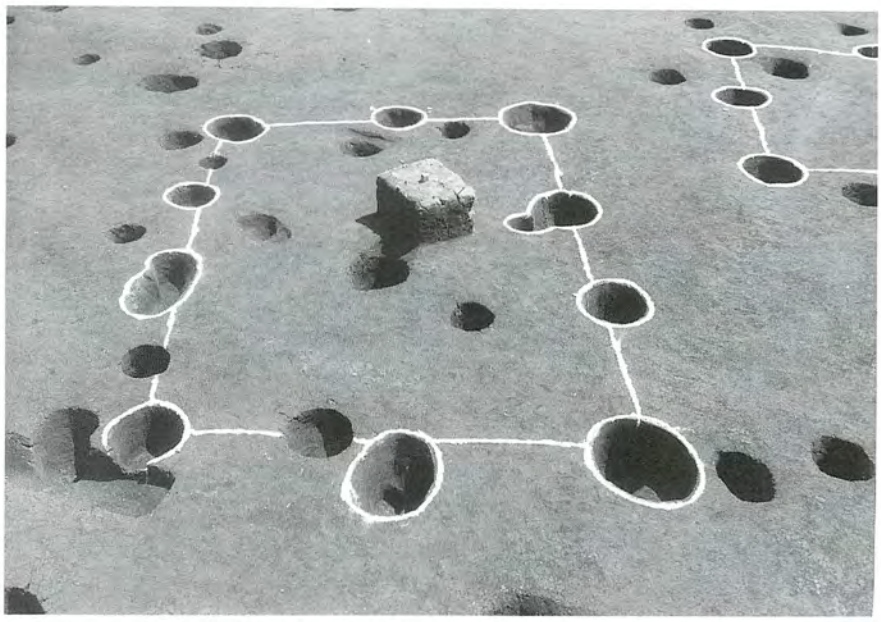


Ⅶ区 73・74－O
ＳＢ－408仕上げ
（東ヨリ）

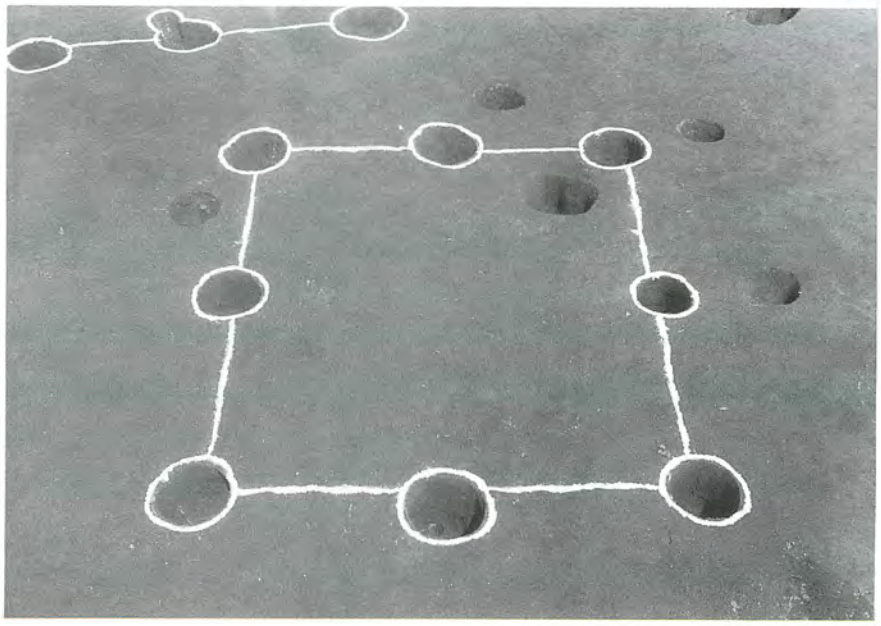
図版10



Ⅶ区 72－O
ＳＢ－409仕上げ

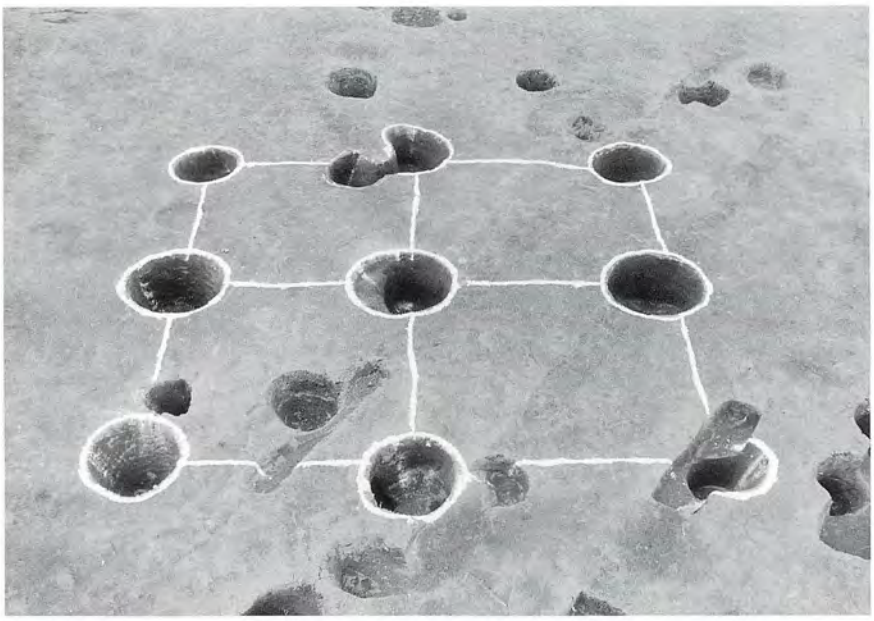


Ⅶ区 72－P・Q
ＳＢ－410仕上げ

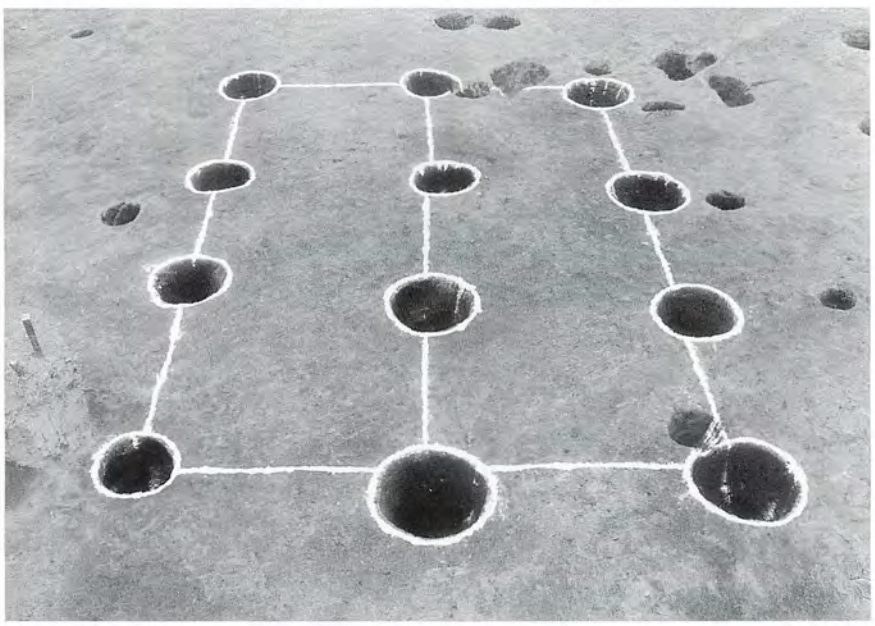


Ⅶ区 71－P・Q
ＳＢ－411仕上げ

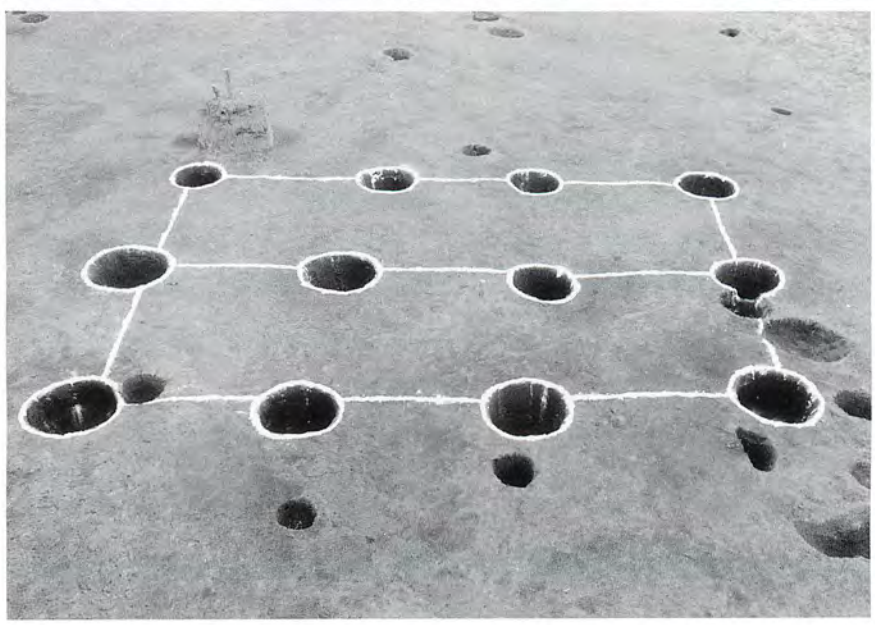
図版11



Ⅶ区 69・70—P・Q
SB—412仕上げ
（東ヨリ）



Ⅶ区 69・70—O・P
SB—413仕上げ
（東ヨリ）



Ⅶ区 69・70—O・P
SB—413仕上げ
（北ヨリ）

図版12

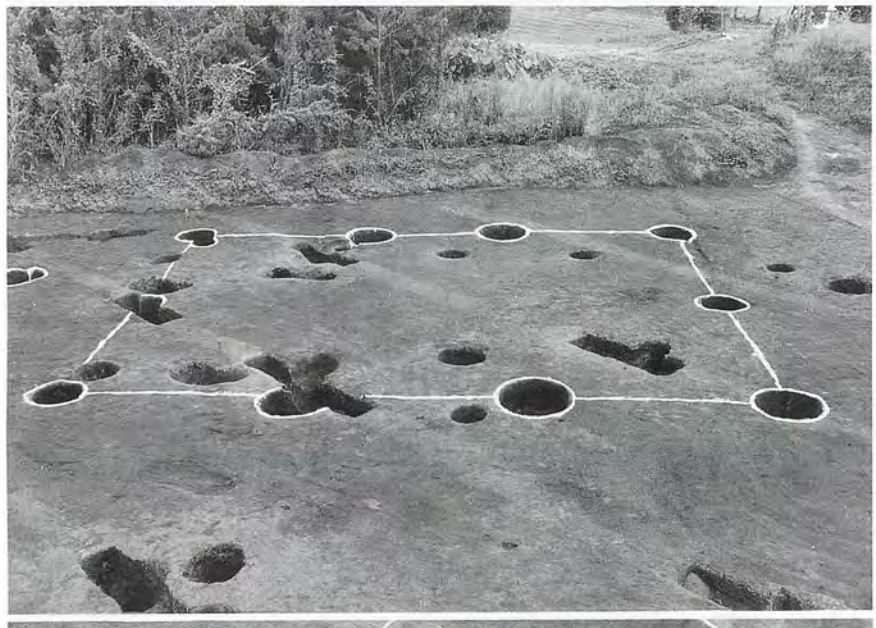
Ⅶ区 70－N
ＳＢ－414発掘前
（南ヨリ）

Ⅶ区 70－N
ＳＢ－414仕上げ

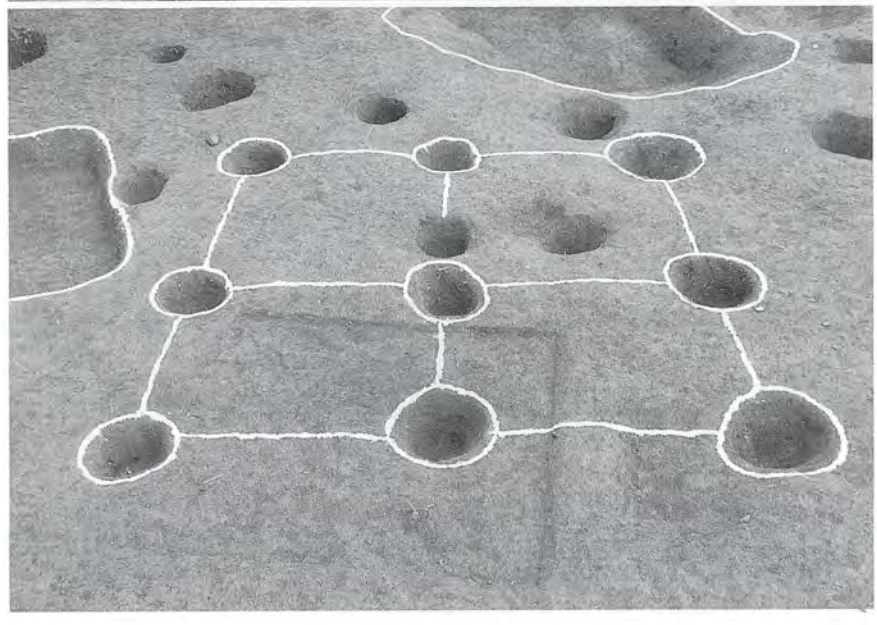
Ⅶ区 69・70－N・O
ＳＢ－415発掘前
（南ヨリ）

図版13

Ⅶ区 69・70－N・O
ＳＢ－415仕上げ
（東ヨリ）



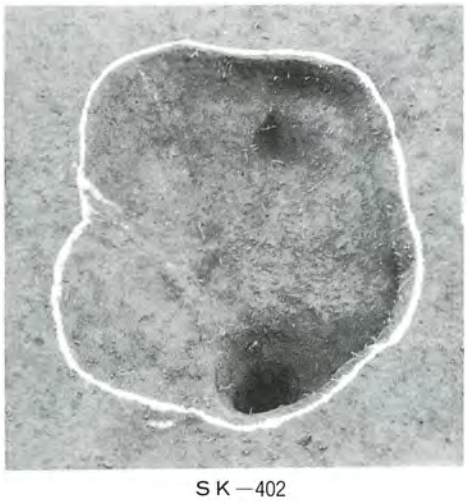
Ⅶ区 69・70－N・O
ＳＢ－415仕上げ
（南ヨリ）



Ⅴ区 63－Q
ＳＢ－416仕上げ
（東ヨリ）

Ⅴ区 土拡群発掘前（東ヨリ）

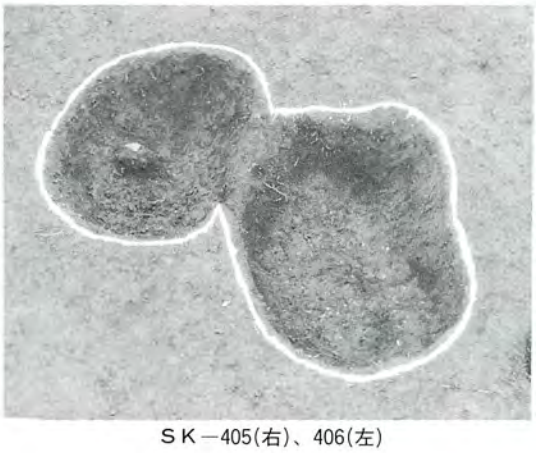
ＳＫ－401



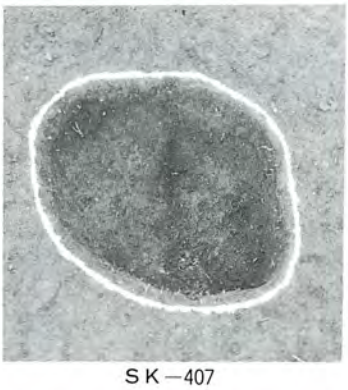
ＳＫ－402

ＳＫ－403

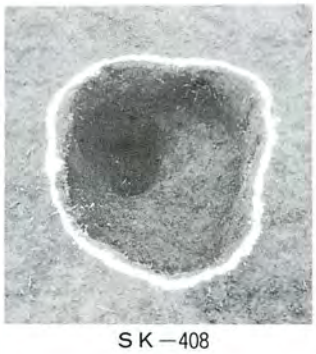
ＳＫ－404



ＳＫ－405(右)、406(左)



ＳＫ－407



ＳＫ－408

図版15

Ⅶ区 80・81－P
ＳＸ－401仕上げ

Ⅶ区 78－Q
ＳＸ－402仕上げ
（北ヨリ）

Ⅶ区 78・79－O
ＳＸ－404仕上げ

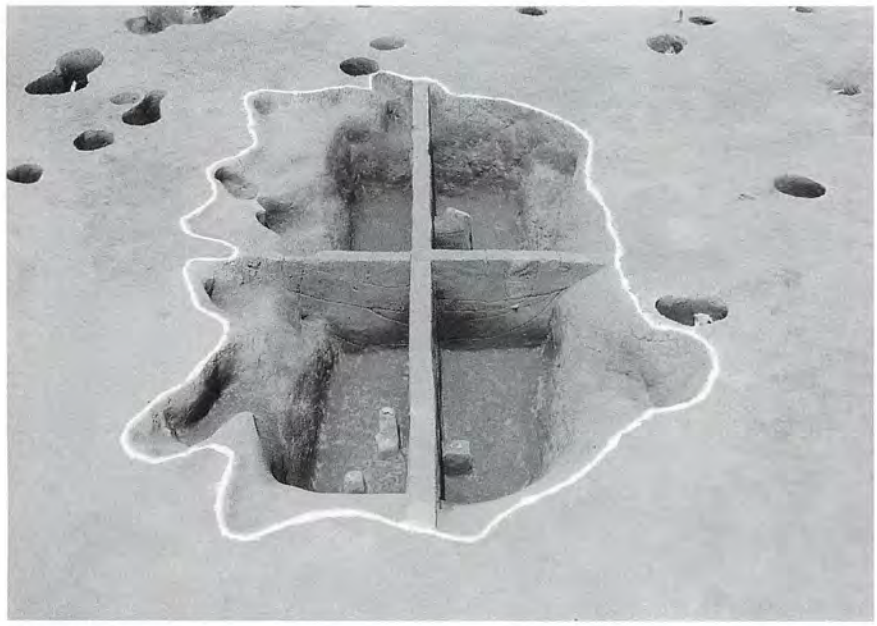
図版16

Ⅶ区 76—P・Q
SX—405仕上げ
（東ヨリ）

Ⅶ区 76—P・Q
SX—405遺物出土状態
（西ヨリ）

Ⅶ区 76—P・Q
SX—405
遺物出土状態近景

図版17



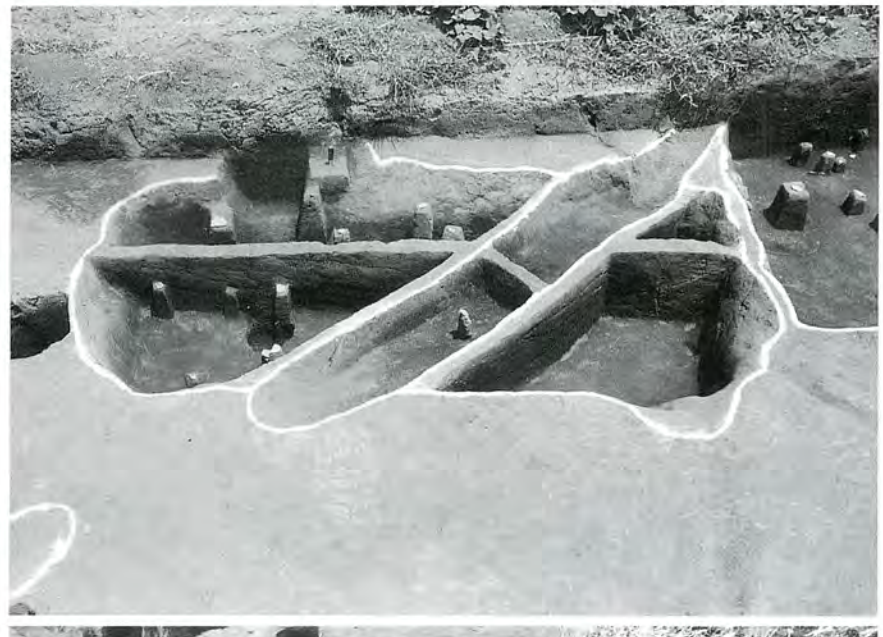
Ⅶ区 75－P
ＳＸ－406遺物出土状態
（東ヨリ）

Ⅶ区 75－P
ＳＸ－406仕上げ

Ⅶ区 74－R
ＳＸ－407仕上げ
（北ヨリ）

図版18

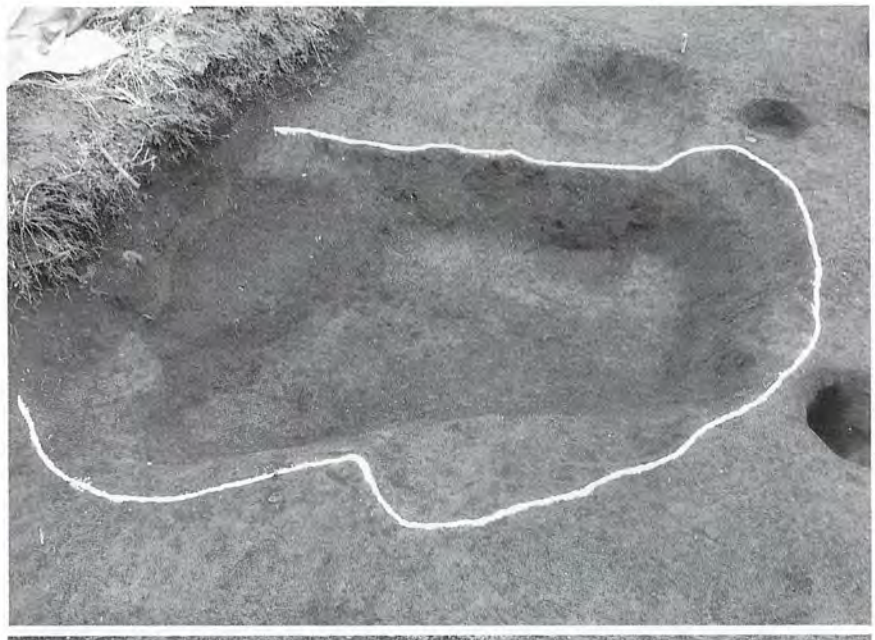
Ⅶ区 72－P
ＳＸ－408仕上げ



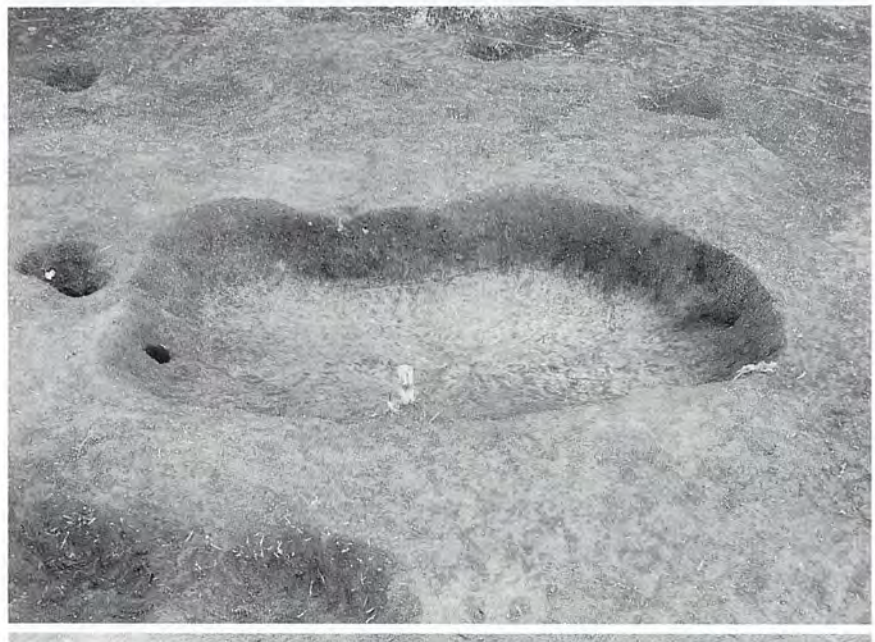
Ⅶ区 75・76－O
ＳＤ－404・ＳＸ－409
遺物出土状態（南ヨリ）

Ⅶ区 75・76－O
ＳＸ－409仕上げ

図版19



V区 63・64－Q
ＳＸ－412仕上げ
（南ヨリ）



V区 60・61－O・P
ＳＸ－413仕上げ

Ⅶ区 71－P
Pit No. 1遺物出土状態

Ⅶ区 71－P
Pit No.1遺物出土状態
（拡大）

Ⅶ区 71－P
Pit No.2遺物出土状態

Ⅶ区 71－P
Pit No.2遺物出土状態
（拡大）

図版21

Ⅶ区 75－O
ＳＸ－410(竪穴住居址)
発掘前（南ヨリ）

Ⅶ区 75－O
ＳＸ－410(竪穴住居址)
遺物出土状態（南ヨリ）

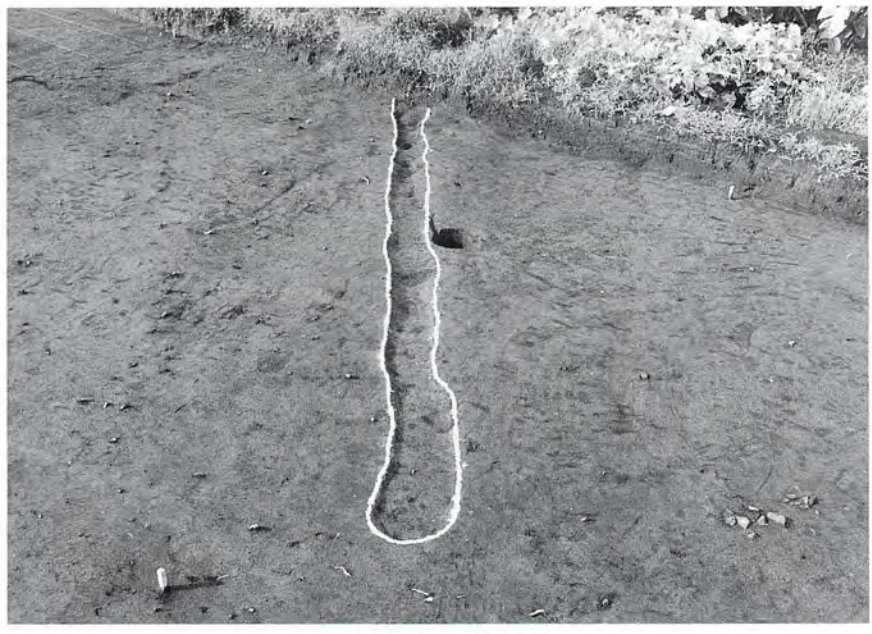
Ⅶ区 75－O
ＳＸ－410(竪穴住居址)
遺物出土状態近景（南ヨリ）

図版22

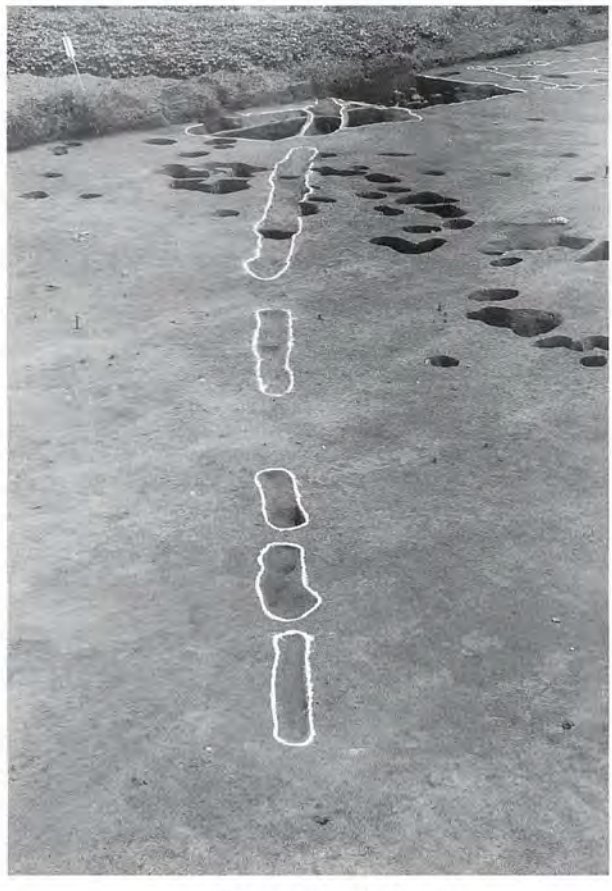
Ⅶ区 75－O
ＳＸ－410(竪穴住居址)
カマド

Ⅶ区 75－O
ＳＸ－410(竪穴住居址)
カマド半割

Ⅶ区 75－O
ＳＸ－410(竪穴住居址)
仕上げ



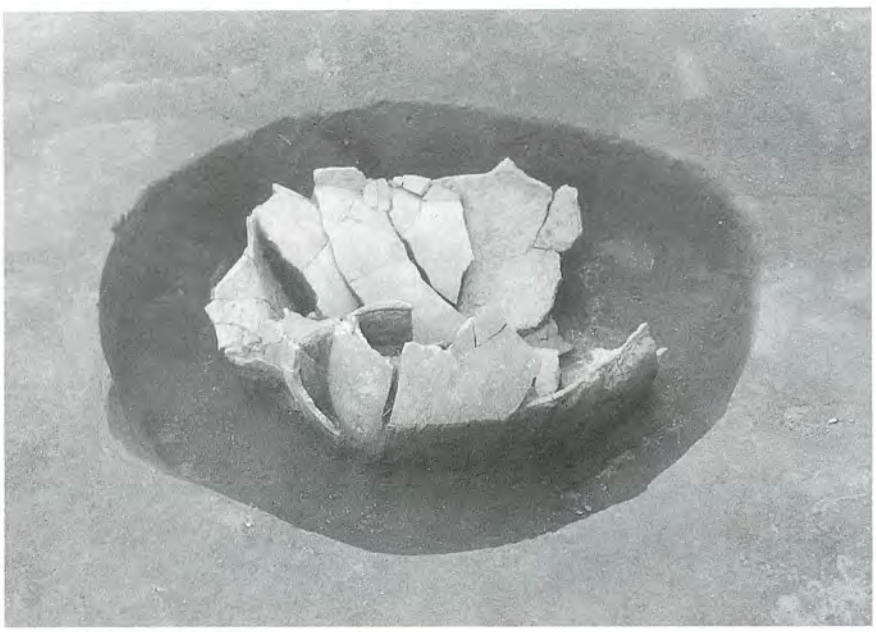
Ⅶ区 76・77－N
ＳＤ－403仕上げ



Ⅶ区 75・76・77－Ｏ・Ｐ
ＳＤ－404仕上げ
（南西ヨリ）

Ⅶ区 71－Ｐ
ＳＤ－406仕上げ
（北ヨリ）

Ⅶ区 80－P
ＳＸ－411
検出状態



Ⅶ区 80－P
ＳＸ－411内土器出土状態

Ⅴ区 59－P
ＳＸ－414内遺物出土状態

図版25

Ⅶ区 72－O
1号集石検出状態

Ⅶ区 72－P
2号集石検出状態

Ⅶ区 76－O
4号集石検出状態

Ⅶ区 79・80－P
6号集石検出状態（東ヨリ）

Ⅶ区 80－P
7号集石検出状態

Ⅴ区 59－P
9号集石検出状態

図版27

V区 59—P
9号集石土器出土状態

V区 63—P・Q
縄文土器出土状態（北ヨリ）

V区 63—P・Q
曽畑式土器出土状態

図版28

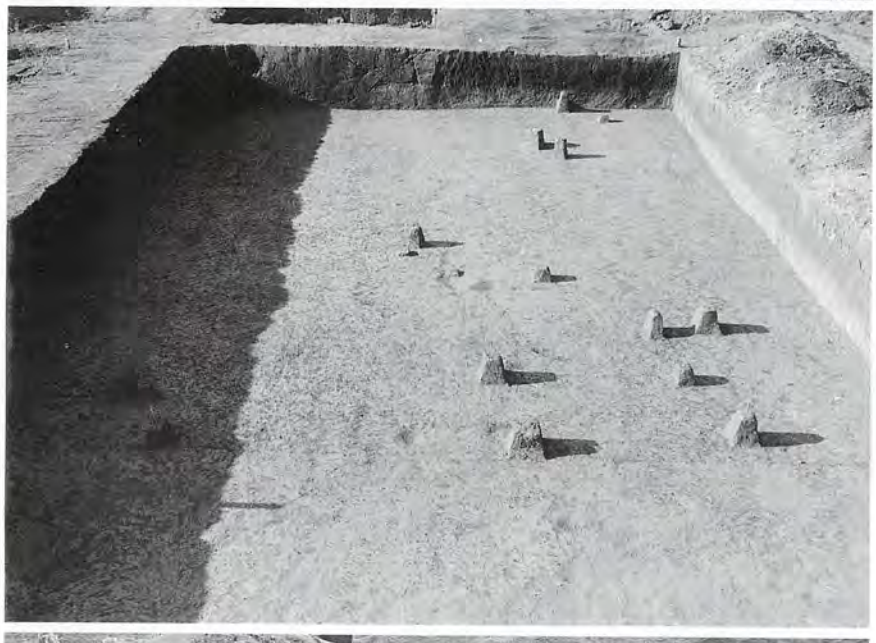
V区 45－K旧石器調査
カーボン集中地点調査風景

V区 43－K旧石器調査
遺物出土状態

V区 44－K旧石器調査
カーボン集中地点

図版29

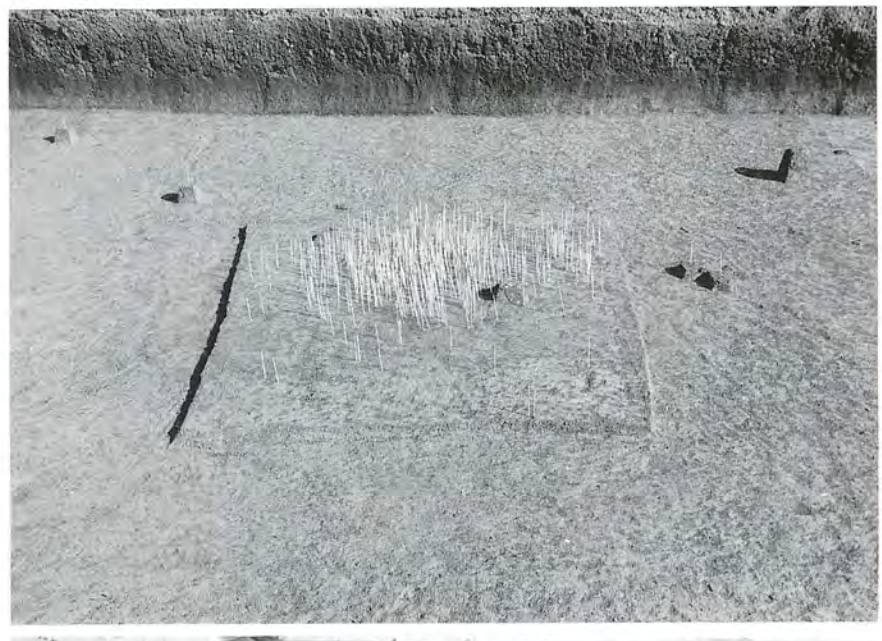
Ⅴ区 46－K旧石器調査
Ⅵ層中遺物出土状態（西ヨリ）



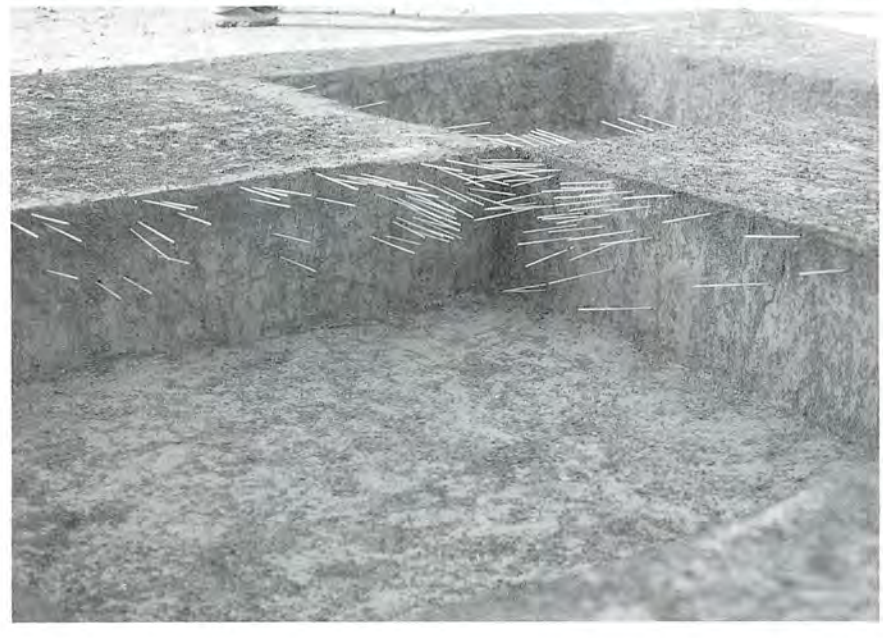
Ⅴ区 47－K旧石器調査
Ⅵ層中遺物出土状態

Ⅴ区 63－O旧石器調査
Ⅵ層中遺物出土状態（南ヨリ）

V区 45－K旧石器調査
遺物出土状態



V区 45－K旧石器調査
カーボン集中地点（南ヨリ）



V区 45－K旧石器調査
カーボン集中部断面

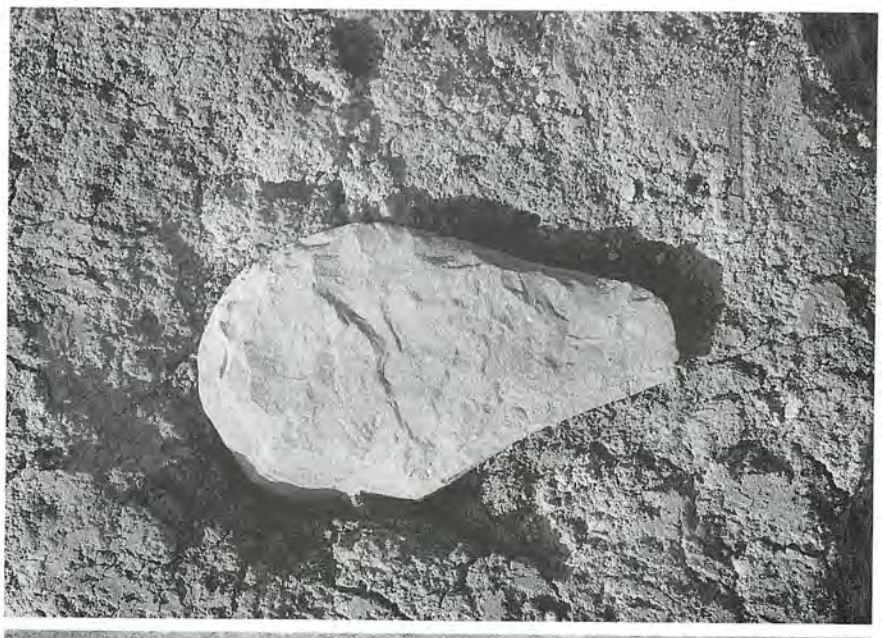
図版31

Ⅴ区 46－K旧石器調査
Ⅵ層中遺物出土状態

Ⅴ区 47－K旧石器調査
Ⅵ層中遺物出土状態

Ⅴ区 47－K旧石器調査
Ⅵ層中遺物出土状態

図版32



Ⅴ区 47－K旧石器調査
Ⅵ層中局部磨製石斧出土状態

Ⅴ区 48－K旧石器調査
Ⅵ層中局部磨製石斧出土状態

Ⅴ区 63－O旧石器調査
Ⅵ層中遺物出土状態

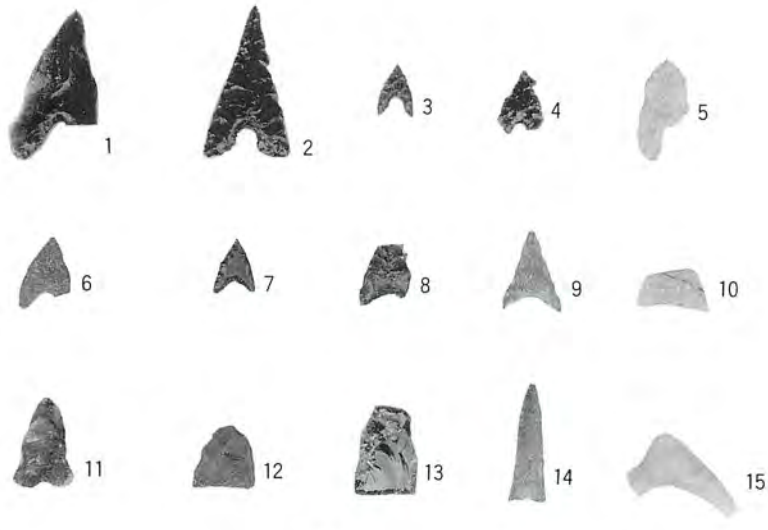
図版33

ナイフ型石器

局部磨製石斧

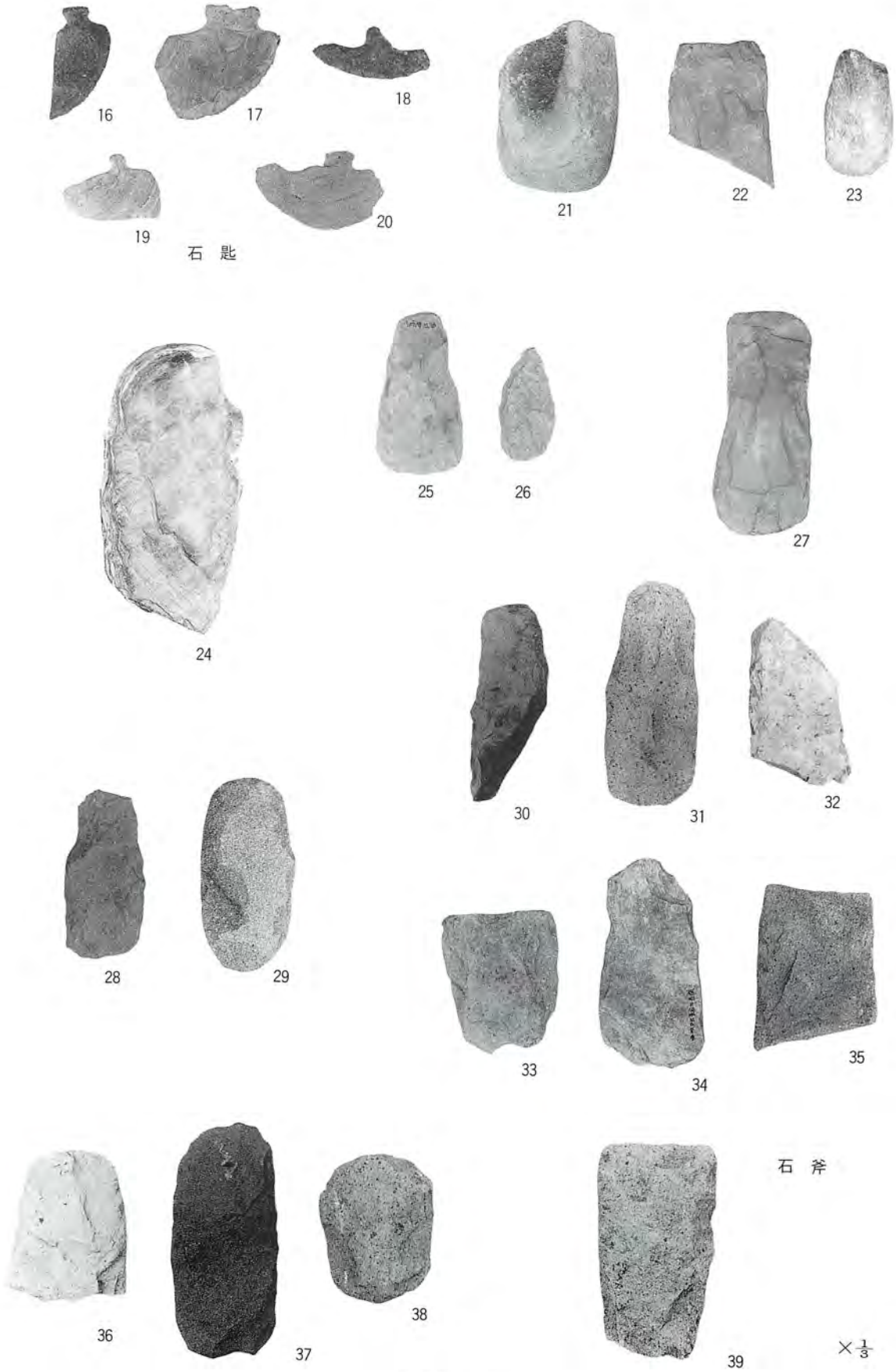
局部磨製石斧
旧石器

×$\frac{1}{2}$



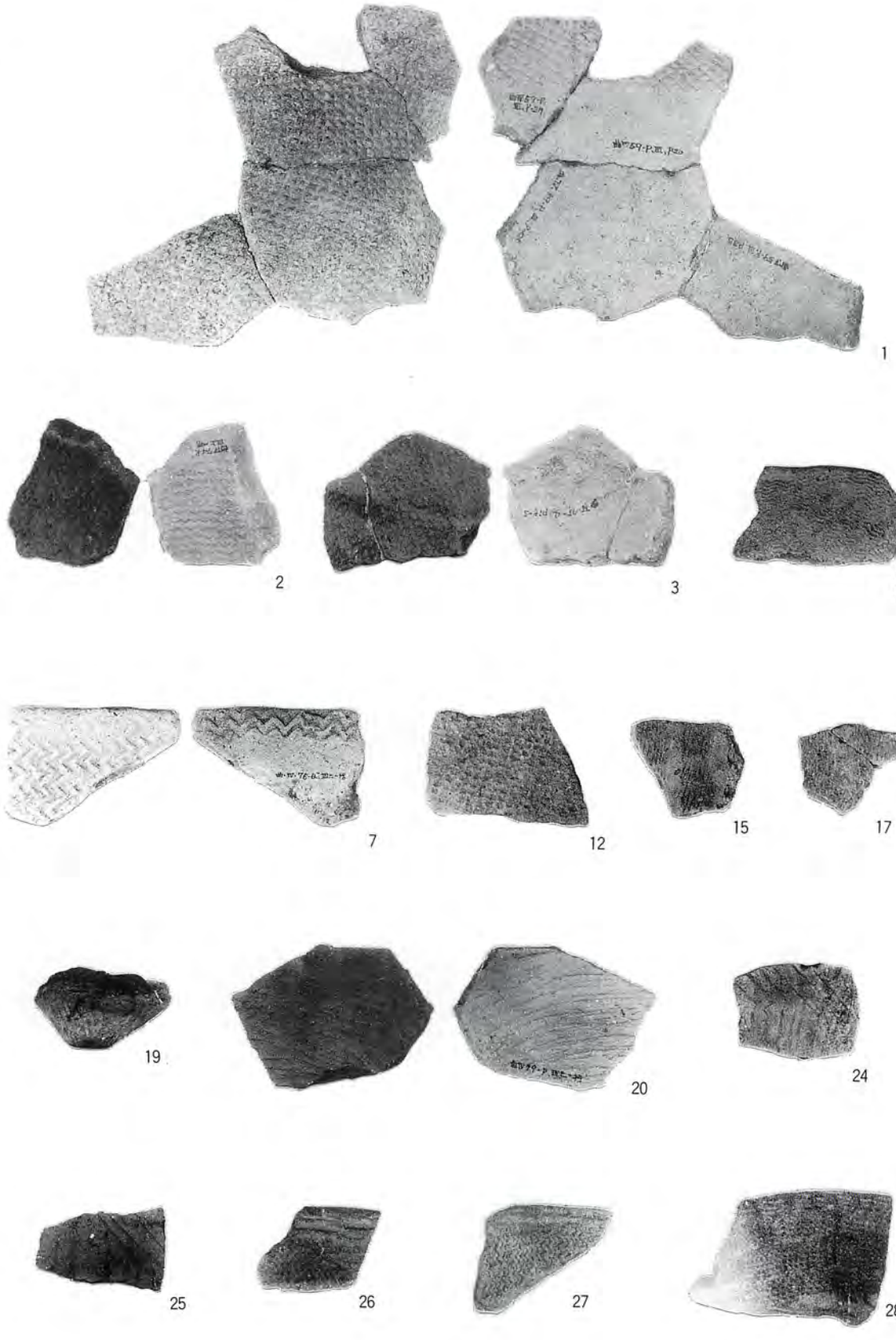
石鏃
縄文石器

×$\frac{1}{2}$


16
17
18
19
20
21
22
23
石 匙
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
石 斧
×1/3

縄文石器

図版35

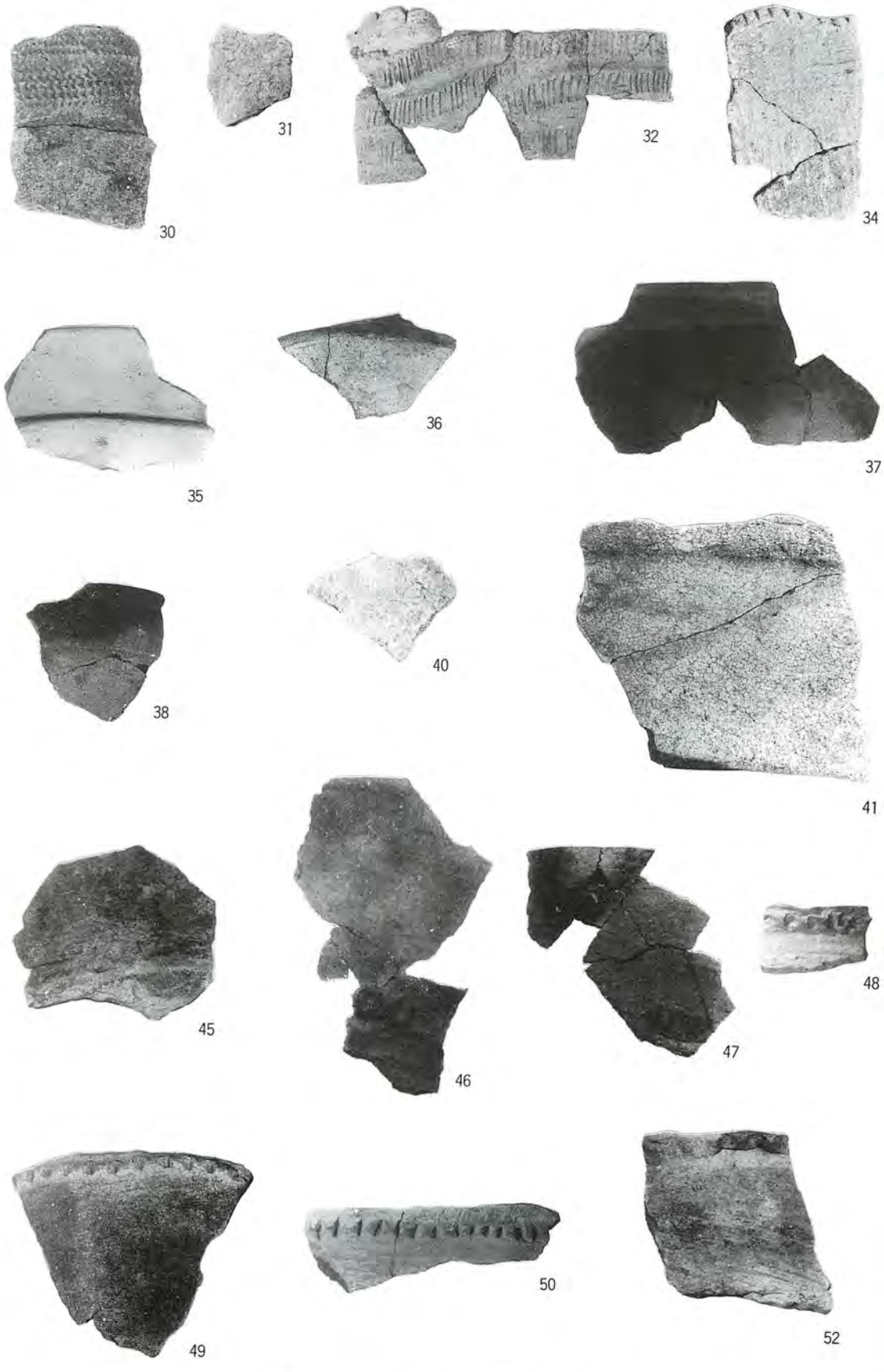


縄文土器

1・2・3・6・7・12　Ⅰ類　　15・17　Ⅱ類　　19・20類　Ⅲ類

24・25　Ⅳ類　　27・28・30　Ⅴ類

×$\frac{1}{3}$



縄文土器　31 Ⅵ類　32 Ⅶ類　34 Ⅷ類　35・36・37・38 Ⅸ類
40 Ⅹ類　41 Ⅺ類　45・46・47 Ⅶ類　48・49・50・52 Ⅻ類

×$\frac{1}{3}$

図版37

54

55

56

57

縄文土器底部

1

4号集石

2

7号集石

3

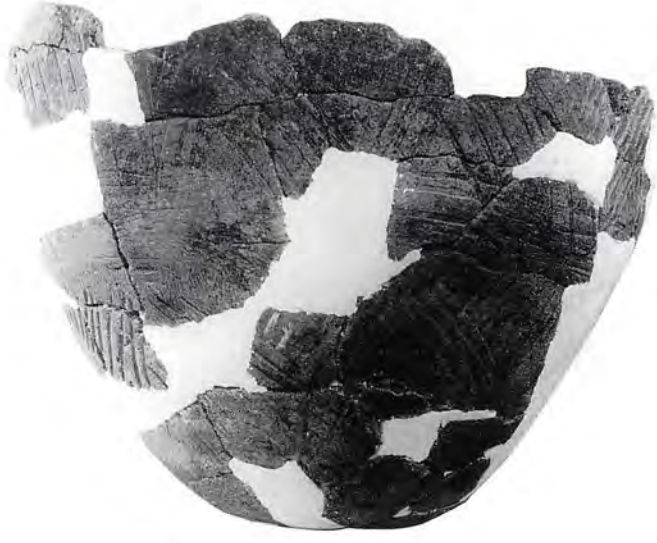
9号集石

4

9号集石

5

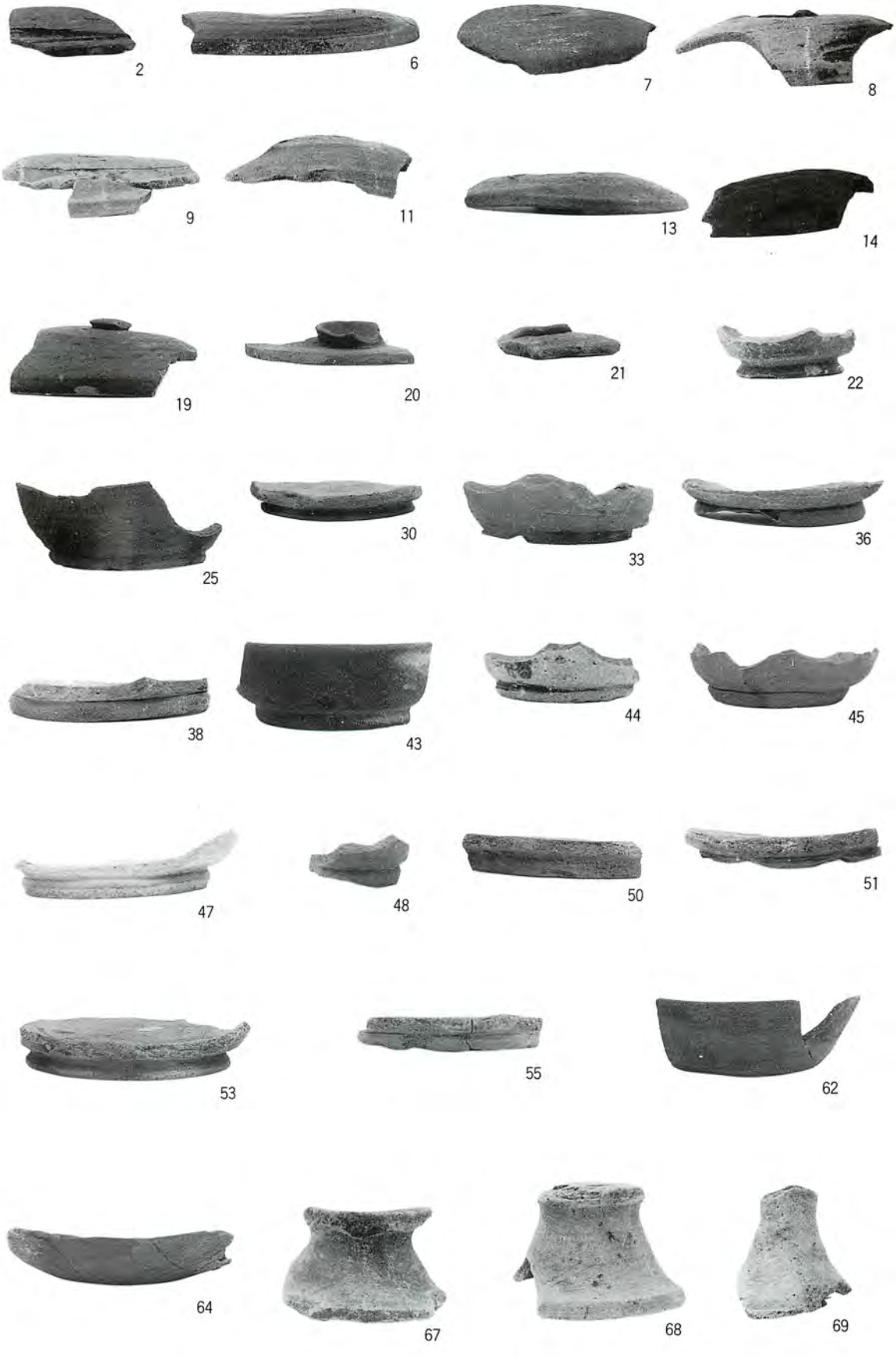
9号集石



63－Qグリッド 縄文土器集中部曽畑式土器

縄文土器

×$\frac{1}{3}$



須恵器

一括遺物

土師器

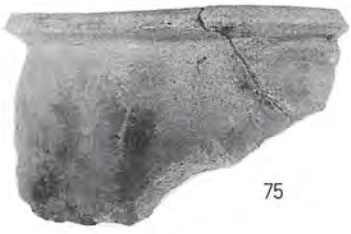
×$\frac{1}{3}$

図版39

71

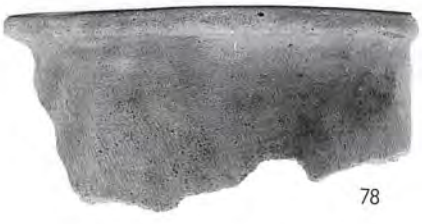
72

74


75

76

77


78

79

81

86

89

一括遺物
須恵器
土師器

2

7

6

71—Pグリッド
ピット 1内

2

7

8

71—Pグリッド
ピット 2内

ＳＸ－410(竪穴住居址)内

×$\frac{1}{3}$

ＳＸ－405(大型土壙)内

×$\frac{1}{3}$

ＳＸ－412(大型土壙)内

ＳＸ－413(大型土壙)内

×$\frac{1}{3}$

×$\frac{1}{6}$

ＳＸ－411(土器埋納土壙)内

熊本県文化財調査報告　第75集

曲野遺跡Ⅲ

1985年3月31日
編集・発行　熊本県教育委員会
〒862　熊本市水前寺6丁目18番1号
印　刷　城野印刷所
〒861-21　上益城郡益城町広崎1630-1
（産業団地内）

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 75 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：曲野遺跡 3
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/